

東九州自動車道建設(鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

みや が はら い せき
宮 ヶ 原 遺 跡

(曾於市大隅町)

の がた まえ だん い せき びー ち てん
野 方 前 段 遺 跡 B 地 点

かき のき だん い せき
柿 木 段 遺 跡 2

(曾於郡大崎町)

2012年3月



宮ヶ原遺跡遠景（南上空から）



宮ヶ原遺跡 縄文時代出土遺物



野方前段遺跡B地点 縄文時代早期出土土器

序 文

この報告書は、東九州自動車道（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）の建設に伴って、平成19年度から平成22年度にかけて実施した曾於市大隅町に所在する宮ヶ原遺跡と曾於郡大崎町に所在する野方前段遺跡B地点、柿木段遺跡の発掘調査の記録です。

宮ヶ原遺跡では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・近世から現代の遺構・遺物が発見されました。なかでも、近世から現代の道跡の発見は、江戸時代から現代までおよそ同じ場所で改修を繰り返しながら道が造られた証であり、地域の人々にとって生活する上で重要な交通路の一つであったことがうかがえます。

野方前段遺跡B地点では、縄文時代早期の遺跡で、集石遺構や落とし穴、土坑等当時の狩猟生活の痕跡が発見されました。

柿木段遺跡では、平成19・20年度の調査で発見された古道跡や溝の続きとともに新たな古道や溝が発見されました。

これら各遺跡で発見された遺構・遺物は、本県及び各地域の歴史を解明していく上で貴重な資料です。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々にご利用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただき、文化財保護の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、曾於市教育委員会、大崎町教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々へ厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺 田 仁 志

本文目次

巻頭図版・序文	157
宮ヶ原遺跡	157
報告書抄録・例言	158
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
1 分布調査	1
2 試掘調査	1
3 確認調査	2
第3節 本調査	3
第4節 整理・報告書作成作業	10
第2章 遺跡の位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11
第3章 調査の方法と成果	15
第1節 調査の方法	15
1 発掘調査の方法	15
2 遺構の認定と検出方法	15
3 整理・報告書作成作業の方法	15
4 出土遺物の分類	18
第2節 層序	20
第3節 調査の成果	27
1 旧石器時代の調査	27
(1) 調査の概要	27
(2) 遺物	27
2 縄文時代早期の調査	32
(1) 調査の概要	32
(2) 遺構	32
(3) 遺物	38
① 土器	38
② 石器	92
3 縄文時代中・後期の調査	119
(1) 調査の概要	119
(2) 遺構	119
(3) 遺物	126
① 土器	126
② 石器	128
4 弥生時代の調査	136
(1) 調査の概要	136
(2) 遺物	136
5 近世以降の調査	137
(1) 調査の概要	137
(2) 遺構	137
(3) 遺構内遺物	137
④ 包含層出土遺物	142
第4節 自然科学分析	145
第5章 総括	151
野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡	157
報告書抄録・例言	157
第1章 発掘調査の経過	157
第1節 調査に至るまでの経緯	157
第2節 事前調査	157

1 分布調査	157
2 試掘調査	158
3 確認調査	158
第3節 本調査	159
第4節 整理・報告書作成作業	161
第2章 遺跡の位置と環境	162
第1節 地理的環境	162
第2節 歴史的環境	162
第3章 野方前段遺跡B地点の調査の方法と成果	166
第1節 調査の方法	166
1 発掘調査の方法	166
2 遺構の認定と検出方法	166
3 整理・報告書作成作業の方法	166
第2節 層序	168
第3節 調査の成果	170
1 縄文時代早期の調査	170
(1) 調査の概要	170
(2) 遺構	170
(3) 遺物	175
2 縄文時代前・中期の調査	189
(1) 調査の概要	189
(2) 遺構	189
3 弥生時代の調査	199
(1) 調査の概要	199
(2) 遺物	199
4 古代・中世の調査	201
(1) 調査の概要	201
(2) 遺物	201
第4章 柿木段遺跡の調査の方法と成果	204
第1節 調査の方法	204
1 発掘調査の方法	204
2 遺構の認定と検出方法	204
3 整理・報告書作成作業の方法	204
第2節 層序	206
第3節 調査の成果	208
1 縄文時代の調査	208
(1) 調査の概要	208
(2) 遺物	208
2 古墳時代の調査	208
(1) 調査の概要	208
(2) 遺物	208
3 古代の調査	210
(1) 調査の概要	210
(2) 遺構	210
(3) 遺物	216
4 中・近世の調査	217
(1) 調査の概要	217
(2) 遺構	217
(3) 遺物	225
第5章 自然科学分析	226
第6章 総括	228
写真図版編	228

挿 図 目 次

宮ヶ原遺跡	14
第1図 周辺遺跡位置図	14
第2図 遺跡周辺地形図	16
第3図 グリッド配置図及び年度別調査区域	17
第4図 土層断面1 (K-27～31区, 西壁)	21
第5図 土層断面2 (K-32～34区, 西壁)	22
第6図 土層断面3 (G～J-29区, 南壁)	23
第7図 土層断面4 (K-M-28区, 北壁)	24
第8図 土層断面5 (奥道南側断面1)	25
第9図 土層断面6 (奥道南側断面2)	26
第10図 旧石器出土状況図 (上は層別, 下は器種別)	28

第11図 旧石器時代の遺物1	29
第12図 旧石器時代の遺物2	30
第13図 縄文時代早期の遺構配置図	32
第14図 縄文時代早期の落とし穴1	33
第15図 縄文時代早期の落とし穴2	34
第16図 縄文時代早期の土坑1	34
第17図 縄文時代早期の土坑2	35
第18図 縄文時代早期の集石遺構1	35
第19図 縄文時代早期の集石遺構2	36
第20図 縄文時代早期の集石遺構3	37
第21図 縄文時代早期前葉・中葉の土器出土状況図	39

挿 図 目 次

第22図	縄文時代早期前葉・中葉の土器	40
第23図	縄文時代早期中葉の土器1	41
第24図	縄文時代早期中葉の土器2	42
第25図	縄文時代早期中葉の土器3	43
第26図	縄文時代早期中葉の土器4	44
第27図	縄文時代早期中葉の土器5	45
第28図	縄文時代早期後葉の土器出土状況図1	47
第29図	縄文時代早期後葉の土器1	48
第30図	縄文時代早期後葉の土器2	49
第31図	縄文時代早期後葉の土器3	50
第32図	縄文時代早期後葉の土器4	51
第33図	縄文時代早期後葉の土器5	52
第34図	縄文時代早期後葉の土器6	53
第35図	縄文時代早期後葉の土器7	54
第36図	縄文時代早期後葉の土器出土状況図2	57
第37図	縄文時代早期後葉の土器8	58
第38図	縄文時代早期後葉の土器9	59
第39図	縄文時代早期後葉の土器10	60
第40図	縄文時代早期後葉の土器11	61
第41図	縄文時代早期後葉の土器12	62
第42図	縄文時代早期後葉の土器13	63
第43図	縄文時代早期後葉の土器14	64
第44図	縄文時代早期後葉の土器15	65
第45図	縄文時代早期後葉の土器16	66
第46図	縄文時代早期後葉の土器17	67
第47図	縄文時代早期後葉の土器18	68
第48図	縄文時代早期後葉の土器19	69
第49図	縄文時代早期後葉の土器20	70
第50図	縄文時代早期後葉の土器21	71
第51図	縄文時代早期後葉の土器22	72
第52図	縄文時代早期後葉の土器23	73
第53図	縄文時代早期後葉の土器24	74
第54図	縄文時代早期後葉の土器25	75
第55図	縄文時代早期後葉の土器26	76
第56図	縄文時代早期後葉の土器27	77
第57図	縄文時代早期後葉の土器28	78
第58図	縄文時代早期後葉の土器出土状況図3	79
第59図	縄文時代早期後葉の土器29	80
第60図	縄文時代早期後葉の土器30	81
第61図	縄文時代早期後葉の土器31	82
第62図	縄文時代早期後葉の土器32	84
第63図	縄文時代早期後葉の土器33	85
第64図	縄文時代早期後葉の土器34	86
第65図	縄文時代早期後葉の土器35	88
第66図	縄文時代早期後葉の土器36	89
第67図	縄文時代早期後葉の土器37	90
第68図	縄文時代早期後葉の土器38	91
第69図	縄文時代早期の土器出土状況図1	94
第70図	縄文時代早期の土器出土状況図2	95
第71図	縄文時代早期の土器出土状況図3	96
第72図	縄文時代早期の土器1	97
第73図	縄文時代早期の土器2	98
第74図	縄文時代早期の土器3	99
第75図	縄文時代早期の土器4	100
第76図	縄文時代早期の土器5	101
第77図	縄文時代早期の土器6	102
第78図	縄文時代早期の土器7	103
第79図	縄文時代早期の土器8	104
第80図	縄文時代早期の土器9	105
第81図	縄文時代早期の土器10	106
第82図	縄文時代早期の土器11	107
第83図	縄文時代早期の土器12	108
第84図	縄文時代早期の土器13	109
第85図	縄文時代早期の土器14	110
第86図	縄文時代早期の土器15	111
第87図	縄文時代早期の土器16	112
第88図	縄文時代早期の土器17	113
第89図	縄文時代早期の土器18	114
第90図	縄文時代早期の土器19	115
第91図	縄文時代早期の土器20	116
第92図	縄文時代中期の遺構配図	119
第93図	縄文時代中・後期の落とし穴1	120
第94図	縄文時代中・後期の落とし穴2	121
第95図	縄文時代中・後期の土坑1	122
第96図	縄文時代中・後期の土坑2	123
第97図	縄文時代中・後期の土坑3	124
第98図	縄文時代中・後期の集石遺構	125
第99図	縄文時代中期の土器1	126
第100図	縄文時代中期の土器2	127
第101図	縄文時代後期の土器	127
第102図	縄文時代中・後期の右器出土状況	129
第103図	縄文時代中・後期の土器1	130
第104図	縄文時代中・後期の土器2	131
第105図	表土・層乱層の土器1	133
第106図	表土・層乱層の土器2	134
第107図	弥生時代の土器	136
第108図	近世の遺構内遺物	137
第109図	近世以降の道路1	138
第110図	近世以降の道路2	139
第111図	近世以降の道路3	140
第112図	近世以降の道路断面図	141
第113図	近世の遺物1	143
第114図	近世の遺物2	144
野方前段遺跡		
第1図	周辺連絡位置図（榑木段遺跡と共通）	165
第2図	周辺地相図及びグリッド配図	167
第3図	土層断面図	169
第4図	縄文時代早期前半の遺構配図	170
第5図	縄文時代早期前半の集石遺構1	171
第6図	縄文時代早期前半の集石遺構2	172
第7図	縄文時代早期前半の土坑	172
第8図	縄文時代早期後半の遺構配図	173
第9図	縄文時代早期後半の集石遺構	174
第10図	縄文時代早期後半の土坑	174
第11図	縄文時代早期の遺物出土状況図	175
第12図	縄文時代早期の土器1	176
第13図	縄文時代早期の土器2	177
第14図	縄文時代早期の土器3	178
第15図	縄文時代早期の土器4	179
第16図	縄文時代早期の土器5	180
第17図	縄文時代早期の土器6	181
第18図	縄文時代早期の土器7	182
第19図	縄文時代早期の土器8	183
第20図	縄文時代の土器1	187
第21図	縄文時代の土器2	188
第22図	縄文時代前・中期の落とし穴配図	189
第23図	縄文時代前・中期の落とし穴1	191
第24図	縄文時代前・中期の落とし穴2	192
第25図	縄文時代前・中期の落とし穴3	193
第26図	縄文時代前・中期の落とし穴4	194
第27図	縄文時代前・中期の落とし穴5	195
第28図	縄文時代前・中期の土坑配図	196
第29図	縄文時代前・中期の土坑1	197
第30図	縄文時代前・中期の土坑2	198
第31図	弥生時代の遺物出土状況図	199
第32図	弥生時代の土器1	200
第33図	弥生時代の土器2	201
第34図	古代・中世の遺物1	202
第35図	古代・中世の遺物出土状況図	202

挿 図 目 次

第36図 古代・中世の遺物2	203
----------------	-----

柿木段遺跡

第1図 グリッド配置図	204
第2図 周辺地形図	205
第3図 土層断面図	207
第4図 縄文時代・古墳時代の遺物1	208
第5図 縄文時代の遺物2	209
第6図 古代の遺構配置図	212
第7図 古代の古道1	213

第8図 古代の古道2・溝	214
第9図 古代の土坑	215
第10図 古代の遺物	216
第11図 中・近世の遺構配置図	219
第12図 中・近世の古道1・溝1	220
第13図 中・近世の古道2	221
第14図 中・近世の古道3・溝2	222
第15図 中・近世の溝3	223
第16図 中・近世の溝4	224
第17図 中・近世の遺物	225

表 目 次

宮ヶ原遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表	13
第2表 宮ヶ原遺跡基本土層	20
第3表 旧石器時代 石器観察表1	30
第4表 旧石器時代 石器観察表2	31
第5表 縄文時代早期の集石遺構観察表	37
第6表 縄文時代早期の土器観察表1	41
第7表 縄文時代早期の土器観察表2	42
第8表 縄文時代早期の土器観察表3	45
第9表 縄文時代早期の土器観察表4	46
第10表 縄文時代早期の土器観察表5	52
第11表 縄文時代早期の土器観察表6	55
第12表 縄文時代早期の土器観察表7	59
第13表 縄文時代早期の土器観察表8	60
第14表 縄文時代早期の土器観察表9	63
第15表 縄文時代早期の土器観察表10	69
第16表 縄文時代早期の土器観察表11	72
第17表 縄文時代早期の土器観察表12	75
第18表 縄文時代早期の土器観察表13	76
第19表 縄文時代早期の土器観察表14	78
第20表 縄文時代早期の土器観察表15	86
第21表 縄文時代早期の土器観察表16	87
第22表 縄文時代早期の土器観察表17	88
第23表 縄文時代早期の土器観察表18	90
第24表 縄文時代早期の石器観察表1	117
第25表 縄文時代早期の石器観察表2	118

第26表 縄文時代中・後期の集石遺構観察表	118
第27表 縄文時代中期の土器観察表	127
第28表 縄文時代後期の土器観察表	127
第29表 縄文時代中・後期の石器観察表	135
第30表 表土・礫品の石器観察表	135
第31表 弥生時代の土器観察表	136
第32表 近世の遺物観察表（遺構内物）	137
第33表 道路断面の埋土観察表	141
第34表 近世の遺物観察表（包含層出土遺物）	144

野方前段遺跡B地点

第1表 周辺遺跡一覧表（柿木段遺跡と共通）	164
第2表 野方前段遺跡B地点の基本土層	168
第3表 縄文時代早期土器観察表1	183
第4表 縄文時代早期土器観察表2	184
第5表 縄文時代の石器観察表	186
第6表 弥生時代の土器観察表	201
第7表 古代・中世の土器観察表	203

柿木段遺跡

第1表 柿木段遺跡の基本土層	206
第2表 縄文時代の遺物観察表	209
第3表 古墳時代の遺物観察表	209
第4表 古代の遺物観察表	216
第5表 中世の遺物観察表	225
第6表 近世の遺物観察表	225

図 版 目 次

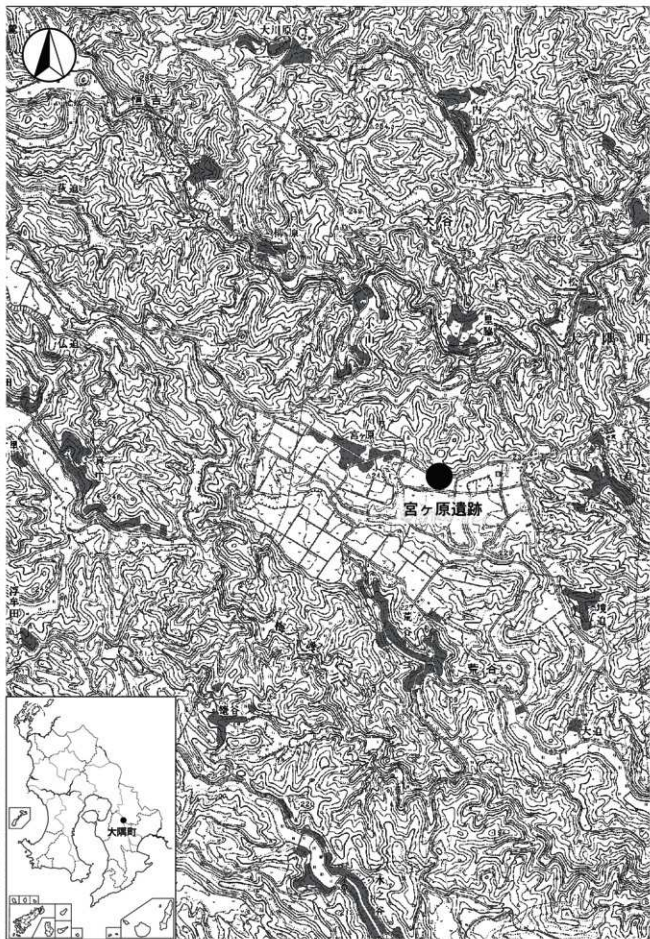
図版1 宮ヶ原遺跡土層断面、作業風景、集石遺構	231
図版2 宮ヶ原遺跡集石遺構、落とし穴	232
図版3 宮ヶ原遺跡落とし穴	233
図版4 宮ヶ原遺跡遺跡	234
図版5 宮ヶ原遺跡遺状石帯出土状況	235
図版6 宮ヶ原遺跡土器出土状況	236
図版7 野方前段遺跡B地点土層断面、集石遺構	237
図版8 野方前段遺跡B地点土坑、落とし穴1	238
図版9 野方前段遺跡B地点落とし穴2	239
図版10 野方前段遺跡B地点落とし穴3	240
図版11 野方前段遺跡B地点落とし穴4、遺物出土状況、調査風景	241
図版12 野方前段遺跡B地点遺物出土状況、調査風景	242
図版13 柿木段遺跡遠景、調査風景	243
図版14 柿木段遺跡土層断面、古代の調査1	244
図版15 柿木段遺跡古代の調査2	245
図版16 柿木段遺跡中世～近世の調査1	246
図版17 柿木段遺跡中世～近世の調査2	247
図版18 柿木段遺跡中世～近世の調査3	248
図版19 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器1	249
図版20 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器2	250
図版21 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器3	251
図版22 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器4	252

図版23 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器5	253
図版24 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器6	254
図版25 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器7	255
図版26 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器8	256
図版27 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器9	257
図版28 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器10	258
図版29 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器11	259
図版30 宮ヶ原遺跡縄文時代早期出土土器12	260
図版31 宮ヶ原遺跡近世出土遺物	261
図版32 野方前段遺跡B地点縄文時代早期出土土器1	262
図版33 野方前段遺跡B地点縄文時代早期出土土器2	263
図版34 野方前段遺跡B地点縄文時代早期出土土器3	264
図版35 野方前段遺跡B地点縄文時代早期出土土器4	265
野方前段遺跡B地点弥生時代出土土器	265
野方前段遺跡B地点古代・中世出土土器	266
柿木段遺跡出土遺物	266
図版37 宮ヶ原遺跡旧石器・縄文時代石器1	267
図版38 宮ヶ原遺跡縄文時代早期石器2	268
図版39 宮ヶ原遺跡縄文時代早期石器3	269
図版40 宮ヶ原遺跡縄文時代中・後期石器	269
野方前段遺跡B地点縄文時代石器	270

宮ヶ原遺跡

報告書抄録（宮ヶ原遺跡）

ふりがな	みやがはらいせき のがたまえだんいせきびーちてん かきのきだんいせきに							
書名	宮ヶ原遺跡 野方前段遺跡B地点 柿木段遺跡2							
副書名	東九州自動車道建設（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第173集							
編集者名	松下建生							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 ℡0995-48-5811							
発行年月	西暦2012年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
宮ヶ原遺跡	鹿児島県 曾於市 大隅町	46217	63-154	31° 33' 17"	130° 56' 32"	確認本調査 ①2007.05.16 ～ 2008.03.19 ②2008.05.22 ～ 2009.03.19 ③2010.05.06 ～ 2010.07.27	6750 8375 2281	東九州自動車 道建設（鹿屋 串良IC～曾 於弥五郎IC 間）による記 録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮ヶ原遺跡	散布地	旧石器時代	ブロック3か所	細石刃、細石刃核、砥石				
	散布地	縄 文 時 代	早期	落とし穴 3基 土坑 3基 集石遺構 4基	前平式土器、石坂式土器、下刺峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、妙見・天道ヶ尾式土器、平椅式土器、壺ノ神式土器、石鏃、磨製石斧、石匙、削器、搔器、楔形石器、異形石器、石核、磨石、敲石、石皿			
	散布地		中・後期	落とし穴 4基 土坑 18基 集石遺構 3基	深浦式土器、岩崎上層式土器、鐘崎式土器、中岳式土器、市来式土器、石鏃、ドリル、楔形石器、石匙、削器、敲石			
	散布地	弥生時代		下城式土器、入来Ⅱ式土器				
	散布地	近世～現代	道跡1条（数層の硬化面）	陶磁器、煙管、貨幣等				
遺跡の概要	本遺跡は、発掘調査の結果、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、近世～現代の遺構・遺物が確認された。特に、縄文時代早期後葉の妙見式土器、天道ヶ尾式土器、平椅式土器に比定できる土器が多数出土していることから、この時期の土器製作技法の変遷を解明していくに貴重な資料となるものと考えられる。また、県道下から検出された近世から現代にかけての硬化面は、同じ場所ですれすれ大きさを変えながら改築を繰り返して行われたことがうかがえ、近世から現代にかけての人々の生活を解明していくとつの手がかりになるものと考えられる。							



宮ヶ原遺跡位置図 (S=1/25,000)

例 言

- 1 本編は、東九州自動車道建設（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）建設に伴う宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡発掘調査報告書の宮ヶ原遺跡編である。
- 2 宮ヶ原遺跡は鹿児島県曾於市大隅町大谷及び荒谷1130番地ほかに所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は、国土交通省九州地方備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査事業は、平成19・20・22年度に実施し、整理・報告書作成事業は、平成21年度から平成23年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は宮ヶ原遺跡が「MGH」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海抜絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は衛星カメラで九州に委託した。
- 11 遺構実測図、遺物出土状況図の作成及びトレースは、永瀬功治・松下建生が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、土器を八木澤一郎・松下、石器を長野眞一・富田逸郎が担当し、整理作業員の協力を得て行った。また、遺物実測（石器）の一部を榎大成エンジニアリング、熊本九州文化財研究所に委託し富田が監修した。
- 13 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 14 本報告に係る自然化学分析は、放射性炭素年代測定を株式会社分析研究所、藤バレオ・ラボに委託した。
- 15 本編の執筆は次のように分担し、編集は松下が行った。

第1章・第2章	松下
第3章 第1節・第2節	松下
第3節	富田・八木澤・松下 岩元康成
第4章	委託（体裁：田畑哲治）
第5章	富田・八木澤・松下
- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、平成11年1月に鹿屋申良IC～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋申良IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡(854,100㎡)が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センターの4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の徹底的な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

そこで、鹿児島県教育委員会は、まず、平成13年1月29日から平成13年2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石楯遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日から7月26日に鹿屋申良IC～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と、平成13年9月17日から10月26日まで、平成13年12月3日から12月25日までの2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩伏遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日から平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志IC～鹿屋申良IC間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅IC（平成21年4月28日、「曾於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調

査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまますることとなった。

また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

宮ヶ原遺跡の調査は、以下の通り実施した。
分布調査：平成10年度
試掘調査：平成12年度
確認調査：平成19年度
本調査：平成19・20・22年度
整理・報告書作成作業：平成21～23年度（今年度）
なお、各調査の詳細については次節以降で報告することとする。

第2節 事前調査

1 分布調査

宮ヶ原遺跡に関する分布調査は、日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道第13次区間のうち、鹿屋申良IC～末吉財部IC間の分布調査依頼を受け、平成11年1月に実施した。分布調査の結果、遺跡範囲面積が22,000㎡であることが判明した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（分布調査：平成10年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課 課長 内村正弘
	〃 調査課長補佐 庭田野慎一
調査企画	〃 埋蔵文化財係長 戸崎勝洋
調査担当	〃 文化財主事 倉元良文
	〃 堂込秀人
	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主任文化財主事 長野真一

2 試掘調査

宮ヶ原遺跡の試掘調査は、分布調査の結果を受けて、調査の利便性や面積等を考慮し、包含層等の状況を確認するため、平成13年1月29日～1月30日の2日間に実施した。調査方法は、3m×10mの試掘トレンチを1か所設定し、重機を使用し、地層と遺構・遺物の有無を確認しながら、約3.3mまで掘り下げた。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

試掘調査の調査体制は次のとおりである。

調査体制（試掘調査：平成12年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
------	--------------------

調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 井上明文
調査企画	〃 次長兼総務課長 黒木友幸
	〃 主任文化財主事兼 調査課長 新東兎一
	〃 主任文化財主事兼 調査課長補佐 立神次郎
	〃 主任文化財主事兼 第二調査係長 彌榮久志
調査担当	〃 主任文化財主事 長野真一
	〃 文化財主事 井ノ上秀文
	〃 〃 大保秀樹
	〃 〃 立部 剛
	〃 〃 高見憲次
	〃 文化財研究員 藤野義久
	〃 〃 山崎克之
	〃 〃 有馬孝一
事務担当	〃 総務係長 有村 賢
	〃 主 事 溜池住子

3 確認調査

本遺跡の確認調査を2回実施した。

1回目は、用地取得済み部分(約9,000㎡)の確認調査を平成19年5月16日から平成19年6月28日まで実施した。調査は、確認トレンチを11箇所設定し、重機で表土を剥いだ後、人力で掘り下げた。調査の結果、層の残存と遺構・遺物が確認されたので引き続き本調査を行うこととした。

2回目は、調査開始後に用地取得済みとなった農道南側の確認調査を本調査の作業工程と調整を図り、表土剥ぎを平成19年10月9日に、調査を平成19年11月26日から平成19年11月28日まで実施した。調査は、重機で表土を剥いだ後、確認トレンチを6箇所設定し、人力で掘り下げた。調査の結果、層の残存及び遺構・遺物は確認されなかった。

調査体制(平成19年度)

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
	鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 宮原景信
調査企画	〃 次長兼総務課長 平山 章
	〃 次長兼南の縄文室長 新東兎一
	〃 調査第二課長 立神次郎

	〃 主任文化財主事兼 調査第二課 第一調査係長 彌榮久志
調査担当	〃 文化財主事 高岡和也
	〃 〃 〃 榎田岳志
	〃 文化財調査員(1回目) 岩永勇亮
	〃 文化財調査員(2回目) 佐藤真人
事務担当	〃 総務係長 寄井田正秀
	〃 主 事 五百路真

調査の詳細(日誌抄より) ※T=トレンチ

(1回目)	
5月16日～5月18日	オリエンテーション、表土剥ぎ。2m×20mの確認T設定(1～6T)。1T掘り下げ。
5月21日～5月28日	表土剥ぎ。メッシュ杭打ち(STA136+40とSTA135+60基点)。1～5T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。土坑1～5検出状況写真撮影、実測。
6月1日～6月8日	7～10T設定、掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。1～6T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ、土層断面実測。T位置図作成。
6月11日～6月15日	1～6T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ、土層断面実測。9・10T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。11T設定、掘り下げ。
6月18日～6月22日	1～7T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ、土層断面実測。8・11T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。
6月18日～6月22日	1・3・4・6～8T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ、土層断面実測。11T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。
6月25日～6月28日	1～6T拡張調査。

(2回目) ※本調査の作業工程と調整を図り実施

10月9日	H～L-6～13区、重機による表土剥ぎ。確認T設定(18～23T)
11月26日～11月28日	設定した確認Tの調査。層の残存、遺構・遺物確認できず。

第3節 本調査

本調査を平成19・20・22年度に実施した。平成19年度は確認調査に引き続き平成19年7月2日から平成20年3月19日まで、平成20年度は平成20年5月22日から平成22年3月19日まで、平成22年度は平成22年5月6日から平成22年7月27日まで実施した。各年度の調査体制及び調査の詳細(日誌抄より)については次のとおりである。

調査体制(平成19年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所 長	宮原景信
調査企画	” 次長兼総務課長	平山 章
	” 次長兼南の縄文室長	新真晃一
	” 調査第二課長	立神次郎
	” 主任文化財主事兼調査第二課	
	” 第一調査係長	彌榮久志
調査担当	” 文化財主事	高岡和也
	” ”	楸田岳志
	” 文化財調査員(前期)	岩永勇亮
	” 文化財調査員(後期)	佐藤真人
事務担当	” 総務係長	寄井田正秀
	” 主 事	五百路真
外部指導者	鹿児島大学 理学部 教授	小林哲夫
	” 法学部 准教授	本田道輝

調査の詳細(日誌抄より) ※T=トレンチ

7月2日～7月6日

1・2・4T掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。

G～J-23～28区:IVa層掘り下げ、ピット実測。

7月9日～7月13日

G～J-23～28区:表土剥ぎ、IVa層掘り下げ、

ピット実測。4T拡張調査、VIIa層掘り下げ。

7月17日～7月20日

G～J-23～28区:表土剥ぎ、IVa～IVb層掘り

下げ、ピット・土坑実測、遺物取り上げ、写真撮影。

4T拡張調査、VIIa層掘り下げ。1T集石(1号、2号)実測、写真撮影。グリッド杭打ち。

7月23日～7月27日

G～J-23～28区:表土剥ぎ、IVa～Vb層掘り

下げ、土坑実測。1T集石(2号)実測。4T拡張調査、X・XI層掘り下げ。

8月1日～8月3日

G～J-23～28区:IVa～Vc層掘り下げ、土坑実測。4T拡張調査、XII・XIII層掘り下げ。耐風養生、台風来襲

8月6日～8月10日

G～J-23～28区:IVb～Vc層掘り下げ、土坑実測、平板実測、遺物取り上げ。4T拡張調査、XIII・XIV層掘り下げ。5T、7T土層断面写真撮影。

8月16日～8月17日

G～J-23～28区:IVb～VI層掘り下げ、土坑実測。

G～H-26～27区:Vb層コンター図作成。4T拡張調査、XIV層掘り下げ。黒曜石チップ出土。11T遺物取り上げ。

8月20日～8月24日

G～J-23～28区:IVb～VII層掘り下げ、土坑実測、集石3号検出、写真撮影。4T拡張調査、XV層掘り下げ、遺物取り上げ。

8月27日～8月28日

G～J-26～28区:VI～VIII層掘り下げ、遺物取り

上げ、集石3号検出、写真撮影、落とし穴検出、半截。9月3日～9月7日

G～J-26～28区:VIII層掘り下げ、遺物取り上げ、落とし穴半截、写真撮影(H・I-26・27区)、竪穴状遺構(J-27区)掘り下げ、土坑検出(G-26区)。9月10日～9月14日

G～J-26～28区:VIII層掘り下げ、遺物取り上げ、落とし穴半截、写真撮影(H・I-26・27区)、竪穴状遺構(J-27区)掘り下げ、土坑検出(G-26区)、集石3号実測(H-27区)。

9月18日～9月21日

G～J-26～28区:VIII～IX層まで掘り下げ。H-26区、落とし穴掘り下げ・スライス・完掘状況写真撮影。H-27区、集石実測。J-27区、土坑実測。I-28・29区、IX層以下の下層確認調査。G-26区、剥片集中範囲(XIX層)写真撮影、取り上げ。H-J-26・27区、東側土層断面実測、コンタ実測。

9月25日～9月27日

G～J-26・28区:VIII層以下下層確認調査。集石実測(H-27区)。土坑調査(J-27区)。T配置図作成(G～J-26～28区)。鹿児島大学理学部小林哲夫教授現地指導。

10月4日～10月5日

G～J-26～28区:VIII層以下下層確認調査。集石実測(H-27区)、土層断面実測(12T)。G～J-21～25区、グリッド杭打ち・平板実測遺構・配置図作成。K～N-24～26区、重機による表土剥ぎ。土坑調査(J-27区)。

10月9日～10月12日

G～J-26～28区：Ⅷ層以下下層確認調査、土層断面実測(13T)。G～J-21～25区、Ⅴ層掘り下げ・土坑調査、L～N-21～24区、重機による表土剥ぎ。土層断面実測(14～16T)。N-29～32区、Ⅵ～Ⅶ層掘り下げ、土坑調査(I-27区)。

10月15日～10月18日

G～J-21～25区：Ⅴ～Ⅵ層掘り下げ・遺物取り上げ・土坑調査。K～N-24～26区、重機による表土剥ぎ、遺物取り上げ。N-29～32区、Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ。G～J-26～28区、Ⅷ層以下確認T調査、土層断面実測(17T)。

10月22日～10月26日

G～J-21～25区：Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ、コンター図作成。N-29～32区：Ⅵ～ⅩⅢ層掘り下げ、遺物取り上げ。H-26区：落とし穴状遺構調査。J-28区：焼土跡調査。H-27区：集石実測。

11月1日～11月2日

G～J-21～25区：Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ・遺物取り上げ、平板実測、土坑調査(J-24・25区)。K-22・23区：Ⅳb層掘り下げ。N-29～32区：Ⅸ～ⅩⅤ層掘り下げ。

11月5日～11月9日

G～J-21～25区：Ⅵ層掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影(石匙)、土坑調査。K・L-23～28区：Ⅳb層掘り下げ・遺物取上げ。J-28区：焼土1実測、図面整理、遺物整理。現地説明会へ向けての準備。

11月12日～11月17日

G～J-21～25区：Ⅵ層掘り下げ、遺物取り上げ、土坑実測(1-24区)及び写真撮影、Ⅷ層掘り下げ、遺物写真撮影。K～M-24～28区：Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。K・L-23～28区：Ⅳb層掘り下げ。現地説明会へ向けての準備、環境整備。現地説明会の開催。

11月19日～11月22日

G～J-21～25区、Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ、土坑調査、遺物取り上げ。K～M-24～28区：Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ、コンター図作成、土坑調査(L-28区)。焼土跡調査(L-28区)。

11月26日～11月28日

K～N-27・28区：Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。K～M-29～31区：表土剥ぎ、精査、Ⅳ層掘り下げ。

12月3日～12月7日

G～J-21～25区：下層確認T調査(Ⅸ～ⅩⅢ層)。T設定(24～26T)。K～M-24～28区：Ⅴ層調査、掘り下げ。空撮準備、空撮。M-26区及びL-27区、Ⅵ～Ⅷ層T調査。

12月10日～12月14日

K～M-24～28区：Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ、土坑調査、

包含層掘り下げ、土坑実測、写真撮影、遺物取り上げ、コンター図作成、写真撮影。I-25区：土層断面実測。G～J-21～25区、下層確認T調査、写真撮影。

12月17日～12月21日

K～M-24～28区：Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ・遺物取り上げ。L-28区の写真撮影(環状石器をはじめとする遺物出土状況)、遺物取り上げ。J-24区：磨製石織出土状況写真撮影。I～J-24～25区：コンター図作成、写真撮影(磨製石織出土、自然流路?)。G～I-23～26区：コンター図作成、土坑実測、写真撮影。G～J-21～25区：ベルト掘り下げ、遺物取り上げ、遺構検出、ベルトはずし、土層断面実測。

12月25日～12月26日

K～M-27・28区：Ⅵ～Ⅷ層掘り下げ、石皿、土器出土状況写真撮影。N～O-26～34区：重機による埋め戻し。年末年始休暇に伴う現場管理、図面整理、遺物整理。彌栄係長現場指導。

1月7日～1月11日遺物整理・図面整理

K～M-25～28区、下層確認T調査(2m×5mのTを4箇所設定)、Ⅷ層掘り下げ、遺物取り上げ・写真撮影、土層断面実測。K～M-31区：重機による表土剥ぎ。M-26～28区：Ⅳ・Ⅴ層調査。H-24区：土坑(落とし穴?)調査。N-28区：集石4号実測、写真撮影。宮原所長と立神課長が年始のあいさつのため来跡。

1月15日～1月18日

M～N-26～28区：Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ、集石4号・5号実測、写真撮影、土層断面実測。K～M-25～28区及び34～37区：下層確認T調査、34T土層断面実測、土坑調査(K-27区)、遺物取り上げ。鹿児島大学法文学部本田道輝准教授現地指導。

1月21日～1月25日

K～M-25～28区：下層確認T調査、36T土坑(落とし穴?)調査、土層断面実測。コンター図作成。35～37T土層断面実測。重機による掘り下げ、遺物取り上げ。K～M-29～31区：Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ、Ⅴb層コンター図作成、写真撮影。M～N-26～28区：Ⅵ～Ⅷa層掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影。産業医職場訪問。図面整理、遺物整理。安全バートル来跡。K～L-29・30区：Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。

1月28日～2月1日

K～M-29～31区：Ⅴ層掘り下げ。K～M-26～28区：コンター図作成、36T遺構実測(落とし穴)。図面整理、遺物整理。

2月4日～2月8日

K～M-29～31区：Ⅴ・Ⅵ層調査、壑穴状遺構実測写真撮影、遺物取り上げ。36T(K-27区)の落とし穴状遺構3号調査(小ピット(遊茂木痕)実測、

スライス)。落とし穴状遺4号構検出。写真撮影(M-29区)。K、M-27～28区：土層断面実測。

2月12日～2月15日

K～M-29～31区：VI～VII層調査、土坑調査(230～232、K-29区)、落とし穴状遺構?調査(M-29区)、土坑(砂質土集中土坑)調査(K-29区)。36 T(K-27区)の落とし穴状遺構3号調査(小ピット(逆茂木痕)実測、スライス終了)※小ピット(逆茂木痕)を全部で4基検出。K-26～28区、コンター図作成準備。

2月18日～2月22日

K～M-29～31区：VIII層調査、遺物取り上げ、写真撮影(K・L-30区、チップ集中出土箇所を中心に)、遺物取り上げ、土坑調査(土坑231)。ベルトはなし(J～K-26～28区)。

2月25日～2月27日

K～M-29～31区：VIII層調査、遺物取り上げ、コンター図作成、土坑251号(砂質集中土坑)調査。図面整理。土坑調査(完掘写真撮影・スライス調査、小ピット(逆茂木)検出されず)。K～L-30区の土坑調査(検出時には住居の可能性を考えたが横転であると判断)。

3月3日～3月7日

K～M-29～31区：VIII層調査。38～46 T(9箇所)を設定し下層確認調査(IX～XIII層まで終了)。K-29区、土坑251号調査(逆茂木痕と思われる小ピットを3基検出、写真撮影、完掘)※落とし穴4号へ名称変更。土坑253号調査(検出状況写真撮影)。次年度の調査箇所の先行調査(P-36区、M-35区、I-43区に41～43 Tを設定し、調査。41 T：V層から一部残存、VIII層調査、石織出土、IX層面検出で終了。42 T：XIII層から残存、XIII層調査、XVI層(シラス)検出、土層断面実測で終了。43 T：VIIa層から残存・VIII層～XII層調査)

3月10日～3月14日

K～M-29～31区：下層確認T調査(38～40 T・44～46 T、X～XV層掘り下げ・遺物取り上げ・土層断面実測)。土坑253調査 底部不定形のため樹痕または自然の落ちこみと判断。次年度調査区の先行調査：41 T、土層断面実測・43 T、XIV層まで掘り下げ、土層断面実測で終了。新たに47 Tを設定し(P-38区)、I～Vc層掘り下げ。

3月17日～3月19日

K～M-29～31区：下層確認T調査(38～40 T・44～46 T、XIV～XV層掘り下げ、土層断面実測、遺物取り上げ。次年度調査区の先行調査：47 T、VIII層掘り下げT拡張・遺物取り上げ。K～M-32区：表土剥ぎ。撤収作業及び発掘機材、遺物等の荷出し。宮原所長が来跡し、終了あいさつ。

調査体制(平成20年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 宮原景信

調査企画 // 次長兼総務課長 平山章

// 次長兼南の縄文室長 池畑耕一

// 調査第二課長 彌榮久志

// 主任文化財主事兼

調査第二課

第一調査係長 中村耕治

調査担当 // 文化財主事 日高正人

// // 楸田岳志

事務担当 // 総務係長 紙屋伸一

// 主事 五百路真

調査の詳細(日誌抄り)

5月21日～5月23日

発掘作業員雇用開始に伴うオリエンテーション。発掘機材等の荷受け、発掘道具配付。K～N-32区：表土人力堀削、VIII層掘り下げ、遺構検出。F～I-31・32区：表土剥ぎ。F～I-29・30区：表土剥ぎ・掘り下げ(表土・IV・VI・VIII層)。遺跡周辺の側溝の土あげ、草刈り、防風用寒冷紗設置

5月26日～5月28日

現場周辺の環境整備。K～N-32区：VIII層掘り下げ、遺構検出、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ。F～I-29～32区：表土剥ぎ、掘り下げ(表土残土除去)、IV層掘り下げ。I-29～31区：表土剥ぎ。K-30・31区：IX層上面検出 住居?検出状況写真撮影。図面整理。

6月2日～6月6日

I～J-29～32区：表土剥ぎ(重機による)、表土残土除去、IVb層(P7)掘り下げ。G～H-29～32区：表土残土除去。J-28区：IVb層掘り下げ、遺構検出、写真撮影。K～N-32区：遺物取り上げ、写真撮影(遺物出土状況)。G～H-29～31区：コンター図作成。E～J-31～33区：表土剥ぎ(P7上面)。K～O-32区：VIII層掘り下げ、遺構検出、遺物取り上げ。J-29区：排土用穴設置、昨年度未調査部分(IX層)まで掘り下げ。F～J-29～33区：表土剥ぎ、表土残土掘り下げ。K～O-32区：VIII層掘り下げ、遺物除去。F～I-20～33区：グリッド仮杭設置。図面整理。

6月9日～6月13日

F～J-29～32区:IVb～Va層掘り下げ。G～I-31区:下層確認ミニT掘り下げ(擾乱区域が多く、Vc上面でのコンターがとりにくいためミニTをあける)、擾乱・表土遺物一括取り上げ。J・K-30・31区の杭にレベル再移動。K～M-32・33区:Ⅷa層 重機による掘り下げ(IX層上面まで)。J-29区:土坑、ミニT掘り下げ(VI層上面検出の横転、住居、落とし穴の可能性を含め調査)。F・G-30～32区:遺物取り上げ(VI～Ⅷ層)。I～J-29～33区:Va層まで掘り下げ、Vb層上面のコンター図作成。I～J-30-31区:遺構検出する全て樹痕と判断。雨天時の流水対策(土のう積み、溝切り等)、図面整理、遺物整理。H～J-29～31区:表土残土除去。K～N-32区:Ⅷ層掘り下げ、重機によるⅧ層掘り下げ。I～J-32～33区:重機による表土剥ぎ。J-28区:土坑半裁・IVb層掘り下げ。

6月16日～6月20日

I～J-29～32区:IVb～Va層掘り下げ、Vb層上面コンター図作成。G～H-29～32区:Va層掘り下げ、天地返し部分の掘り下げ。K～J-33・34区:Ⅷa層掘り下げ。J-33区:Ⅷ層掘り下げ、終了。K～N-33・34区:Ⅷa層表土残土除去。K～M-32・33区:Ⅷ層掘り下げ、IX層面(P14)遺構検出・コンター図作成準備。J-29区:土坑調査。

6月23日～6月27日

G～J-29～31区:Vb・Vc層掘り下げ、遺物取り上げ、ベルトコンベア移動。K～M-30～35区:IX層上面遺構検出状況写真撮影、コンター図作成、溝状遺構平板実測。K～M-33～35区:IX層上面まで重機による掘り下げ、IX層上面精査・遺構確認作業。G～J-28～31区:Vb・Vc層掘り下げ、Vb層コンター図作成、遺物取り上げ。図面整理。

7月1日～7月4日

G～J-29～31区:V～VI層掘り下げ、遺物取り上げ、仮杭打ち(I・J-28～30区)。J-28区:VI～Ⅷ層掘り下げ、遺物取り上げ、遺物出土状況写真撮影。K-30区:土坑調査(検出、埋土除去、写真撮影)。M～N-30～31区:溝状遺構(?)調査。H～J-29～31区:VI層掘り下げ・遺物取り上げ。J-30区:土坑または横転写真撮影、掘り下げ後樹痕と判断。

7月7日～7月11日

M・N-30・31区:溝状遺構(?)調査、トレンチ設定(48～51T)及び調査(48・49・51Tは表土下が旧石器時代の包含層だった)。遺物取り上げ(VI～Ⅷ、X1・XII層)。出土状況写真撮影。J-32～34区:IX層上面遺構検出状況写真撮影。M・N-32～35区IX層上面自然流路、掘り下げ、ミニT掘り下げ。

7月14日～7月18日

M・N-30・31区:トレンチ調査(掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影。J-32・33区:遺構調査(埋土除去、写真撮影)→遺構ではないと判断。K～N-32・33区:IX層検出自然流路断面T設定、掘り下げ、実測、写真撮影。新たにトレンチ設定(52・53T)及び掘り下げ。耐風養生。図面整理。遺物整理。デジタルトレース。

7月22日～7月25日

I・J-29～31区:VIb層掘り下げ、遺物取り上げ。J-28区:X層上面コンター図作成。I・J-29区:IVb～Ⅷ層掘り下げ、セクションベルト南壁の土層断面実測。48～53T調査(旧石器時代の調査:掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影等)。50Tは土層断面実測後埋め戻して調査終了。L・M-31～33区:自然流路1再写真撮影、平板実測。台風後の遺跡内の安全確認、飛石対策用寒冷紗設置。

8月1日、8月4日～8月8日

48・49、51～53Tの調査(旧石器時代の調査:掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影等、トレンチ配置図作成。G～J-29・30区:VI層掘り下げ。L・M-32～34区:自然流路2(IX層上面検出)平板実測。I・J-31・32区:VI層掘り下げ。E～J-29～32区:VIb層掘り下げ、ベルトコンベア移動。F～J-29～33区VI層掘り下げ、検出状況写真撮影。

8月11日～8月12日

F～J-29～33区:VI層掘り下げ、遺物取り上げ、出土状況写真撮影。

8月18日～8月22日

F～J-29～33区:VI層～Ⅷ層掘り下げ、遺物取り上げ。I・J-30区:Ⅷ層上面検出土坑の調査(写真撮影、埋土除去、実測等)。旧石器時代の調査(48・49・51・53Tの掘り下げ)。図面整理。

8月25日～8月28日

F～J-29～32区:VI～Ⅷ層掘り下げ・遺物取り上げ。I～J-30区:土坑調査(半掘、実測、写真撮影等)。H～J-30～33区:VII～Ⅷ層掘り下げ、遺物取り上げ旧石器時代の調査(48・49・51・53Tの掘り下げ)。51Tは土層断面実測後埋め戻し。

9月1日～9月5日

F～J-29～32区:Ⅷ層掘り下げ、遺物取り上げ、打製石斧出土状況写真撮影。E～G-29～32区:Ⅷ層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ、ベルトコンベア移動。I・J-30区:土坑調査(半裁・写真撮影等)。J-28区:重機による排土場整備。旧石器時代の調査(48・49・53Tの掘り下げ)。48・49Tは土層断面実測後埋め戻し。C・D-31・32区:54Tを設定し、表土剥ぎ、VI～Ⅷ層掘り下げ、ベル

トコンベア移動。

9月8日～9月12日

E～G-29～32区:Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ, 土器集中域検出状況写真撮影及び実測, 取り上げ(先波で取り上げ)。I・J-30区:Ⅷ層検出落とし穴の調査(半裁, 逆茂木痕断面写真撮影等)。54 Tの調査(遺物取り上げ, 出土状況写真撮影等)。耐風養生。

9月16日～9月19日

E～I-29～32区:Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ。F・G-29・30区:Ⅷ層遺物取り上げ(トータルステーション)。H-30区:土坑の調査(半裁, 写真撮影)。54 Tの調査(遺物取り上げ等)。耐風養生。図面整理。

9月24日～9月26日

E～I-29～32区:Ⅷ層掘り下げ・遺物取り上げ。G～H-29区:土坑の調査(実測, 写真撮影等)。I・J-30区:落とし穴の調査(実測, 断面実測等)。E～I-29区:Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ。54 Tの調査(掘り下げ, 遺物取り上げ等)。

10月6日～10月10日

E～J-29～32区:Ⅷ層掘り下げ, 遺物出土状況写真撮影, 遺物取り上げ。G・H-31区:土器集中写真撮影。I・J-30区:落とし穴の調査(断面スライス, 底部逆茂木跡実測, 断面実測, 底面写真撮影等)。I・J-31区:Ⅷ層検出土坑の調査(検出状況写真撮影, 半掘等)。H-31区:集中出土土器の実測。I-33区及びJ-29区:土坑検出写真撮影。54 Tの調査(Ⅷ層掘り下げ, IX層上面精査・遺構確認, 重機によるIX層除去等)。

10月14日～10月17日

H～J-30～32区:Ⅷ層掘り下げ。H-31区:土器集中, 実測, 遺物取り上げ。F～J-29～32区:重機によるIX層除去。I-30区:落とし穴最低面まで掘り下げ, 実測。細石刃文化期(X～XI層)の調査:55～57 Tを新たに設定し, 54 Tは2.0 m×1.25 m, 55～57 Tは1.5×1 mのメッシュを組み調査。X層からマイクロプレーダが計7点出土。X層出土状況写真撮影, 遺物取り上げ。

10月20日～10月24日

F～J-29～32区:Ⅷ層遺物取り上げ, IX層上面での遺構確認, コンター図作成。H・I-30区:落とし穴(2基)の調査(逆茂木痕検出写真撮影, 完掘写真撮影)。M-32～34区:表土剥ぎ。54 T～57 T:細石刃文化期(X～XII層)の調査(細石刃やチップ等が出土したため, 56 Tを拡張)。図面整理。

10月27日～10月28日

G～I-29～32区:IX層上面まで掘り下げ。54～57 T:旧石器時代の調査(56 Tは細石刃文化期の調査)。

11月4日～11月7日

54～57 T:旧石器時代の調査(56 Tは細石刃文化期の調査)。

11月10日～11月14日

F～J-29～32区:遺構検出写真撮影。H-29区:土坑(Ⅷ層埋土)の調査(検出状況写真撮影, 埋土除去等)。54～57 T:旧石器時代の調査(56 Tは細石刃文化期の調査)。

11月17日～11月21日

G～I-29区:土層断面実測。H・I-29区:北面土層断面実測。P・Q-37～39区:IV～Vb層掘り下げ。54～57 T:旧石器時代の調査(54～57 Tは土層断面実測, 写真撮影後調査終了)。

新たに58～60 Tを設定し, 旧石器時代の調査を開始。月野小6年生10名, 教師1名…地層見学, 発掘体験。

11月25日～11月27日

G～I-29区:土層断面写真撮影。57 T:土層断面実測。

12月1日～12月5日

C-31区, 54 T拡張部分:表土剥ぎ, Va～Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ。E～I-32～34区:表土剥ぎ, VI～Ⅷ層掘り下げ。H-29・31区:土坑(2基)の調査(埋土除去, 断面実測, 写真撮影等)。旧石器時代の調査(55・56・58～60 T):掘り下げ, 写真撮影, 遺物取り上げ。57 Tは埋め戻し。

12月8日～12月12日

E～H-32～34区:Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ, 遺構検出・実測(F-32区, 6号集石遺構), 写真撮影。H-29区:落とし穴状遺構の調査(半掘, 写真撮影等)。54 T拡張部分:Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ。旧石器時代の調査(55・56・58～60 T):掘り下げ, 写真撮影, 遺物取り上げ。図面整理。

12月15日～12月19日

E～H-32～34区:Ⅷ層掘り下げ完了, 遺物取り上げ。F-32区6号集石実測(二段目), 写真撮影。G-32区:遺物取り上げ。H-29・31区:土坑(2基)の調査(半掘, 半裁, 断面実測, 写真撮影等)。H・I-28区:センターベルト掘り下げ。IV～Ⅷ層掘り下げ。L・O-20～25区:重機による草払い。旧石器時代の調査(L・M-34区, 55・56・58～60 T):掘り下げ, 遺物取り上げ, 土層断面実測, 写真撮影等)。55 Tは埋め戻し。54 T拡張部分:Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ, 石皿出土写真, 再拡張等)。

12月22日～12月24日

H・I-28区:センターベルト掘り下げ(IVb～IX層上面まで)。L・M-34区:X～XII層掘り下げ・遺物取り上げ。54 T拡張部分:平椅式土器集中部実測, 遺物取り上げ, 埋め戻し。旧石器時代の調査(58

～60 T)；掘り下げ、土層断面実測。

1月6日～1月9日

G・H-28区：センターベルトV層まで掘り下げ。H～J-32・34区：重機によるVII層除去・IX層上面遺構検出・センターベルト延長。K-33区：センターベルト交点付近、IX層除去(重機)。K・L-34区：旧石器時代の調査。54 T拡張部分：平桁式土器集中部実測終了。遺物取り上げ、IX層上面コンター図作成。北面壁土層断面実測、埋め戻し。旧石器時代の調査(L・M-34区、55・56・58～60 T)；掘り下げ、遺物取り上げ、土層断面実測、写真撮影等)。58・60 Tは埋め戻し。新たに61 Tを設定し、旧石器時代の調査開始。

1月13日～1月16日

I～M-33・34区：自然流路実測(平板)、旧石器時代の調査(掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影等)。トレンチによる旧石器時代の調査(54・59・61 T)；掘り下げ、写真撮影。54 T拡張部分は完掘状況写真撮影後埋め戻して調査終了。新たに62・63 Tを設定し調査開始。

1月19日～1月23日

F・G-28区：IV～V層掘り下げ、Vb～Vc層コンター図作成準備。K～N-34・35区：旧石器時代の調査。トレンチによる旧石器時代の調査(59・61～63 T)；完掘、土層断面実測、写真撮影。写真撮影後埋め戻して調査終了。31～33 Tの再調査；31 Tは土層断面実測のみ。32・33 TはVI層～IX層まで掘り下げ、土層断面実測、写真撮影。図面整理。

1月26日～1月28日

K～N-34～36区：旧石器時代の調査(掘り下げ、平板実測等)、新たな調査箇所の表土剥ぎ。F・G-28区：V～VI層の掘り下げ、Vb層コンター図作成。

2月2日～2月6日

A～F-7～15区：下層確認T調査(掘り下げ、写真撮影、平板によるトレンチ配置図作成等)。F・G-28区：VI～VII層掘り下げ。H～L-5～13区：昨年度設定下層確認T調査(掘り下げ、精査等)。K～M-35区：旧石器時代該当層の掘り下げ。L～N-33・34区：表土剥ぎ。図面整理。

2月10日～2月13日

H～L-5～13区：下層確認T調査(遺物なし、写真撮影、土層断面実測、調査終了)。F・G-28区：VI層掘り下げ・遺物取り上げ。K～M-35区：旧石器時代該当層の掘り下げ。

2月16日～2月20日

F・G-28区：VI～VII層掘り下げ(遺物なし)。J～M-34・35区：X～XII層掘り下げ、遺物取り上げ。土層断面実測。N・O-32～34区：遺構確認のため

IX層上面精査、コンター図作成。図面整理(修正、データ入力)。

2月23日～2月25日

F・G-38区：VII層掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ。K～M-35区：X I層掘り下げ・遺物取り上げ。I～K-28～31区：センターベルト掘り下げ・遺物取り上げ。K～M-34・35区：旧石器時代該当層の掘り下げ。N-37区：VI～VII層掘り下げ。O～Q-36～39区：V層掘り下げ。

3月2日～3月6日

F・G-27・28区：IX層上面遺構確認作業、IX層上面コンター図作成、土層断面実測。I～K-28～31区：セクションベルト掘り下げ(VIII層)、遺物取り上げ。K～M-34・35区：旧石器時代該当層の掘り下げ。N-37区：IX層上面遺構確認作業、IX層上面コンター図作成、写真撮影。O～Q-36～39区：IV・V層掘り下げ、遺物取り上げ。

3月9日～3月13日

K～M-34・35区：ベルト掘り下げ(旧石器時代該当層)、コンター図作成。N・O-34・35区：旧石器時代該当層の掘り下げ。O・Q-36～39区：IV～VIII層掘り下げ、遺物取り上げ、コンター図作成。

3月

調査体制(平成22年度)

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
	鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所長	山下吉美	
調査企画	次長兼総務課長	田中明成	
	次長兼南の縄文室長	中村耕治	
	調査第二課長	井ノ上秀文	
	文化財主事兼		
	調査第二課		
	第一調査係長	前迫亮一	
調査担当	文化財主事	長崎慎太郎	
		松下建生	
事務担当	総務係長	大園祥子	
	主事	高崎智博	

調査の詳細(日誌抄より)

5月6日～5月7日

表土剥ぎ(県道北側部分)。物品搬入(コンパネ)。リース品搬入・点検。国交省西山監督官来訪。環境整備(電気工事・駐車場造成)。

5月10日～5月14日

雇用通知・ガイドランス。発掘機材、備品搬入。環境整備。県道北側の表土下掘り下げ。耕作土中よりスス付着の礫・黒曜石、各1点出土。耕作土中より縄文早期土器・黒曜石チップ・土師器出土。東側部分で土坑・硬化面検出。中央部で東西に走る溝状遺構検出。X I層で黄色バミスを埋土とする長方形土坑検出。国交省西山監督官との協議。

5月17日～5月21日

県道北側遺構検出(硬化面)。県道表土下掘り下げ。土坑の調査(検出・実測・写真撮影)。溝状遺構写真撮影。遺跡範囲図データ作成。県道北側Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。土層断面写真撮影。実測。県道下溝状遺構・清掃・写真撮影。ベルコン設置。国交省西山監督官実跡。

5月24日～5月28日

県道北側(E～G-34・35区):硬化面検出、写真撮影、Ⅱ～Ⅳa層掘り下げ。県道下(N・O-38・39区):溝状遺構の硬化面の調査(検出、平板実測)、土坑の調査(検出、完掘)、写真撮影。グリッド杭打ち。集石1号検出。実測、写真撮影。土層断面(県道下南)実測、写真撮影。M-38区:SD1半掘・写真撮影・実測。ベルコン移動。

6月1日～6月4日

E～J-34～36区、K～O-35～39区:溝状遺構(硬化面)、SD1・3・4の検出、半掘、完掘、実測、写真撮影。Ⅱ～Ⅳa層掘り下げ。F-33区:表土剥ぎ。ベルコン移動。1T(E・F-34・35区)設定。Ⅳa～Ⅶ層掘り下げ。溝状遺構検出・写真撮影。2T(N-38・39区)設定。Ⅸ～ⅩⅡ層掘り下げ。F-34区:硬化面・Ⅳa層コンター平板実測・写真撮影。G～L-36区:土層断面実測。N～P-39・40区:Ⅳa層コンター実測。曾於市教委藤目係長・松下氏実跡。

6月7日～6月11日

1Tの調査:Ⅳa～ⅩⅥ層掘り下げ、遺物取り上げ、溝状遺構検出、平板実測、南・西壁土層断面実測、SD-5実測、写真撮影。2T(N-38・39区)の調査:設定、Ⅳa～ⅩⅣb層掘り下げ。F～J-33～36、39・40区、N～P-38～40区:溝状遺構(硬化面)の調査(検出、平面・断面実測)、Ⅳa～Ⅶ層掘り下げ、遺物取り上げ。Ⅳa層コンター図作成。L-35区:Ⅶ～Ⅹ層掘り下げ。K・L-35・36区:土層断面実測、Ⅹ～ⅩⅡ層掘り下げ。

6月14日～6月18日

1Tの調査:Ⅳa～ⅩⅥ層掘り下げ、遺物取り上げ、溝状遺構検出、写真撮影、平板実測。2Tの調査:ⅩⅣa～ⅩⅣb層掘り下げ。N～P-39区:Ⅴa～ⅩⅢ層掘り下げ。K・L-35・36区:土層断面実測。写真・図面整理。F-34区:Ⅳa～Ⅳb層掘り下げ。

重機による排土・排水処理。

6月21日～6月28日

図面整理。重機による排土及び排水処理。1Tの調査:溝状遺構(硬化面)検出、完掘、写真撮影、実測。重機によるⅣa～ⅩⅥ層掘り下げ。F-33～35区:Ⅳa～Ⅶ層掘り下げ。H～M-35～39:溝状遺構(硬化面)の調査(清掃、実測)、Ⅳa層コンター平板実測。M～O-37～39区:Ⅳa～Ⅶ層掘り下げ。F～H-33～35区:Ⅳb～Ⅶ層掘り下げ。曾於市教委松下氏実跡。

7月1日～7月2日

F-34区:1T北壁土層断面実測。工事用道路下、重機によるⅦa層掘り下げ遺物が確認できなかったの調査終了。調査終了後すぐ道場施工業者が排水管設置工事に入る。G～J-34～37区:硬化面の調査。L～N-38区:Ⅳa層コンター平板実測・掘り下げ。F～I-33～35区:Ⅹ層掘り下げ。遺物取り上げ、SD6～11の調査(半掘、実測・写真撮影)。N・O-38・39区:Ⅹ層掘り下げ。2T東壁土層断面実測・写真撮影。

7月5日～7月9日

G～O-33～39区の調査:溝状遺構(硬化面)の調査(検出、ミニトレンチA～F完掘、実測、写真撮影等)、SD6～11の調査(半掘・完掘、実測、写真撮影)、Ⅳa～ⅩⅠ層掘り下げ。土層断面実測、Ⅳa層コンター図作成。1・2T西壁・北壁写真撮影。図面・写真整理。国土交通省黒木専門員来跡(排土処理及び調査範囲、日程の確認)。

7月12日～7月16日

G～O-33～39区:溝状遺構(硬化面)の調査(掘り下げ、実測、写真撮影等)。F～I-33～35区:Ⅱ～ⅣⅥ～Ⅹ層掘り下げ、遺物取り上げ、写真撮影。J・K-35～37区:3Tの調査(設定、掘り下げ)、Ⅴc、Ⅶ層掘り下げ。M～O-37～39区:Ⅳa・Ⅶ層掘り下げ、土層断面実測。恒吉小学校鈴木慎一郎教諭、5・6年生児童7名、曾於市教委藤目係長・松下氏遺跡見学のため来跡。

7月20日～7月23日

G～O-33～39区:溝状遺構(硬化面)の調査(検出、掘り下げ、実測、写真撮影等)。F～H-33～35区:Ⅶ層掘り下げ、遺物取り上げ。N・O-37・38区:ⅦⅥ・Ⅹ層掘り下げ、遺物取り上げ。P-39区:東壁土層断面実測。遺跡範囲図作成。大隅南小学校新留智子校長ほか教諭3名、2～6年生児童12名、曾於市教委藤目係長・松下氏ほか1名遺跡見学のため来跡。南日本新聞曾於支局平峯記者が取材で来跡。後日、南日本新聞に「県道下から昔の道6層(大隅・宮ヶ原遺跡)」の記事掲載。

7月26日～7月29日

G-O-33～37区:溝状遺構(硬化面)の調査(実測, ミニトレA～L断面実測, 写真撮影, 調査終了)。N・O-37・38区:VI～VII層掘り下げ, 遺物取り上げ, 写真撮影。O・P-39区:IX層上面コンター図作成。調査終了に伴う環境整備。28日で調査終了, 29日に撤去完了検査(プレハブ撤去, レンタカー・バルコン返却等)。

第4節 整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は, 平成21年4月～平成24年3月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。

出土遺物の水洗い, 注記, 十三塚遺跡の遺構内遺物と包含層遺物の仕分け, 石器や一般織の仕分け等をはじめ, 両遺跡の石器実測の委託, 遺構, 遺物の実測, 拓本, トレース, レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。また, 鹿児島大学法文学部本田道輝准教授と鹿児島大学埋蔵文化財調査室中村直子准教授に集落等の遺構や, 遺物に関する指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制(平成21年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室
作成主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	山下吉美
作成企画	〃	次長兼総務課長	齋藤守重
	〃	次長兼南の縄文室長	青崎和憲
	〃	調査第二課長	瀬原久志
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課	
作成担当	〃	第一調査係長	長野真一
	〃	文化財調査員	岩下直樹
			(5月～8月)
	〃	〃	岩元康成
			(9月～3月)
事務担当	〃	総務係長	紙屋伸一
	〃	主事	高崎智博

調査指導 南九州考古学研究所 所長 新東晃一

作成体制(平成22年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室
作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	山下吉美
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文室長	中村耕治
	〃	調査第二課長	井ノ上秀文
	〃	文化財主事兼	
	〃	調査第二課	
作成担当	〃	第一調査係長	前迫亮一
	〃	文化財主事	松下建生
事務担当	〃	総務係長	大園祥子
	〃	主事	高崎智博

調査指導 宮崎県考古学会 会長 岩永哲夫

作成体制(平成23年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室
作成主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	寺田仁志
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中明成
	〃	次長兼南の縄文室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	富田逸郎
	〃	文化財主事兼	
	〃	調査第二課	
作成担当	〃	第一調査係長	八木澤一郎
	〃	文化財主事	松下建生
事務担当	〃	総務係長	大園祥子
	〃	主事	高崎智博
企画委員	〃	文化財研究員	岩永勇亮

報告書作成検討委員会 平成23年11月29日
寺田所長ほか9名

報告書作成指導委員会 平成23年11月24日
井ノ上次長ほか6名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

宮ヶ原遺跡は、鹿児島県曽於市大隅町荒谷に所在する。遺跡の所在する曽於市は、鹿児島県の北東部、宮崎県との県境に位置し、財部町・末吉町・大隅町の3町で構成されている。周囲は、宮崎県東部都市と鹿児島県志布志市・霧島市・鹿屋市・垂水市・大崎町の5市1町と隣接している。

遺跡の所在する曽於市を含めた鹿児島県北部から大隅半島北半分にかけての地勢を概観すれば、東西の山地とこれらに挟まれた低地帯から構成され、地質は大部分がシラス・ボラなどの火山灰土壌となっている。

山地は、東側に志布志湾北部から宮崎県に突出した形で、北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）で、主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119 m）で中生層の地質からなっている。西側は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なる。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々、南部の大甕橋岳（1,236.8 m）を主峰に横岳・御岳など1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間には低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。

これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この地域の火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、大部分は湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。この火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまでに大小多くの河川で開折され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食され残り残った広大な台地となっている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

曽於市のうち大隅町の地形は、東西に狭長く北部高地に端を発する前川、後川、月野川の3つの川がそれぞれ町内の東部、中部の波状型の凹地を随所に貫流し、東南に向かい、葦田川に入り志布志湾に注いでいる。大隅半島の基盤となる地層は、高隈山周辺に分布している新生代古第三紀の日南層群である。

本遺跡は月野川によって分断された標高約230 mの南部台地上、県道495号（志橋福山宮ヶ原）線沿いに位置する。遺跡の周辺は広大な畑地があり、夏は芥子芋すいか、冬は白菜の生産が盛んである。また、眺望も非常に良く、北に霧島連山、西に高隈連山と微かに桜島が眺望できる。

第2節 歴史的環境

宮ヶ原遺跡が所在する曽於市の歴史的環境は、明治時代以前については文献等に記載されている内容が少なく明らかではない。

明治時代以降では、大隅町は薩摩藩県が行われた明治4年（1871）7月に鹿児島県、同年11月に都城県に属し、地租改正が行われた明治6年（1873）に再び鹿児島県に編入された。明治20年（1887）に東郷暗部の直轄となり、明治22年（1889）に町村制の施行に伴い、岩川村・恒吉村・志布志村が成立した。明治24年（1891）に志布志村大字月野は分村して月野村が成立した。大正13年（1922）に岩川村が町制を施行して岩川町となり、昭和30年（1955）1月に岩川町・恒吉村・月野村が合併し大隅町が発足した。同年4月に野方村（現曾於市大崎町・志布志市有明町）の荒谷地区を編入した。平成17年（2005）に財部町・末吉町と合併し曾於市となり、現在に至る。

曾於市大隅町には、県指定民俗文化財の芥子芋どん祭り（昭和62年指定）、県指定有形文化財の投谷八幡宮（平成15年指定）、そして264か所の遺跡がある。

大隅町における発掘調査は、昭和31年（1956）に同志社大学の酒沼伸博博士が行った上八合遺跡の調査が最初で、縄文時代の遺物が出土したといわれている。その後、本格的な発掘調査は長く行われなかったが、平成4年から大隅町教育委員会が各種農業基盤整備に伴い本格的な発掘調査が再開された。調査を実施した遺跡は、宮田遺跡、立馬遺跡（いずれも縄文時代早期）、大丸・小迫遺跡（縄文時代早期、後期）、炭床遺跡（縄文時代早期、平安時代）、川路山遺跡（縄文時代後期）、鳴神遺跡（縄文時代晩期）等であった。調査の結果、多くの貴重な資料が確認された。

平成11年には鹿児島県教育委員会が県道改良事業に伴い出水平遺跡の調査を実施し、縄文時代早期の集石遺構8基を検出し、縄文時代早期、晩期、弥生時代前期の遺物が出土した。特筆すべきは、縄文時代早期の耳輪状土製品が出土していることである。

その後、鹿児島県教育委員会が東九州自動車道建設に伴う大規模な発掘調査を開始し、調査された遺跡によって、歴史的環境の様相が、さらに明らかとなりつつある。

旧石器時代

耳取遺跡・桐木遺跡・桐木B遺跡・間山遺跡・建山遺跡等で多くの資料が出土している。耳取・桐木遺跡ではナイフ形石器文化期から細石刃文化期に到る礫群や石器製作跡等の遺構が多く検出され、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・細石核・細石刃等の遺物が多く出土している。特筆すべきは、耳取遺跡で日本最古の石錐（耳

取ヴィーナス)も出土していることである。この耳取ヴィーナスを含む273点が平成19年県指定文化財として指定されている。建山遺跡では二時期のナイフ形石器文化期と細石刃文化期の存在が確認され、特に、細石刃文化期に西北九州からの移動もしくは交流を裏付ける資料や細石刃の線状痕の観察から細石刃の機能、使用方法について再考を促す資料等が出土している。

縄文時代

縄文時代の遺跡は各時期、多くの遺跡が発見されている。草創期では数は少ないが、桐木遺跡で集石遺構が検出され、隆起線土器や石鏃が出土している。早期では堅穴住居跡・連穴土坑・集石・土坑・落とし穴等の遺構が、踊場遺跡・耳取遺跡・桐木遺跡・関山遺跡・関山西遺跡・唐尾遺跡・西原段1遺跡・建山遺跡・狩俣遺跡・高古塚遺跡・定塚遺跡・チシャノ木遺跡など多くの遺跡で検出され、多種多様の土器や石器が多く出土している。なかでも関山遺跡では地形に沿った計画的な配置が行われていたことがうかがえる19基の落とし穴と赤色顔料が詰まった入れ子状の変形摺糸文土器が確認されている。また、定塚遺跡では堅穴住居跡97軒、連穴土坑15基、土坑257基、集石遺構54基、多種多様の土器や石器が確認されている。中期では桐木遺跡で船元式土器や在地の尖底柔痕文土器群・石鏃・石匙が多く出土し、関山遺跡・唐尾遺跡・高古塚遺跡などの遺跡で落とし穴が、小倉前遺跡・チシャノ木遺跡では土坑が検出されている。後期の遺跡はそれほど多くないが、丸尾遺跡は丸尾式土器の標識遺跡である。晩期の遺跡は各地にあるが、大きな集落遺跡はない。明確な遺構としては、桐木遺跡で入佐式・黒川式土器に伴う5軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑が、唐尾遺跡で黒川式土器に伴う1軒の堅穴住居跡が検出されている。遺物としては、上中段遺跡で夜臼式土器の土器セットに丹塗り壺や初痕土器などが含まれ、この時期の稲作の可能性を示す遺跡として注目されている。また、楠木岡遺跡で日常品の鉢形土器は縄文時代晩期のスタイルを維持され、壺形土器は弥生時代の最新形態が導入されるという辺地ならではの特色を見せている。

弥生時代・古墳時代

地形のせいか、弥生時代・古墳時代の遺跡は少なく、関山西遺跡・打込遺跡・吹切段II遺跡などが挙げられるが詳細は不明である。墳墓や集落の様相も不明である。

古代

古代は高塚遺跡・踊場遺跡といった都城盆地に近い遺跡で掘立柱建物跡などが検出されているが、内陸部では少ない。中尾遺跡・唐尾遺跡・建山遺跡・狩俣遺跡・高古塚遺跡などで掘立柱建物跡や礎土跡などが検出され、墨書土器も出土している。上中段遺跡では墨書土器や焼塩土器などとともに輪の羽子や鉄滓・鉄製品など製

鉄関係の遺物が多く出ている。

中世

中世では桐木遺跡・建山遺跡で道跡が、狩俣遺跡で畠跡や溝状遺構が検出されている。

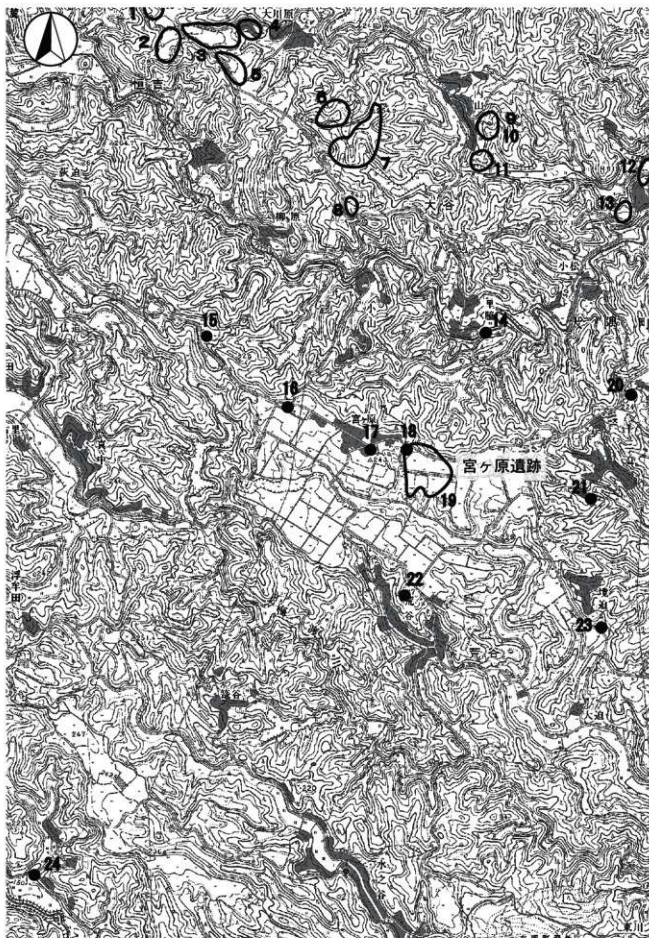
本遺跡の近くには先述した鹿児島県有形文化財の投谷八幡神社や宮ヶ原千人塚がある。投谷八幡神社は大隅正八幡宮(鹿児島神宮)の末社として和銅元年(708年)に創建され、「三国名勝図説」にも記載されている。平成16年(2004年)1月に投谷八幡神社と改称されるまでは「投谷八幡宮」と呼ばれていた。宮ヶ原千人塚は、永禄元年(1558年)に起こった「恒吉宮ヶ原の戦」関連の史跡で投谷八幡神社鳥居の近くにある。

【参考文献】

- 「大隅町誌」1969年2月 大隅町役場
- 「大隅町誌(改訂版)」1990年3月 大隅町役場
- 「大隅町誌(追録版)」2009年3月 曾於市教育委員会
- 「末吉郷土史」1970年10月 末吉町役場、末吉町教育委員会
- 「鹿児島県風土記」1995年11月 芳即正・塚田公彦編 旺文社
- 「鹿児島県の地名」1998年7月 日本歴史地名大系47 平凡社
- 「土地分類基本調査一岩川」1972年 国土調査
- 「九養岡遺跡・踊場遺跡・高塚遺跡」2002年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(36)
- 「出水平遺跡」2002年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(43)
- 「桐木耳取遺跡」2005年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(91)
- 「関山遺跡・鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡」2008年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(125)
- 「関山西遺跡」2008年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(126)
- 「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」2008年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(127)
- 「定塚遺跡・稲村遺跡」2009年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(153)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺物等	備考
1	石牟礼	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉大川原	散布地		縄文(早)	台地	土器	
2	火ノ道	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉大川原	散布地		縄文(早)	台地	土器・石器	H11年農政, 町概報(7)
3	石牟礼段	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉大川原	散布地		縄文(早・晩)	台地	土器・石器・編布	H11年農政, 町概報(8)
4	木佐貫	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉大川原	散布地		縄文(早)	台地	土器	
5	桑木畑	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉桑木畑	散布地		縄文(早)	台地	土器・石器	H11年農政, 町概報(7)
6	堂ノ道	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉柳原	散布地		縄文(早)	台地	土器	H11年農政, 概報有
7	土穴	鹿児島県曾於郡大隅町恒吉柳原	散布地		縄文(早～後)	台地	土器・石器	H11年農政, 町概報(7)
8	八月田	鹿児島県曾於郡大隅町大谷八月田	散布地		縄文(早)	丘陵	円筒土器	
9	中迫	鹿児島県曾於郡大隅町大谷3527	散布地		縄文(前)	丘陵	竊ノ神BC式	
10	内山	鹿児島県曾於郡大隅町大谷3705-3～6	散布地	畑地	縄文	丘陵	縄文土器	
11	瀬戸口	鹿児島県曾於郡大隅町大谷瀬戸口	散布地		平安, 歴史	丘陵	須恵器	
12	宇都	鹿児島県曾於郡大隅町大谷宇都	散布地		縄文(晩)	丘陵	縄文土器	
13	炭床Ⅱ	鹿児島県曾於郡大隅町大谷瀬戸	散布地		弥生, 歴史	丘陵		
14	里脇	鹿児島県曾於郡大隅町大谷里脇	散布地		歴史	丘陵	土師器	
15	土取迫	鹿児島県曾於郡大隅町大谷5785-1	散布地		縄文	丘陵		
16	太郎ヶ迫	鹿児島県曾於郡大隅町大谷太郎ヶ迫	散布地		縄文	台地	縄文土器	
17	鳥井段	鹿児島県曾於郡大隅町大谷鳥井段	散布地		歴史	台地	須恵器	
18	宮ヶ原千人塚	鹿児島県曾於郡大隅町荒谷1132-1・1132-2	その他		中世(室町)	台地		(町) S 49.3.8
19	宮ヶ原	鹿児島県曾於郡大隅町大谷宮ヶ原	散布地		歴史	台地	土師器・青磁	本報告書
20	十三迫Ⅱ	鹿児島県曾於郡大隅町月野高松	散布地		歴史	丘陵	土師器	
21	十三迫Ⅰ	鹿児島県曾於郡大隅町月野十三迫	散布地		歴史	丘陵	土師器	
22	屋敷段	鹿児島県曾於郡大隅町荒谷屋敷段	散布地		弥生(中)	台地	石斧	
23	大迫	鹿児島県曾於郡大隅町荒谷大迫	散布地		縄文	台地	土器片	
24	青木段(松下)	鹿児島県鹿屋市輝北町平房青木段	散布地		不明	台地	青磁	S 56年度分布調査



第1図 周辺遺跡位置図 (S=1/25,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理・報告書作成作業の方法、出土遺物の分類について箇節に述べていくこととする。

1 発掘調査の方法

宮ヶ原遺跡の本調査は、平成19・20・22年度の合計3次にわたって合計17,406㎡を対象として実施された。

発掘調査を進めるにあたり、東九州自動車道建設予定地の工事用基準杭「STA135+60」と「STA136+00」を結ぶ線を基軸とし、東西方向にA～Xまで、南北方向に1～48までとする10m×10mのグリッドを用い調査区を設定した(第3図)。これを基にして、遺構や遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで行う際の測量座標は、X-1区の左下を原点(O, 0)とし、縦軸をX、横軸をYとした。

調査は、基本的には人力(主に山楾・鋤簾を使用)で掘り下げを行い、表土剥ぎ、無遺物層、火山灰のブロック等で硬い地層は重機を使用した。また、X層～XII層の細石刃文化期層については手鎌を、遺構の調査は移植ごてを使用するなどして慎重に調査を進めた。

2 遺構の認定と検出方法

(1) 遺構の認定

宮ヶ原遺跡では、縄文時代早期、縄文時代中・後期、近世～現代の遺構が検出された。検出面や埋土の状況、規模等を総合的に判断して遺構の認定を行った。土坑の中には底部に明瞭な小ビット等(逆茂木痕)が確認されなかった場合、「落とし穴状遺構」として報告されることもある。しかし、今回は、落とし穴の可能性があっても不確定要素があるものについては土坑として報告することとした。

遺構の時期の判断については、検出面や埋土の状況から大まかには判断できた。しかしながら、遺構の時期を判断する際に1つの指標となる遺構内外の遺物数が少なく、時期も2時期以上あったため詳細な時期については判断できなかった。

(2) 遺構の検出方法

落とし穴や土坑等の遺構の検出については、調査担当者全員が「検出面を当時の掘り込み面に限りなく近いところで検出しよう」という共通の意識をもって調査に臨んだ。結果としては、当時の掘り込み面よりも下位の層でしか検出できず、「掘りすぎ」であったことは否めない。したがって遺構の深さにもばらつきが出てしまったことは今後の調査における課題となる。

3 整理・報告書作成作業の方法

宮ヶ原遺跡の整理・報告書作成作業は、平成21年度～平成23年度に県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。

(1) 平成21年度

平成21年度は、水洗い・注記・分類・接合・遺跡周辺地形図のデジタルトレース・遺物ドット図作成のためのデータ処理・土層断面トレース・遺構分類・遺構トレース・石器実測委託・外部指導者による遺物指導等を実施した。

遺物の水洗いについては、発掘現場でも行われたが、未洗いや洗いが不十分な遺物について行った。また、石器の中には微細刮離等の認定を行うため超音波洗浄機を使用して行った。

注記はこれまで刊行された遺跡の注記と重複することがないようにデータを管理している南の縄文調査室と連携を図り、「MGH」と注記することとした。注記をする際は、薬品を使用するので換気等作業環境には十分留意して作業を進めた。

遺物の分類・接合は、石器については、剥片石器と礎石器に大別し、細石刃、石楾、楔形石器、異形石器、磨石、敲石、石皿等細かく分類した。その後、接合を行った。土器については、胎土や文様等を基に分類後、接合作業を行ったが、平成22年度の調査で出土するであろう土器片と接合できる可能性があるため、中断することとした。

遺物ドット図作成のためのデータ処理は、遺物を平板とトータルステーションで取り上げたためデータを統合する必要があった。トータルステーションで設定した測量座標を用いて平板で取り上げた遺物は出土状況図からデジタルレーザーを使用してデータ化した。まとめた。

遺構の認定・分類は、発掘調査時に行われていたのを基に、実測図や写真等を用いて検出面、埋土の状況等から遺構の種類や時期を再検討し、確定した。

土層断面や遺構のトレースは、はじめに鉛筆トレースを行い、点検・修正を行った後、本トレースを行った。

石器実測委託については、縄文時代該当の石楾を中心に100点行なった。旧石器時代の細石刃や細石刃核を中心とするその他の石器については平成22年度に実施することとした。

遺物指導は、南九州考古学研究所所長の新東晃一氏に依頼し、貴重な指導内容・所見を教示していただいた。

(2) 平成22年度

平成22年度は、5月～7月まで発掘作業と整理作業を並行して実施した。8月以降は遺物の水洗い・注記・接合作業・土器の拓本・土器実測・ドット図作成のためのデータ処理・遺構図作成・石器実測委託・外部指導者による遺物指導等を実施した。

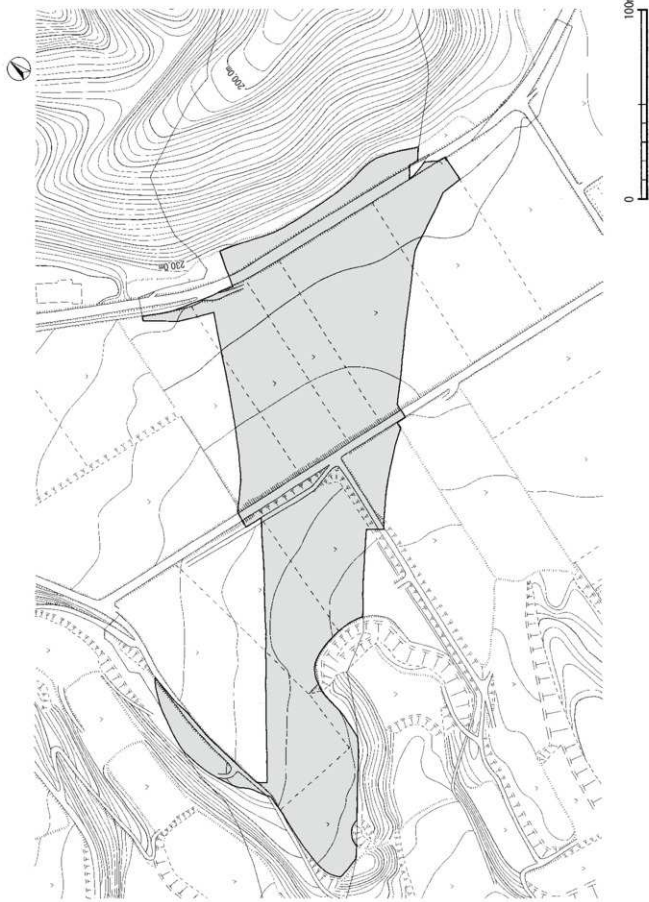
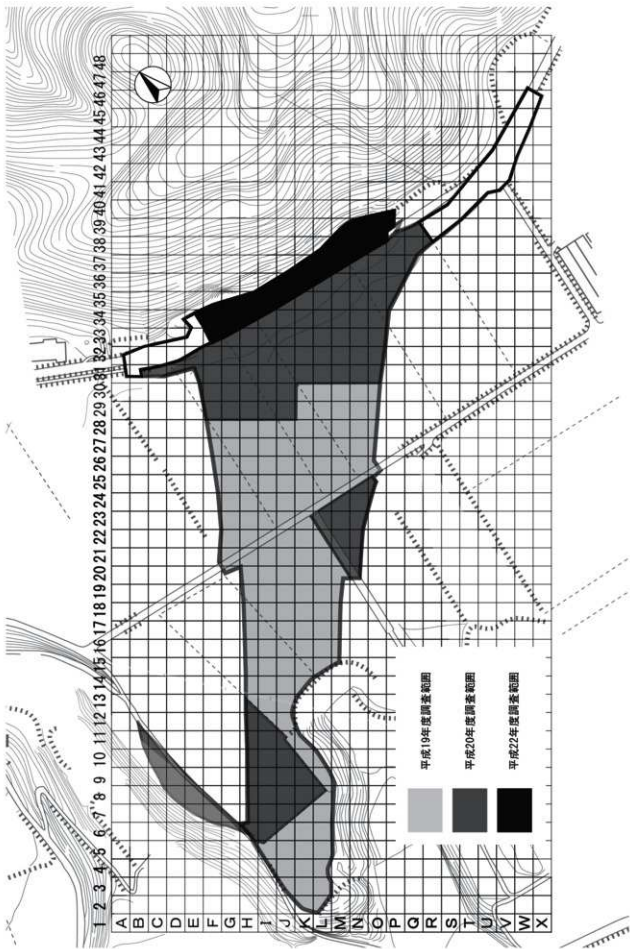


图 2 图 例 说明 图 例 说明



第3図 グリッド配置図及び年度別調査区域

遺物の水洗い・注記・データ処理・遺構図作成等は昨年年度と同様の方法で実施した。

石器実測委託は、旧石器時代の細石刃や細石刃核を中心に、3か月の調査で出土した石鏃・磨石・石皿等87点を行った。遺物指導は、宮崎県考古学会会長の岩永哲夫氏に依頼し、貴重な指導内容・所見を教示していただいた。

(3) 平成23年度

平成23年度は報告書刊行に向け作業を進めた。宮ヶ原遺跡だけでなく、野方前段遺跡B地点、柿木段遺跡の3遺跡合本の報告書ということで3遺跡の整理作業を計画的に実施することとした。野方前段遺跡B地点は、平成22年度に天神段遺跡と同じグループに組み込まれ整理作業が行われていたため、遺物量の多い宮ヶ原遺跡と平成22年度に調査が実施された柿木段遺跡の整理作業を優先して行った。その後、レイアウト、遺物写真撮影、現場写真選別、原稿執筆等を経て報告書刊行の運びとなった。

4 出土遺物の分類

(1) 縄文時代早期土器の分類

宮ヶ原遺跡で出土した土器の多くは、縄文時代早期、特に後葉の土器であった。総数約1万点の出土遺物の中から抽出した縄文時代早期の土器を以下のように分類した。他の時代の土器については各時期ごとに述べることにする。

1類土器：底部のみの出土である。外面には横位及び斜位方向の貝殻条痕を施し、底面に貝殻印痕がみられる。前平式土器に比定できる土器である。

2類土器：口縁部が外反あるいは直行し、胴部が直線的に筒形を呈する土器である。口縁部外面に貝殻刺突文あるいは貝殻条痕文を、胴部外面に貝殻条痕を施すのが特徴である。口縁部の形状からA・B2つのタイプに分類した。石版式土器に比定できる土器である。

2A類：口縁部が外反する器形を呈する土器である。石版1式土器に比定できる土器である。

2B類：口縁部が直行する器形を呈し、胴部外面に粗い被杉状の貝殻条痕を施す土器である。石版2式土器に比定できる土器である。

3類土器：口縁部が緩やかに内湾あるいは直行し、口唇部は内傾する平坦面を成形する土器である。外面には横位あるいは斜位方向の貝殻刺突文を施すのが特徴である。下刺率式土器に比定できる土器である。

4類土器：器形は口縁部が緩やかに内湾あるいは直行し、口唇部は内傾する平坦面を成形する土器である。外面には横位あるいは斜位方向の貝殻刺突文を施すのが特徴である。桑ノ丸式土器に比定できる土器である。

5類土器：押型文土器である。

5A類：口縁部が外反し、底部に向け胴部がほぼ直線的に緩やかにすぼまる器形を呈する土器である。細かい押型文を横位方向に施すのが特徴である。

5B類：胴部がほぼ直線的に緩やかにすぼまる器形を呈する土器である。外面には斜位方向の押型文を施すのが特徴である。

5C類：短い口縁部が僅かに外反し、胴部は直線的に移行する土器である。横位及び縦位方向の大柄の押型文を組み合わせて施すのが特徴である。

5D類：胴部がほぼ直線的に緩やかにすぼまる器形を呈する土器である。外面には縦位方向あるいは僅かに斜位方向の押型文を施す。

6類土器：器種には深鉢と壺がある。口縁部が外反し、口縁形態は平口縁あるいは緩やかな波状を呈する。器面外側全体に縄文、沈線文、連点文等を施す。妙見・天道ヶ尾式土器に比定できる土器である。A～Cの3つのタイプに分類した。

6A類：深鉢には口縁部から胴部外面には縄文を地紋に施した後、口縁部には波頂部下に胴部まで縦位方向の突帯を貼り付ける。また、口縁部上端及び口縁部下端あるいは胴部上端には横位方向の貼付突帯を数条ずつ巡らす。

6B類：口縁部から胴部外面には縄文を地紋に施した後、胴部には刻みを施した突帯を縦位方向に貼り付け、その他の部分には斜位方向や曲線状の沈線文と沈線文間には連点状に刺突文を施すのが特徴である。

6C類：全面に縄文を施す土器を帰属させた。頸部が短く肩部がなで肩の器形を呈する壺である。

7類土器：器種には深鉢と壺がある。深鉢は口縁部が外反し、頸部がしまり、胴部最大径が胴部中央にあり、底部に向け緩やかにすぼまり、底部は上げ底を呈する土器である。口縁上縁は略方形で、口縁は緩やかな波状口縁を呈する。口縁部が肥厚し、頸部には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。肥厚した口縁上には幾何学的に沈線文及び連点文を施し、胴部には結節縄文を施す土器と幾何学文を施す土器がある。壺には頸部が長く肩部が張る器形の土器と、頸部が短く肩部がなで肩の器形の土器がある。長頸壺形の口縁形態には緩やかな波状口縁のものと平口縁のものがある。また、口縁部形態には直行するものと外反するものがある。

7A類：口唇部上端から口縁部上端に内側を凹ませた小さな断面三角形の突帯を貼付すること、頸部から胴部に刻みを施す突帯を縦位方向に貼付すること、頸部下端及び胴部中央に瘤状突起を付けるのが特徴である。

7B類：口縁部に貼り付けによる肥厚帯を設け、肥厚帯の断面形がカマゴコ状類似の形態を呈する土器である。また、頸部から胴部には瘤状突起や縦位方向の突帯の貼

り付けはみられない。文様は7Aと同じである。

7C類：口縁部に貼り付けによる幅広の肥厚帯を設けることが特徴である。口縁形態は平口縁あるいは緩やかな波状口縁を呈する。第7B類土器と同様に、頸部から胴部には瘤状突起や縦位方向の突帯の貼り付けはみられない。文様は7Aと同じである。

7D類：口縁形態は緩やかな波状口縁あるいは平口縁を呈する。また、頸部を削り口縁部下端に貼付突帯を巡らすことあるいは頸部より器厚の厚い粘土紐を積み上げ、口縁部に「見かけの肥厚帯」を設ける土器である。

7E類：口縁形態は緩やかな波状口縁を呈する。また頸部より器厚の厚い粘土紐を積み上げ、口縁部に「見かけの肥厚帯」を設ける土器である。口唇部上端に刻みを施す。口縁部上端と下端に2条ずつ刺突連点文を横位方向に巡らす。連点文間には横位・斜位方向及び曲線状の沈線文で幾何学文を施す。頸部には刻みを施す突帯を2条横位方向に巡らす。

8類土器：器種には深鉢と壺がある。深鉢は口縁形態が平口縁あるいは非常に緩やかな波状口縁を呈し、頸部がラップ状に屈曲し、口縁部は下半では内湾状に外反し、中程で屈曲し、上半で外傾あるいは直立する、いわゆる二重口縁を呈する土器である。

9類土器：ラップ状に屈曲した口縁部が内湾状に外反し、中央で僅かに屈曲し外傾し、胴部は円筒形の土器である。胴部上半から口縁部は無文である。

10類土器：胴部は縦位方向の網目柵系文を施した後、横位及び曲線状の沈線文を組み合わせて施す。壺ノ神式Aa式土器に比定できる土器である。

(2) 縄文時代石器の分類

石槍

直接加撃による器面調整によって尖端部を作り出し、全長が6cmを超えると推定できる石器。

磨製石鏃

研磨によって器面調整を施し、尖端部を作り出し6cmを超えない石器。

打製石鏃

押圧剥離によって器面調整し、尖端部を作り出し6cmを超えない石器

磨製石斧

直接加撃と敲打や研磨によって器面調整し、方形もしくは三角形の平面形状に作り、その短辺のひとつもしくは底辺に研磨による刃部を有する石器。

環状石斧

敲打及び研磨による調整で車輪状の形状に仕上げ、その外周に磨製石斧と同じような刃部を作り出した石器。

石匙

二つの挟入によってつまみ部分を作り、一側縁もしくは

は二側縁に両刃の刃部を作り出した石器。

削器

剥片石器のうち、両面調整によって両刃の刃部をつけた石器で、器面調整がほとんど施されず、調整は刃部と周縁に限られる石器。素材とする剥片の大きさによって粗製・大型の削器もある。

掻器

剥片石器のうち、片面調整によって急角度の片刃の刃部をつけた石器。素材とする剥片の形状は一定しない。

楔形石器

剥片石器のうち、対面する二辺に階段状剥離がある石器。平面形状は方形もしくは不正円形を呈する。

彫器

剥片石器のうち、周縁を調整したうえで、一側縁に桶状剥離を施し刃部とした石器。

小型両面調整石器

剥片石器のうち、両面調整によって素材剥片の形状を大きく変えたうえに周縁調整を施した石器。

礮器

掌大以上の大きさの円礮等を素材とし、一側縁もしくは二側縁に粗雑な剥離による刃部が作られている石器。

異形石器

剥片石器のうち、定形石器とは全く異なる形状をした石器。周縁に施された挟入によって又状の平面形を呈する特徴がある。

磨石

礮石器のうち、円礮を素材とし、「磨る」作業によってできたと考えられる平滑面を持つ石器。側面に敲打痕を持つものもこれに分類した。

敲石

円礮の一端もしくは両端に敲打の結果と考えられる割れや敲打痕を持つ石器。

砥石

砂岩の礮を素材とし、研磨作業によってできた研磨面を持つ石器。1点だけの出土である。

台石

安山岩の亜円礮を素材とし、平滑面は持たないものの、敲打痕を多数残す石器。これも1点だけの出土である。

石皿

人頭大以上の大きさの礮で、平坦面や凹み面を持ち、の面が平滑である石器。垂角礮から円礮までが素材となるが、柱状節理から割れた角礮素材のものも含めた。

石核

礮もしくは剥片素材で、直接加撃によるネガティブな剥離面があり、目的剥片剥離が行われたと考えられる石器。目的剥片は最小の石器の大きさを目標とした。ちなみに、その石器は533の石鏃や613の母指状掻器642の加工痕剥片である。

第2節 層序

宮ヶ原遺跡の調査区における旧地形は、県道 495 号線付近が一番高く、県道を境に北側は北東方向へ傾斜し、南側は南西方向へ傾斜していることが判明した。

また、県道付近が道路建設・補修や土地構造改善等の工事により削平を強く受けており、表土下がすぐにIV a～VII層となっていたり、旧石器時代該当層のX・XI層となっていたりする箇所があった。

以上のような状況ではあったが、残存している地層を基に宮ヶ原遺跡の基本土層を第2表のように作成した。

I層は表土(旧耕作土)である。

II層は黒色土である。本来なら中・近世の遺物包含層であるが、本遺跡では遺構・遺物は確認できなかった。

III層は弥生時代へ古代の遺物包含層であるが、本遺跡では遺構は確認できず、弥生時代の遺物のみ出土した。

IV層は縄文時代後期・晩期の遺物包含層であるが、本遺跡では、晩期の遺構・遺物は確認されなかった。

全体的な色調は黄褐色土層であるが、灰黄色パミス含有量が2層に分層した。

IV a層：黄褐色土でP7が点在している。

IV b層：約1cm程度のP7(約5,000年?前の板島起源の噴出物)の集中層

V層は縄文時代前期・中期の遺物包含層である。本遺

跡では前期末から中期初頭にかけての遺物が出土した。橙色をベースにした色調の若干の違いや軽石の含有量等で3つに分層した。

V a層 黄褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が見られる層

V b層 明黄褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在する層

V c層 アカホヤ火山灰一次の軽石(約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物)層

VI層はVII層の高植土層で色調は青灰色土である。縄文時代早期の遺物包含層である。

VII層はP11(約8,000年前の板島起源の噴出物)の集中層。縄文時代早期の遺物包含層である。

VIII層は黒褐色土で上部にP13(約10,600年前の板島起源の噴出物)を含む層。縄文時代早期の遺物包含層である。

IX層は薩摩火山灰層(P14, 約12,800年前の板島起源の噴出物)

X層は暗茶褐色粘質土で、旧石器時代細石刃文化期の遺物包含層である。

XI層は淡黄褐色粘質土で、旧石器時代細石刃文化期の遺物包含層である。

XII層は暗茶褐色粘質土で、旧石器時代細石刃文化期の遺物包含層である。X層より粘質が弱い。

XIII層は乳白色粘質土層

XIV層は硬質土で、P15(詳細な年代は不詳。板島起源の噴出物)と思われるオレンジパミスを含む層で、P15の含有量や色調の違いで2つに分層した。

XIV a層：黄褐色硬質土で、P15を多く含む。

XIV b層：暗黄褐色硬質土で、上部にP15を僅かに含む。

XV層は硬質土で、P17(約28,000年前の板島起源の噴出物)と思われるオレンジパミスを含む層で、P17の含有量や色調の違いで3つに分層した。

XV a層：淡黄褐色硬質土で、P17を少量含む。

XV b層：暗黄褐色硬質土で、P17を多く含む。

XV c層よりやや黒っぽい。

XV c層：明黄褐色硬質土で、P17を多く含む。

XVI層は黄褐色硬質土で灰色の粒子を含む。

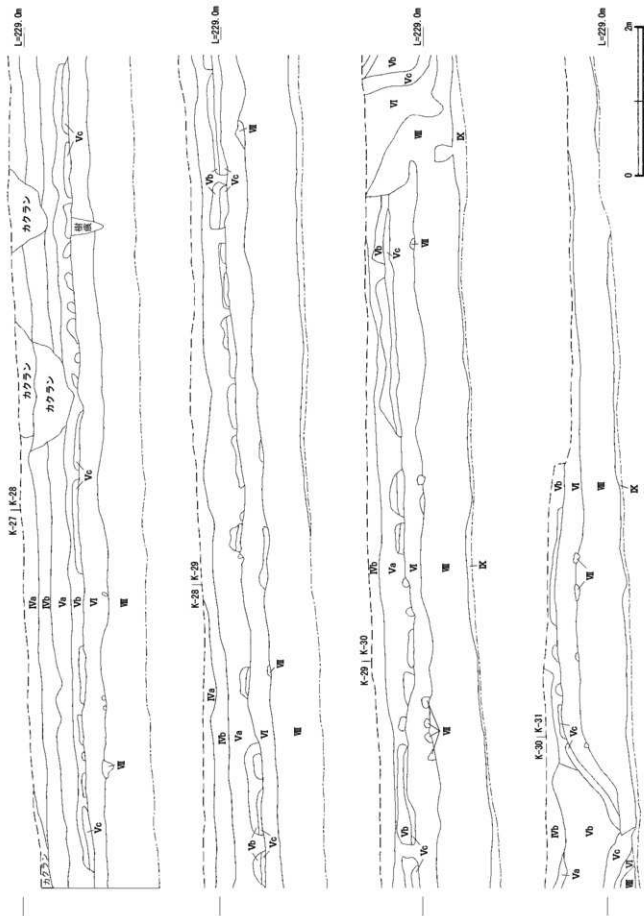
※シラス(約26,000～29,000年前の給良カルデラ起源の噴出物)。上面で掘り下げをやめ調査終了。

※火山灰の年代については、2003 町田洋 新井朋夫 著 東京大学出版会『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—』(p108～110)から引用した。

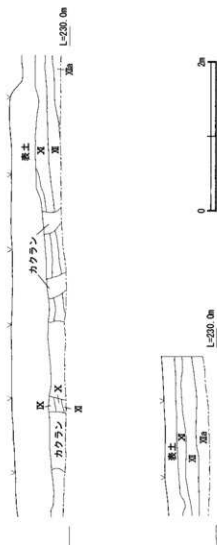
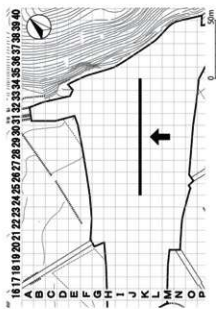
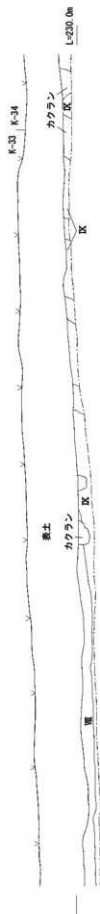
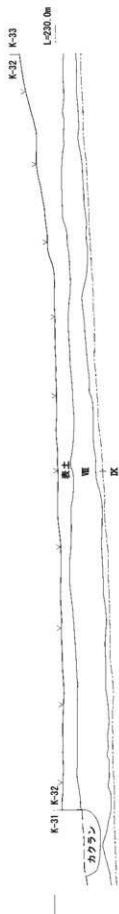
なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。

第2表 宮ヶ原遺跡基本土層

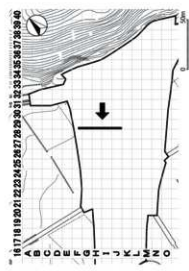
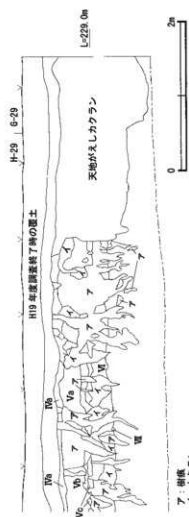
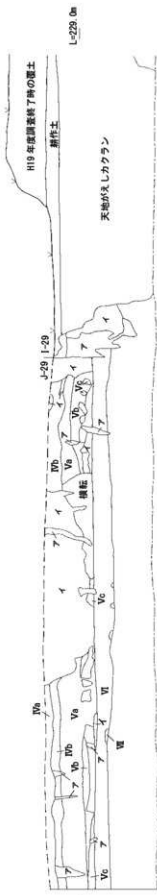
I	層	表土	平均厚
II	層	黒色土	—
III	層	暗茶褐色土	10cm
IV a	層	黄褐色土 (P7混)	20cm
IV b	層	灰黄色軽石層 (P7)	15cm
V a	層	黄褐色土 (7林火山灰)	20cm
V b	層	明黄褐色土 (7林火山灰)	15cm
V c	層	7林火山灰一次堆積層	5 cm
VI	層	青灰色土	30cm
VII	層	黄褐色火山灰 (P11) 層	4 cm
VIII	層	黒褐色土 (P13混)	60cm
IX	層	薩摩火山灰層 (P14)	40cm
X	層	暗茶褐色粘質土	10cm
XI	層	淡黄褐色粘質土	10cm
XII	層	暗茶褐色粘質土	15cm
XIII	層	乳白色粘質土	30cm
XIV a	層	黄褐色硬質土 (P15?)	10cm
XIV b	層	暗黄褐色硬質土 (P15?)	30cm
XV a	層	淡黄褐色硬質土 (P17?)	10cm
XV b	層	暗黄褐色硬質土 (P17?)	15cm
XV c	層	明黄褐色硬質土 (P17?)	30cm
XVI	層	黄褐色硬質土	30cm
		シラス (上面までで調査終了)	—



第4図 土層断面1 (K-27~31区, 西壁)

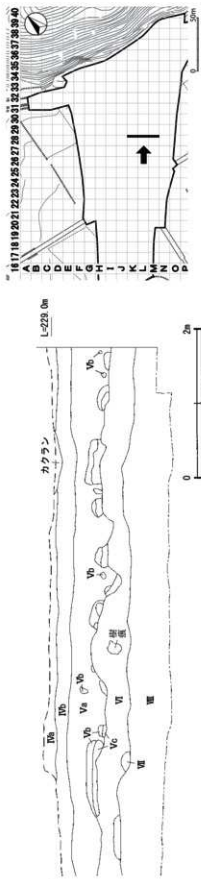
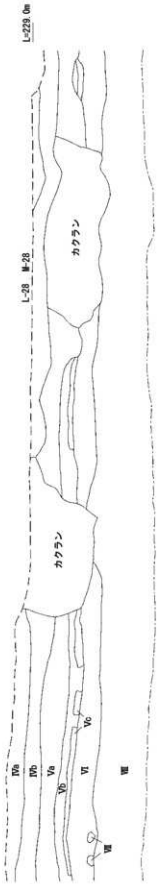
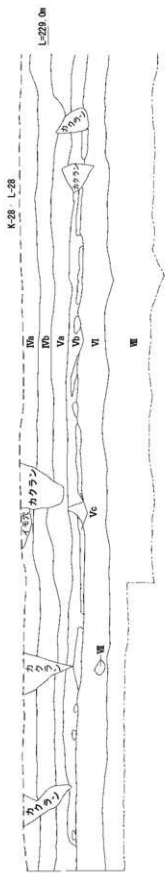


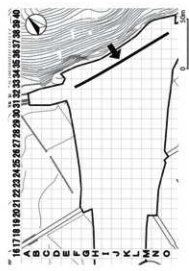
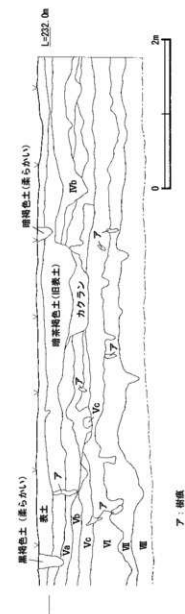
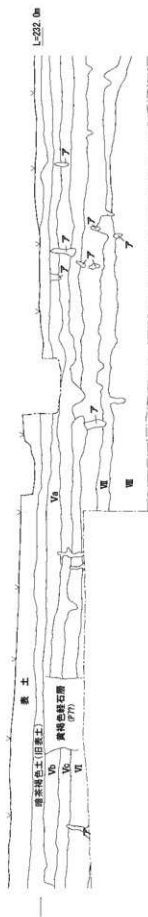
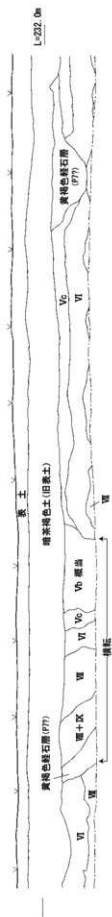
第5図 土層断面2 (K-32~34区, 西壁)



第6図 土層断面3 (G~J-29区, 南壁)

ア: 単層
イ: カカラン





第9図 土層断面6 (奥道南側断面2)

第3節 調査の成果

1 旧石器時代の調査

(1) 調査の概要

遺跡内で旧石器が出土したのはK~M-33~36区にかけてブロックが3箇所検出されたほかは、少数の遺物が散在して検出された。

層位的にはIX層薩摩火山灰層の下位で、X、XI、XII層の3層に渡って出土しているが、平面分布は層を越えて重なる。垂直分布を見ても層を越えてレンズ状に分布することから、ブロックとしてのまとまりは層を越えて認定せざるを得ない状況である。その原因は、凍結、融解等による埋没過程での上下動が考えられるが、現段階では不明である。調査時に分層する際、本来分層すべきでない層を無理に分層した可能性も否定できない。垂直分布図は151ページに掲載した。

なお、遺跡全体で、細石刃文化期以前の遺物は出土していない。

(2) 遺物

Aブロックの遺物

細石刃、細石刃核、スクレイパー、剥片、砕片から構成されるブロックである。石材はほとんどが黒曜石であり、頁岩の細石刃核と水晶の細石刃、スクレイパーが混じる。石材は限定される。

1~7・11~13はいずれも黒曜石の細石刃核から剥離された細石刃で、11だけが完形であり、他はいずれも頭部もしくは尾部を欠く。背面の稜はほぼ並行であり、連続する細石刃剥離が行われたことが分かる。頭部調整はほとんど成されていない。黒曜石の細石刃核は、このブロックに残されていないので、ブロック外に持ち出された細石刃核から剥離されたものである。

8は水晶製の細石刃であり、背面に節理面が残るものの、左側縁側に主剥離面と同一方向の剥離痕があり、連続する剥離であったろうと推定できる。なお、このブロックでは水晶製の細石刃核は出土しておらず、このブロックから持ち出されたものであろう。

9は頁岩製の細石刃核である。最終作業面を図示しているが、長さ1cm、幅3mm足らずの細石刃が剥離されたようである。この作業面への打面転位の前段階が左側面図に見える2条の剥離痕と図左側面上側分割剥離面から構成される作業面である。ただし、この作業面での細石刃剥離は失敗したようである。また、このブロックには頁岩の細石刃は見あたらないことから、側面調整等は他の場所で行われ、剥離された細石刃は持ち出されたことが分かる。

10は水晶製のスクレイパーであり、背面は水晶の結晶面である。右側縁の主剥離面側に連続する調整剥離が施され刃部を形成する。片刃の作りではあるが、その刃部角は、結晶面である背面の傾斜のせいもあり、サイド・

スクレイパーのそれと等しいので、エンド・スクレイパーとしてではなく、サイド・スクレイパーとして使われたものであろう。なお、頭部にも若干の調整剥離が施されている。

Bブロックの遺物

細石刃、剥片、砕片から構成されるブロックである。ほとんどが剥片、砕片であり1点だけ細石刃が出土している。14がそれであり、頭部を若干欠いているものの、ほぼ完形に近い。その形状からするとAブロックの9のような形態の細石刃核から剥離されたものであろうと推定できる。ただし、このブロックも含めこの遺跡からは水晶製の細石刃核は出土していないことから、細石刃剥離はここで行われたものの、細石刃核そのものは遺跡外に持ち出されている。

Cブロックの遺物

細石刃、石皿、剥片、砕片から構成されるブロックである。数多くの細石刃が出土しているにもかかわらず、細石刃核は1点も出土していない。また、細石刃も幅2mmから1cm弱までの物があり、斉性に乏しい。頭部の破片のうち、頭部調整を施されている物とそうでない物、調整打面の物とそうでない物等の差異もあり、この点でも斉性がない。ただし、長さについては、頭部の破片や中間部の微細な破片を除けば1cm~1.5cmの範囲に収まり、一定程度の斉性を持つ。このうち15~75までの61点を図示した。これらはほとんどが黒曜石製であり、58と74の2点が水晶製である。側縁に微細剥離痕を持つ物も見受けられる。19、40、51、56、57、63、68の7点がそれぞれである。

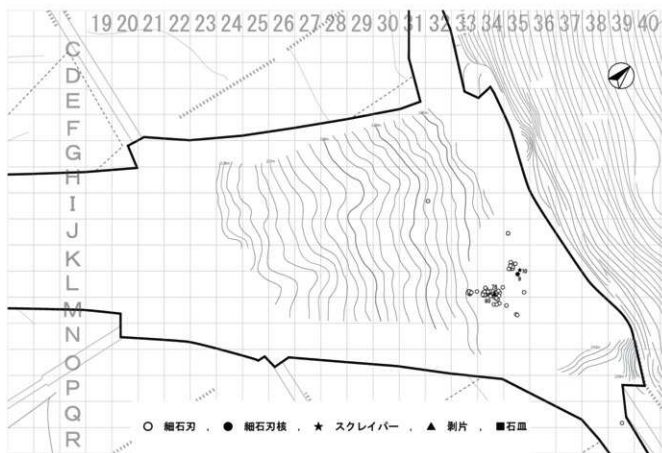
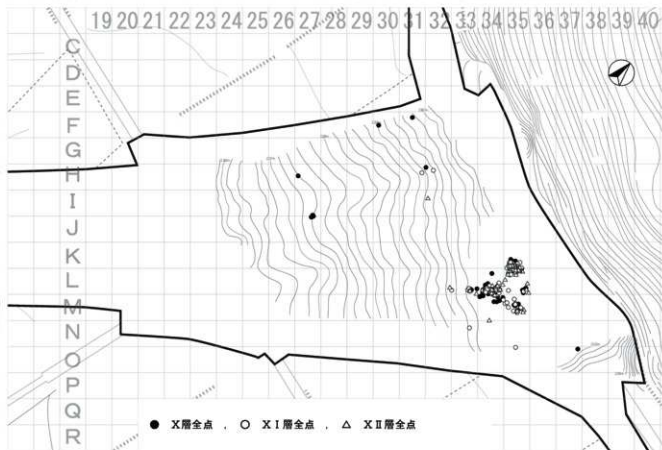
76~79は作業面調整剥片であり、特に77は、ステップした作業面をうまく調整している。

80は砂岩の扁平な小円礫を利用した石皿であり、表裏両面とも僅かな凹みを持つ。縄文期の石皿と異なり小型であり重量感にも乏しいが、凹みの存在とその面が平滑であることから石皿に分類した。側縁の一部及び凹面に敲打痕が残る。また、側縁の一部には、被熱による赤化した部分もある。

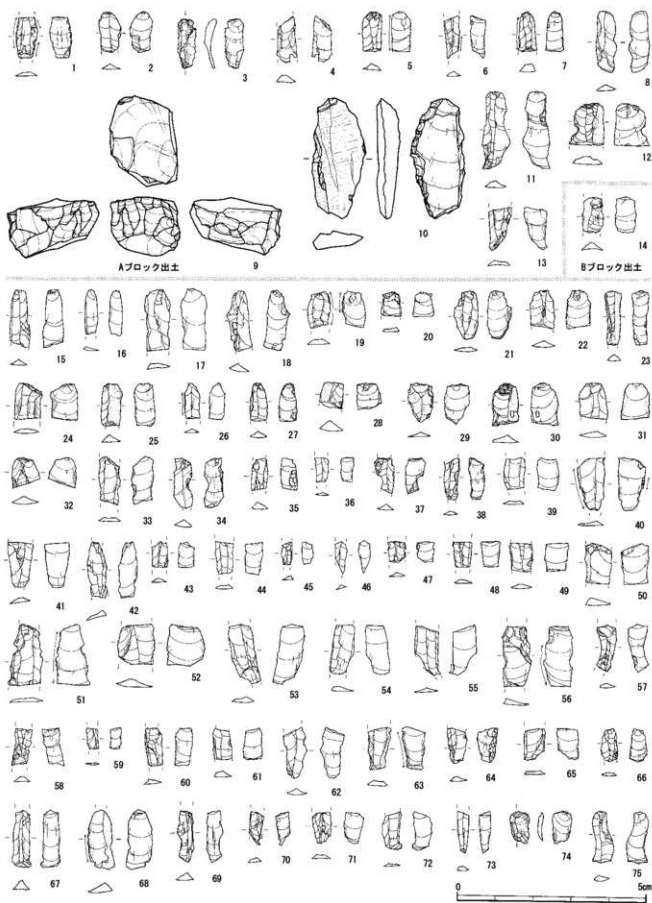
ブロック外出土の遺物

A~Cブロックで散在するように出土した細石刃もある。82~84がそれであり、82、83が水晶製、84が黒曜石製である。

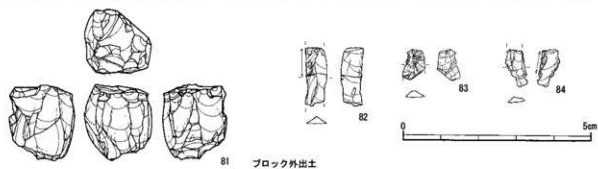
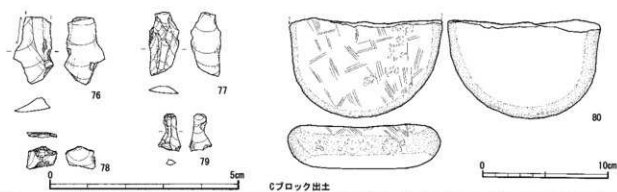
81はL-34区で一括した遺物の中から取り出したもので、風倒木痕の横転した地層中から採集された物である。最終作業面には幅約8mmの細石刃剥離痕があり両側面と併せて9条の細石刃剥離が認められる。右側面のやや幅広い剥離痕は細石刃剥離と言うよりは、側面調整のような結果に終わったものであろう。打面・準打面であり、細かな打面調整が残るものの打面調整によって全面が覆われるほどではない。



第10図 旧石器出土状況図（上は層別，下は器種別）



第 11 図 旧石器時代の遺物 1



第 12 図 旧石器時代の遺物 2

第 3 表 旧石器時代 石器観察表 1

神岡 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
11	1	K-35	X	細石刃	黒曜石	(1.10)	0.60	0.10	0.10	
	2	K-35	X	細石刃	黒曜石	(1.10)	0.55	0.15	0.10	
	3	K-35	X	細石刃	黒曜石	1.75	0.65	0.43	0.33	
	4	K-35	X	細石刃	黒曜石	(1.20)	0.60	0.20	0.10	
	5	K-35	X I	細石刃	黒曜石	(1.05)	0.50	0.18	0.10	
	6	K-35	X I	細石刃	水晶	(1.10)	0.40	1.00	0.05	
	7	K-35	X I	細石刃	黒曜石	(1.05)	0.50	0.21	0.10	
	8	K-35	X II	細石刃	水晶	1.60	0.50	0.15	0.10	
	9	L-35	X I	細石刃核	流紋岩	1.50	1.80	2.40	8.50	
	10	K-35	X II	サイドスクレイパー	水晶	3.20	1.40	0.60	2.50	
	11	K-35	X I	細石刃	黒曜石	2.05	0.80	0.25	0.20	
	12	K-35	X I	細石刃	黒曜石	(1.01)	0.90	0.20	0.30	
	13	K-35	X I	細石刃	黒曜石	1.15	0.70	0.10	0.10	
	14	L-35	X	細石刃	水晶	0.90	0.50	0.15	0.20	
	15	56 T	X	細石刃	黒曜石	1.50	0.50	0.14	0.10	
	16	57 T L-32	X	細石刃	黒曜石	(1.15)	0.35	0.10	0.05	
	17	L-34	X	細石刃	黒曜石	(1.65)	0.60	0.18	0.30	
	18	56 T L-32	X	細石刃	黒曜石	1.60	0.65	0.20	0.10	
	19	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.90)	0.60	0.10	0.10	
	20	M-34	X	細石刃	黒曜石	(0.60)	0.55	0.10	0.05	
	21	L-34	X I	細石刃	黒曜石	1.70	0.85	0.15	0.24	
	22	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(1.00)	0.60	0.15	0.10	
	23	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.45)	0.45	0.20	0.10	
	24	L-34	X I	細石刃	黒曜石	1.30	1.00	0.28	0.30	
	25	M-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.15)	0.50	0.20	0.10	
	26	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(0.91)	0.40	0.10	0.05	
	27	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.00)	0.45	0.19	0.10	
	28	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(0.70)	0.60	0.29	0.20	
	29	L-34		細石刃	黒曜石	1.05	0.60	0.11	0.10	

第4表 旧石器时代 石器观察表2

採掘 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
11	30	L-34	X I	細石刃	黒曜石	1.10	0.70	0.20	0.20	
	31	L-34	X II	細石刃	黒曜石	0.95	0.70	0.15	0.10	
	32	L-34	X II	細石刃	黒曜石	1.08	1.00	0.25	0.23	
	33	L-34	X	細石刃	黒曜石	(1.30)	0.60	0.10	0.10	
	34	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.80)	0.50	0.20	0.10	
	35	L-34	X	細石刃	黒曜石	(0.90)	0.40	0.19	0.10	
	36	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.60)	0.30	0.80	0.01	
	37	L-34	X	細石刃	黒曜石	(0.95)	0.50	0.15	0.10	
	38	56 T	X	細石刃	黒曜石	(1.10)	0.40	0.10	0.05	
	39	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.80)	0.55	0.05	0.10	
	40	56 T	X	細石刃	黒曜石	(1.90)	0.75	0.10	0.10	
	41	M-34	X	細石刃	黒曜石	1.20	0.70	0.20	0.10	
	42	56 T	X	細石刃	黒曜石	(1.45)	0.44	0.30	0.10	
	43	M-34	X	細石刃	黒曜石	(0.65)	0.40	0.10	0.05	
	44	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.85)	0.50	0.10	0.05	
	45	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.60)	0.25	0.10	0.01	
	46	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.80)	0.30	0.10	0.01	
	47	56 T	X	細石刃	黒曜石	(0.55)	0.40	0.10	0.05	
	48	56 T	X II	細石刃	黒曜石	(0.70)	0.50	0.10	0.10	
	49	56 T L-32	-	細石刃	黒曜石	(0.75)	0.60	0.10	0.05	
	50	L-34	-	細石刃	黒曜石	1.10	0.65	0.20	0.20	
	51	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.60)	0.80	0.10	0.40	
	52	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.05)	1.00	0.20	0.20	
	53	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(1.60)	0.85	0.10	0.20	
	54	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(1.30)	0.60	0.10	0.10	
	55	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(1.30)	(0.60)	0.10	0.10	
	56	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.60)	0.70	0.15	0.30	
	57	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.20)	(0.50)	1.00	0.10	
	58	M-35	X I	細石刃	水晶	(1.00)	0.55	0.10	0.10	
	59	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(0.55)	0.30	0.03	0.02	
	60	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(1.00)	0.45	0.19	0.10	
	61	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(0.90)	0.50	0.15	0.05	
	62	L-34	X	細石刃	黒曜石	(1.40)	0.65	0.15	0.10	
	63	56 T	X	細石刃	黒曜石	(1.15)	0.65	0.10	0.10	
	64	L-34	X	細石刃	黒曜石	0.90	0.50	0.15	0.10	
	65	L-34	X	細石刃	黒曜石	(0.80)	0.55	0.10	0.05	
	66	56 T	X I	細石刃	黒曜石	(0.90)	0.45	0.10	0.10	
	67	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.50)	0.50	0.38	0.20	
	68	L-34	X II	細石刃	黒曜石	(1.60)	0.65	0.21	0.20	
	69	M-35	X	細石刃	黒曜石	(1.38)	0.45	0.20	0.10	
	70	L-34	X	細石刃	黒曜石	(0.90)	0.40	0.15	0.05	
	71	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(0.85)	0.53	0.18	0.05	
	72	56 T	-	細石刃	黒曜石	1.00	0.50	0.10	0.05	
	73	L-32	X I	細石刃	黒曜石	(1.10)	0.30	0.15	0.05	
	74	M-35	X I	細石刃	水晶	1.15	0.70	0.20	0.17	
	75	L-34	X I	細石刃	黒曜石	(1.35)	0.50	0.11	0.10	
	76	L-34	X II	細石刃	黒曜石	(1.79)	0.91	0.35	0.50	
	77	L-35	X II	細石刃	黒曜石	1.60	0.80	0.18	0.20	
	78	L-34	X II	細石刃	黒曜石	0.80	1.09	0.20	0.15	
	79	L-34	X I	細石刃	黒曜石	1.30	0.82	0.30	0.17	
80	L-34	X I	石皿	砂岩	7.90	12.10	3.50	457.00		
81	L-34	-	細石刃核	頁岩	2.00	1.80	1.70	8.20		
82	52 T	X I	細石刃	水晶	(0.80)	0.55	0.15	0.20	①	
82	52 T	X I	細石刃	水晶	(0.85)	0.55	0.15	0.10	②	
83	I-32	X II	細石刃	水晶	(0.80)	0.60	0.15	0.10		
84	K-35	X	細石刃	黒曜石	(1.00)	0.55	0.15	0.10		

2 縄文時代早期の調査

(1) 調査の概要

宮ヶ原遺跡の縄文時代早期該当層はV c層のアカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源）とIX層の薩摩火山灰（板島起源：P 14）に挟まれたVI層～VII層である。

調査の結果、遺構は落とし穴、土坑、集石遺構等が、遺物は多種多様の土器や石器が確認された。

(2) 遺構

縄文時代早期の遺構は、土坑1基を除き、全てVII・IX層で検出された。土坑1基は斜面上の調査で旧石器時代該当層のX・X1に変化する面で検出された。

落とし穴や土坑等については、可能な限り掘り込み面で検出しようと細心の注意を払って調査を進めた。しかし、実際は下位の層（薩摩火山灰層）まで掘り下げないと遺構を確認できなかった。

ア 落とし穴（第14図・第15図）

縄文時代早期該当の落とし穴は3基検出された。

1号落とし穴（第14図 右）

I～29区、IX層上で検出された。長軸が100cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈している。

検出面からはほぼ垂直に掘り込まれ、深さが約110cmである。

底面は長軸70cm、短軸約45cmの隅丸長方形を呈しており、直径5～7cm、深さ約50cmの小ピットが2基検出された。

2号落とし穴（第15図）

K～27区、IX層上で検出された。直径約100cmのほぼ円形を呈している。

検出面から約40cmのところで段が形成され、そこからは底面までわずかに内側に入りながら掘り込まれ、深さは約80cmである。

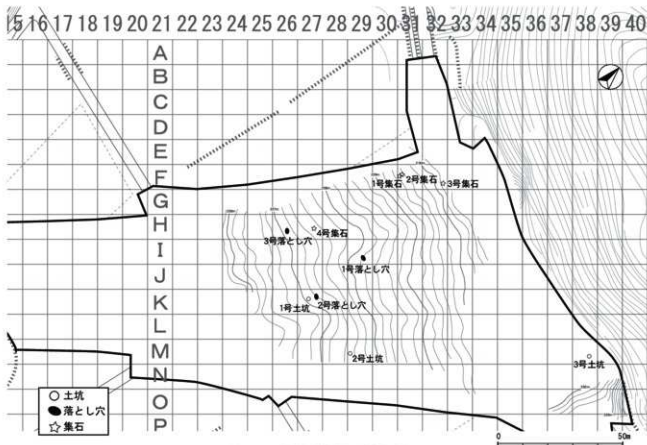
底面は長軸約65cm、短軸約40cmの楕円形を呈し、直径約5cm、深さが15～40cmの小ピットが4基検出された。

3号落とし穴（第14図 左）

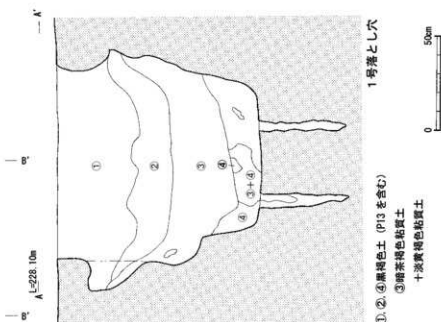
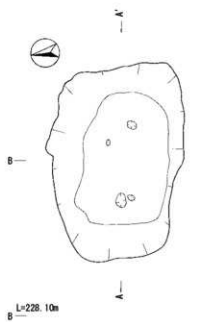
H～26区、VIII層上で検出された。長軸約120cm、短軸約55cmの隅丸長方形を呈している。

検出面から底面へと斜め方向にゆるやかに掘り込まれ、深さは約60cmである。

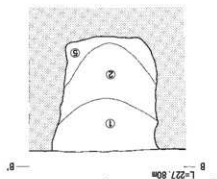
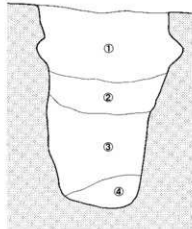
底面は長軸約60cm、短軸約40cmの隅丸長方形を呈しており、直径5～7cm、深さ約25～40cmの小ピットが3基検出された。



第13図 縄文時代早期の遺構配置図

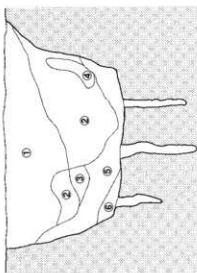
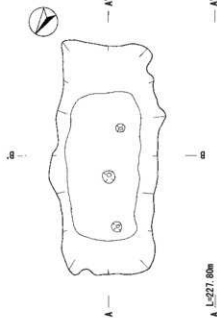


- 1号落とし穴
- ①、②、④黒褐色土 (P13 を含む)
 - ③暗茶褐色粘質土
 - 十黄褐色粘質土

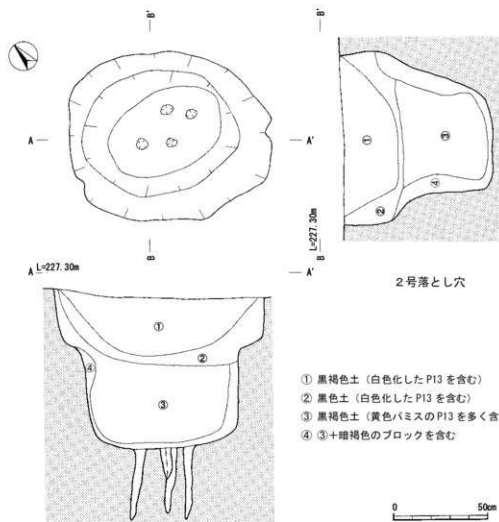


- ①黄褐色土 (P7 を含む)
- ②明褐色土 (P7 を少し含む)
- ③明黄褐色土 (アカホヤ火山灰)
- ④黄褐色土 (アカホヤ火山灰)
- ⑤黄灰色土
- ⑥黄灰色土と黒褐色土の混土

3号落とし穴



第 14 図 縄文時代早期の落とし穴 1



2号落とし穴

- ① 黒褐色土（白色化したP13を含む）
- ② 黒色土（白色化したP13を含む）
- ③ 黒褐色土（黄色バミスのP13を多く含む）
- ④ ③+暗褐色のブロックを含む

第15図 縄文時代早期の落とし穴 2

イ 土坑

縄文時代早期該当の土坑は3基検出された。

1号土坑（第16図）

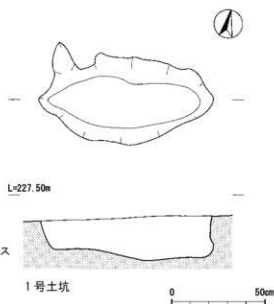
K-27区, IX層上面で検出された。長径約90cm, 短径45cmの楕円形を呈している。埋土はⅧ層（P13を含む黒褐色土）に類似した単一埋土である。検出面からの深さは約20cmである。

2号土坑（第17図）

M-29区, Ⅷ層上面で検出された。長軸約140cm, 短軸約70cmの隅丸方形を呈している。埋土の堆積状況から、2回掘り込んだ可能性がある土坑である。

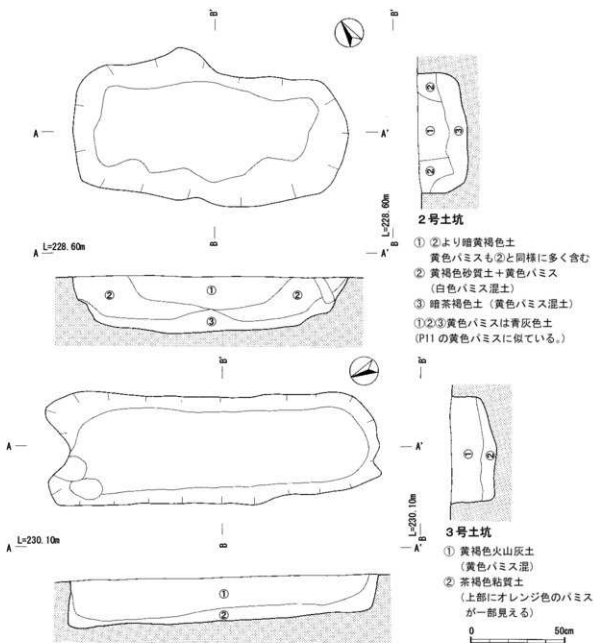
3号土坑（第17図）

M-38区, 斜面上であったためX・X I層で検出された。長軸175cm, 短軸60cmの足形を呈している少し大きめの土坑である。深さが25cmと浅めだが、検出面にP11と思われる黄色バミスが堆積していることから掘り込み面はかなり上であったと思われる。



1号土坑

第16図 縄文時代早期の土坑 1



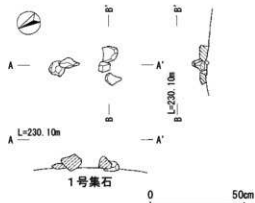
第17図 縄文時代早期の土坑 2

集石遺構

縄文時代早期の集石遺構は4基検出された。4基とも遺構の時期を特定するような他の遺構は確認されず、また、縄文時代早期の遺物が多種多様出土しているため、遺構の詳細な時期については不明である。

1号集石(第18図)

F-31区, VII層上面で検出された。下部に掘り込みは見られず、竪は長軸約40cm、短軸約20cmの範囲に平面的に広がって検出された。遺構を構成している竪は、数が5個、石材は安山岩が多くを占めていた。



第18図 縄文時代早期の集石遺構 1

2号集石 (第19図)

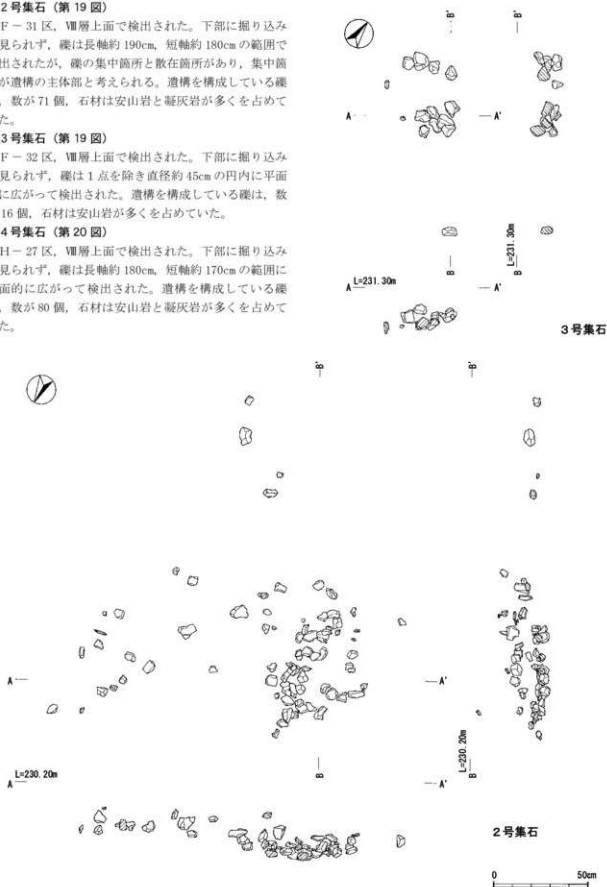
F-31区, VII層上面で検出された。下部に掘り込みは見られず, 礫は長軸約190cm, 短軸約180cmの範囲で検出されたが, 礫の集中箇所と散在箇所があり, 集中箇所が遺構の主体部と考えられる。遺構を構成している礫は, 数が71個, 石材は安山岩と凝灰岩が多くを占めていた。

3号集石 (第19図)

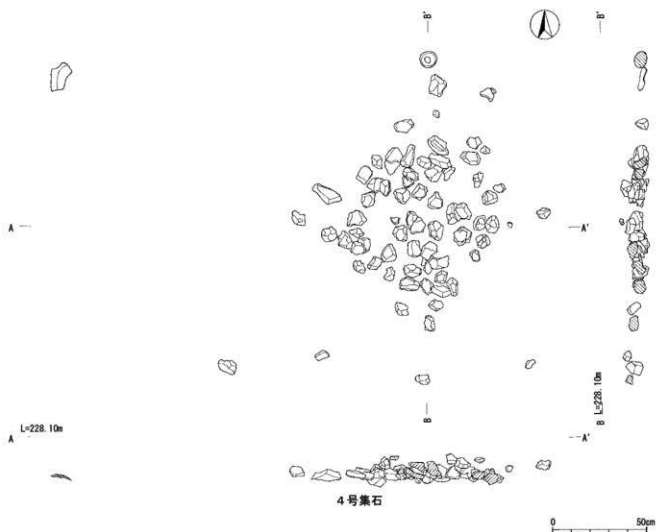
F-32区, VII層上面で検出された。下部に掘り込みは見られず, 礫は1点を除き直径約45cmの円内に平面的に広がって検出された。遺構を構成している礫は, 数が16個, 石材は安山岩が多くを占めていた。

4号集石 (第20図)

H-27区, VII層上面で検出された。下部に掘り込みは見られず, 礫は長軸約180cm, 短軸約170cmの範囲に平面的に広がって検出された。遺構を構成している礫は, 数が80個, 石材は安山岩と凝灰岩が多くを占めていた。



第19図 縄文時代早期の集石遺構 2



第20回 縄文時代早期の集石遺構 3

第5表 縄文時代早期の集石遺構観察表

集石 No.	検出区	検出層	長軸 (cm)	短軸 (cm)	掘り 込み	礫数	構成礫の石材別個数					被熱痕跡のある礫数 (重複あり)		平均 重量 (g)	備考	
							安山岩	凝灰岩	頁岩	砂岩	花崗岩	スス	ひび			赤化
1	F-31	Ⅷ上	40	20	無	5	4	1	0	0	0	0	1	4	294.6	
2	F-31	Ⅷ上	190	180	無	71	32	24	7	5	3	1	7	36	106.9	
3	F-32	Ⅷ上	45	45	無	16	13	0	3	0	0	0	8	6	198	
4	H-27	Ⅷ上	200	140	無	80	34	26	6	8	6	12	11	53	329.7	

(3) 遺物 ア 土器

出土遺物のうち、縄文時代早期の時期に属する土器は、多型式にわたり出土した。そのうち、縄文時代早期前葉から早期中葉の時期の土器は僅かな出土のみで、多くは縄文時代早期後葉の時期に属する土器であった。

以下、出土土器を各時期ごと、各型式ごとに詳述する。

早期前葉の土器 (第22図)

第1類土器 (第22図 85)

縄文時代早期前葉の時期の出土土器は、第1類土器のみである。そのうち1点を資料化した。遺跡南側緩斜面上部の出土である。85は底部である。外面には横位及び斜位方向の貝殻条痕を施す。底面には、二枚貝による貝殻圧痕と思われる。整然と並んだ痕跡がみられる。

早期中葉の土器 (第22図～第27図)

縄文時代早期中葉の時期の出土土器は、第2類・第3類・第4類及び第5類土器である。第5類土器は各細別型式土器の出土がみられた。各土器型式間で数量の多寡は見られなかった。

第2類土器 (第22図 86～90)

第2類土器は5点を資料化した。主に遺跡東側急斜面端の出土である。器形は口縁部が外反あるいは直立し、胴部が直線的に筒形を呈する土器である。口縁部外面に貝殻刺突文あるいは貝殻条痕文を、胴部外面に貝殻条痕を施すのが特徴である。

第2類土器のうち、第2A類土器は口縁部が外反する器形を呈する土器である。2点を資料化した。86は外反する口縁部である。外面に横位方向の刺突文を施す。87は胴部である。外面に綾杉状の貝殻条痕を施す。

第2B類土器は口縁部が直立する器形を呈し、胴部外面に粗い綾杉状の貝殻条痕を施す土器である。3点を資料化した。88は直立する口縁部から胴部片である。口縁部外面には横位方向の条痕文を、胴部外面には横位方向の綾杉文を施す。89は綾杉状の貝殻条痕を施す土器である。90は粗い綾杉状の貝殻条痕を施す土器である。

第3類土器 (第22図 91～97)

第3類土器は7点を資料化した。主に遺跡南側緩斜面中央付近の出土である。器形は口縁部が緩やかに内湾あるいは直立し、口唇部は内傾する平坦面を形成する土器である。外面には横位あるいは斜位方向の貝殻刺突文を施すのが特徴である。

91～94・96は口縁部である。91では外面に横位方向の押し引き文及び刺突文を施す。92・96では口縁部外面に横位方向の貝殻条痕文を、胴部上端外面に羽状の貝殻

刺突文を横位方向に施す。93では外面に貝殻刺突文を縦位方向の山形状に施す。94では斜位方向に貝殻刺突文及び押し引き文を施す。口唇部直下外面に貫通しない孔がある。補修孔と考える。

95・97は胴部である。95では横位方向の貝殻条痕を全面に施す。97では横位方向の貝殻条痕文と羽状の貝殻刺突文を交互に施す。95～97では胎土鉱物及び混和材等から同一個体と考える。

第4類土器 (第23・24図 98～112)

第4類土器は15点を資料化した。主に遺跡南側緩斜面中央付近の東側と西側に出土した。器形は口縁部から底部に向け僅かにすぼまるバケツ状を呈する土器である。口縁部は肥厚し、緩やかに内湾する。口唇部上端は内傾する平坦面を形成する。外面全面に木製のへら状工具あるいはクシ歯状工具による短沈線文を羽状に施す特徴や貝殻による短い押し引き文を施す特徴が挙げられる。

98～102は口縁部である。98～100・102では外面にへら状工具による羽状の短沈線文を横位方向に施す。102では胴部全面に横位方向を意識した羽状の短沈線文を施す。また、101では口縁部から胴部外面に貝殻による短い押し引き文を横位方向の波状に施す。施文方法等は本類での既存の型式概念からははずれる土器だが、口唇部形態等の器形及び成形方法等から本類に帰属させた。

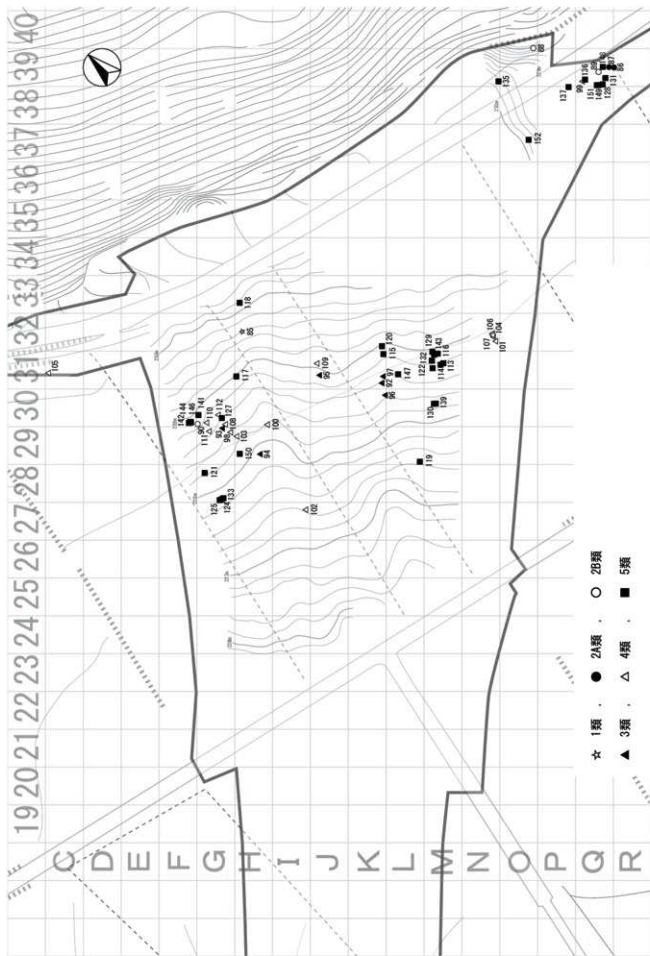
103～109は胴部である。103・108では外面に木製へら状工具による羽状の短沈線文を横位あるいは斜位方向に施す。104～107・109では貝殻による短い押し引き文を施す。いずれの土器にも施文に羽状の意識は認められない。104・106・107・109では横位あるいは斜位方向に、105では縦位方向に施す。

110～112は胴部下端である。いずれも外面には木製クシ歯状工具による短沈線文を施す。110では横位及び斜位方向の短沈線文を施す。明瞭な羽状文あるいは波状文の文様構成は認められないが、右下がり及び左下がりの短沈線文を施す。111では羽状の短沈線文を横位方向に施し、胴部最下端に横位方向の短沈線文を施す。112では横位及び斜位方向の短沈線文を波状あるいは部分的に羽状を意識して施す。胴部最下端に横位方向の短沈線文を施す。

第5類土器 (第25～27図 113～152)

第5類土器は40点を資料化した。主に遺跡南側緩斜面中央付近の東側と西側及び東側急斜面端の出土である。多くは小破片で全体形を復元できる土器の出土はなかった。器形及び施文方法等から4タイプに細別できる。

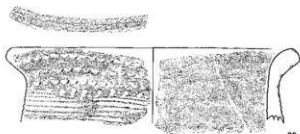
第5A類土器 (第25図 113～127) は口縁部が外反し、底部に向け胴部がほぼ直線的に緩やかにすぼまる器形を呈する土器である。



第21図 縄文時代早期前葉・中葉の土器出土状況図



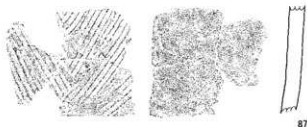
85



86



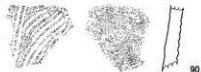
88



87



89



90



91



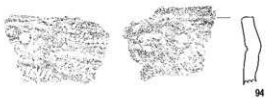
92



93



95



94



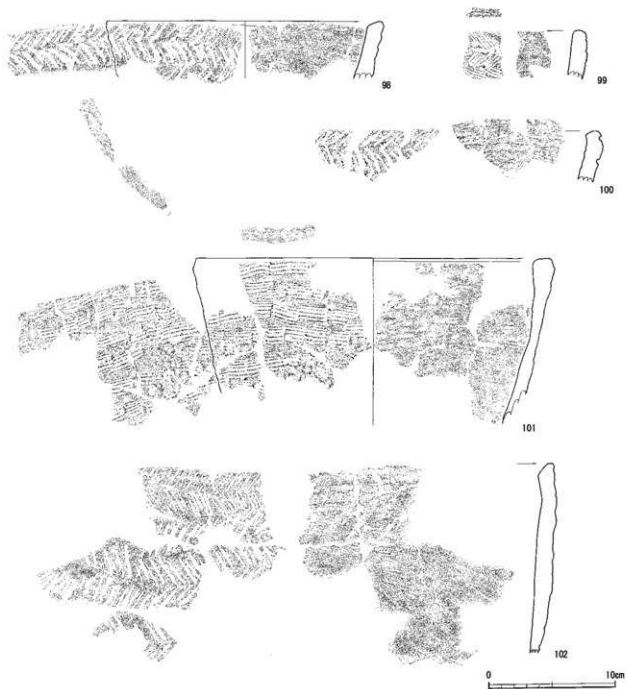
96



97



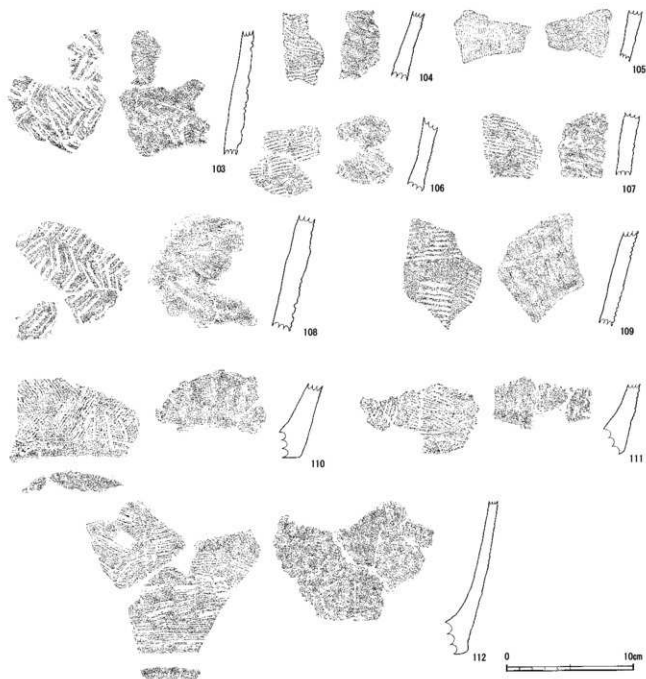
第22図 縄文時代早期前葉・中葉の土器



第23図 縄文時代早期中葉の土器 1

第6表 縄文時代早期の土器観察表 1

種 類 番 号	掲載 番 号	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整（主な文様）		胎土				焼成	取上 番号	備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	石英	長石	雲母				燧石
22	85	H-31-32	VI	深鉢	胴部へ直部	橙	にぶい黄橙		沈線	ナデ	○	○	○	○	良	5953	
	86	Q-39	VII	深鉢	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	津点文	刺突津点文	ナデ	○	○	○	○	良	9113	
	87	Q-39	VI-VII上	深鉢	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		貝殻文	ナデ	○	○	○	○	良	9102他	
	88	P-40	VII下	深鉢	口縁	褐灰	灰黄褐		貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	良	10511	
	89	Q-39	VI	深鉢	胴部	にぶい橙	褐灰		貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	良	9057	
	90	G-30	VII	深鉢	胴部	橙	灰褐		貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	良	6644	
	91	1 T	カクラン	深鉢	口縁	橙	にぶい黄橙		貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	良	-	
	92	K-31	VI下	深鉢	口縁	にぶい褐	にぶい褐		貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	良	3649	
	93	G-29	VII	深鉢	口縁	黒褐	褐灰		貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	良	6995	



第24回 縄文時代早期中葉の土器 2

第7表 縄文時代早期の土器観察表 2

採 取 番 号	掲載 番号	出土 区	層	器種	部位	色調		器面調整（主な文様）					胎土			焼成	取上 番号	備考
						外面	内面	口唇	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	珪石			
22	94	H-29	VII	深鉢	口縁	灰褐	にぶい褐	刺突点文	ナデ	○	○					良	7292	
	95	I-31 J-30-31	VI~VII	深鉢	胴部	橙	橙	貝殻条痕	ナデ	○	○	○			良	7754 他		
	96	K-30	VI	深鉢	口縁	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	○	○					良	2542		
	97	K-31	VI~VII	深鉢	胴部	橙	にぶい橙	貝殻条痕	ナデ	○	○	○			良	3631他		
	98	G-29	VII	深鉢	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	羽状文	ナデ	○	○	○			良	7016他		
23	99	Q-39	VII上	深鉢	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	○	○				良	9118		
	100	G-29 H-29-30	VII	深鉢	口縁	灰黄褐	灰黄褐	羽状刻目	ナデ	○	○	○			良	6798他		
	101	4 T	—	深鉢	口縁~胴部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	○	○	○				良	512他		
	102	G-H-29	VII	深鉢	口縁~胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	羽状文・点文	ナデ	○	○	○			良	817他		

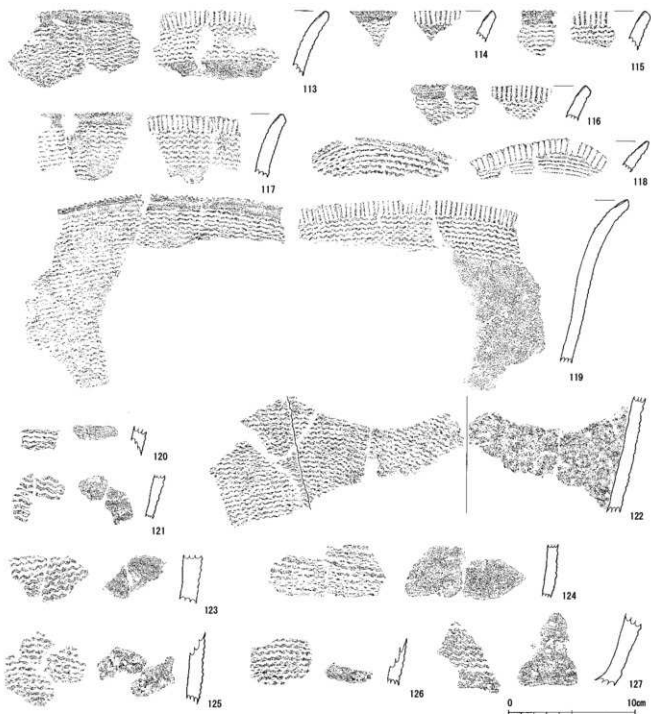
113～119は口縁部である。口唇部上面及び口縁部外面上端には無文帯を設け、口縁部から胴部外面には細かい山形押型文を横位方向に施す。口縁部内面には数段の山形押型文を横位方向に施した後、上端には縦位方向の櫛状文を1段施す。また、118では直線的に外傾する口縁部で上面観が方形を呈するのが特徴的である。口縁部内面には条線状の押型文を横位方向に施す。

120～127は胴部である。120～122では山形押型文を横位方向に施す。123～127では楕円押型文を横位方向に施し、施文後にナデ調整が行われたと考えられる。127

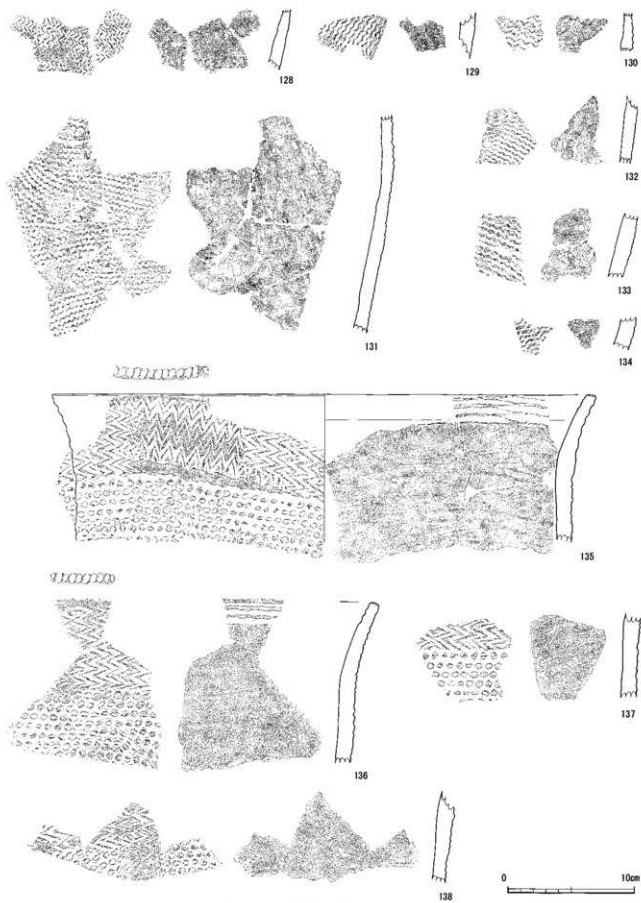
は胴部下端である。最下端部には施文が行われていない。

第5B類土器(第26図 128～134)は胴部がほぼ直線的に緩やかにすぼまる器形を呈する土器である。外面には斜位方向の押型文を施すのが特徴である。

128では細かい山形押型文を縦位あるいは僅かに斜位方向に施す。また、一部にナデ消しによる無文帯を施すのが特徴である。129～132・134では斜位方向の山形押型文を施す。131では右下がり及び左下がりの斜位方向並びに横位方向の山形押型文を組み合わせる。133では斜位方向の楕円押型文を施す。



第25図 縄文時代早期中葉の土器 3



第26図 縄文時代早期中葉の土器 4

第5 C類土器(第26図 135~138)は短い口縁部が僅かに外反し、胴部は直線的に移行する土器である。

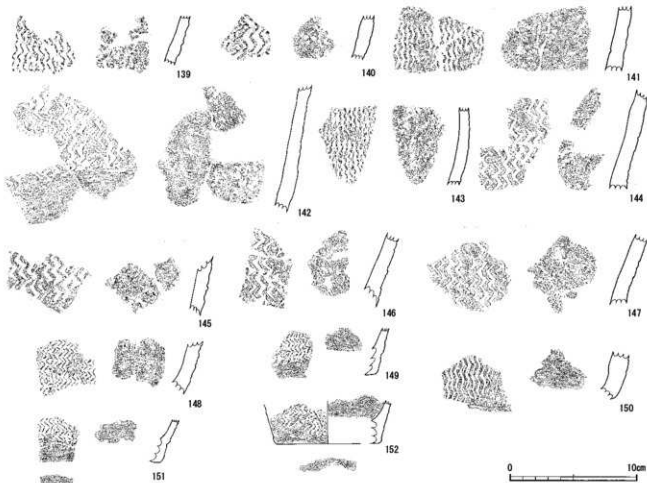
135・136は口縁部から胴部である。口縁部外面には横位及び縦位方向の大柄の山形押型文を組み合わせる。胴部外面全面には横位方向の大粒の楕円押型文を施す。また、口唇部上端には棒状工具による刻みを施し、口縁部内面には糸線状の押型文を施す。

137・138は胴部である。外面上半には縦位方向に大柄の山形押型文を、下半には横位方向の大粒の楕円押型文を施す。

第5 D類土器(第27図 139~152)は胴部がほぼ直

線的に緩やかにすぼまる器形を呈する土器である。外面には縦位方向あるいは僅かに斜位方向の山形押型文を施す。

139では外面に縦位方向及び僅かに斜位方向の山形押型文を組み合わせる。140では外面に少し間延びした縦位方向の山形押型文を施す。141では外面に起伏の少ない間延びした縦位方向の山形押型文及びナデ消しによる無文帯を施すのが特徴である。142では外面に縦位方向の山形押型文を施した後に、ナデ調整を行ったため、凹凸の少ないのが特徴である。また、下端にはナデ



第27図 縄文時代早期中葉の土器 5

第8表 縄文時代早期の土器観察表 3

掲載番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整(主な文様)		胎土				焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	石英	長石	角閃石				雲母
24	103	H-29	VII	深鉢	胴部	橙	にぶい黄橙	沈線	ナデ	○	○	○	○	○	良	7223	
	104	4-T	VII	深鉢	胴部	橙	灰褐	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	516	
	105	54T	VII上	深鉢	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	8064	
	106	4-T	VII	深鉢	胴部	にぶい橙	褐灰	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	519他	
	107	4-T	VII	深鉢	胴部	橙	黒褐	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	513	
	108	G-H-29	VII-VI上	深鉢	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線	ナデ	○	○	○	○	○	良	5711	
	109	J-31	VII	深鉢	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	7713	
	110	G-30	VII	深鉢	底部	にぶい橙	褐	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	6987	
	111	G-29	VII	深鉢	胴部	にぶい橙	褐灰	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	6287他	
	112	G-30	VII	深鉢	底部	にぶい黄橙	にぶい橙	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	○	良	6700他	

消しによる無文帯を設ける。143は胴部上半から下半へ湾曲する土器である。外面には細い山形押型文を縦方向に施すのが特徴である。144・146・147は胴部下端部に近い土器である。144～147では外面に大きめの山形押型文を縦方向に施すのが特徴である。148～152は胴部下端の土器である。いずれも外面に細い縦方向の山形押型文を施し、最下端部にはナゲ消しによる無文帯を設けるのが特徴である。

早期後葉の土器 (第29図～68図)

縄文時代早期後葉の時期の出土土器は、第6類・第7類・第8類・第9類及び第10類土器である。第6類及び第7類土器には細別型式土器の出土がみられた。宮ヶ原遺跡では、特に第8類土器の出土が多く見られた。

第6類土器 (第29図 153～第35図 237)

第6類土器は85点を資料化した。主に遺跡南側緩斜面上部の西側の出土である。細別分類では出土区域に有意な差はない。本類は施文方法等から第6A類土器と第6B類土器に細別できる。

第6A類土器 (第29図 153～第34図 215)

第6A類土器の器種には深鉢と甕がある。

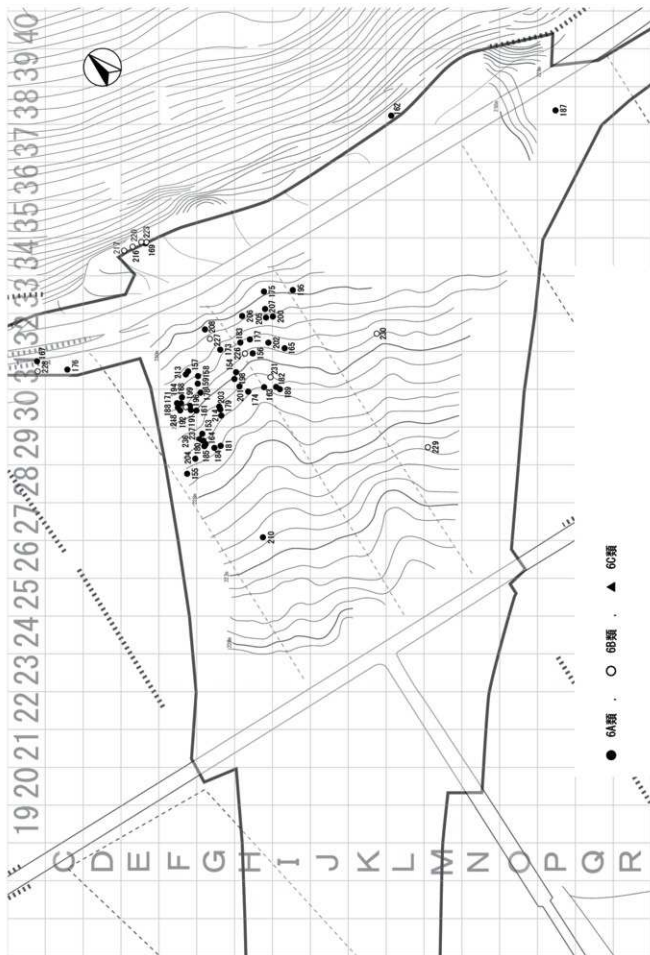
深鉢 (第29図 153～第34図 211)

器形は口縁部が大きく外反し、胴部最大径が胴部上半にあり、底部に向け緩やかにすぼまり、底部は平底を呈する土器である。口縁上面観は略方形を、口縁は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部の口縁外面には瘤状突起を貼付するのが特徴的である。口縁部から胴部外面には縄文地紋に施した後、口縁部には波頂部下に胴部まで縦方向の突帯を貼り付ける。また、口縁部上端及び口縁部下端あるいは胴部上端には横位方向の貼付突帯を数条ずつ巡らす。胴部には突帯を横位方向や曲線状に貼付し、その間を斜位方向の沈線文を施すのが特徴である。

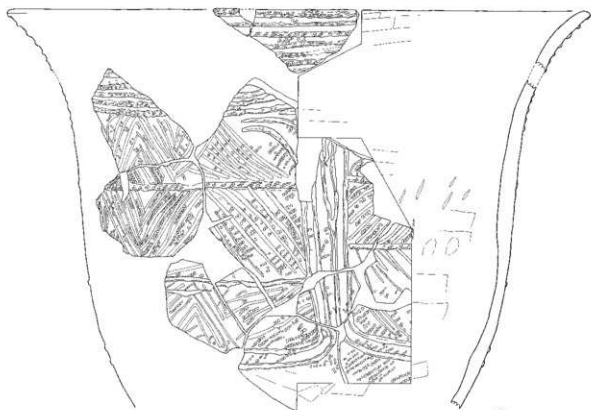
153・154は全体形をうかがえる土器である。153には口唇部上端及び口縁部から胴部外面に縄文地紋に施す。その後、口縁部から胴部外面に5列以上の突帯を縦位方向に貼り付け、そのうちの2列は「コ」字状に施す。また、口縁部上端に5条以上の貼付突帯を、口縁部下端に5条以上の貼付突帯を横位方向に巡らす。154には口縁部から胴部外面に右上がりと右下がりの縄文地紋に施す。口唇部上端は無文であるのが特徴である。波頂部下の口縁上端と胴部上半に瘤状突起を貼り付け、口縁部上端と胴部上端にはそれぞれ刻みを施した貼付突帯を2条ずつ巡らす。さらに、胴部外面には刻みを施した貼付突帯を曲線状に2条平行して施す。

第9表 縄文時代早期の土器観察表 4

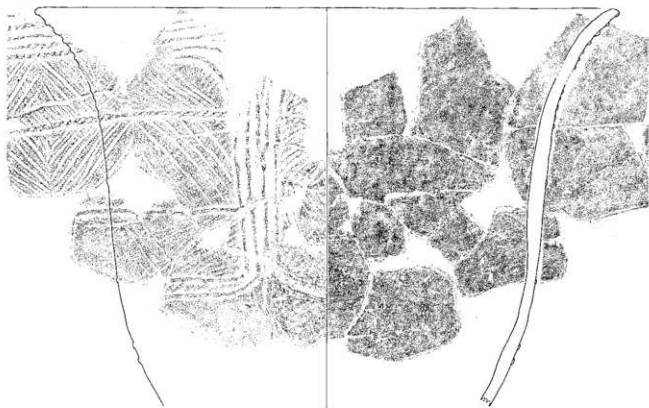
種別番号	掲載番号	出土区	器	器種	部位	色調		器底調査 (主な文様)		胎土				備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	長石	石英	礫石		構成物
113	M-31	VI上	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3500	—
114	M-31	VI上	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3510	—
115	K-31	VI	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3587	—
116	M-31	VI	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3585	—
117	G-H-31	VI	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	7884	—
118	H-32	VI	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	6488	—
119	I-33	VI	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	2492	2
120	K-32	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	4334	—	
121	G-28	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	8770	—	
122	F-31	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3522	—	
123	G-H-30	カタラン	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	—	—	
124	G-27	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	8728	—	
125	G-27-28	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	8508	—	
126	G-30	カタラン	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	—	—	
127	G-29	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	6705	—	
128	Q-39	VI-III	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9038	2	
129	M-31	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3530	—	
130	M-30	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3480	—	
131	M-30	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9093	2	
132	M-31	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3527	—	
133	G-27	VI-III上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	8558	—	
134	G-29	カタラン	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	—	—	
135	X-39	VI-III	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	1009	2	
136	Q-39	VI-III	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9051	2	
137	F-38	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9065	—	
138	N-38	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	—	—	
139	M-30	VI-III上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	2483	2	
140	G-32	カタラン	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	—	—	
141	F-38	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	5673	2	
142	F-G-30	VI-III上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	5675	2	
143	M-31	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3528	—	
144	I-F-30	VI-III上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	4848	—	
145	G-29	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黒	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	—	—	
146	F-29-30	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	4828	—	
147	I-30	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	3930	2	
148	Q-39	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9053	—	
149	Q-39	VI上	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9083	—	
150	H-30	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	7096	—	
151	Q-39	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	9080	—	
152	O-37	VI	深鉢	胴部	にぶい黄緑	にぶい黄緑	山形押型文	ナダ	○	○	○	良	8629	—	



第28図 縄文時代早期後葉の土器出土状況①



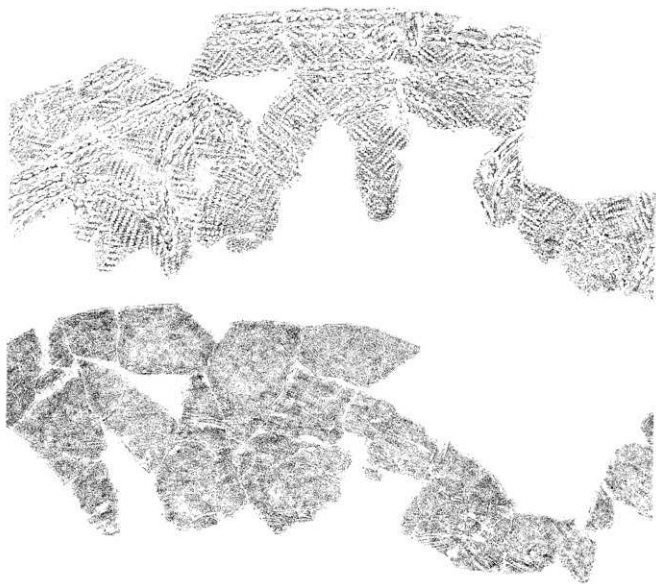
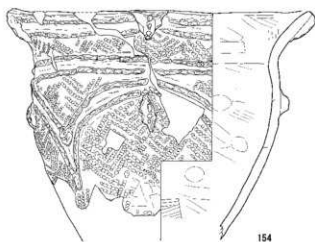
153



0 10cm

 A horizontal scale bar with a vertical tick mark at the 0 position and another at the 10cm position. The bar is divided into several segments, representing centimeters.

第29図 縄文時代早期後葉の土器 1



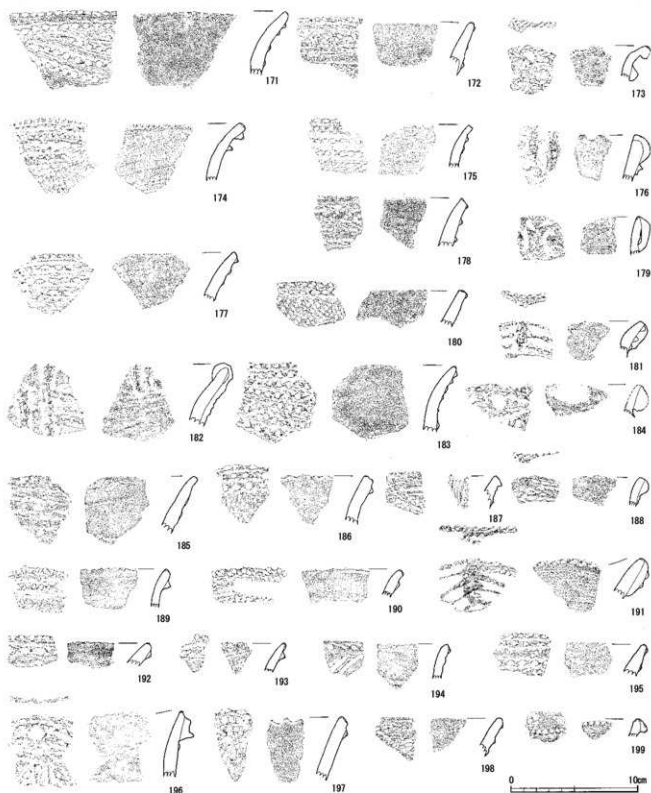
第30図 縄文時代早期後葉の土器 2



第31図 縄文時代早期後葉の土器 3

155～199は口縁部である。口唇部上端には155・156・158・162・163・165・166・169・170・171・173・174・175・177・182・183・184・185・186・189・192・193・196・197ではヘラ状工具による刻みを、199では刺突文を施し、164・167・168・172・178・179・180・181・188・190・191・195では縄文を施す。また、187・194・198は無文である。

158に貼付した瘤状突起には棒状工具で刺突文を施す。159は木製又条工具を横位方向に施した沈線文により表した「見かけの突帯」上に刻みを施すのが特徴である。162では口唇部上端に棒状工具で刺突文を施す。縦位及び横位方向の貼付突帯は細いのが特徴である。163・174・190では口縁部に貼付突帯が剥がれた痕跡が見



第32図 縄文時代早期後葉の土器 4

られ、その部分には縄文施文が観察できる。168では波頂部下の口縁上端に瘤状突起を貼付し、口縁部に刻みを施した貼付突帯を横位方向に3条巡らす。胴部外面には縄文を地紋に施した後、波頂部下に刻みを施した縦位方向の突帯を貼り付ける。その他の部分には縦位方向の沈線文を多数施す。171では口縁部に刻みを施す突帯を斜位方向に貼り付けるのが特徴である。172・178では横位方向に貼り付けた突帯上に縄文を施す。176・182では口縁部内面上端から口唇部上端、口縁部外面に突帯を縦位方向に貼り付ける。179では口縁部上端から下端に幅約10mmの橋状把手を設ける。181では口縁部内面に土塊を貼り付けるのが特徴である。191では口縁部外面上端に貼り付けた瘤状突起上に縄文を施した2条の突帯を横位方向に貼り付ける。194では口縁部に斜位方向の沈線文を施すのが特徴である。196では口縁部外面上端に棒状工具で刺突文を施した瘤状突起を貼り付け、そこに刻みを施した貼付突帯を2条横位方向に巡らす。突起下には2列の縦位方向の突帯を貼り付け、そこから斜位方向に突帯を貼り付ける。

200・205・207は口縁部から胴部である。口縁部には刻みを施す貼付突帯を3条巡らす。200では胴部には右上がりの縄文と右下がりの縄文を施す。

201～204・208は胴部である。201では上端に刻みを施す貼付突帯を横位方向に巡らし、胴部には縄文を施す。202では地紋に縄文を施した後、縦位及び斜位方向の刺突を施した突帯を貼り付ける。203では横位及び斜位方向に刻みを施す細い突帯を貼り付ける。204では地紋に縄文を施した後、逆「Y」字状の細い突帯を貼り付け、斜位方向の細い沈線文を施す。208では縄文を施す。

206は小型深鉢土器の胴部である。全面に縄文を施す。

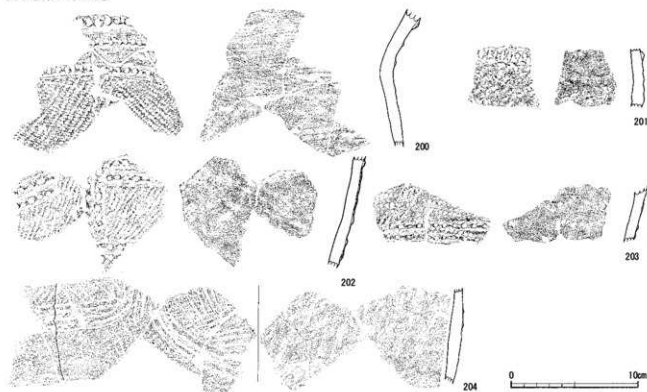
210・211は平底を呈する底部である。

壺 (第34図 212～215)

出土土器は頸部から肩部で、全体形はうかがえない。

212・214は肩部である。横位方向の貼付突帯を巡らす。

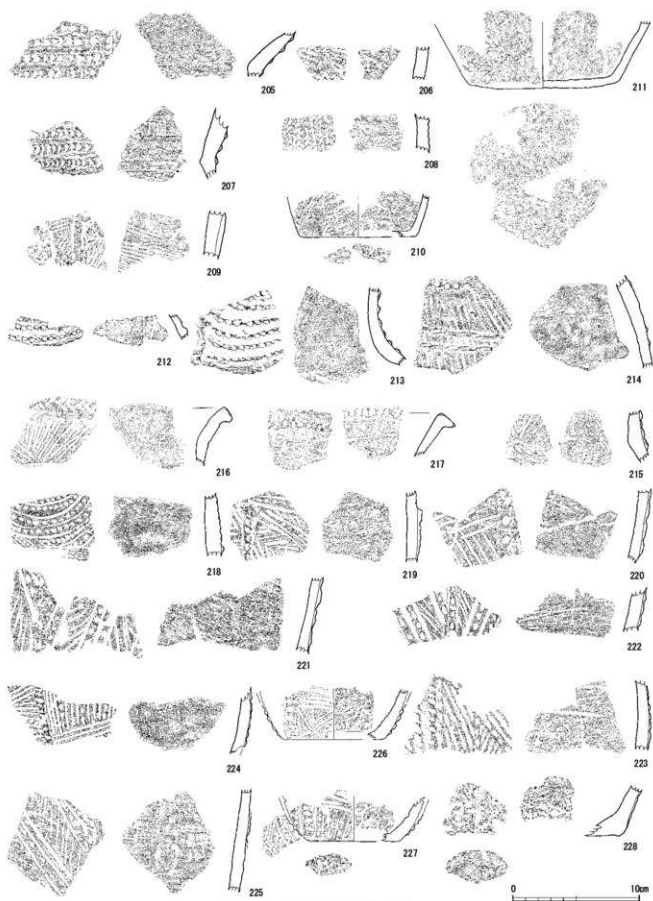
213・215は頸部から肩部である。刻みを施す突帯を縦位及び横位方向に貼り付ける。横位方向の突帯は6条が確認できる。



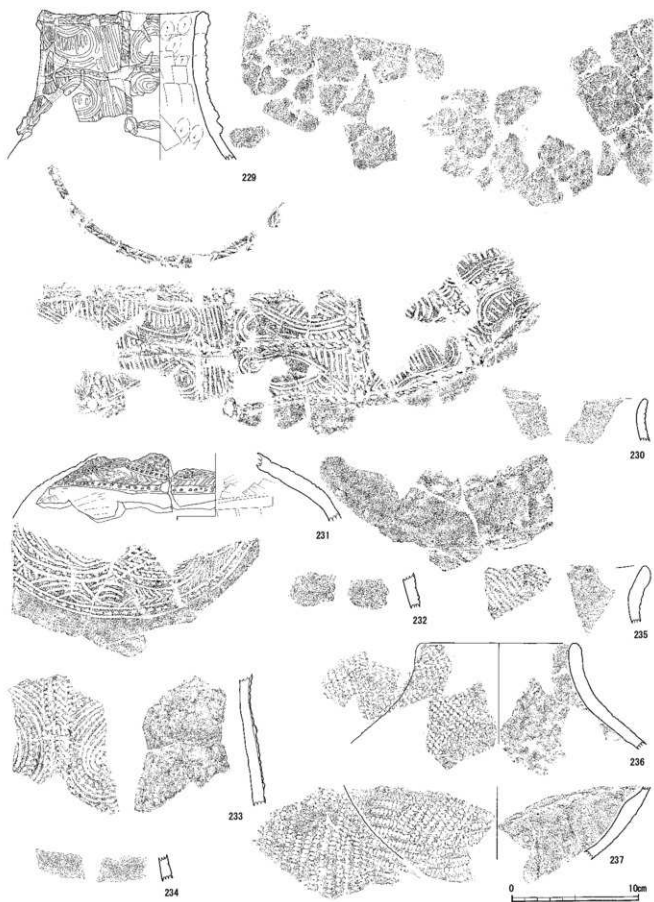
第33図 縄文時代早期後葉の土器 5

第10表 縄文時代早期の土器観察表 5

採掘 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整 (主な文様)		胎土				焼成	取上 番号	備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	石英	長石	雲母				珪石
29	153	F-28-II	VII	深鉢	口縁-胴部	橙	にぶい黄橙	沈線	貼付突帯沈線	ナデ	○	○	○	○	良	6293他	
30	154	H-31	VIII	深鉢	口縁-胴部	にぶい地	にぶい地		貼付突帯沈線	ナデ	○	○	○	○	良	7076	
31	155	F-28	VIII上	深鉢	口縁	黒褐色	にぶい黄橙	刻目	瘤状突起	ナデ	○	○	○	○	良	8823	
31	156	H-31	VIII上	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刻目	突帯文	ナデ	○	○	○	○	良	7459	



第34図 縄文時代早期後葉の土器 6



第35図 縄文時代早期後葉の土器 7

第11表 縄文時代早期の土器観察表6

種別 器番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	色澤		表面観察 (主な文様)				胎土				備考							
						外面		内面		口唇		外面		内面			石 英	長 石	角 閃石	雲 母	銅 石	焼 成	取 上 番 号
						外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面										
157	F-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6171								
158	G-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6254								
159	G-31	ⅤB	深鉢	口縁	灰黄地	灰黄地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6308								
160	F-29	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6336								
161	F-30	ⅤB	深鉢	口縁	灰黄地	灰黄地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6653								
162	K-37	ⅤB・ⅤC	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい黄地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	10386								
163	H-30-31	ⅤB・ⅤC上	深鉢	口縁	灰黄地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7165								
164	G-29	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	灰黄地	刷目	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7159								
165	H-30-32	ⅤB・ⅤC	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7669								
166	F-30	表土	深鉢	口縁	灰黄地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	8036								
167	S47	ⅤB上	深鉢	口縁	灰黄地	にぶい黄地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	8151								
168	F-30-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6149								
169	F-35	ⅤB	深鉢	口縁	灰黄地	灰黄地	刷目	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	10102								
170	S47	カタラン	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
171	黒4内	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	25								
172	—	表土	深鉢	口縁	黄地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
173	G-32	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい黄地	刷目	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7324								
174	H-30	ⅤB上	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7088								
175	H-33	ⅤB	深鉢	口縁	明赤地	明赤地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5285								
176	S47	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	8036								
177	H-32	ⅤB上	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7441								
178	F-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6240								
179	G-30	ⅤB	深鉢	口縁	地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6083								
180	G-29	ⅤC	深鉢	口縁	灰黄地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5365								
181	G-29	ⅤB上	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6053								
182	-31	ⅤB上	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7421								
183	H-32	ⅤB	深鉢	口縁	黄地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6531								
184	G-29	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	灰黄地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6626								
185	G-29	ⅤB	深鉢	口縁	灰黄地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7001								
186	F-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6683								
187	F-29	V	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	8627								
188	I-7	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	84								
189	I-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7418								
190	I-7	カタラン	深鉢	口縁	黒地	灰黄地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
191	F-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6097								
192	S47	V	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	10								
193	G-31	カタラン	深鉢	口縁	にぶい地	にぶい地	変形文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
194	F-30	V	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5349								
195	I-32	V	深鉢	口縁	黄地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5552								
196	F-30-31	ⅤB・ⅤC上	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5657								
197	G-29	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7145								
198	I-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7080								
199	I-7	ⅤB	深鉢	口縁	地	地	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	526									
200	H-30-31	ⅤB・ⅤC上	深鉢	胴部	明赤地	明赤地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7370								
201	H-31	ⅤB	深鉢	胴部	黄地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7364								
202	G-31	ⅤB上	深鉢	胴部	にぶい黄地	明赤地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7472								
203	G-30	ⅤB上	深鉢	胴部	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6251								
204	F-28-29	ⅤB	深鉢	胴部	地	地	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	8777									
205	H-31	V	深鉢	胴部	にぶい黄地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5501								
206	H-32	ⅤB上	深鉢	胴部	にぶい黄地	にぶい地	刷目	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	7526								
207	H-32	ⅤB	深鉢	胴部	灰黄地	灰黄地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5852								
208	H-32	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	8227								
209	J-27-28	カタラン	深鉢	胴部	にぶい地	黒地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
210	H-27	V	深鉢	底部	にぶい地	明赤地	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	6558									
211	K-32	V	深鉢	底部	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	4300									
212	F-1	カタラン	深鉢	胴部	灰黄地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7193								
213	F-1	ⅤB	深鉢	胴部	明赤地	明赤地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7193								
214	G-30	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6253								
215	黒2内	—	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	—									
216	F-35	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい黄地	刷目	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	10406								
217	F-35	ⅤB上	深鉢	胴部	にぶい黄地	にぶい黄地	刷目	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	10205								
218	F-30	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6124								
219	G-31	カタラン	深鉢	胴部	にぶい地	灰黄地	産点文	刷付変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
220	F-35	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい黄地	灰黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	10104								
221	H-30-31	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
222	H-30-31	ⅤB	深鉢	胴部	地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
223	F-35	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	1003								
224	G-31	カタラン	深鉢	胴部	にぶい地	黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
225	H-31	カタラン	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
226	H-30-31	ⅤB・ⅤC上	深鉢	胴部	黒地	黒地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	7466								
227	G-32	ⅤB	深鉢	底部	にぶい地	明赤地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6506								
228	S47	ⅤB	深鉢	底部	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	6105								
229	M-1-29	V	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	刷目	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	7229								
230	K-32	V	深鉢	胴部	黄地	にぶい黄地	産点文	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	4303								
231	H-30-31	V	深鉢	胴部	黄地	明赤地	産点文	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	5910								
232	I-31	カタラン	深鉢	胴部	灰黄地	にぶい黄地	産点文	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
233	G-30	カタラン	深鉢	胴部	にぶい地	にぶい地	刷目	変形文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
234	G-27	カタラン	深鉢	胴部	灰黄地	灰黄地	産点文	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
235	G-29	カタラン	深鉢	胴部	灰黄地	灰黄地	産点文	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	—								
236	F-6-30	ⅤB・ⅤC上	深鉢	胴部	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	5693								
237	F-6-29	V	深鉢	胴部	にぶい黄地	にぶい黄地	産点文	産点文	ナダ	○	○	○	○	良	5446								

第6 B類土器 (第34図 216～第35図 234)

第6 B類土器の器種には深鉢と甕がある。

深鉢 (第34図 216～228)

出土土器は小破片が多く、全体形はうかがえないものの、ほぼ第6 A類土器の器形と酷似する。また、施文方法は口縁部から胴部外面には縄文を地紋に施した後、胴部には刻みを施した突帯を縦位方向に貼り付け、その他の部分には斜位方向や曲線状の沈線文を巡らし、その沈線文間には連点状に刺突文を施すのが特徴である。

216・217は口縁部である。口縁部外面上端に断面三角形の突帯を貼り付ける。216では口唇部上面に「ハ」字状の刻みを施す。口縁部には斜位方向の沈線文を、口縁部下端には横位方向の沈線文を施す。217では口唇部上端と突帯上に刻みを施す。

218～225は胴部である。218では下部に横位方向の突帯を貼り付けた後、曲線状の多重の沈線文と沈線文間に刺突連点文を施す。219～225では刻みを施した突帯を縦位方向に貼付け、その他の部分には斜位方向、横位方向あるいは縦位方向の沈線文と、沈線文の間には部分的に連点状に刺突文を施す。224では接合痕が観察できる。

226～228は胴部下端から底部である。226・227では刻みを施した突帯を縦位方向に貼り付け、その他の部分には斜位方向、横位方向あるいは縦位方向の沈線文と、沈線文間には部分的に連点状に刺突文を施す。228では縄文を地紋に施した後、突帯を縦位方向に貼り付ける。

甕 (第35図 229～234)

本類に帰属する甕には、頸部が長く肩部が要る器形を呈する土器(229・231・233)と、頸部が短く肩部がなで肩の器形を呈する土器(230)がある。

229では刻みを施す突帯を縦位及び横位方向に貼り付ける。その突帯間には縦位方向及び曲線状の沈線文を施す。口縁部上端と頸部下端には棒状工具で刺突した瘤状突起を貼り付ける。231では横位及び斜位方向の沈線文を施し、沈線文間には連点状に刺突文を施す。233では刻みを施す突帯を縦位方向に貼り付けた後、曲線状の多重の沈線文と沈線文間に刺突連点文を施す。

232・234は頸部である。細い沈線文を斜位及び曲線状に施す。

230は口縁部である。細い沈線文を横位及び曲線状に施す。

第6 C類土器 (第35図 235～237)

全面に縄文を施す土器を帰属させた。頸部が短く肩部がなで肩の器形を呈する甕である。

235は口縁部、236は口縁部から肩部、237は胴部下半の土器である。

第7類土器 (第37図 238～第57図 406)

第7類土器は159点を資料化した。遺跡南側緩斜面全域のうち標高約227mから約228mの範囲を除く部分と、遺跡西側部分の出土である。本類は器形等から第7 A類から第7 E類の5種に細別できる。

それぞれ器種には深鉢と甕がある。

深鉢の器形は口縁部が外反し、頸部がしまり、胴部最大径が胴部中央にあり、底部に向け緩やかにすぼまり、底部は上げ底を呈する土器である。口縁上面観は略方形で、口縁は緩やかな波状口縁を呈する。口縁部が肥厚し、頸部には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。肥厚した口縁上には幾何学的に沈線文及び連点文を施し、胴部には結節縄文を施す土器と幾何学文を施す土器がある。

甕には頸部が長く肩部が要る器形の土器と、頸部が短く肩部がなで肩の器形の土器がある。長頸蓋形の口縁形態には緩やかな波状口縁のものと平口縁のものがある。また、頸部から肩部にかけて強く屈曲するもの、なだらかなものがある。第2の口縁部が外反する器形の口縁形態は平口縁を呈し、頸部から口縁部にかけて強く外反し、頸部は短く、頸部と肩部との境は緩やかに移行する。口縁部から頸部には沈線文及び連点文を施し、胴部は無文であるのが特徴である。

なお、甕の属性から第7 A類土器には帰属が可能であるので細分したが、第7 B類土器～第7 E類土器では帰属が困難なため、一括して分類した。

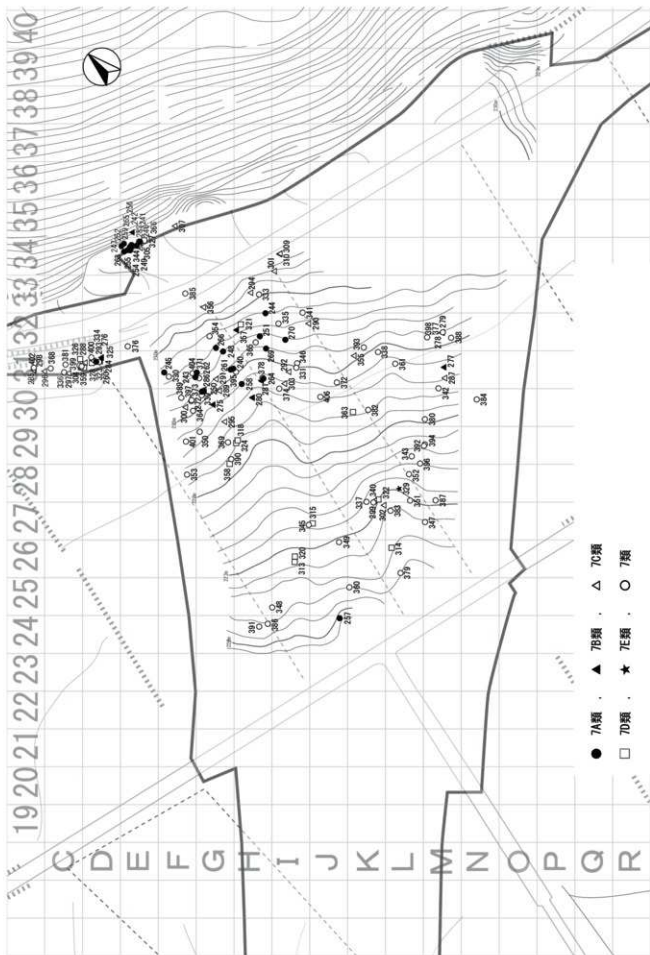
第7 A類土器 (第37図 238～第39図 272)

本類は35点を資料化した。

深鉢 (第37図 238～第38図 267)

本類は、口唇部上端から口縁部上端に内側を囲ませた小さな断面三角形の突帯を貼り付け、頸部から胴部には刻みを施す突帯を縦位方向に貼り付け、頸部下端及び胴部中央に瘤状突起を付けるのが特徴である。

238～241は口縁部から胴部である。238では口唇部上端及び突帯上に刻みを施し、波頂部下及び波頂部間に刻みを施す突帯を3列ずつ貼り付ける。その他の頸部には横位方向の沈線文と、沈線文間には部分的に刺突連点文を施す。また、胴部には縦位方向の沈線文と沈線文間には部分的に刺突連点文を施す。239では突帯上に羽状の刻みを、頸部から胴部に横位方向の沈線文と、沈線文間に刺突連点文を施す。240では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。頸部から胴部には刻みを施した突帯を縦位方向に貼り付ける。その両側には、縦位・横位斜位方向に沈線文を施す。241・242では口唇部上端及び突帯上端に刻みを施し、突帯上には山形状の短沈線文を施す。頸部中央と胴部上端には刻みを施す突帯を横位方向に巡



第36図 縄文時代早期後葉の土器出土状況図2

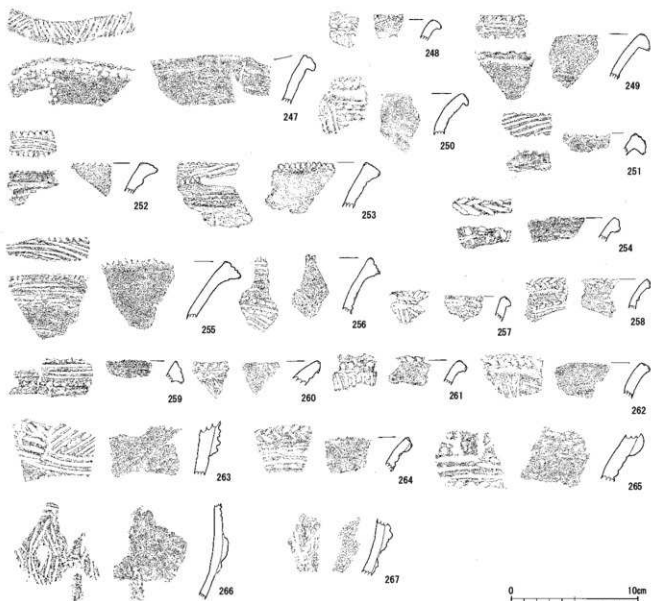
らす。突帯間及び胴部には斜位方向の沈線文を施す。

243～262・264は口縁部から頸部である。243では突帯上に横位方向の沈線文を2条巡らし、胴部は無文である。244では頸部に横位方向の沈線文とその沈線間には部分的に刺突連点文を施す。245では突帯上に斜位方向の短沈線文を施す。246では突帯上に横位方向の短沈線文を施し、胴部は無文である。247では突帯上には山形状の短沈線文を施し、頸部上端には刺突連点文を横位方向に1条巡らす。248では頸部に縦位方向の沈線文を施す。

249では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。突帯上には横位方向の沈線文を2条巡らし、胴部は無文である。250では突帯上には刺突連点文を施す。頸部には横位及び縦位方向の沈線文と刺突連点文を施す。251・253では口唇部上端と突帯上端に刻みを施し、突帯上には山形状の短沈線文を施す。252・255では口唇部上端と突帯上端に刻みを施し、突帯上には曲線状の沈線文を施す。254・258では突帯上に羽状の刻みを施す。256では突帯上に横位方向の沈線文を巡らし、頸部には横位方向の刺



第37図 縄文時代早期後葉の土器 8



第38図 縄文時代早期後葉の土器 9

第12表 縄文時代早期の土器観察表 7

標記 番号	周縁 番号	出土区	層	器種	部位	色澤			器面観察 (主な文様)			胎土			焼成 温度	取上 番号	備考
						外面	内面	口唇	外面	内面	石灰	長石	燧石	雲母			
238	—	—	深鉢	口縁-胴部	灰褐色	にぶい黒	黒目	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	○	良	—	
239	6-T	カクラン	深鉢	口縁	黒	にぶい黒	黒目	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
240	G-31	ⅤB	深鉢	口縁-胴部	明茶褐色	にぶい赤褐色	明茶褐色	点文	取付突帯	ナツ	○	○	○	○	良	7071他	
241	F-35	ⅤB-ⅤB	深鉢	口縁-胴部	灰褐色	灰褐色	黒目	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	1022他		
242	F-35	ⅤB上	深鉢	口縁-胴部	灰褐色	にぶい黒	黒目	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	10221		
243	F-31	ⅤB	深鉢	口縁	明茶	にぶい黒褐色	黒目	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	6181		
244	H-32	Ⅴ1	深鉢	口縁	黒	にぶい黒	黒目	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	5486		
245	F-31	ⅤB	深鉢	口縁	灰褐色	にぶい黒	沈澱	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	6479		
246	F-35	ⅤA	深鉢	口縁	黒	にぶい黒	点文	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	10029		
247	F-35, H-31	ⅤB-ⅤB上	深鉢	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈澱	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	1020他		
248	G-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい赤褐色	明茶	点文	沈澱	ナツ	○	○	○	○	良	6763		
249	F-35	ⅤB下	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	点文	ナツ	○	○	○	○	○	良	10417		
250	G-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	点文	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	8678		
251	H-32	ⅤA	深鉢	口縁	にぶい黒	灰褐色	点文	ナツ	○	○	○	○	○	良	5839		
252	F-35	ⅤB上	深鉢	口縁	黒	にぶい黄褐色	点文	突帯文	ナツ	○	○	○	○	良	10212		
253	浦田川A	カクラン	深鉢	口縁	黒	にぶい黄褐色	紅目線	突帯文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
254	F-35	ⅤB	深鉢	口縁	黒	にぶい黄褐色	沈澱	ナツ	○	○	○	○	○	良	10396		
255	F-35	ⅤA	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黄褐色	点文	ナツ	○	○	○	○	○	良	10393		
256	F-35	ⅤB	深鉢	口縁	灰褐色	灰褐色	沈澱	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	10403		
257	J-24	ⅤA	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	黒目	沈澱	ナツ	○	○	○	○	良	1579		
258	H-31	ⅤA	深鉢	口縁	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	沈澱	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	5752		
259	F-35	ⅤB上	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	黒目	沈澱	ナツ	○	○	○	○	良	10215		
260	347	ⅤB	深鉢	口縁	黒褐色	明茶	沈澱	ナツ	○	○	○	○	○	良	6442		
261	G-31	ⅤB	深鉢	口縁	明茶褐色	明茶褐色	点文	沈澱	黒目ナツ	○	○	○	○	良	7069		
262	G-31	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	点文	刺突点文	ナツ	○	○	○	○	良	6966		

突連点文と斜位方向の沈線文を施す。257では突帯上に山形状の短沈線文を施し、頸部に斜位方向の沈線文を施す。259では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。突帯上に横位方向の沈線文を3条巡らし、260では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。頸部には斜位方向の沈線文を施す。261では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。頸部に縦位方向の沈線文を施す。262・264では突帯上に羽状の刻みを施す。262では頸部には横位及び縦位方向の沈線文と刺突連点文を施し、264では頸部に横位方向の沈線文と刺突連点文を施す。

263・265・267は胴部である。瘤状突起を貼り付け、横位及び斜位方向の沈線文を施し、沈線文間には部分的に刺突連点文を施す。263・267では瘤状突起に刻みを施す。263では瘤状突起上の刻み内や沈線文内に赤色顔料を塗布するのが特徴である。

266は小型深鉢土器の胴部である。刻みを施した瘤状突起を貼り付け、横位方向や「く」字状、逆「く」字状の沈線文を組み合わせて施す。

壺 (第39図 268～272)

出土土器の器形は、頸部が長く、口縁形態は平口縁を呈する。口縁部形態には外反する土器(268・269)と直行する土器(270・271)がある。また、口唇部上端から口縁部上端に内側を囲ませた小さな断面三角形の突帯を巡らし、頸部に刻みを施す突帯を縦位方向に貼り付けるのが特徴である。

268～270は口縁部である。268では口唇部上端と突

帯上端に刻みを施す。突帯上に斜位方向の沈線文を施し、頸部は無文である。269では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。突帯上には山形状の短沈線文を描く。突帯上端の刻みは貝殻刺突文で極めて珍しい資料である。270では口唇部上端と突帯上端に刻みを施す。突帯上には山形状の短沈線文を描く。

271は口縁部から頸部である。突帯上端には刻みを施す。突帯上には山形状の短沈線文を描く。頸部には刻みを施した突帯を縦位方向に貼り付ける。その他の頸部には斜位方向の沈線文を折帯文に施す。

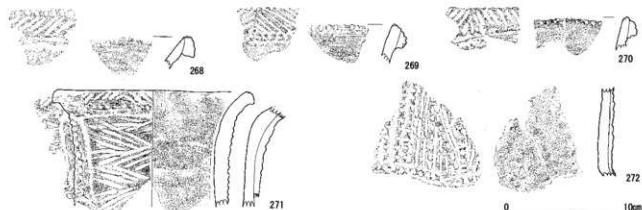
272は頸部である。頸部下端には刻みを施した突帯を横位方向に巡らす。また、頸部には縦位方向に3列貼り付ける。その他の部分には縦位方向及び斜位方向の短沈線文を施し、短沈線文間には部分的に刺突連点文を施すのが特徴である。

第7B類土器 (第40図 273～第41図 284)

本類は12点を資料化した。

深鉢の器形は、口縁部に貼り付けによる肥厚帯を設け、肥厚帯の断面形がコマボコ状類似の形態を呈する土器である。また、頸部から胴部には瘤状突起や縦位方向の突帯の貼り付けはみられない。

273・274は平口縁あるいは緩やかな波状口縁を呈する。口唇部上端には刻みを施す。肥厚帯上には押し引きによる連点文と斜位方向と曲線状の沈線文を組み合わせる。頸部には波状沈線文と刻みを施す貼付突帯を横位方向に巡らすのが特徴である。275では口唇部上端に刻みを施



第39図 縄文時代早期後葉の土器10

第13表 縄文時代早期の土器観察表8

種別 番号	掲載 番号	出土区	器	器種	部位	色面		器面観察(主な文様)				胎土		焼成	取上 番号	備考		
						外面	内面	口唇	外面	内面	右 英	左 右	胎 土				質 地	色 澤
38	263	F-35	VI・VII	深鉢	胴部	にぶい赤黒	にぶい赤黒	—	貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	良	10387	朱有り		
	264	H-31	VI	深鉢	口縁	緑	—	沈線	刺突連点文	ナデ	ナデ	○	○	良	7773			
	265	F-35	VI	深鉢	胴部	緑	にぶい黄緑	—	貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	良	10404			
	266	G-32	VI	深鉢	胴部	灰黒	にぶい黒	—	貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	良	657			
	267	H-32	カクラン	深鉢	胴部	にぶい黒	赤黒	—	貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	良	—			
39	268	H-30	カクラン	壺	口縁	明赤黒	緑	—	連点文	ナデ	ナデ	○	○	良	—			
	269	H-32	VI	壺	口縁	にぶい黒	黒緑	—	連点文	ナデ	ナデ	○	○	良	7875			
	270	J-32	VI	壺	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	—	連点文	ナデ	ナデ	○	○	良	3511他			
	271	—	—	壺	口縁～胴部	—	—	—	連点文	貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	良	—		
	272	F-30-31	VI	壺	胴部	明赤黒	明赤黒	—	刺突連点文	ナデ	ナデ	○	○	良	540他			

し、肥厚帯上には短沈線文を羽状に施す。頸部には刺突連点文と横位方向の沈線文を巡らす。276では口唇部上端と肥厚帯下端に刻みを施す。肥厚帯上に横位方向の沈線文を3条巡らす。281では口唇部上端と肥厚帯下端に刻みを施す。肥厚帯上には短沈線文を羽状に施す。283では口唇部上端に刻みを施し、肥厚帯上に短沈線文を羽状に施す。頸部には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。

277・278・279・280・282・284は肥厚帯断面形態の類似性から本類に帰属させた。いずれも口唇部上端に刻みを施し、肥厚帯上に縄文を施すのが特徴である。277・278・279・280・282では頸部下位の残存が悪く、器形及び施文方法等は不明である。284は口縁部から頸部及び胴部下半までみられる土器である。頸部及び胴部は無文で、頸部と胴部の境に中空の棒状工具による刺突連点文を施す。

第7C類土器 (第42図 285～第46図 312)

本類は28点を資料化した。

深鉢は、口縁部に貼り付けによる幅広の肥厚帯を設けることが特徴である。口縁形態は平口縁あるいは緩やかな波状口縁を呈する。第7B類土器と同様に、頸部から胴部には瘤状突起や縦位方向の突帯の貼り付けはみられない。

285～297は口縁部である。口唇部上端に刻みを施す。285では肥厚帯の上端と下端に押し引きによる連点文を、またその間には斜位方向の沈線文を施す。286では肥厚帯上端と下端に刺突連点文を施し、その間に多重の波状沈線文を施す。肥厚帯下には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。287・288・291・292・297では肥厚帯上に短沈線文を羽状に施す。また287・288では頸部には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。287では肥厚帯下端に刻みを施す。289では肥厚帯上に斜位方向と山形状の短沈線文を組み合わせて施す。290では肥厚帯上端と下端に2条ずつ波状沈線文を横位方向に巡らす。最下端には刺

突連点文を施す。293では肥厚帯上に波状沈線文と斜位方向の短沈線文を施す。294では肥厚帯上端に刺突連点文を、その下位に斜位方向の沈線文を施す。295では肥厚帯の上端と下端に押し引きによる連点文を、またその間には山形状の沈線文を施す。

296は小型深鉢の口縁部である。口唇部上端に刻みを施し、肥厚帯上には短沈線文を羽状に施す。

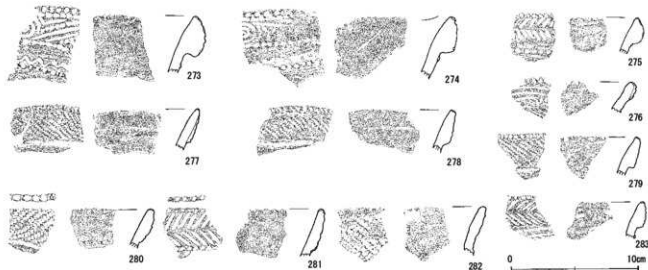
298は口縁部から胴部下半である。口縁形態は緩やかな波状口縁を呈する土器である。口唇部上端には刻みを、肥厚帯上に短沈線文を羽状に施し、肥厚帯最下端には刺突連点文を施す。頸部中央と下端には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。突帯間には波状沈線文を横位方向に巡らす。胴部には右上がりの結節縄文と右下がりの結節縄文を施す。

299は口縁部から頸部である。口唇部上端には刻みを、また肥厚帯上には沈線文と刺突連点文を組み合わせた幾何学文を、さらに肥厚帯最下端には刺突連点文を施す。頸部には刻みを施した2条の突帯を横位方向に巡らし、突帯間には波状沈線文を横位方向に巡らす。

300～303は口縁部から頸部上端である。口唇部上端が残存する300・301では口唇部上端に刻みがみられる。

300では交差状に施した斜位方向の短沈線文と、縦位方向の短沈線文及び刺突文を組み合わせて施す。沈線文内には赤色顔料の塗布がみられる。301では肥厚帯上端と下端に刺突連点文を横位方向に巡らし、肥厚帯最下端には刻みを施す。肥厚帯上には刺突連点文と山形状の沈線文を組み合わせた幾何学文を施す。302では肥厚帯上に刺突連点文と曲線状の沈線文を組み合わせた幾何学文を施す。303では肥厚帯上には押し引き文と曲線状の沈線文を組み合わせた幾何学文を施し、頸部上端には逆山形状の沈線文を施す。

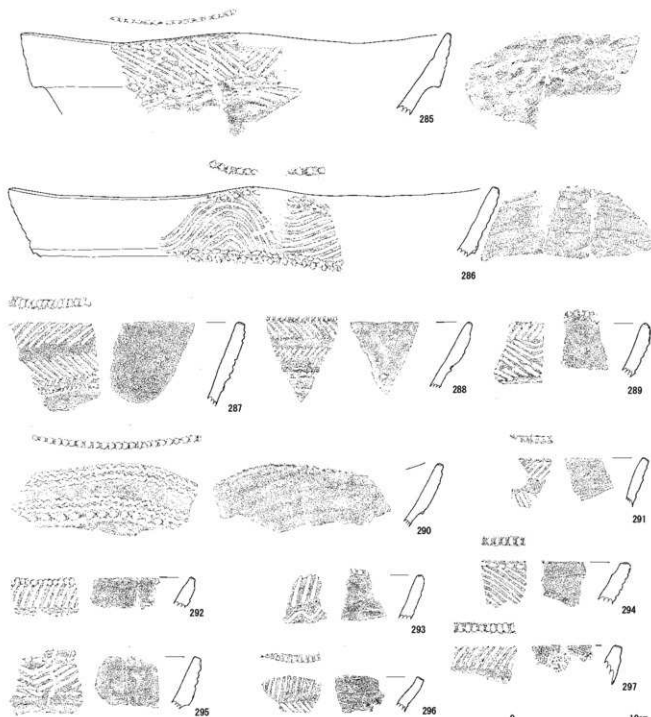
304は口縁部から底部である。口唇部上端には刻みを、肥厚帯上に短沈線文を羽状に施す。短い頸部中央に



第40図 縄文時代早期後葉の土器 11



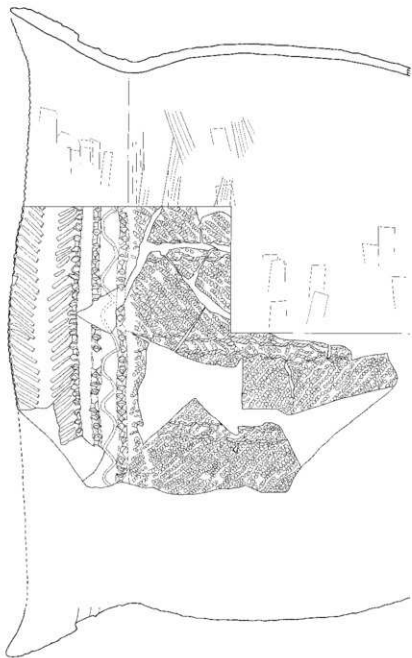
第41図 縄文時代早期後葉の土器12



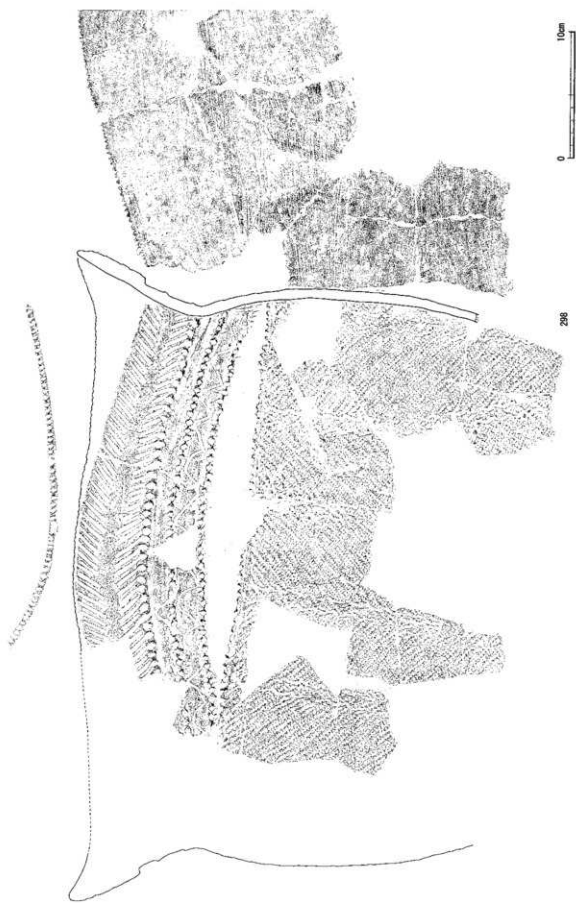
第42図 縄文時代早期後葉の土器 13

第 14 表 縄文時代早期の土器観察表 9

標記 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整(主な文様)		胎土					備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	石英	長石	雲母	燧石		その他
273	—	—	—	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	滑点文	網点滑点文	ナツ	○	○	○	○	良	—
274	—	—	—	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	滑点文	滑点文	ナツ	○	○	○	○	良	—
275	G-30	VI	—	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	滑点文	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	6,323
276	54T	VII上	—	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	滑点文	沈線	ナツ	○	○	○	○	良	6,386
277	N-32	VI	—	深鉢	口縁	にぶい黒	灰黒	滑点文	縄文	ナツ	○	○	○	○	良	1,269
278	N-31	VI	—	深鉢	口縁	にぶい黒	黒色	滑点文	縄文	ナツ	○	○	○	○	良	1,275
279	N-31	VI	—	深鉢	口縁	にぶい黒	灰黒	滑点文	縄文	ナツ	○	○	○	○	良	1,273
280	H-30	VI	—	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄緑	滑点文	縄文	ナツ	○	○	○	○	良	7,287
281	H-31	VII上	—	深鉢	口縁	黒色	にぶい黒	滑点文	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	7,431
282	1T	表土	—	深鉢	口縁	にぶい黒	にぶい黒	—	滑点文	ナツ	○	○	○	○	良	—
283	F-34	VI	—	深鉢	口縁	にぶい黄緑	黒灰	滑点文	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	10,233

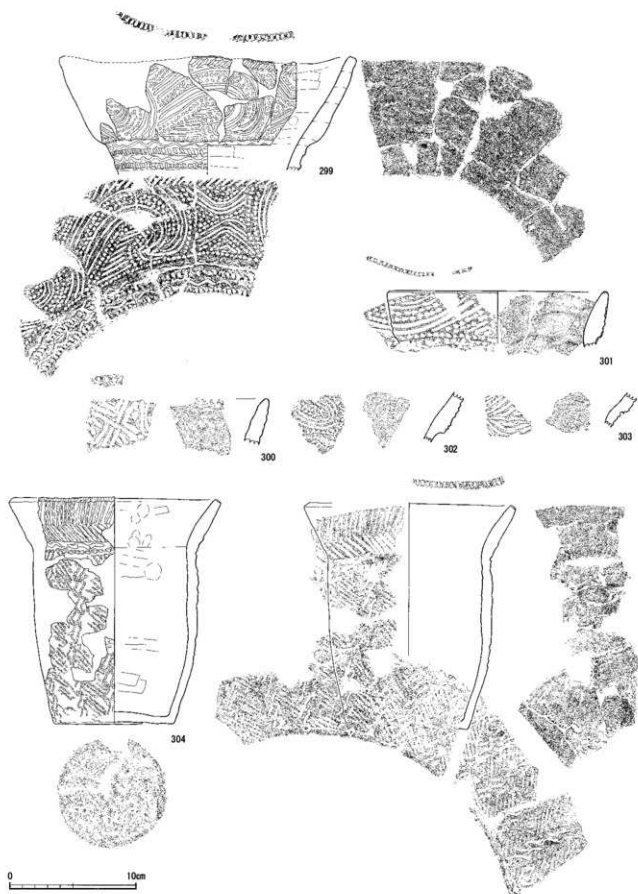


第43図 縄文時代早期後葉の土器14

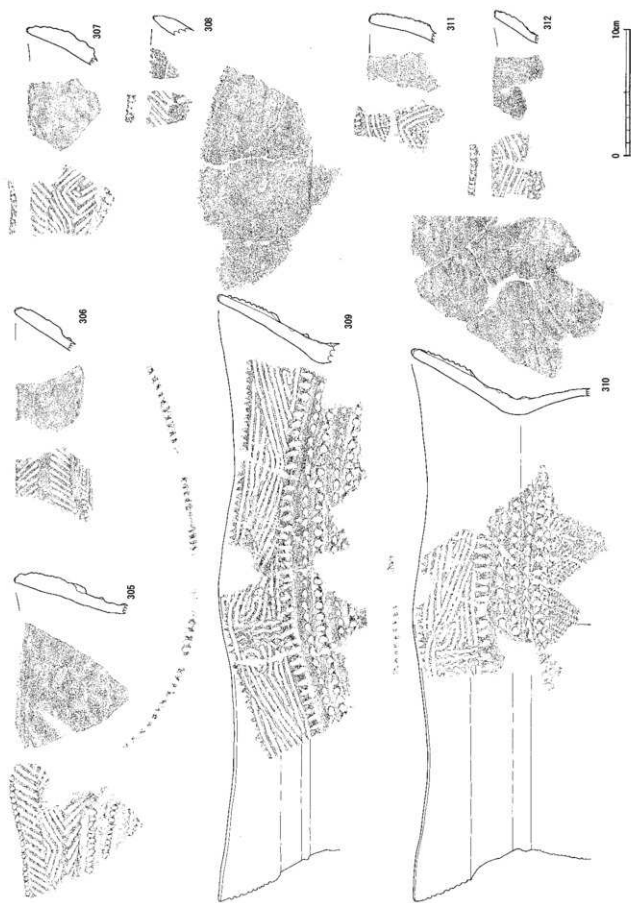


286

第44回 縄文時代早期後葉の土器15



第45図 縄文時代早期後葉の土器16

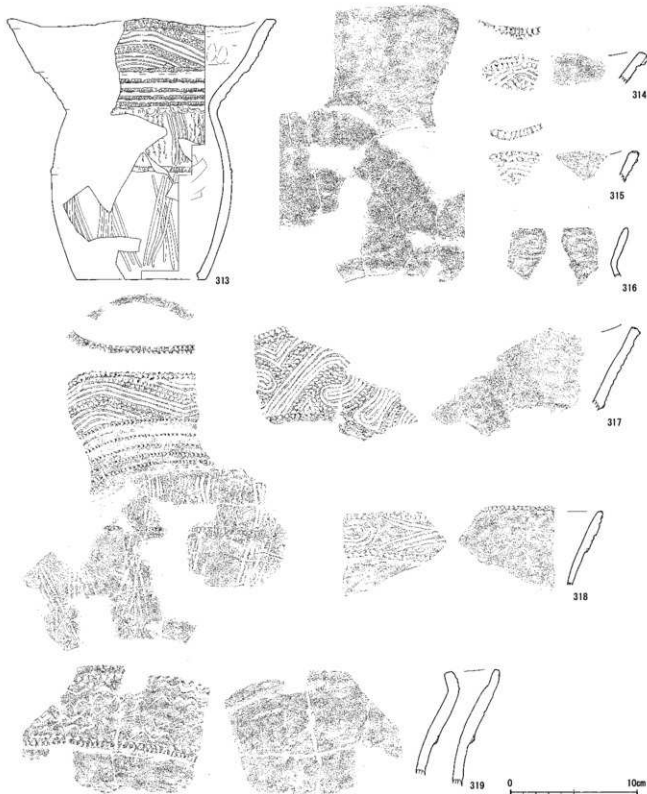


第46図 縄文時代早期後葉の土器17

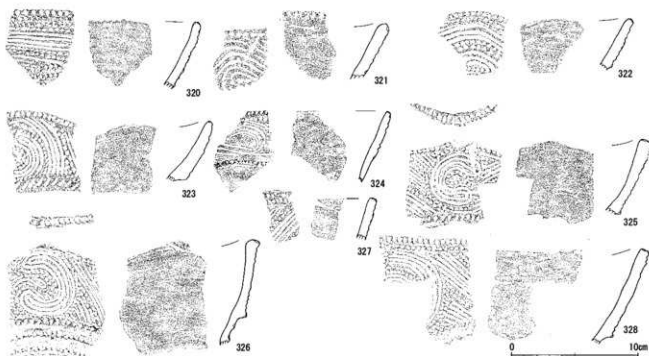
は刺突連点文を横位方向に施す。突帯と口縁部の間には波状沈線文を横位方向に巡らす。胴部には右下がりの結節縄文を施す。

305・306・307・309・310・312は口縁部から頸部であり、308・311は口縁部である。いずれも口唇部上端に刻みを

施す。305・307では肥厚帯上に斜位方向と山形状の短沈線文を組み合わせる。さらに305では頸部に刻みを施した3条の突帯を横位方向に巡らす。306・307では肥厚帯上に短沈線文を羽状に施す。また306では頸部に刻みを施した突帯を横位方向に巡らす。309・310では肥厚



第47図 縄文時代早期後葉の土器18



第48図 縄文時代早期後葉の土器19

第15表 縄文時代早期の土器観察表 10

種別 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	色澤		陶面装飾(主な文種)				胎土			焼成 温度	取上 番号	備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	右基	左基	雲母	黒石				
41	284	547	ⅤB	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄緑	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	○	良	6452他	
	285	547	ⅤB・Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	8220他		
	286	G-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	6360		
	287	W-31	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄	刷目	明高橋	ナツ	○	○	○	○	良	3501		
	288	—	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	6461		
	289	G-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい赤褐色	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	7236		
	290	I-32	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄	灰褐色	刷目	且野条直	ナツ	○	○	○	○	良	7600他		
	291	G-31	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄	黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	6835		
	292	I-31	ⅤA・Ⅴ上	深鉢	口縁	黄	黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	8997他		
	293	547	ⅤB	深鉢	口縁	黄	にぶい黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	6365		
42	294	H-33	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	8309		
	295	G-30	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄緑	にぶい黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	6081他		
	296	547	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄	灰褐色	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	8067		
	297	547	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄	期在焼	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	8110		
	298	547	ⅤA・Ⅴ上 ⅤB・Ⅴ上	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい赤褐色	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	8193他		
	299	K-27・28	ⅤⅤ上	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい黄	刷目	曲線文	雁行直	○	○	○	○	良	2176他		
	300	F-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	黄	にぶい黄	刷目	波線	ナツ	○	○	○	○	良	5669	朱有り	
	301	I-33	ⅤⅤ上	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	6542他		
	302	K-27	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい黄緑	明高橋	刷目	曲線文	ナツ	○	○	○	○	良	2078		
	303	L-31	ⅤB	深鉢	胴部	黄	黄	刷目	波線	ナツ	○	○	○	○	良	7881		
43	304	547	ⅤⅤ下・ⅤⅤ上	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	羽状文	雁行直	○	○	○	○	良	6465他		
	305	F-35	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	10489		
	306	道304C	カタラン	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
	307	F-35	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	波状文	ナツ	○	○	○	○	良	10521		
	308	H-31	カタラン	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	羽状文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
	309	I-34	Ⅴ上・Ⅴ上	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい赤褐色	刷目	羽目変帯	ナツ	○	○	○	○	良	10328他		
	310	F-1・24	Ⅴ上	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい赤褐色	刷目	羽目変帯	ナツ	○	○	○	○	良	10338他		
	311	G-30・B-31	—	深鉢	口縁	黄	黄	刷目	波線新装束文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
	312	I・2・2	表土	深鉢	口縁	赤褐色	赤褐色	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
	313	I-26	ⅤA・ⅤⅤ上	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	7830他		
44	314	I-26	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	雁行変帯	ナツ	○	○	○	○	良	2120		
	315	I-27	ⅤB	深鉢	口縁	明高橋	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	846		
	316	—	カタラン	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	へろナツ	ナツ	○	○	○	○	良	—		
	317	G-31	カタラン	深鉢	口縁	灰黄褐色	にぶい黄	刷目	曲線文	ナツ	○	○	○	○	良	—		
	318	H-30	ⅤⅤ下	深鉢	口縁	黄	黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	5719		
	319	547	ⅤB	深鉢	口縁	黄	にぶい黄	刷目	羽目変帯	ナツ	○	○	○	○	良	8968		
	320	I-26	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	羽目変帯	ナツ	○	○	○	○	良	2968		
	321	H-32	Ⅴ上	深鉢	口縁	浅黄褐色	浅黄褐色	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	7546		
	322	K-28	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	2055		
	323	547	ⅤA	深鉢	口縁	黄	浅黄褐色	刷目	曲線文	ナツ	○	○	○	○	良	6319		
45	324	H-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい黄	灰褐色	刷目	曲線文	ナツ	○	○	○	○	良	5720		
	325	547	Ⅴ上	深鉢	口縁	黄	黄	刷目	曲線文	ナツ	○	○	○	○	良	6740他		
	326	547	Ⅴ上	深鉢	口縁	黄	黄	刷目	曲線文	ナツ	○	○	○	○	良	6466		
	327	F-35	ⅤB	深鉢	口縁	にぶい黄	にぶい黄	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	10107		
	328	547	ⅤA・ⅤB	深鉢	口縁	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	刷目	新装束点文	ナツ	○	○	○	○	良	6322他		



第49図 縄文時代早期後葉の土器20

帯上に横位方向と山形状及び曲線状の沈線文と縦位方向の波状沈線文を組み合わせて施す。311では斜位方向と山形状の短沈線文を組み合わせて施す。312では肥厚帯上端と下端に刺突連点文を横位方向に巡らし、その間には山形状の沈線文を施す。

第7 D類土器(第47図 313~第48図 328)

本類は16点を資料化した。

口縁形態は緩やかな波状口縁あるいは平口縁を呈する。また、頸部を削り口縁部下端に貼付突帯を巡らすことあるいは頸部より器厚の厚い粘土紐を積み上げること、口縁部に「見かけの肥厚帯」を設ける土器である。口縁形態は緩やかな波状口縁あるいは平口縁を呈する。第7 B及び第7 C類土器と同様に、頸部から胴部には瘤状突起や縦位方向の突帯の貼り付けはみられない。

313は口縁部から胴部下端、314~328は口縁部もしくは口縁部から頸部である。いずれも口唇部上端に刻みを施す。313では口縁部上端と下端に1条ずつ刻みを施す突帯を横位方向に巡らし、突帯間には2条の刺突連点文と3条の沈線文を山形状に施す。頸部には4条の刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。胴部最大径に刻みを施す突帯を横位方向に巡らし、突帯より上には曲線状の沈線文を縦位方向に数列施す部分と、網目標糸文を縦位方向に施す部分を交互に施し構成する。突帯より下には斜位方向の沈線文を施す。314・315では口縁部上端に刻みを施す突帯を横位方向に貼り付け、その下位には刺突連点文と3条の山形状の沈線文を施す。317では口縁部上端と下端に1条ずつ刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。突帯間には刺突連点文と曲線状斜位方向の沈線文で幾何学文を施す。318・319・324では口縁部上端と下端に1条ずつ刺突連点文を横位方向に巡らし、連点間には曲線状、波状斜位方向の沈線文を施す。320では刻みを施した突帯を口縁部上端には横位方向に、下端には斜位方向に貼り付ける。その間には押し引き文と横位方向の沈線文を施す。321では口縁部上端と下端に1条ずつ刺突連点文を横位方向に巡らす。連点間には多重の山形状の沈線文を施す。322では口縁部上端に刻みを施し、下端には刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。その間には刺突連点文と曲線状の沈線文で幾何学文を施す。323では口縁部上に刺突連点文と曲線状の沈線文で幾何

学文を施し、口縁部下端には刻みを施す。325では口縁部上端に刺突連点文を、下端に刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。その間には刺突連点文と曲線状の沈線文で幾何学文を施す。326・327・328では口縁部上端に刺突連点文を、下端に刻みを施す。その間には刺突連点文と曲線状の沈線文で幾何学文を施す。327では口縁部下端は不明である。

第7 E類土器(第49図 329)

本類は1点を資料化した。

329は口縁部から胴部下半である。

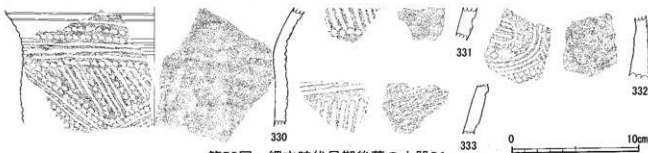
口縁形態は緩やかな波状口縁を呈する。また頸部より厚い粘土紐を積み上げ、口縁部に「見かけの肥厚帯」を設ける土器である。口唇部上端に刻みを施し、口縁部上端と下端に2条ずつ刺突連点文を横位方向に巡らす。連点間には横位・斜位方向及び曲線状の沈線文で幾何学文を施す。頸部には刻みを施す突帯を2条横位方向に巡らす。胴部は無文である。頸部から胴部には瘤状突起や縦位方向の突帯の貼り付けはみられない。

細別困難な第7類土器(第50図 330~第57図 406)

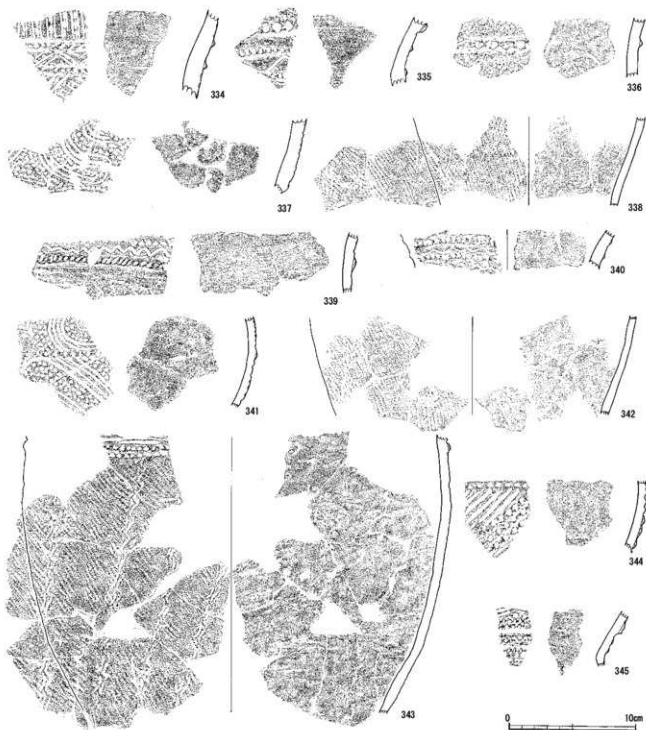
ここでは、細別を行うのが困難であった深鉢、無文深鉢土器、小型深鉢土器、壺、ミニチュア土器、土製品77点を資料化した。

深鉢(第50図 330~第52図 354)

335・339・340・345・346は頸部である。刻みを施す突帯を横位方向に巡らし、突帯間には波状沈線文を施す。330・332・334・337・341・344では沈線文と刺突連点文を組み合わせて幾何学文を施す胴部である。334・341では刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。336・338・342・343では結節縄文を施す胴部である。336では刻みを施す突帯を横位方向に巡らす。347は頸部から胴部である。頸部に刻みを施す突帯を横位方向に巡らし、胴部に結節縄文を施す。348・349・351は胴部下端から底部である。いずれも胴部には右下がりの結節縄文を施す。352~354は底部である。352・353は緩やかな上げ底を、354は深い上げ底を呈する。350は壺の底部である。



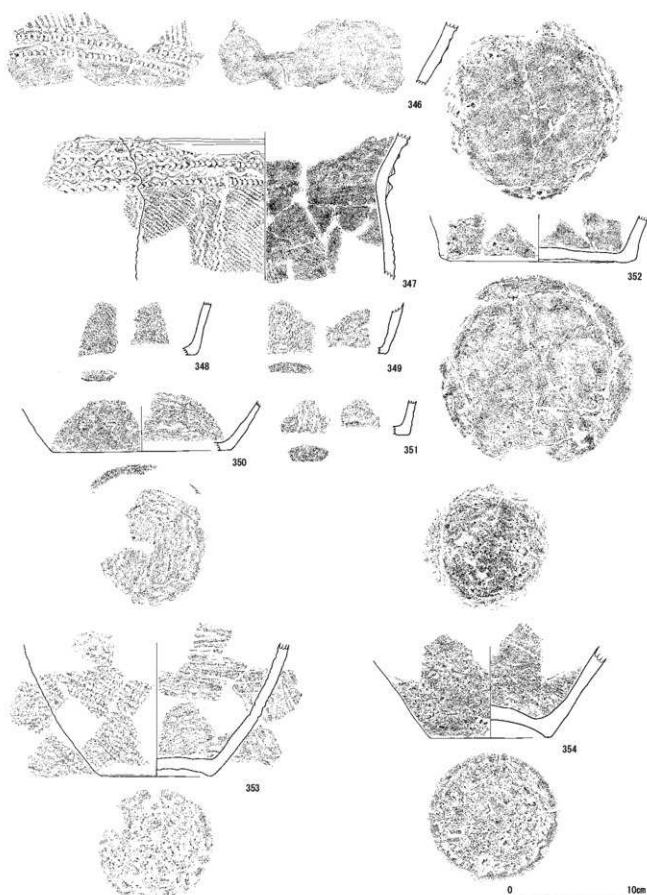
第50図 縄文時代早期後葉の土器21



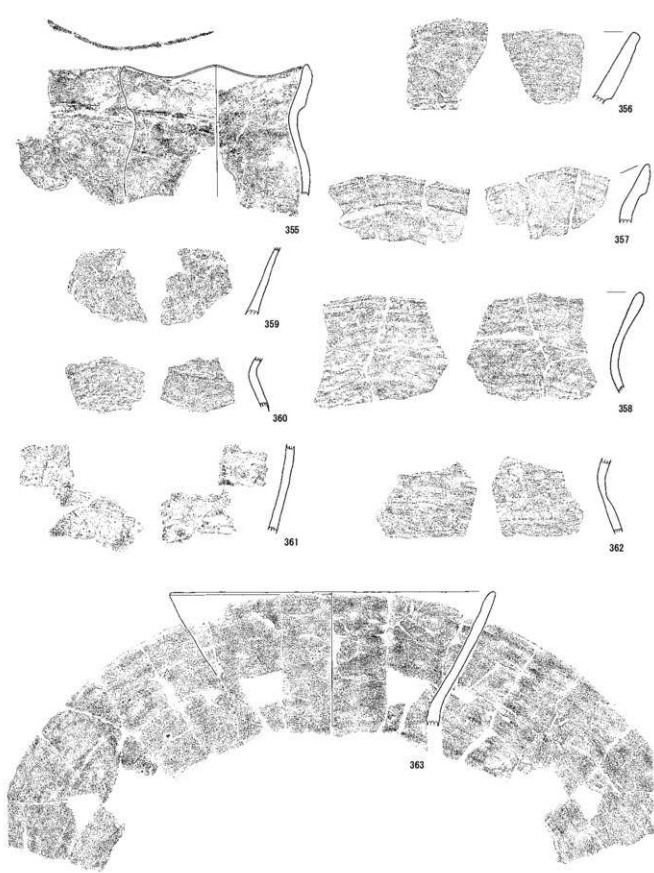
第51図 縄文時代早期後葉の土器22

第16表 縄文時代早期の土器観察表 11

種別 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	色調		器面図様(主な文様)		新土			焼成	取上 番号	備考		
						外面	内面	口唇	外面	内面	石英	雲母				その他	
49	329	I-28-29	VII	漆鉢	口唇-胴部	にじい黄緑	にじい黄緑	割目	曲線文	ナデ	○	○	○	良	2189他		
	330	I-1	VII	漆鉢	胴部	にじい黒	にじい黒		新交差文	ナデ	○	○	○	良	74		
	331	I-31	VI	漆鉢	胴部	黒	黒		斜交文	ナデ	○	○	○	良	4440		
	332	G-30	カタラン	漆鉢	胴部	灰黄褐	灰黄褐		曲線文	ナデ	○	○	○	良	—		
50	333	H-33	VII	漆鉢	胴部	黒	黒		沈線	ナデ	○	○	○	良	8301		
	334	HT上葉1	VII	漆鉢	胴部	黒褐色	にじい黒		交差文	ナデ	○	○	○	良	10525		
	335	I-32	VII上	漆鉢	胴部	黒	黒		斜目交差	ナデ	○	○	○	良	7617		
	336	54T	VII	漆鉢	胴部	にじい黒	黒		斜線文	ナデ	○	○	○	良	8173他		
	337	K-27-28	Vb-VI	漆鉢	胴部	にじい黒	にじい黒		曲線文	ナデ	○	○	○	良	1801他		
	338	K-31-32	VI下	漆鉢	胴部	にじい黄緑	黒褐色		結節文	ナデ	○	○	○	良	3588他		
	339	G-31	VII上	漆鉢	胴部	黒褐色	にじい黒		斜目交差	ナデ	○	○	○	良	9634		



第52図 縄文時代早期後葉の土器23



第53図 縄文時代早期後葉の土器24

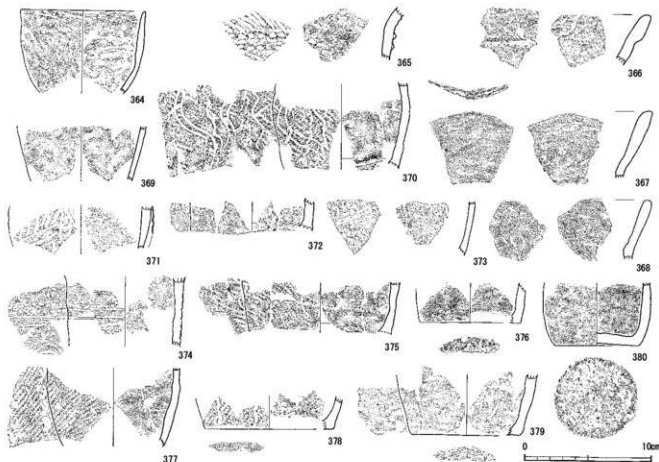


深鉢無文土器 (第53図 355～363)

第7類有文深鉢土器の成形及び器形的特徴を有した無文土器である。355～358・363は口縁部, 359～362は胴部である。357は第7B類土器, 355・356は第7C類土器, 358・363は第7D類土器に帰属する。359～362は細別が困難な土器である。

第7類有文深鉢土器の成形及び器形的特徴を有した小型土器である。365・370～372・374～378は有文土器, 364・366～369・373・379・380は無文土器である。

小型深鉢土器 (第54図 364～380)



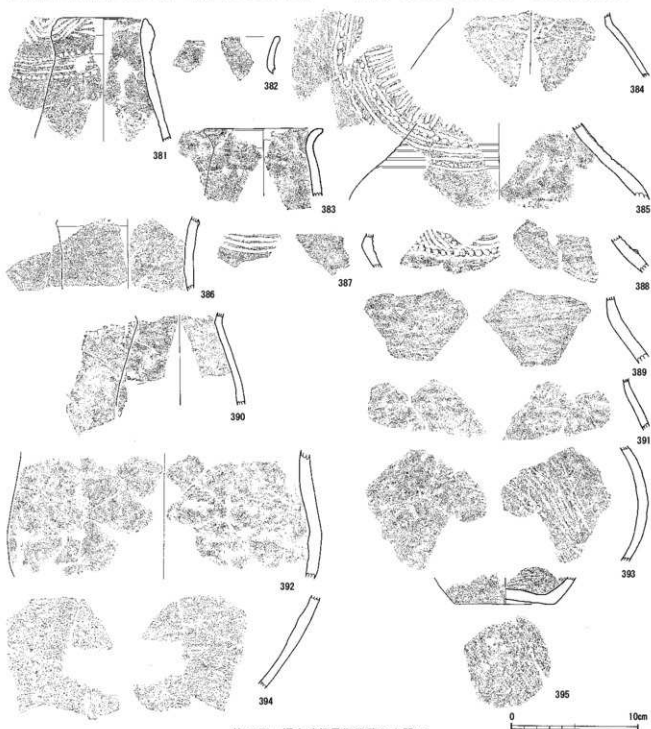
第54図 縄文時代早期後葉の土器25

第17表 縄文時代早期の土器観察表 12

神居番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	色澤		器面調整(主な文様)		胎土		焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	右英				胎土
51	340	K-27	ⅤB	深鉢	胴部	明褐色	にぶい褐色	突帯文	ナダ	○	○	○	良	2171他	
	341	I-32	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい相	にぶい黄褐色	曲線文	ナダ	○	○	○	良	6019他	
	342	M-30・31	ⅤB(Ⅴ)Ⅰ	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	乱線縞文	ナダ	○	○	○	良	2490他	
	343	I-29	ⅤI	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	乱線縞文	ナダナダ	○	○	○	良	3188他	
	344	I(Ⅴ)25・27	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	乱線縞点文	ナダ	○	○	○	良	10492	
	345	I-27	ⅤI	深鉢	胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	斜目突帯	ナダ	○	○	○	良	734	
	346	I-31	Ⅴ(Ⅴ)Ⅰ	深鉢	胴部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	斜目突帯点文	ナダ	○	○	○	良	5993他	
52	347	B(Ⅴ)23・引	Ⅴ(Ⅴ)Ⅰ	深鉢	胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	斜目突帯	ナダ	○	○	○	良	2240他	
	348	I-25	ⅤI	深鉢	胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	乱線縞	ナダ	○	○	○	良	1556	
	349	I-26	ⅤI	深鉢	底部	残黄褐色	残黄褐色	突帯文	ナダ	○	○	○	良	782	
	350	I-7	ⅤB	深鉢	底部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	縞文	ナダ	○	○	○	良	5374	
	351	K-28	ⅤI	深鉢	底部	残黄褐色	残黄褐色	乱赤文	ナダ	○	○	○	良	4061	
	352	I(Ⅴ)23・29	Ⅴ(Ⅴ)Ⅰ	深鉢	底部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	縞文	ナダ	○	○	○	良	1781他	
	353	I(Ⅴ)23・29	Ⅴ(Ⅴ)Ⅰ	深鉢	底部	にぶい褐色	残黄褐色	縞文	ナダ	○	○	○	良	3829他	
53	354	G-31・32	ⅤB	深鉢	底部	にぶい褐色	にぶい褐色	縞文	ナダ	○	○	○	良	6508他	
	355	K-31・32	Ⅴ(Ⅴ)Ⅰ	深鉢	口縁・胴部	褐色	にぶい黄褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	良	3605他	又スナ付
	356	G-33	ⅤB上	深鉢	口縁	灰黄褐色	にぶい褐色	王具ナダ	王具ナダ	○	○	○	良	8260	又スナ付
	357	H-32	ⅤB上	深鉢	口縁	灰黄褐色	灰黄褐色	王具ナダ	王具ナダ	○	○	○	良	7742他	又スナ付
	358	G-28	ⅤB	深鉢	口縁	突帯	突帯	王具ナダ	ナダ	○	○	○	良	8733他	
	359	54T	ⅤB	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	黒褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	良	6723	

頸部が短く肩部がなで肩の器形の土器である。392・396は長胴形の胴部で、393は球形の胴部である。394は胴

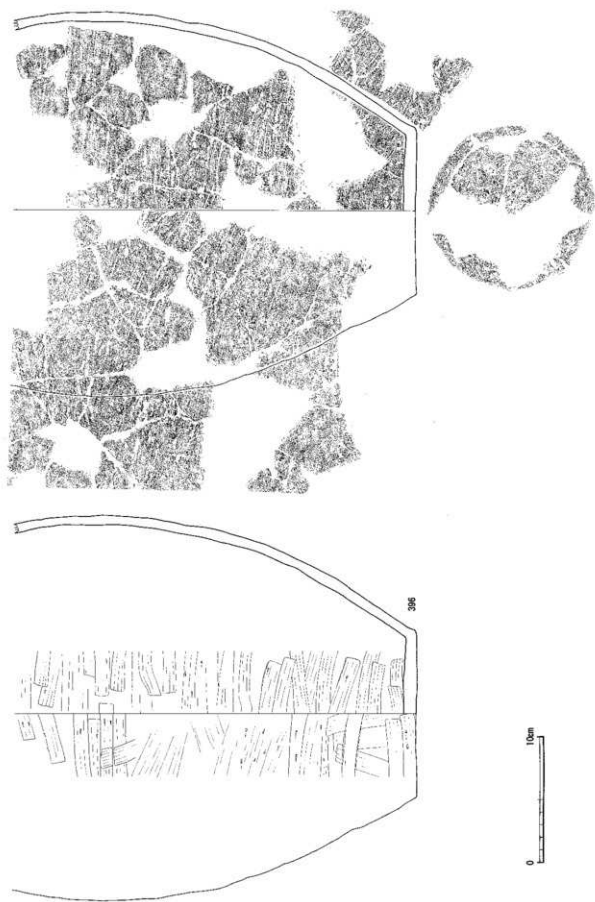
部下半、395は上げ底形の底部である。381・385・387・388は有文、382・383・384・386・389～395は無文である。



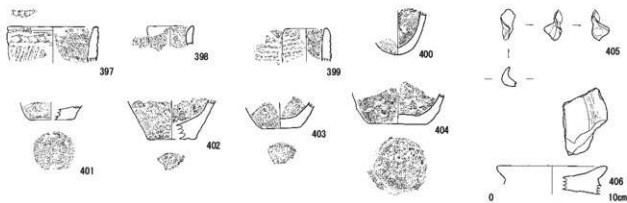
第55図 縄文時代早期後葉の土器26

第18表 縄文時代早期の土器観察表13

種別 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	色澤		表面圖樣（主な文様）		胎土				焼成	取上 番号	備考
						外面	内面	外面	内面	石英	炭石	雲母	銅石			
53	360	K-25	VI	深鉢	胴部	橙	にぶい・橙	ナナ	ナナ	○	○	○	○	段	2965	
	361	L-31	III・IV・V	深鉢	胴部	橙	にぶい・橙	ナナ	ナナ	○	○	○	○	段	3563	
	362	H-29	IV	深鉢	胴部	橙	にぶい・橙	ナナ	ナナ	○	○	○	○	段	2972	文文付着
	363	F-30	VI・VII	深鉢	口唇・胴部	橙	にぶい・橙	ナナ	ナナ	○	○	○	○	段	5162	文文付着
54	364	F-30	VI・VII	土器深鉢	口唇・胴部	橙	にぶい・橙	ナナ	ナナ	○	○	○	○	段	5162	
	365	H-32	VIII	土器深鉢	胴部	明茶色	にぶい・橙	雲母文	ナナ	○	○	○	○	段	7495	



第56図 縄文時代早期後葉の土器27



第57図 縄文時代早期後葉の土器28

第19表 縄文時代早期の土器観察表 14

種別番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	色調		断面調整(主な文様)		胎土		焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	口縁	外面	内面	石炭				高砂岩
54	366	F-35	ⅤB	小型深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	10027	
	367	同上	同上	小型深鉢	口縁	にぶい赤焼	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	1271	
	369	547	ⅤB上	小型深鉢	口縁	にぶい赤焼	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	8095	
	369	H-29-30	ⅤB	小型深鉢	胴部	緑焼	緑焼	ミガキヤ	ミガキヤ	○	○	○	良	5718皿	
	370	F-6-35-36	—	小型深鉢	胴部	にぶい赤焼	にぶい赤焼	縄文	ナデ	○	○	○	良	—	
	371	G-31	ⅤB	小型深鉢	胴部	緑焼	緑焼	交番文	ナデ	○	○	○	良	6852	
	372	I-30	ⅤI-ⅤB	小型深鉢	胴部	にぶい赤焼	にぶい赤焼	縄文	ナデ	○	○	○	良	2698皿	
	373	F-31	ⅤB	小型深鉢	胴部	にぶい赤焼	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	6589	
	374	H-31-32	ⅤB上	小型深鉢	胴部	赤焼	赤焼	新交番文	ナデ	○	○	○	良	7418皿	
	375	F-6-35-36	—	小型深鉢	胴部	にぶい赤焼	にぶい赤焼	縄文	ナデ	○	○	○	良	—	
	376	547	ⅤB	小型深鉢	胴部→底	緑	黒焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	6455	
	377	N-32	ⅤI	小型深鉢	胴部	緑	緑	縄文	ナデ	○	○	○	良	1474	
	378	H-31	ⅤB	小型深鉢	胴部→底	にぶい赤焼	黒焼	縄文	ナデ	○	○	○	良	2255	
	379	L-26	ⅤB	小型深鉢	胴部→底	緑	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	3277	
	380	M-30	ⅤB	小型深鉢	胴部→底	灰焼	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	8126皿	
	381	547	ⅤI-ⅤB	—	口縁	緑	緑	新交番文	ナデ	○	○	○	良	3003	
	382	K-30	ⅤI	—	口縁	緑	緑	ナデ	ナデ	○	○	○	良	1351皿	
	383	L-27	ⅤA-ⅤI	—	口縁	緑	緑	ナデ	ナデ	○	○	○	良	13300皿	
384	N-30	ⅤB上	—	口縁	緑	緑	縄文	ナデ	○	○	○	良	1901皿		
385	F-33	ⅤB	—	胴部	にぶい焼	にぶい焼	新交番文	ナデ	○	○	○	良	1661皿		
386	H-24	ⅤI-ⅤB	—	胴部	にぶい焼	にぶい焼	交番文	ナデ	○	○	○	良	3214		
387	M-26	ⅤB	—	胴部	にぶい焼	にぶい焼	交番文	ナデ	○	○	○	良	1290皿		
388	N-31-32	ⅤI	—	胴部	にぶい焼	にぶい赤焼	交番文	ナデ	○	○	○	良	390	スズ付着	
389	JT	ⅤB	—	胴部→底	にぶい焼	明赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	5733皿		
390	L-23(3)-3	ⅤB-ⅤB上	—	胴部	にぶい焼	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	1524皿		
391	H-24	ⅤI	—	胴部→底	緑	緑	ナデ	ナデ	○	○	○	良	3235皿		
392	L-18-29	ⅤI-ⅤB	—	胴部	緑	緑	ナデ	ナデ	○	○	○	良	4157皿		
393	K-32	ⅤB	—	胴部	にぶい焼	緑焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	3290皿		
394	M-29	ⅤI-ⅤB	—	胴部	緑	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	10526		
395	L-14-4	—	—	底部	にぶい焼	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	3976皿		
396	L-23(3)-3	ⅤI-ⅤB	—	胴部→底	明赤焼	明赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	5654		
397	F-30	ⅤB上	—	口縁	緑	緑	新交番文	ナデ	○	○	○	良	1310		
398	L-37	ⅤB上	—	口縁	緑	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	8340		
399	547	ⅤB上	—	口縁	緑	にぶい赤焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	8346		
400	547	カタラン	—	底部	にぶい焼	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	6035皿		
401	F-29	ⅤB	—	底部	にぶい赤焼	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	8403		
402	547	ⅤI	—	底部	にぶい焼	にぶい焼	縄文	ナデ	○	○	○	良	6174皿		
403	F-30-31	カタラン	—	底部	にぶい焼	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	—		
404	F-31	ⅤB	—	底部	黒焼	にぶい焼	ナデ	ナデ	○	○	○	良	—		
405	H-31	ⅤB	—	口縁	交	交	指圧痕	指圧痕	○	○	○	良	—		
406	J-30	ⅤB	—	口縁	—	緑焼	ナデ	ハタテ	○	○	○	良	7906		

ミニチュア土器(第57図 397～404)

397～399は口縁部, 400～404は底部である。397-399では斜位方向あるいは波状線文と刺突を施す突帯を横位方向に巡らす。398は無文である。400は尖底的な丸底, 401～403は平底, 404は上げ底を呈する。

土製品(第57図 405-406)

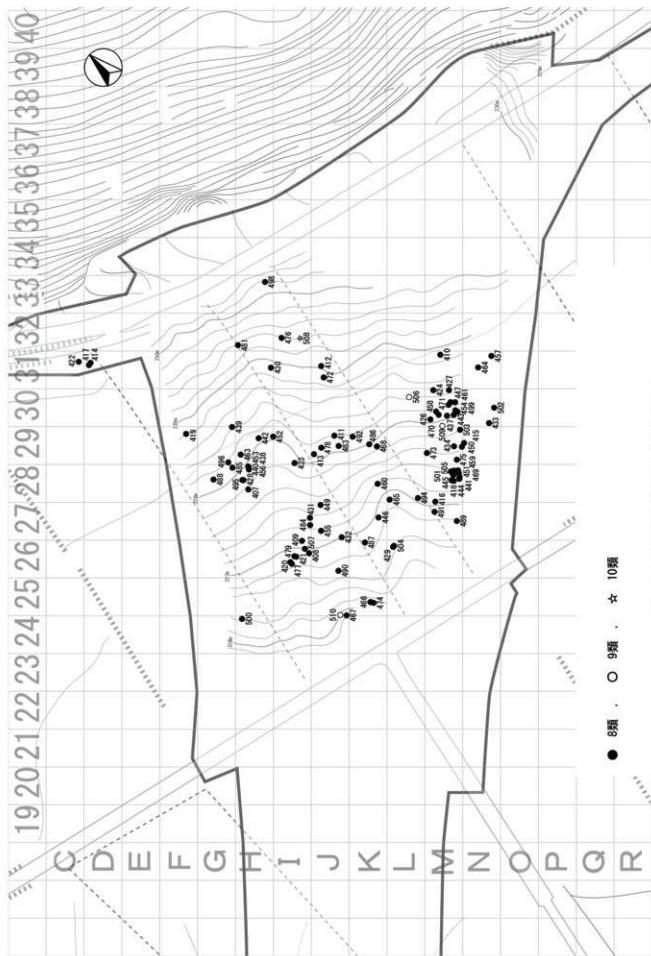
405は注口形をした土製品である。全体形は不明であるため、用途はわからない。406は臼形を呈し、最大厚2.2cmを測る耳栓である。文様は施さない。

第8類土器(第59図 407～第67図 501～503-507)

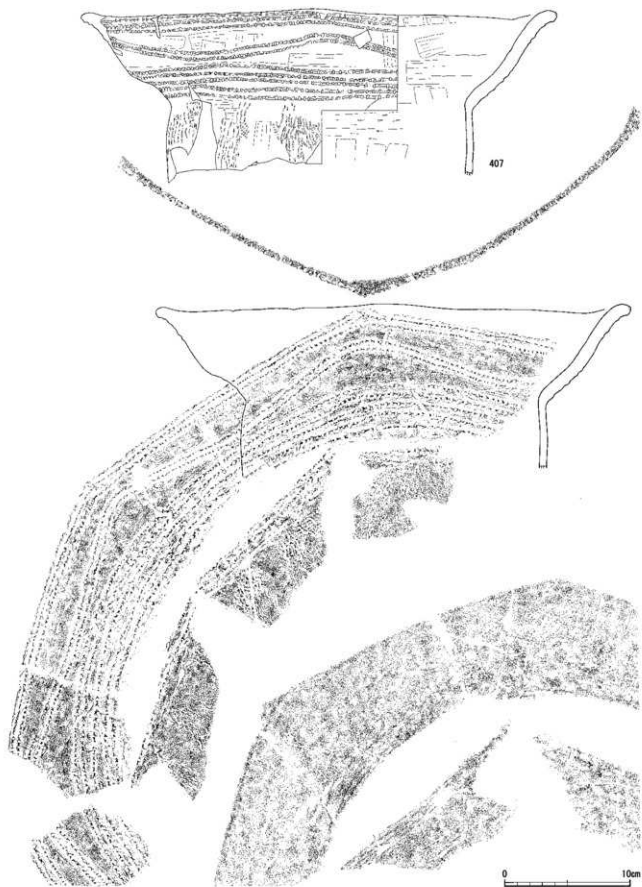
第8類土器は100点を資料化した。遺跡南側緩斜面全域のうち東側部分と標高約226m付近、さらに約227mから約228mの範囲で主に出土した。本類の出土分布域は、第7類土器と比べ、ずれる傾向がみえ、注目できる。器種には深鉢と壺がある。以下、それぞれ詳述する。

深鉢(第58図 407～第65図 498, 第67図 501～503-505-507)

器形は口縁形能が平口縁あるいは非常に緩やかな波状口縁を呈し、頸部がラッパ状に屈曲し、口縁部は下半で



第58図 縄文時代早期後葉の土器出土状況図3



第59図 縄文時代早期後葉の土器29

は内湾状に外反し、中程で屈曲し、上半で外傾あるいは直立する、いわゆる二重口縁を呈する土器である。胴部は若干膨らむ器形を呈する。口唇部上端に木製匙状工具による刻みを施し、口縁部には刻目微隆帯文、沈線文及び刺突連点文を横位もしくは波状に巡らし、胴部には結節文を施すのが特徴である。

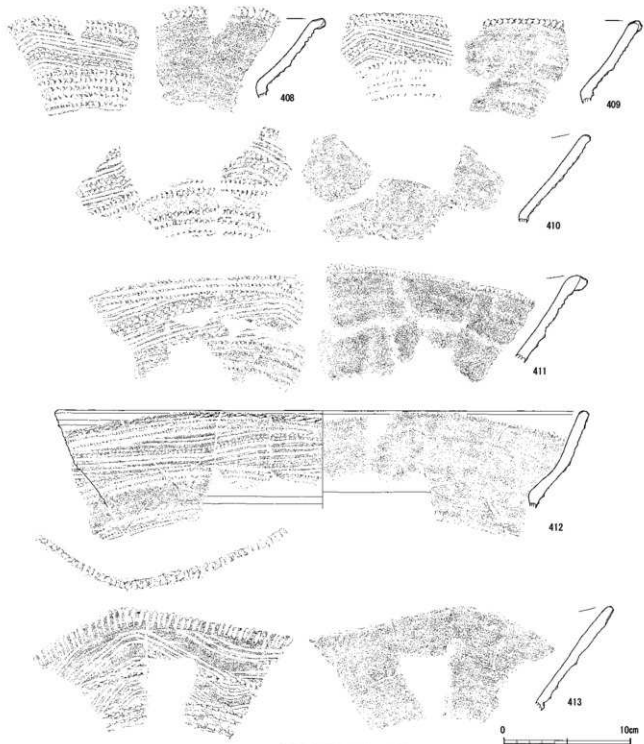
407～475は口縁部である。

407～433・436～440・442～447・449～457・460～

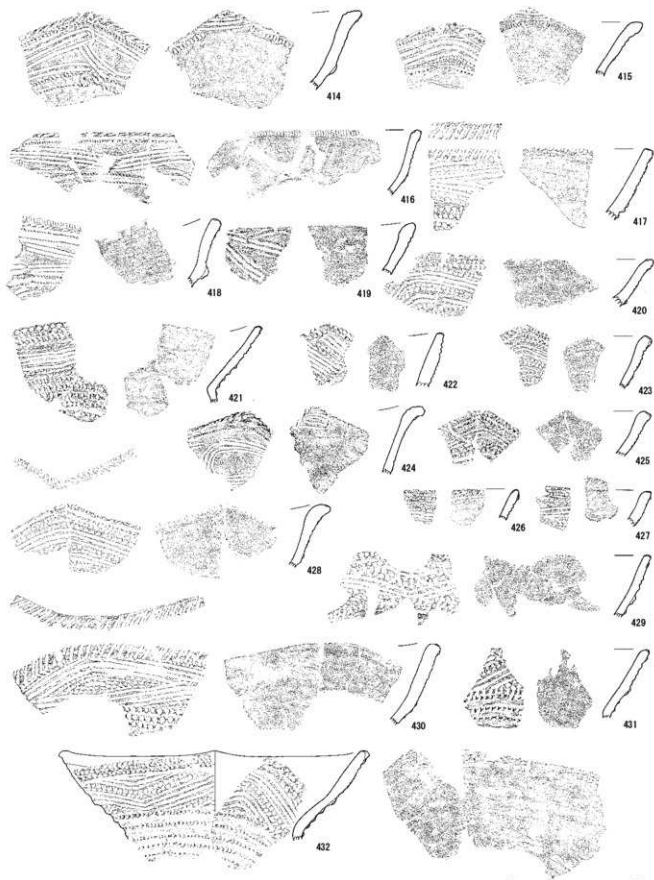
469・471～475は口縁中央部で屈曲し立ち上がるものの、屈曲部外面の稜線は不明瞭で、口縁部内面の稜線は観察できない土器である。

407では口縁部上端に刻みを施すが、舌状に延びた波頂部口唇部には施文を行わない。また口縁部に9条の刻目微隆帯文を横位方向及び山形状に巡らす。また、胴部に結節文を縦位及び斜位方向に施す。

408～413・415～423・425～432・436・438・440・446・



第60図 縄文時代早期後葉の土器30



第61図 縄文時代早期後葉の土器31

449・450・452・453・456・462・463・465・468・472・475 では口縁部上端に刻みを施し、口縁部に刻目微隆帯文及び沈線文と刺突連点文を横位及び山形状に巡らすのが特徴である。408・409・421・422・432 では口縁部上端の刻みを2条巡らし、口唇部上端の刻みとあわせ上面観が羽状になる。411 では口縁部上端には3条の刻目隆帯文を横位方向に巡らす。413 では口縁部上端に長めの刻みを施すのが特徴である。415 は口縁部内面上端部が屈曲し、口唇部が山形状を呈する土器である。また波頂部口唇部が舌状に延び、上端には沈線文を施す。417・430 は口縁部上端を丸く肥厚させる土器である。刻目微隆帯文は口縁屈曲部に3条横位方向に巡らす。418 は口縁屈曲部に瘤状突起を貼付する土器で、口唇部及び口縁部上端に施した刻みが上面観では羽状を呈するのが特徴である。419 は口唇部を丸く肥厚させる土器である。また胎土にはシャモットと考えられる赤色粒が観察できる。423 は波頂部の口縁部上端に瘤状突起を貼付する土器である。また胎土に鉄分が多く含まれるよう、断面の赤さが観察できる土器である。425 は直径等の計測は不能だが小型土器である。426・427 では口縁部上端には2条の刻目隆帯文を横位方向に巡らす。428 では波頂部口唇部が舌状に延びる土器で、上端には刻みのみを施す。432 では口縁屈曲部下半には刻目微隆帯文のみを横位方向に5条巡らす。436 では口縁部上端に無文帯を設けるのが特徴である。438・440・452 は口唇部を少し丸く肥厚させる土器である。446 では刻目微隆帯は胎土に鉄分が多く含まれるよう、突帯の赤さが観察できる土器である。449・456 では口唇部上端を丸くし、施文を行わないのが特徴である。450 では胎土にはシャモットと考えられる赤色粒が観察できる。453 は波頂部口唇部が舌状に延びる土器で、上端には刻みのみを施す。波頂部口縁外面上端には瘤状突起を貼付するのが特徴である。462 では口唇部及び口縁部上端に施した刻みが上面観では羽状を呈するのが特徴である。463・465 では口唇部上端を丸く仕上げた後、軽く平坦面を作出し、刻みを施す土器である。468 では波頂部口唇部が舌状に延び、上端には沈線文を施す。また波頂部口縁外面上端には瘤状突起を貼付するのが特徴である。472 では波頂部口唇部が僅かに舌状に延び、口唇部上端には施文を行わない土器である。

また、414・424・433・439・442 ~ 445・447・451・454・455・457・460・464・466・467・473・474 の口縁部では刻目微隆帯文と沈線文を施し、刺突連点文を施さないのが特徴である。414・424・444・455・473 では波頂部口唇部が舌状に延び、上端には沈線文を施す。また414 では波頂部下の口縁屈曲部には瘤状突起を貼り付けるのが特徴である。433 では口唇部上端には施文を行わない。439・442・466 では口唇部上端の刻みを口縁部内面側に施し、口唇部上端に無文帯が見られるのが特徴である。443・454 では

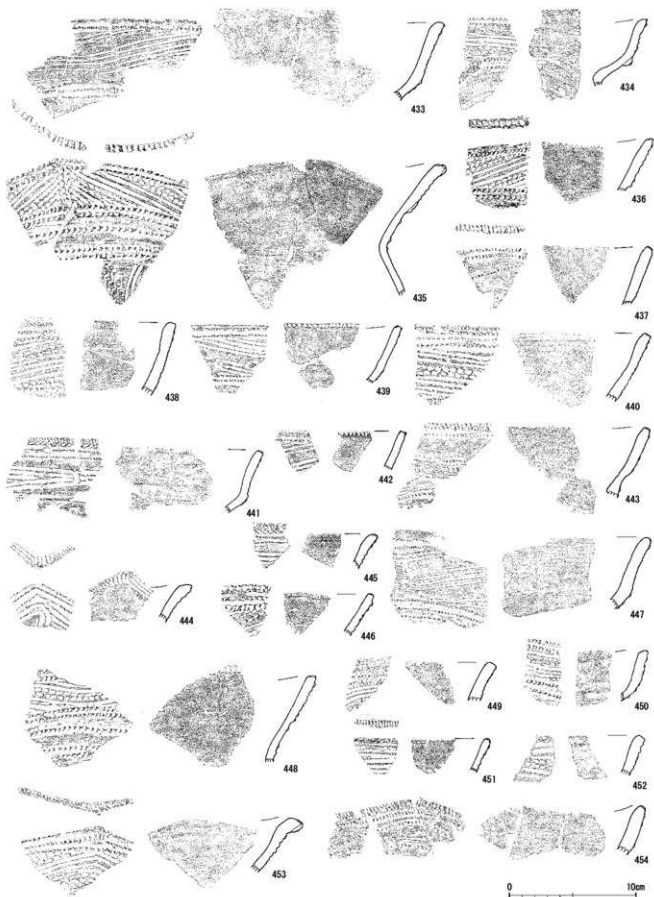
口縁部に粗く不明瞭な沈線文を施す。444 では口唇部上端には刻みの代りに沈線文を施す部分がある。447 では口唇部上端には施文を行わず、口縁部上端に無文帯を設けるのが特徴である。451 では口唇部及び口縁部上端に施した刻みが上面観では羽状を呈するのが特徴である。455 では口縁部下半には刻目微隆帯文のみを横位方向に巡らす。また波頂部口縁外面上端には瘤状突起を貼付するのが特徴である。457 は口縁部内面上端が緩やかに外反し、口唇部が山形状を呈する土器である。下端部には接合痕が見られる。460 は口唇部を少し丸く肥厚させる土器である。464 では口縁部内面上端部が緩やかに外反し、口唇部が山形状を呈する土器である。下端に接合痕が観察できる。467・473 では波頂部口唇部が舌状に延び、上端は無文である。

さらに、437・461・471 の口縁部では刻目微隆帯文のみを横位及び山形状に巡らすのが特徴である。461 では口縁部内面上端部が緩やかに外反し、口唇部が山形状を呈する土器である。471 では口縁内面上端に僅かな屈曲が見られる。波頂部の器形には特に変化は見られない。

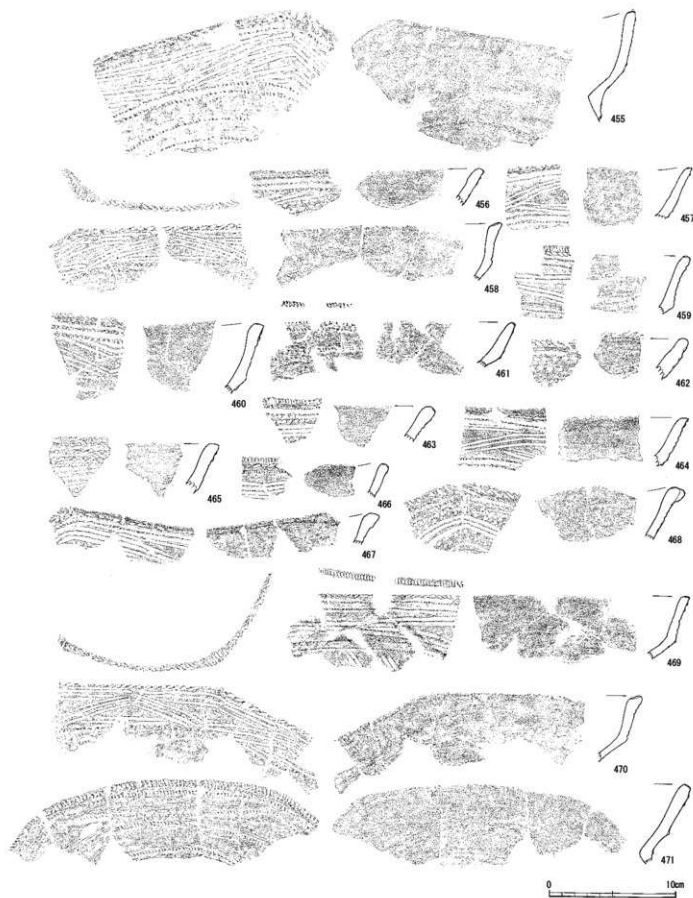
また、434・441・458・459・469・470 は口縁中央部の屈曲は強く、屈曲部外側の稜線が明瞭になり、内面は滑らかで稜線を観察することは出来ない土器である。口縁部上端に刻みを施す。434 では口縁部上位に刻目微隆帯文及び沈線文と刺突連点文を横位及び山形状に巡らし、口縁部下位は無文である。口縁部中央の屈曲部に瘤状突起を貼り付けるのが特徴である。また胎土にはシャモットと考えられる赤色粒が観察できる。441 は口唇部及び口縁部上端に施した刻みが上面観では羽状を呈する土器である。また口縁部上位に刻目微隆帯文を横位方向に施し、沈線文を横位及び「コ」字状に巡らし、口縁部下位は刻目微隆帯文と沈線文を施すのが特徴である。458・470 では口唇部上端及び口縁部上端に刻みを施し、口縁屈曲部には刻目微隆帯文を横位方向に巡らす。口縁部上半には沈線文で横位方向及び山形状に巡らすのが特徴である。458 では波頂部口唇部が舌状に延び、上端には長めの刻みを施す。また口縁部下半には無文である。470 では波頂部口唇部が舌状に延び、上端には沈線文を施す。口縁部下半には刻目微隆帯文を横位方向に巡らす。459・469 では口縁部上位に刻目微隆帯文及び沈線文を横位方向に巡らす。469 では口縁部下位に斜位方向の沈線文を施す。

さらに、435・448 は口縁部下位を削り、見かけの肥厚帯を作出する土器である。口縁中央部の屈曲は緩やかである。肥厚帯には口唇部上端及び口縁部上端に刻みを施し、口縁部上位に刻目微隆帯文及び沈線文と刺突連点文を横位及び山形状に巡らし、口縁部下位には刻目微隆帯文を横位方向に巡らすのが特徴である。435 では胴部に縦位方向の結節文と沈線文を組み合わせて施す。

476 ~ 478・481・483・484 は口縁部下半から胴部である。



第62図 縄文時代早期後葉の土器32



第63図 縄文時代早期後葉の土器33

いずれも刻目微降帯文を横位方向に数条巡らすのが特徴である。477では上位に山形状の沈線文を横位方向に数条巡らす。481では口縁部下半には刻目微降帯文間に波状沈線文を横位方向に巡らし、胴部には結節文を縦位方向に施した後、波状沈線文を横位方向に巡らすのが特徴である。他の個体と比べ、胎土に鉄分が多いようで内外面が赤みがかる。

479・480・482は胴部である。

479では胴部中央に刻目微降帯文を横位方向に1条巡らす。胴部上半には沈線文を横位及び斜位方向に施す。480では刻目微降帯文及び沈線文と刺突連点文を横位及び斜位方向に施す。口縁部上半の可能性のある土器である。482では縦位方向の結節文と斜位方向の沈線文を組み合わせて施す。また、刻目微降帯文を横位方向に4条巡らす。

501～503・505は口縁部である。

501は口縁中央部の屈曲は強く、屈曲部外面の稜線が明瞭で、内面は滑らかで稜線を観察できない土器である。口唇部上端及び口縁部上端に刻みを施し、口縁上位には刻目微降帯文を横位方向に巡らす。口縁部上半には沈線文で横位及び斜位方向に巡らすのが特徴である。

502は口縁屈曲部外面の稜線は不明瞭で、口縁部内面の稜線は観察できない土器である。口縁部上半では刻目微降帯文と沈線文を施し、口縁部下半では刻目微降帯文を横位方向に巡らすのが特徴である。

503・505は口縁部上半の土器である。刻目微降帯文と沈線文を施し、刺突連点文を施さないのが特徴である。

507は胴部下半～下端である。胴部全面に6条の結節文を1組にした原体を用いて、縦位方向に施す。

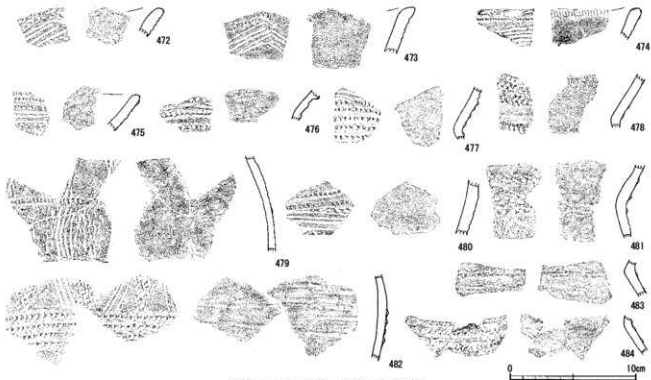
外面無文深鉢(第65図 485～498, 第67図 504)

485～498は器形が本類深鉢土器と同様の形態を呈し、口縁部外面には施文しない土器である。

485～496・498は口縁部である。

485・488・493～495は口縁中央部の屈曲は強く、屈曲部外面の稜線が明瞭になり、内面は滑らかで稜線を観察することは出来ない土器である。485・488・495では口唇部上端に刻みを木製篋状工具による刻みを施す。493・494では口唇部上端の施文は観察できない。

486～492は口縁中央部で屈曲し立ち上がるものの、屈曲部外面の稜線は不明瞭で、口縁部内面の稜線は観察できない土器である。



第64図 縄文時代早期後葉の土器34

第20表 縄文時代早期の土器観察表 15

縄文番号	出土区	層	器種	部位	色面		器面観察(主な文様)				胎土				検取番号	備考	
					外面	内面	口唇	外面	内面	石炭	長石	黒岩	雲母	赤岩			その他
69	407	B-26	Ⅱ下・Ⅱ	深鉢	口縁	にぶ・濃緑	にぶ・濃緑	刻目	結節文	へらタテリ	○	○	○	○	良	933他	
69	408	I-26	Ⅱ上・Ⅱ	深鉢	口縁	にぶ・濃緑	にぶ・濃緑	刻目	結節文	ナダ	○	○	○	良	767他	ヌス付着	
69	409	B-1-26	Ⅱ下・Ⅱ	深鉢	口縁	にぶ・濃緑	にぶ・濃緑	刻目	結節文	ナダ	○	○	○	良	975他		

第21表 縄文時代早期の土器観察表 16

種別 番号	馬鞍 番号	出土区	層	器種	部位	色面					器面調整(主な文様)					胎土					取上 番号	備考
						外面		内面		口唇	外面		内面		右 英	真 直	赤 土	脚 土	焼 成			
						外面	内面	口唇	外面	内面	右 英	真 直	赤 土	脚 土	焼 成							
60	410	I-20-31	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ上	深鉢	口縁・腹部	黄緑	灰黄緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	3929地						
	411	I-20-31	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	7735地						
	412	I-20-31	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ上	深鉢	口縁・腹部	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	7731地						
	413	I-20	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	7403地						
	414	54T	Ⅴ上	深鉢	口縁	明焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	6396						
	415	N-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	1962						
	416	I-20-31	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	明焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2215地						
	417	54T	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	明焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	6417						
	418	M-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2359						
	419	I-27	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	沈線	ナダ	○	○	○	○	良	91						
	420	I-26	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	906地						
	421	I-26	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	895						
	422	54T	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	6392						
	423	I-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	8479						
61	424	M-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	黄緑	明黄緑	滑点文	沈線	ナダ	○	○	○	○	良	3483						
	425	—	—	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	—						
	426	M-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	3917						
	427	M-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2737						
	428	M-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	947地						
	429	I-26-27	I-31(Ⅲ)	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2118地						
	430	I-26, 30	Ⅲ・I-31(Ⅲ)	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	沈線	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	5919地						
	431	I-27	Ⅴ上	深鉢	口縁	明焼	明焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	837						
	432	I-26-27	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	731地						
	433	54T	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	181地						
	434	M-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2819地						
	435	F-G-29	カタラン	深鉢	口縁	にぶい焼	灰黄緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	—						
	436	G-29	カタラン	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	—						
	437	M-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2761						
	438	G-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	8799						
	439	G-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	3170						
	440	G-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	灰焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	8798						
	441	M-28	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2342地						
	442	H-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	4471						
62	443	M-30	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2765地						
	444	M-28	V-a	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	沈線	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2346						
	445	M-28	V-a	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2111						
	446	K-27	V上	深鉢	口縁	明焼	灰焼	滑点文	沈線	ナダ	○	○	○	○	良	1861						
	447	M-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	3470						
	448	G-29	カタラン	深鉢	口縁	にぶい焼	黒焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	—						
	449	I-27	Ⅴ上	深鉢	口縁	黒焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	802						
	450	N-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	1963						
	451	M-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2598						
	452	H-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	5425						
	453	G-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	8800						
	454	M-30	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	灰黄緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	3436地						
	455	I-27	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	975地						
	456	G-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	8796						
	457	4T	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	明焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	524						
	458	M-30	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	3413地	スス付着					
	459	M-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2339地						
	460	K-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2035地						
63	461	M-30	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	灰黄緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2875						
	462	54T	カタラン	深鉢	口縁	黒焼	灰黄緑	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	—						
	463	H-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	8722						
	464	N-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	1304	スス付着					
	465	I-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	4389						
	466	K-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2292						
	467	I-28-26	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2379地						
	468	K-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	明焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2836地						
	469	M-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2274地						
	470	M-30	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	沈線	ナダ	○	○	○	○	良	3391地	スス付着					
	471	M-30	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	3469地						
	472	I-31	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	5687						
	473	M-30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2655						
	474	K-25	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2292						
	475	M-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	2709						
	476	I-32	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	4536						
	477	I-26	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	901						
64	478	I-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	4463						
	479	I-28, 27	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	緑	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	892						
	480	H-26	カタラン	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	—						
	481	H-31	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	黒焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	4480地						
	482	F-G-29	カタラン	深鉢	口縁	にぶい焼	黒焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	—	スス付着					
	483	I-1T	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	黒焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	668						
	484	I-27	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	肩目突帯	ナダ	○	○	○	○	良	734						
	485	I-26, 30	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	8732						
	486	K-29	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	2857	スス付着					
	487	K-27	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	灰黄緑	滑点文	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	1926						
	488	G-28	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	明焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	8744地						
	489	M-27	Ⅴ上・Ⅴ下	深鉢	口縁	にぶい焼	灰焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	2358地						
	490	10T	Ⅴ上	深鉢	口縁	にぶい焼	にぶい焼	滑点文	突帯文	ナダ	○	○	○	○	良	223						

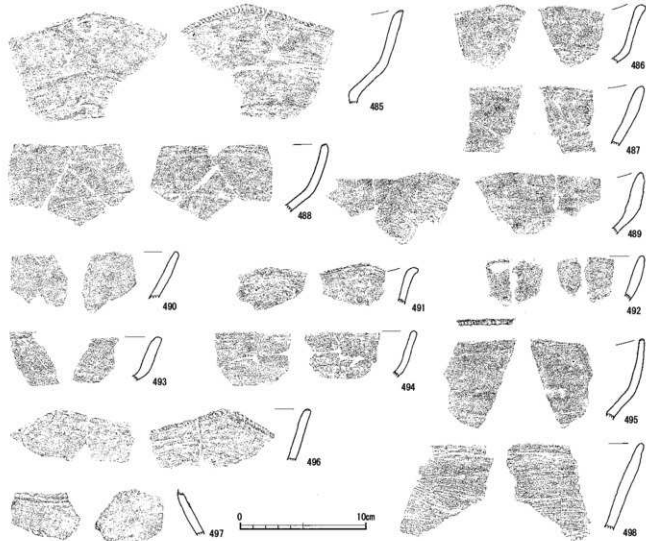
486・487・489～492では口唇部上端の施文は観察できない。486・491では波頂部口唇部が舌状に延びるのが特徴である。487・489では口唇部が山形状を呈する。487は口縁部外面上端部が屈曲し、489は口縁部内面上端部が屈曲する。490では胎土にシャモットと考えられる赤色粒が観察できる。492は胎土に鉄分が多く含まれるように、断面の赤さが観察できる土器である。また直径等の計測は不能だが小型土器である。

496・498は下端部にならずかに屈曲がみられることから、

口縁部上半の土器と判断できるが、形態分類はできない土器である。496では口唇部上端に刻みを木製筒状工具による刻みを施す。498では口唇部上端の施文は観察できない。また最終調整では、内外面共に木製工具によるハケメ調整が明瞭にみられ、丁寧な調整が行われていないのが特徴である。

497は胴部である。

504は口縁部上半下端～胴部である。口縁屈曲部外面の稜線は不明瞭で、口縁部内面の稜線は観察できない土器で



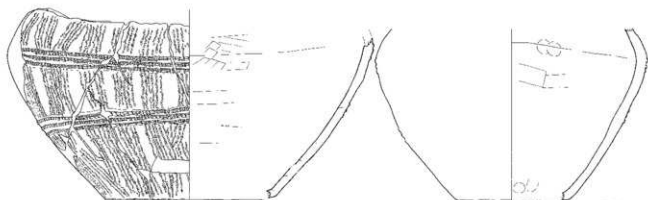
第65図 縄文時代早期後葉の土器35

第22表 縄文時代早期の土器観察表 17

縄文 番号	発掘 番号	出土区	層	器種	部位	色面		器面調整(主な文様)		胎土				焼成 温度	取上 番号	備考	
						外面	内面	口唇	外面	内面	右 英	長 石	黒 雲 母				赤 土 質
65	491	M-27	VI	深鉢	口縁	にふい・焼	にふい・焼	沈着	工具ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	2145	
	492	K-29	Vc・VI	深鉢	口縁	赤黒	にふい・焼	ナデ	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	2850	
	493	—	表掘	深鉢	口縁	灰黒	灰黒	掻き文	工具ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	—	スズ付着
	494	L-28	VI	深鉢	口縁	にふい・焼	にふい・焼	掻き文	工具ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	1749	焼
	495	H-28	VII上	深鉢	口縁	緑	浅黄緑	掻き文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	945	
	496	G-28	VI・VII	深鉢	口縁	にふい・焼	にふい・焼	掻き文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○	○	良	8805	焼
	497	M-30	オケラマ	深鉢	胴部	にふい・焼	にふい・焼	掻き文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	5538	スズ付着
	498	H-32	IV上	深鉢	口縁	灰黄緑	灰黄緑	掻き文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○	○	良	3433	焼
	499	M-30	VI・VII上	笠	胴部	にふい・焼	にふい・焼	掻き文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	1485	スズ付着
	500	上土器区(2区)	上土器区(2区)	表	胴部～底面	緑	緑	掻き文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	1485	スズ付着



499



500



0 10cm

第66図 縄文時代早期後葉の土器36

ある。胎土にシャモットと考えられる赤色粒が観察できる。

壺 (第66図 499・500)

本類に帰属する本道出土土器の壺は、全体形は不明だが、胴部が強く張る器形の土器である。499・500は胴部で、上半部に最大径がある壺である。

499は胴部屈曲部で強く屈曲する土器である。屈曲部には刻目微隆帯文を横位方向に1条巡らすのが特徴である。胴部下半部には曲線状及び横位方向の沈線文を組み合わせて施す。胴部上半部では施文は観られない。

500は胴部上面観及び胴部下端部が楕円形を呈する壺で、胴部上半部が屈曲し、底部に向けて緩やかにすばまる土器である。胴部屈曲部と胴部下半中央部には刻目微隆帯文を横位方向に3条ずつ巡らすのが特徴である。また刻目微隆帯文間には胴部全面に3条の結節文を1組に

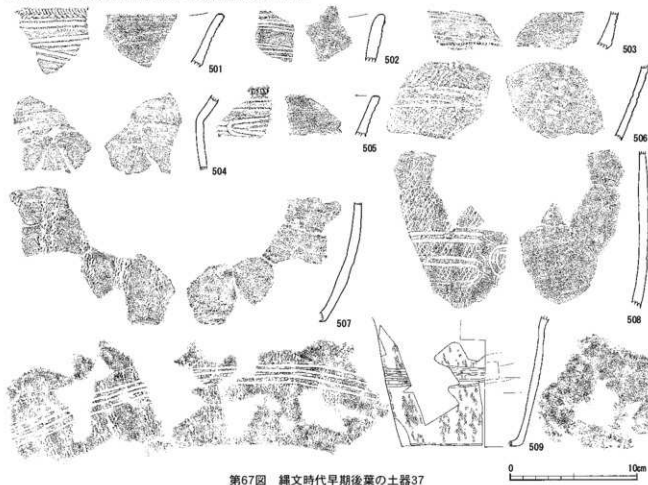
した原体を用いて、縦位あるいは斜位方向に施す。

第9類土器 (第67図 506-509, 第68図 510)

第9類土器は3点を資料化した。深鉢の出土である。510はラッパ状に屈曲した口縁部が内湾状に外反し、中央で僅かに屈曲し外傾し、胴部は円筒形の土器である。胴部上半から口縁部は無文。506・509では縦位方向の結節文を施文後、胴部中央に横位の沈線文を4条巡らす。

第10類土器 (第67図 508)

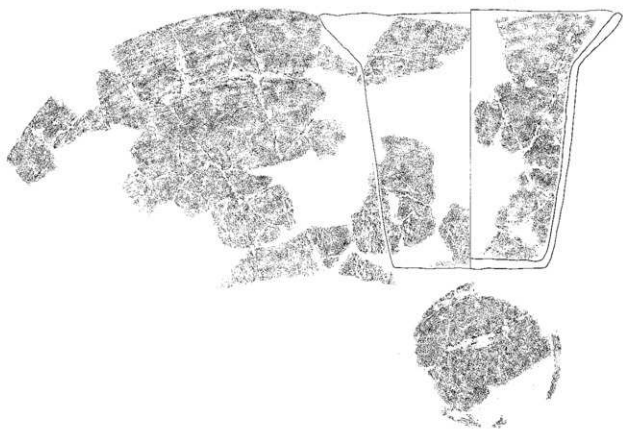
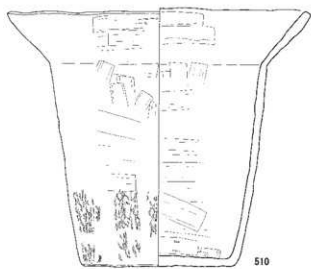
第10類土器に帰属する胴部片の508では縦位方向の網目懸糸文を施文後、横位及び曲線状の沈線文を組み合わせて施す。



第67図 縄文時代早期後葉の土器37

第23表 縄文時代早期の土器観察表 18

標記番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	色面		器面装飾(主な文様)		胎土			焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	燧石	黒石				その他
67	601	M-28	V-b	深鉢	口縁	にぶい模	灰帯	縄文文	交番文	ヘラナダ	○	○	○	良	2327	
	502	S-T	Ⅲ上	深鉢	口縁	線	線	交番文	ヘラナダ	○	○	○	良	172	他	
	603	M-29	VI	深鉢	胴部	にぶい模	にぶい模	交番文	ヘラナダ	○	○	○	良	2818		
	504	I-26	VI・Ⅶ	深鉢	胴部	にぶい模	にぶい模	正具ナダ	正具ナダ	○	○	○	良	2117	他 スス付着	
	605	M-28	V-a	深鉢	口縁	線	にぶい模	交番文	正具ナダ	○	○	○	良	2276		
	506	I-30	VI	深鉢	胴部	網目	網目	縄文・花菱	正具ナダ	○	○	○	良	3924		
	507	I-26	VI・Ⅶ	深鉢	胴部	にぶい模	にぶい模	縄文文	ナダ	○	○	○	良	918	他	
	608	I-32	VI・Ⅶ上	深鉢	胴部	にぶい模	にぶい模	縄文・花菱	ナダ	○	○	○	良	2649	他	
	509	M-30	VI	深鉢	胴部	にぶい模	成層模	縄文文	ヘラナダ	○	○	○	良	2809	他	
	68	510	29532954	2953-Ⅱ	深鉢	先頭部	浅線模	浅線模	ナダ	ナダ	○	○	○	良	1511	他 スス付着



第68図 縄文時代早期後葉の土器38

0 10cm

イ 石器

縄文時代早期の包含層から出土した石器は石槍、磨製石鏃、打製石鏃、磨製石斧、環状石斧、石匙、削器、搔器、楔形石器、彫器、小型両面調整石器、礮器

異形石器、剥片、加工痕剥片、使用痕剥片、砕片、石核、磨石、敲石、石皿の21器種である。

それぞれの分類に当たっては、第3章第4節で述べた分類基準に従った。以下各器種ごとに観察していく。

石槍 (第72図 511・512)

511と512の黒色安山岩製の2点である。当初石鏃の頭部片と判断していたが、よくよく観察すると、器面調整が直接加撃によるものであること、両側縁に押し剥離による調整が施されていないことの2点から石槍として分類した。

南九州においては、石槍が縄文時代早期後葉段階まで残ることが、上野原遺跡第10地点などで知られていたが、これを後づけるものである。

この2点は、直接加撃による丁寧な剥離で器面調整が施され、器体は断面凸レンズ状に薄く作られ、先端は鋭く仕上げられている。511の先端角は60度、512は50度である。

上野原遺跡例は木葉形と柳葉形の2種類があり、2種とも黒色安山岩製で共通しているが、木葉形のは割とラフな剥離で、先端の仕上げも雑な印象を受けるのに対し、柳葉形のは丁寧な剥離で薄く仕上げられている。このことから考えると、本遺跡例は前述したように薄く仕上げられていることや先端が鋭く仕上げられていることから、柳葉形の石槍であろうと考えられる。ただし、残念なことに、上野原例は尾部の破片で先端部を欠き、本遺跡例は先端部片で尾部を欠くので直接的な対比ができない。

磨製石鏃 (第72図 513・514)

513と514は頁岩製の磨製石鏃である。513は表裏両面とも、剥離の痕跡を残さないほどの全面研磨による器面調整、側縁調整が施されている。514は先端部と左右両側の一部を欠くもののほぼ完形であり、器体中央に剥離痕を残す。このような違いはあるが、緩く外湾する側縁と直線の底辺を持つ平面形状を示す点は共通するので、同一時期の所産であろうと思われる。

南九州では縄文時代草創期から磨製石鏃が存在し、早期前葉貝殻紋円筒土器の段階まで残ることが知られているが、本遺跡では貝殻紋円筒土器は数量的に少ない。本遺跡で数量的に多いのは押型文土器や平板式土器であるが、この磨製石鏃が、これらの土器と共存するのから、類例の増加を待って検討することとし、現段階では留保した。

打製石鏃 (第72～74図 515～583)

515～583は打製石鏃として分類した。脚や頭部を欠

損したのも少し混じりが完形品が多い。また、577～583は制作途中で破損したため放棄されたものと考えている。石材は多様であり、平基式から楕形鏃まで細形形式も多様である。楕形鏃が多いのは、押型文土器段階で目立つようになるのとよく整合している。

577は脚部の形状が未完成である上に先端が折れており、そのため放棄されたのであろうか。578はほぼ形状は整っているが左脚が未完成である上に、両側縁が先端で食い違っており、この点で完成品とは見なし得ない。579は先端を欠く上に基部が調整されていない。580・581は制作初期の段階での放棄であろうと考えられる。582は欠損した脚部であり、裏面はほとんど調整されていない。583は「石匙」形の石鏃で、基部調整が途中であり、先端も形成前の段階である。

磨製石斧 (第75図 584～588)

584は頁岩の礫皮面を残す厚い剥片を素材とするもので、表裏両面の上半分に器面調整剥離を施したのちに、両側縁と表面中央を敲打して整形している。研磨は刃部に限られている。両側縁と頭部の調整は特に入念にされている。刃部見通しは右上がりになるが、これは刃部右側の刃こぼれを研ぎなおした結果であろう。刃部裏面の小剥離は刃こぼれではなく、刃部再生のために調整する途中であるような印象を受け、刃部再生の途中段階で放棄されたものであろうか。

585も頁岩の礫皮面を残す剥片を素材とする。頭部幅と刃部幅を比べると、通常とは逆に刃部幅が狭くなっているが、これは、縦断面や刃部のねじれ等を考え合わせると、再三にわたって刃部再生が行われたためであろうと推測できる。

586～588は頭部及び刃部の破片であり、ホルンフェルス及び頁岩製の磨製石斧の破片である。586は体部中央で折れた石斧頭部が柄から取り出されたものであろう。587及び588は刃こぼれというよりは、刃部の破損であり、このような破損を修復するための刃部再生が行われると585のような形状になるのであろう。

環状石斧 (第75図 589)

589はホルンフェルス製の環状石斧である。孔の周囲を除く全面が研磨され、良く使い込まれている。刃こぼれも多数あり、ために平面形状が不正円形になるほどである。刃こぼれに研ぎ直しも目立つ。特に裏面左中央の刃こぼれは研ぎ直されており、そのため刃部はここで敲打つ。刃部は全周に渡ってつぶれたような状況であり、石斧のような刃部ではない。このことは、この石器に石斧のような切れ味は求められておらず、重量と遠心力を利した加撃力が求められていたためであろうと推測できる。なお、孔の中央は摩擦痕が顕著であり、着装した「柄」に掛かる重量によるためであろうと推測できることも整合する。

石匙 (第76・77図 590～597)

590～597は石匙であり、石材は黒曜石、黒色安山岩、チャートが用いられている。

590は黒曜石の湾曲した厚い剥片を素材としており、素材剥片の打面がつまみの裏面と体部裏面右側、挿入の直下に残る。体部の器面調整は行われておらず、刃部と体部上辺の左右側縁が整形されているのみである。

591は黒色安山岩の剥片を素材とする横型である。体部を三角形に作り、その三側縁はていねいに刃部調整が施されている。体部の器面調整はさほど丁寧ではなく表面(素材剥片の腹面)にあった素材剥片のポジティブバルブを除去するためのラフな剥離3枚だけである。また、挿入の剥離のために、体部の刃縁とつまみの縁辺はねじりの位置関係にあり、上野原型の石匙にしてはやや粗雑な印象を受ける。

592も黒色安山岩の剥片素材で、小型の上野原型である。大きな挿入によってつまみ部を作り出した後、その上部にさらに挿入をいれ、つまみを二つに分けている。このようなつまみは上野原遺跡第10地点にも見られた。体部の器面調整と下縁の刃部調整は特に入念であり、上野原型の特徴をよく備えている。

593も黒色安山岩の剥片を素材とする上野原型である。体部下半の器面調整に階段状剥離が見られ、やや分厚く仕上げられている。そのためか、左右側縁はやや内湾気味であり、全体の形状も横型に近い。

594はチャートの剥片を素材とするもので、体部左を欠損している。下縁刃部の作りを見ると、きれいに直線に仕上げられており、横型であろうと思われる。

595は黒色安山岩の剥片素材で、つまみの裏面に素材剥片に残っていた礫皮面を残す。つまみの下に僅かに残る側縁を見ると、左側縁は刃部調整であり、直線的に下に延びそうである。このことからすると縦型であると推測できる。

596は黒色安山岩の縦長剥片を素材とする横型である。体部の器面調整はほとんど施されておらず、ために下縁の刃部が素材剥片の断面のまま湾曲する。体部左端の折れ面は刃部調整の小剥離を切っており、完成後に折れたものであることが分かる。恐らく尖り気味の末端ではなかったか。この時期特有の形状である。

597は姫島産黒曜石の縦長剥片を素材とする横型である。表面(素材剥片の腹面)左の体部器面調整は素材剥片のポジティブバルブを除去するための剥離であり、裏面右の体部器面調整は素材剥片の頭部の厚みを減じたためである。このような手開をかけた上で、縦長剥片を横型の石匙に作るのは、横型でなければならぬ何かの強い理由があったのであろう。刃部調整は、左側は器面調整剥離の影響でやや荒く、右側のほうがより丁寧で、直線を作る。

削器 (第77～79図 598～609)

598は礫皮面を残す粘板岩の縦長剥片を素材とし、下縁に刃部調整を施したラフな作りである。上縁にわずかな整形剥離が見られる。

599は礫皮面を残す黒色安山岩の縦長剥片を素材とし、左右両側縁と下縁右の3箇所に刃部調整を施した削器である。右側縁と下縁の刃部は鋭角に交わり、ナイフの切っ先のような先端を形成しており、特に入念な作りである。

600はチャートの縦長剥片を素材とし、左側縁に入念な刃部調整が施されている。下端の折れ面は表裏の刃部調整剥離で切られており、作製前に折れていたことが分かる。

601はタンバク石の不定形剥片を素材とし、左側縁に刃部調整を施したのみで、他に調整剥離はない簡素な作りである。

602は黒色安山岩の不定形剥片を素材としており、左側縁の入念な刃部調整と下縁のラフな刃部調整が対照的である。この2辺の交点は大きな刃こぼれによって、本来の形状を失っている。

603も黒色安山岩の不定形剥片を素材とするもので、下縁に短い刃部を作っている。右下縁は素材剥片の鋭いエッジを残したままであり、微細剥離痕が観察でき、使用痕と思われる。

604、605も黒色安山岩の不定形剥片を素材とするもので、下縁に刃部調整を施したものである。

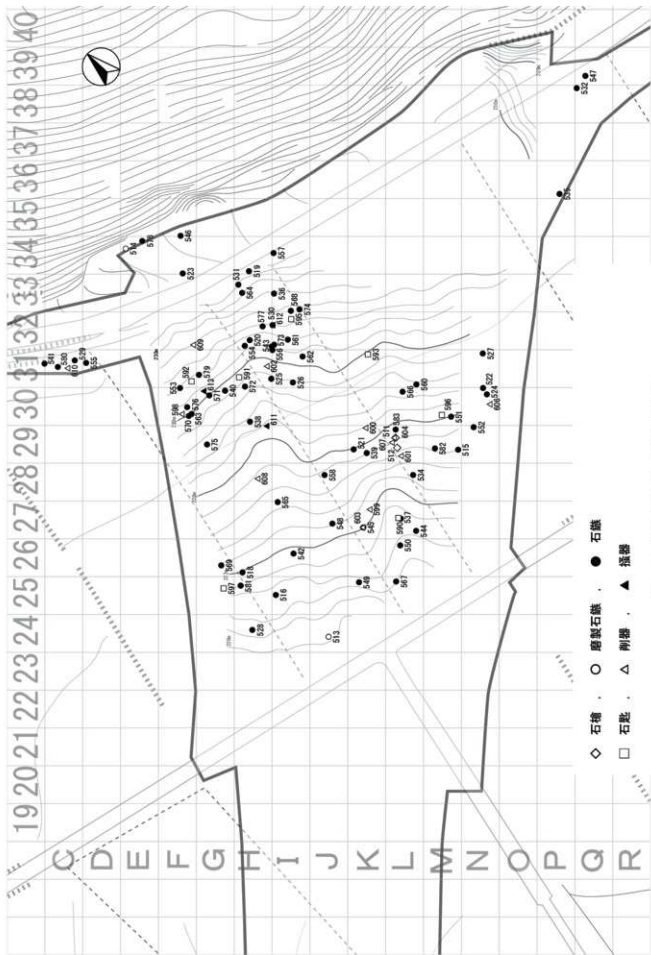
606も黒色安山岩の不定形剥片を素材とするもので、上縁と下縁の端に入念な刃部調整を施して、先端を作り出し、599と同じようにナイフの切っ先のように仕上げている。下縁の他の部分は素材剥片の鋭いエッジを残したままであり、微細剥離痕が残る。

607は黒色安山岩の不定形剥片を素材としており、下縁に刃部調整が施されている。右側の折れ面は刃部調整剥離を切っており、本来はもっと大きな削器であったろうと思われる。

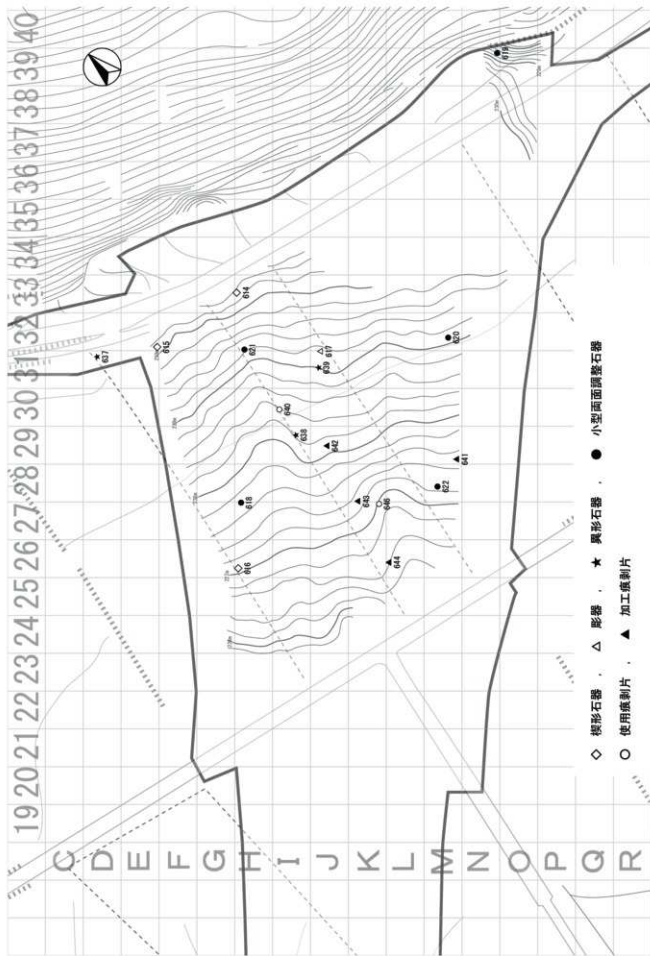
608も黒色安山岩の不定形剥片を素材としており、下縁全体に刃部調整を施している。

609は安山岩の大きめの縦長剥片を素材とするもので、左右両側縁と下縁にラフな刃部調整が施されている。刃部の摩耗は著しく、とくに下縁の刃部は大きな刃こぼれと摩耗痕が目立つ。

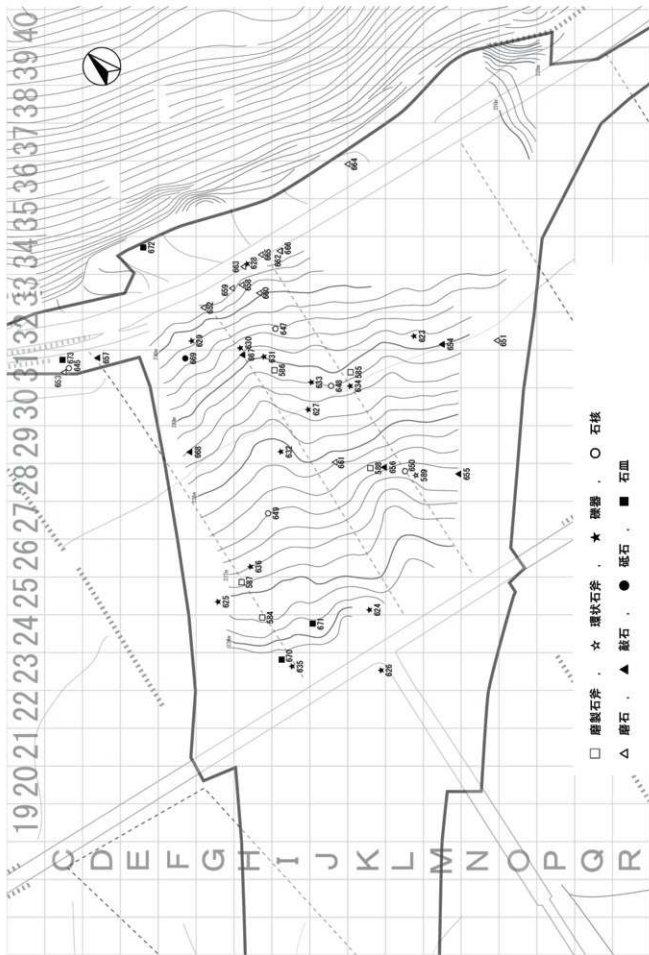
以上の削器を通してみると、三つの特徴を指摘できる。一つ目は、ナイフの切っ先のような先端を持つ削器の存在である。これは上野原遺跡第10地点でも見られた特徴であり、平橋式土器段階の特徴であろうか。二つ目は刃部調整の精粗の差があること、三つ目は大きさに親指大から掌大までの差があることである。ふたつ目と三つ目は連動するようである。



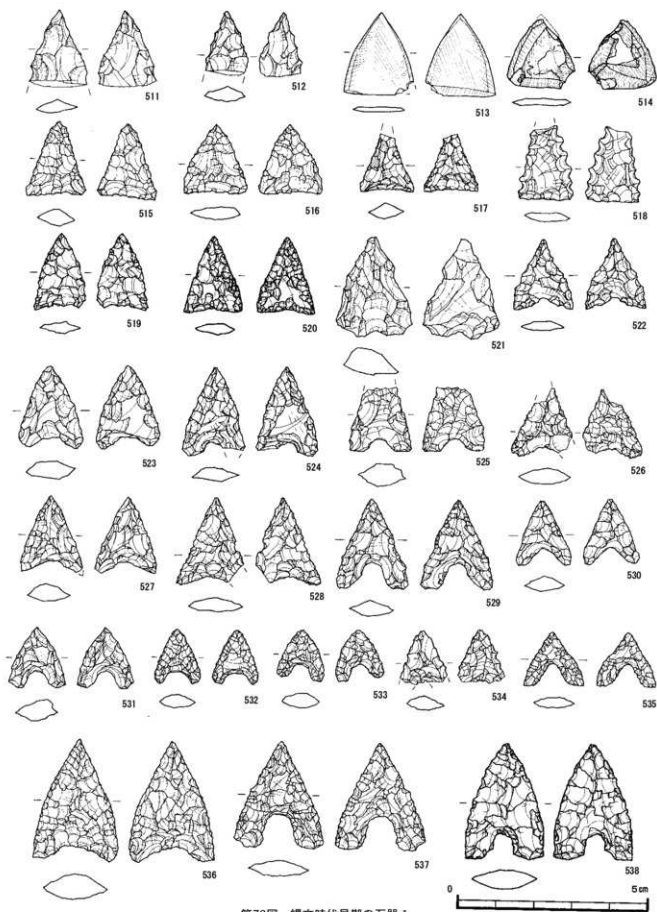
新69図 縄文時代早期の石器出土状況図 1



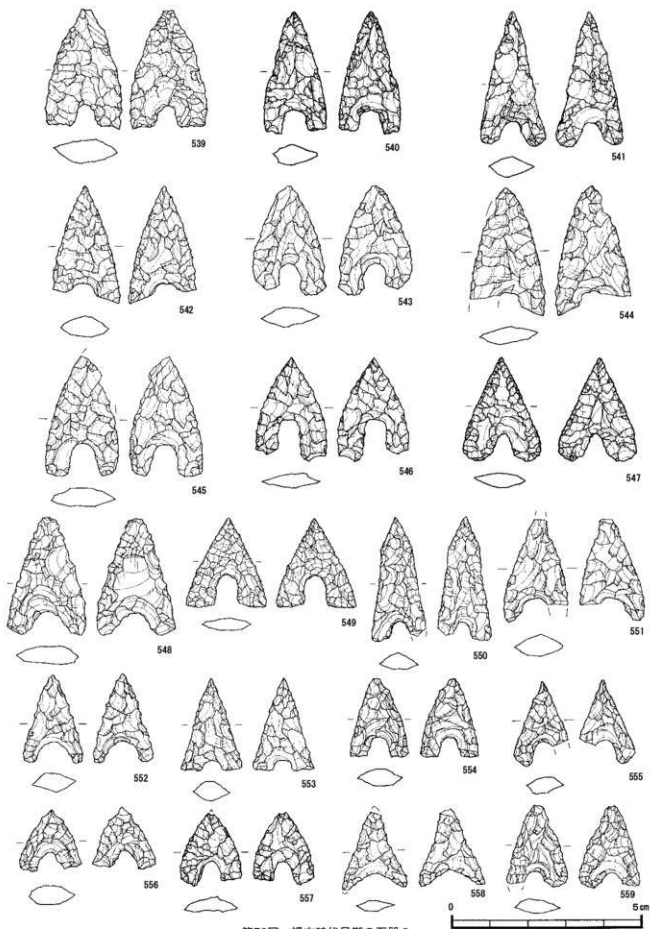
第70図 縄文時代早期の石器出土状況図2



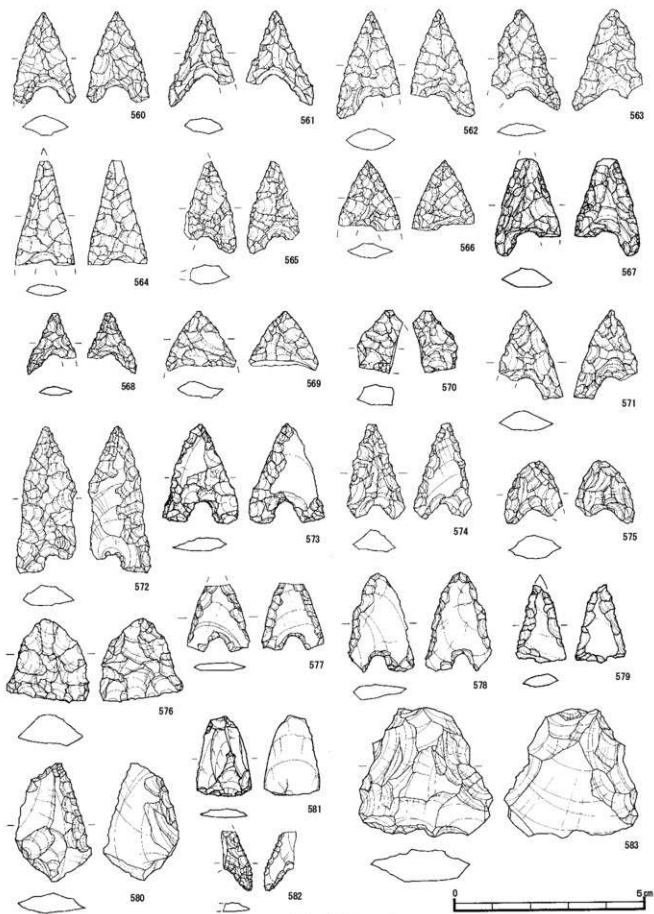
第71図 縄文時代早期の石器出土状況図3



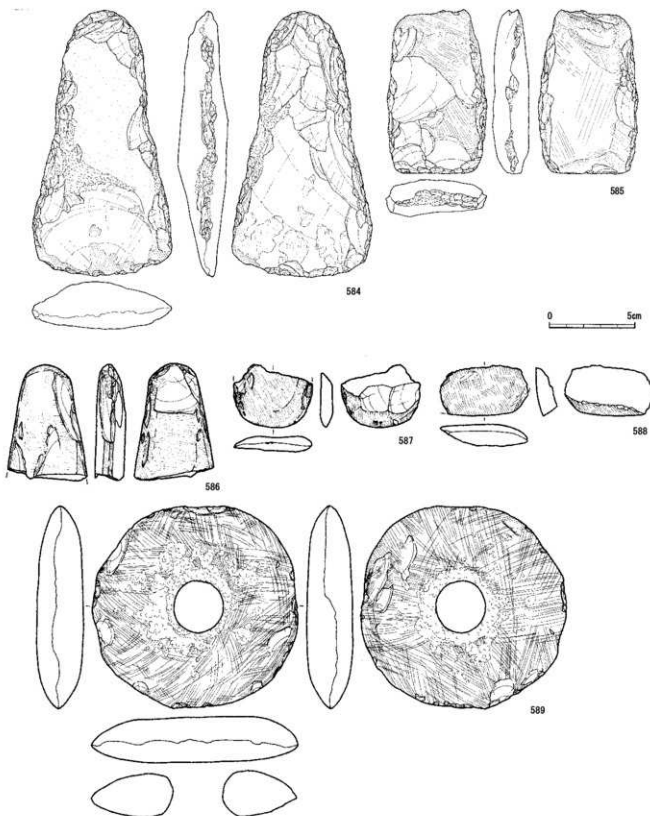
第72図 縄文時代早期の石器 1



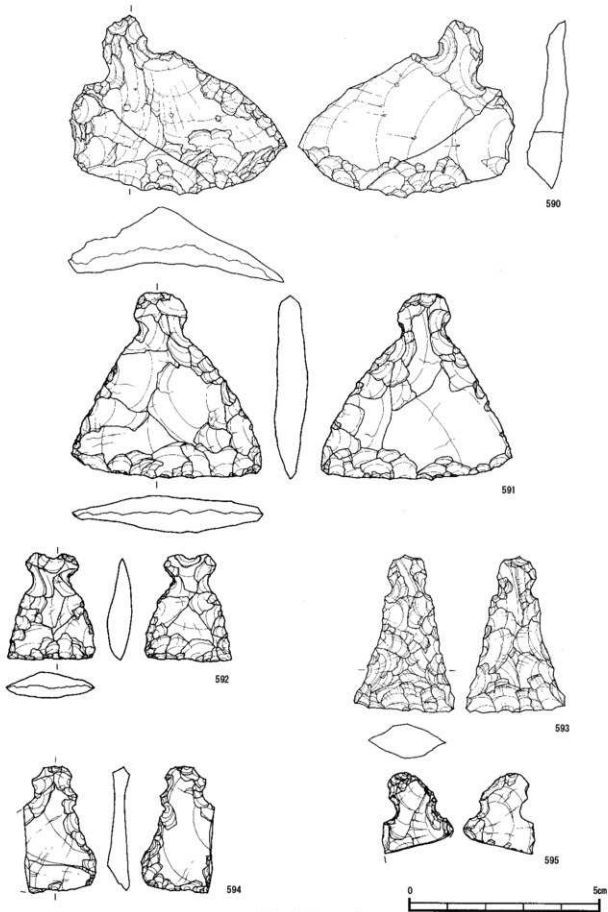
第73図 縄文時代早期の石器 2



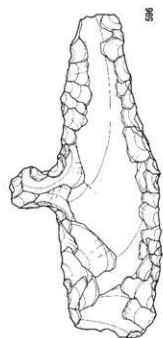
第74図 縄文時代早期の石器 3



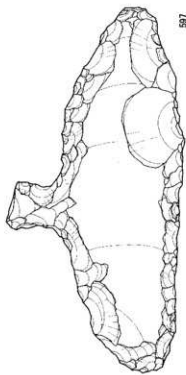
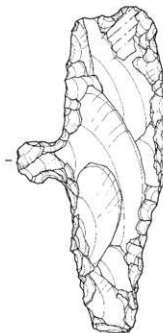
第75図 縄文時代早期の石器 4



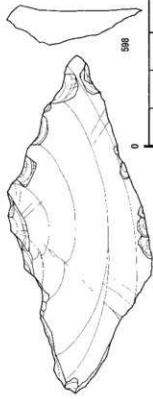
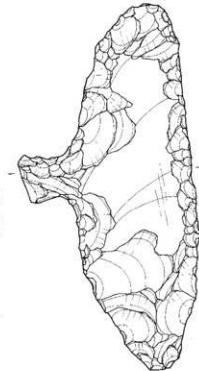
第76図 縄文時代早期の石器 5



596



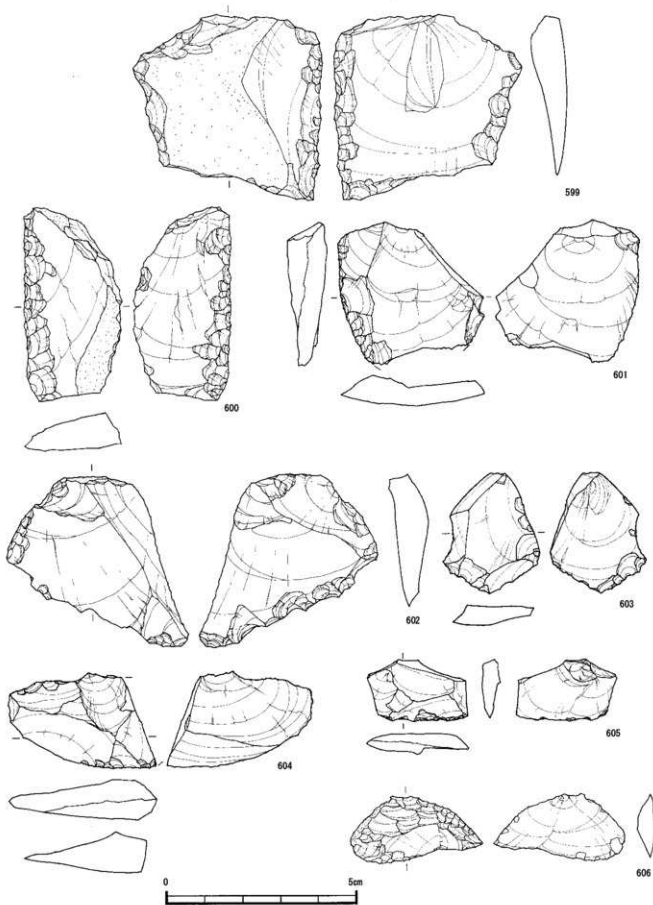
597



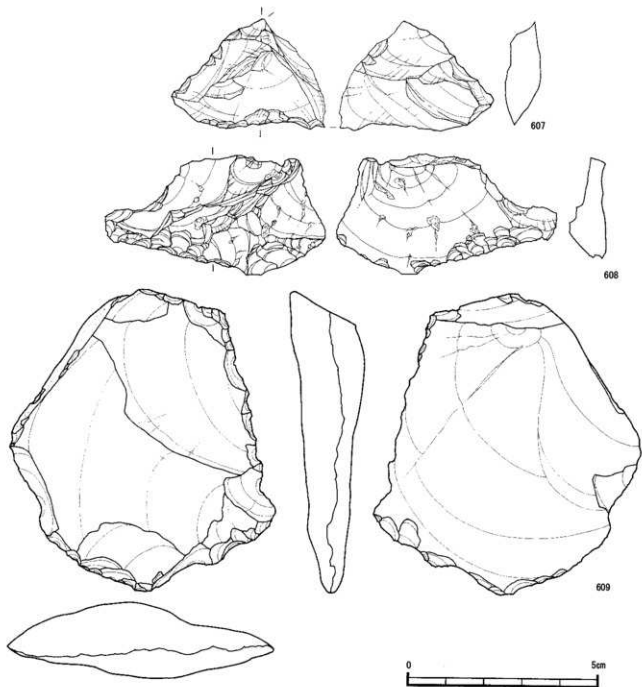
598



第77図 縄文時代早期の石器6



第78図 縄文時代早期の石器 7



第79図 縄文時代早期の石器 8

搔器 (第80図 610～613)

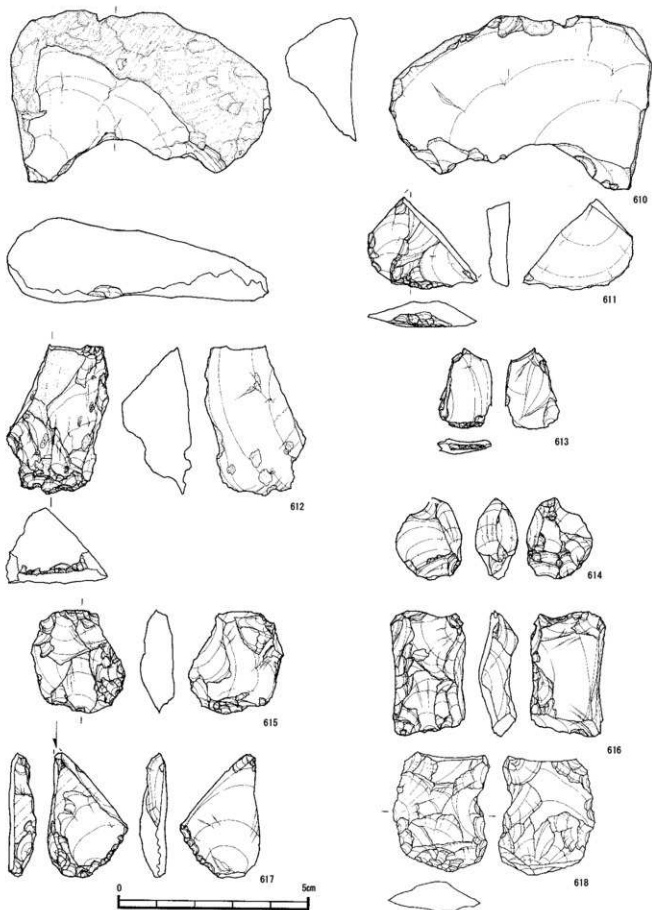
610～613の4点の搔器を図示した。

610は礫皮面の付いた黒曜石の分厚い剥片を素材とするもので、礫皮面に、抉入が生じるような剝離を加え、その抉入にさらに刃部加工を施し、抉入搔器としたものである。刃部の刃こぼれや裏面全体に残る擦痕等の傷が著しい。黒曜石は針尾島産のものである。

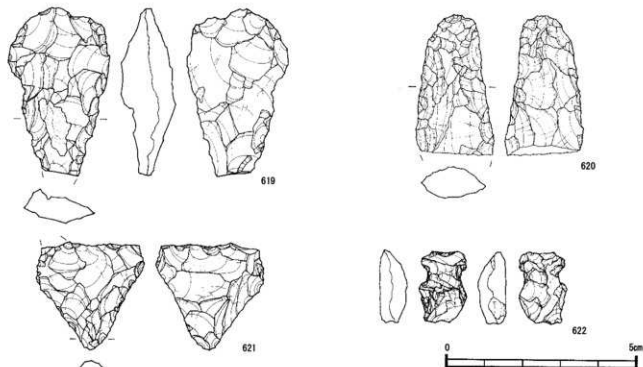
611は流紋岩の小剥片を利用し、分厚くなった部分の縁辺に刃部加工を施したもので、縁辺のごく一部にのみ刃を付けている。

612も礫皮面の残る黒曜石の分厚い剥片を素材とするもので、短辺の一つにスクレイパーエッジを付けたものである。刃部の刃こぼれが著しい。

613は燧石剥離になった大きな剥片を分割して利用したもので、表面に残る素材剥片のポジティブバルブの大きさから素材剥片の大きさを窺い知ることができる。このような素材からではあるが、幅1cm、長さ2cmの大きさの拇指状搔器を作っている。素材剥片にあった燧石剥離の丸くなった端部を刃部とは逆方向からの小剝離で潰し、幅を決定している。また、裏面右端の大きな刃こぼ



第80図 縄文時代早期の石器 9



第81図 縄文時代早期の石器10

れが目立つ。本遺跡における梅指状挿器の出土は、彫器の出土と相まって、興味深い例である。上野原遺跡第10地点でも同様の出土があり、平格式土器の段階の特徴であろうか。

楔形石器 (第80図 614～616)

614は黒曜石製である。断面凸レンズ状になる素材の形状を利用したもので、下端表裏面に階段状剥離が重なっており、右側面には下からの截断面が見られる。

615はチャート製で、上下両方向及び右側縁からの階段状剥離が顕著である。

616は黒色安山岩の切断剥片を素材としており上下両端を加工して断面紡錘形に作っている。

彫器 (第80図 617)

617は黒曜石の縦長剥片を切断して用いており、その切断面から1条の挿状剥離がはいる。彫り部には刃こぼれが認められる。基部調整も丁寧であり、右側縁のそれは、削器様に丁寧に施してある。梅指状挿器の項で述べたように、貴重な出土例である。

小型両面調整石器 (第80・81図 618～622)

ここに挙げた5点は小型両面調整石器としてくつがたが、一つ一つ形状の異なるもので、本来はそれぞれ別々の器種分類を行うべきものであり、ここでは便宜的にくつがたものである。

618は黒色安山岩の縦長剥片を素材とするもので、表面は基部と右側縁からの器面調整が見られ、裏面は左側縁からの器面調整と周縁調整が見られる。器面調整は直接加撃によるものであり、周縁調整は一部凹圧剥離、他

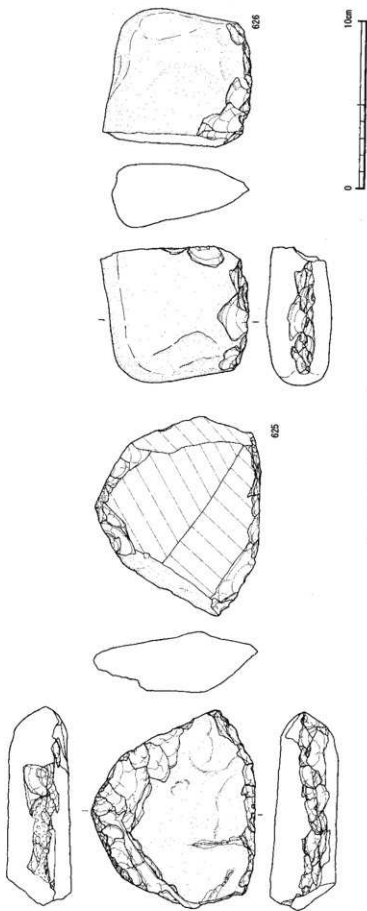
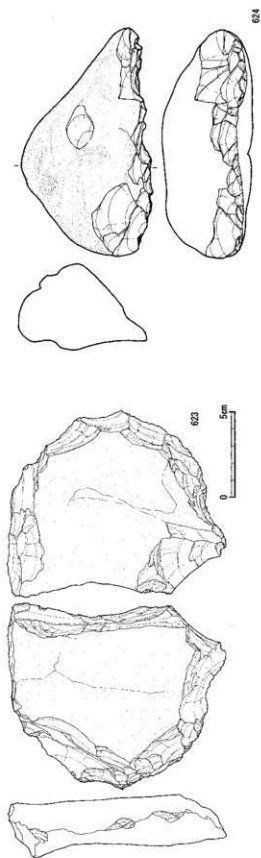
は間接加撃によるものか。平面形状は右側縁が内湾し、左側縁が外湾する。上端は調整剥離を切っており、切断した剥片を素材とするものではないことが分かる。完成後もしくは製作途中で折れたものであろう。小型の篋状石器の破損品かとも考えられるが、押圧剥離が見られることと側縁形状から、あえて篋状石器としては分類しなかった。

619はタンバク石の不定形剥片を素材とし、周縁からの直截加撃によってこのような形状に仕上げている。そのため周縁は削器のような刃縁とならずに、凹凸のある平面形状を呈する。また、側面図で分かるように、基軸面が平面にならず湾曲面になっている。このことから石槍として分類しなかった。小型篋状石器は本遺跡からはほかに出土していないので、その分類項は立てなかった。

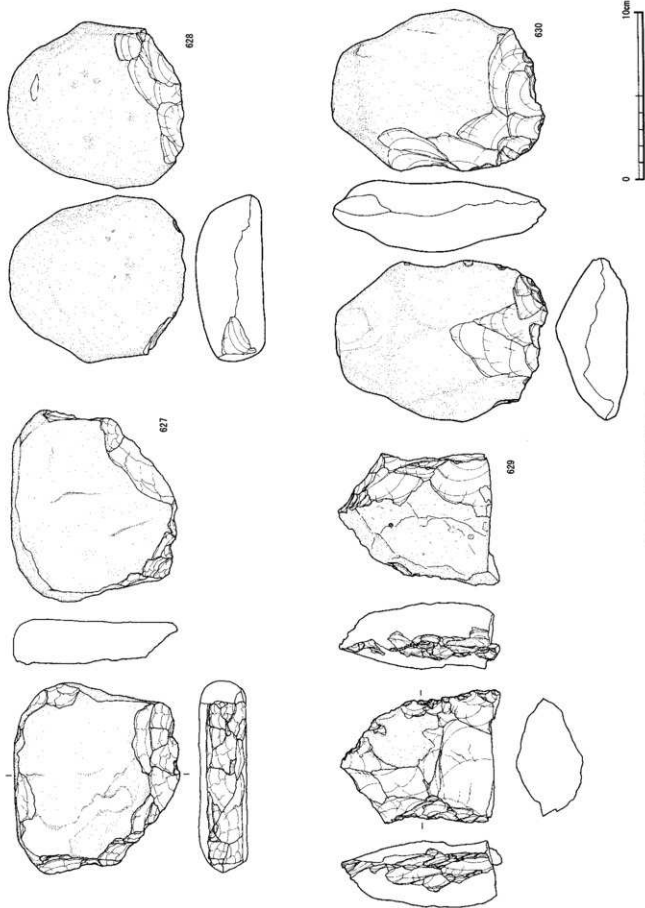
620は黒色安山岩の剥片を素材とするもので柳葉形の石槍の基部である可能性が否定できないが、積極的にそうであるとする根拠も見あたらない。

621も黒色安山岩製である。周縁からの押圧剥離もしくは間接加撃によって三角形の形状に作ってあるが、下端の鈍い尖頭部で交わる側縁が食い違っている。また、上縁右に素材剥片の切断面が残る。これらのことから石筈型の石鏃にも分類しがたく、下端を刃部とする石鏃にも分類しがたい。

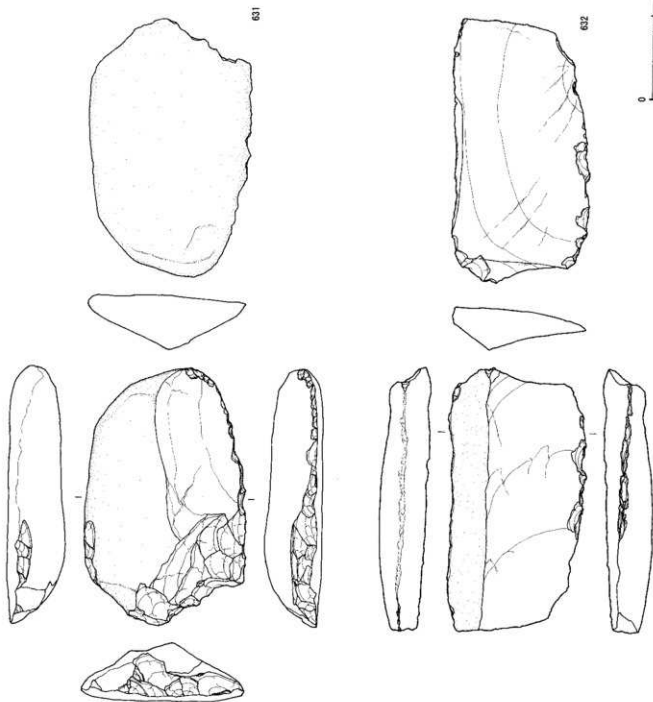
622は挟入石器もしくはつまみ形石器として分類される石器である。二つの挟入によってつまみが作られるが刃部に相当するエッジが作られない。挟入を作ることだけが目的のような石器である。



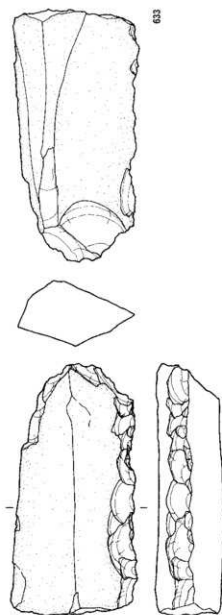
第82図 縄文時代早期の石器11



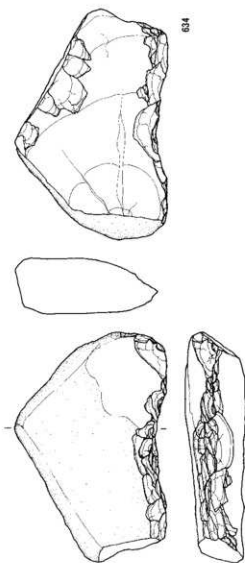
第83図 縄文時代早期の石器12



第84図 縄文時代早期の石器13



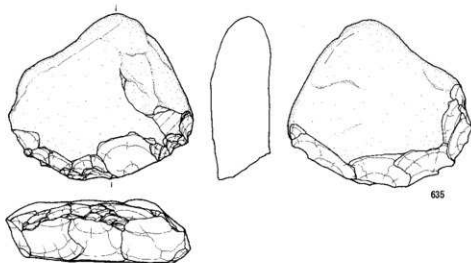
633



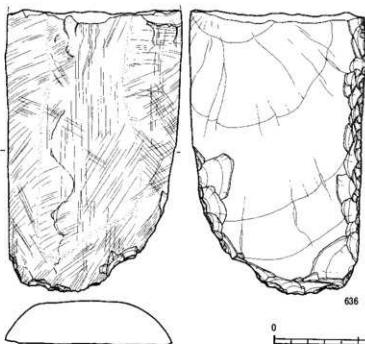
634



第85図 縄文時代早期の石器14



635



636

第86図 縄文時代早期の石器15

礫器 (第 82 ~ 86 図 623 ~ 636)

623 は千枚岩の扁平な礫の周縁に直接加撃を加えて、外湾する両刃の刃部を形成している。また、下端には嘴状の尖りを作り出しており、その裏面には使用の際の打撃によると思われる小剥離痕が複数見られる。主たる使用部位ははこの尖りであろうか。周縁の刃部にはさほど顕著な小剥離は見られない。

624 は砂岩の亜円礫の長辺に直線的な片刃の刃部を作っており、刃部の刃こぼれが顕著である。

625 は節理面で割れた硬砂岩の円礫の一片を用いており、上下両縁に両刃の刃部を作っている。どちらの刃にも小剥離が多いが、特に左上縁は刃が鈍磨するまでにつぶれている。左右側面の稜にも細かな小剥離、敲打痕や

潰れが目立つ。

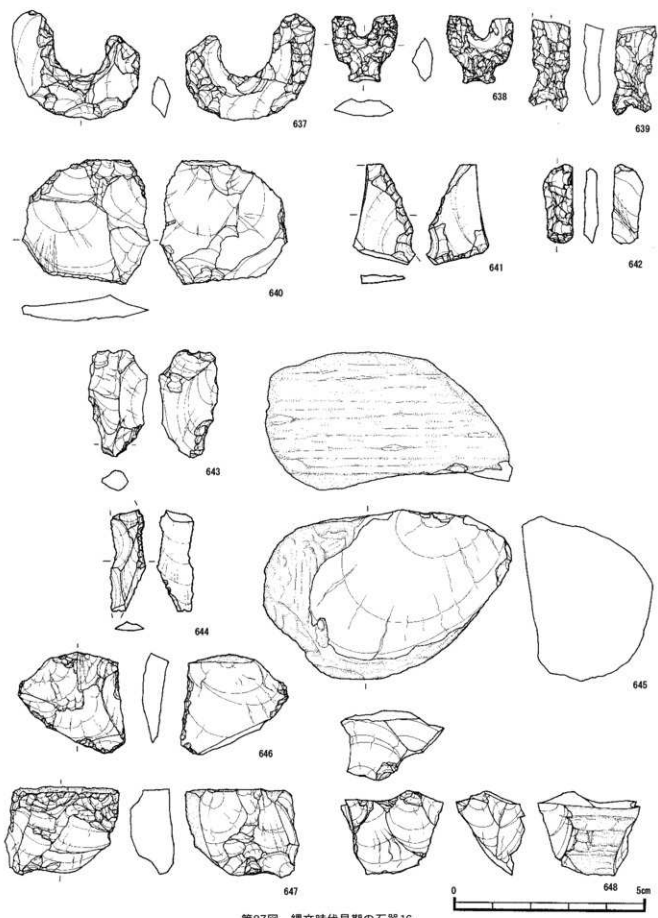
626 は頁岩の円礫の一边に両刃の刃部を付けており、これも刃部の小剥離や潰れが顕著である。

627 はホルンフェルスの扁平な円礫の一边に交互剥離による両刃が作られており、突出した部分の刃が鈍磨している。

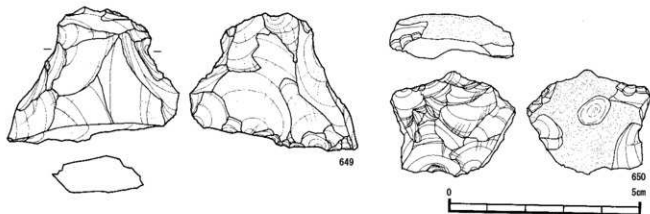
628 は安山岩の扁平な円礫の一端に片刃が付けられたものである。

629 は黒色安山岩の亜角礫に器面調整のような剥離が見られると共に、左右両側縁に両刃の刃部を付けたものである。刃部の潰れはほとんど見られない。

630 はホルンフェルスの亜円礫の下縁に両刃の刃部を、隣接する右側縁に片刃の刃部を作っている。右側縁



第87図 縄文時代早期の石器16



第88図 縄文時代早期の石器17

刃部下端と下縁刃部右側の潰れが著しい。

631もホルンフェルスの扁平な円礫の長辺に細かな剥離で片刃の刃部を作り、左側縁にラフな剥離で片刃の刃部を作っている。下縁の刃部はスクレイパーエッジに近い。

632は柱状節理の発達した安山岩の岩塊から節理面で割れた角礫の長辺に細かな剥離を加え刃部を作ったものである。上縁の稜には敲打による潰れが顕著である。

633も632と同じ石材であり、下縁にラフな剥離による片刃の刃部が付けられている。右側縁はさらにラフな剥離で両刃の刃部が付けられている。632と異なり、上縁の稜の潰れは見られない。

634はホルンフェルスの扁平な円礫を半割にした片材素材である。しかし、素材の用い方や刃部の作り等は他の礫器と同様であるので、礫器に分類する。下縁の内湾する両刃の刃部と裏面上縁の小剥離が特徴的である。

635もホルンフェルスの扁平な円礫を素材とし、一辺に外湾する両刃の刃部を付けたものである。表面の剥離は角度が浅く、裏面の剥離は急角度剥離になっており、他の礫器との違いを見せる。石核からの転用か。

636は頁岩の巨大な円礫からの剥片を素材とするが、その大きさから礫器に分類したものである。面は礫面であり、研磨痕はない。裏面周縁の小剥離は意図的な剥離ではなく、刃こぼれのような印象を受ける。

異形石器 (第87図 637～639)

637は黒色安山岩の剥片を素材とし、上縁からの大きな挟入を作ることで図のような形状に仕上げたものであり、完形である。表面(素材剥片の腹面)に見える挟入を作る調整剥離は細かく連続するもので、裏面(素材剥片の背面)に見える挟入を作る調整剥離は表面のそれより大きい。特に左半分は一回の剥離で形成されている。また、裏面外周縁を作る調整剥離は下縁の一部に施されており、その部分の外周を整えないことが意図されている。

638・639は上野原遺跡第10地点で出土した物と同様である。638は完形で、又状部と体部を分かつ挟入の入れ方を変えることによって、又状部が左右シメトリリーにならないよう作ってある。639は又状部を欠損してお

り、体部を強調するタイプのものである。

使用痕剥片・加工痕剥片 (第87図 640～644・646)

640は珪質頁岩の剥片であり、左右側縁に使用痕と思われる微細剥離痕がある。なお、珪質頁岩の石核は出土していない。641～644・646は黒色安山岩の剥片である。641の左側縁には連続する小剥離が認められ、なんらかの器種の製作が放棄されたものようである。642は右側縁からの連続する押圧剥離で器面調整がなされ、下縁は微細剥離によって成形されている。また、左側縁と上縁にも折れた痕跡はなく、これで完形である。すなわち、この大きさのなんらかの器種の製作途中である。どんな器種の未製品であるか、想像もつけない。643は表面右側縁下端と裏面右側縁下端に連続する剥離痕があり、その加工の位置や標態から石錐の未成品かと思われる。644は右側縁裏面に微細剥離痕が連続する。646は折れている下端を除く全周の側縁に連続する微細剥離痕がある。

石核 (第87・88図 645・647～650)

645は黒色安山岩の分割礫である。円礫を半載したものであり、この後連続する目的剥片剥離が進行するのであろうが、なんらかの理由で、この段階で遺棄されたものか。

647は黒色安山岩の残核である。礫皮面打面であり、作業面が表裏両面にあり、打面方位はない。表面の頭部調整に失敗して放棄されたものようである。

648も黒色安山岩の残核である。左側面と打面右に礫の半載面が残っていることから、目的剥片はさほど多くは剥離されていないようである。

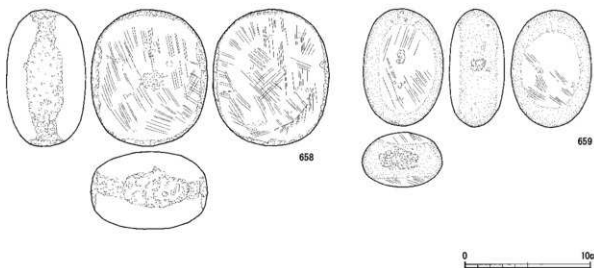
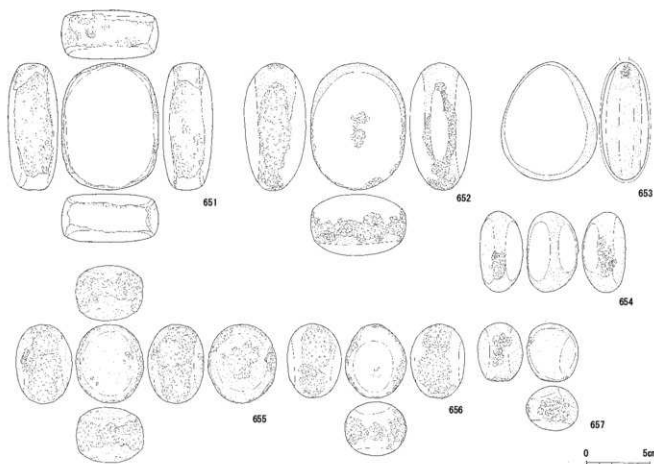
649も黒色安山岩の残核である。上面と下面に礫の半載面が残る。表裏両面に、ほぼ全周から直接加撃による目的剥片剥離がなされている盤状石核である。その目的剥片は削器、搔器楔形石器等に使われている。

650は黒曜石の盤状石核であり、目的剥片剥離は表面に限られている。裏面は礫皮面である。

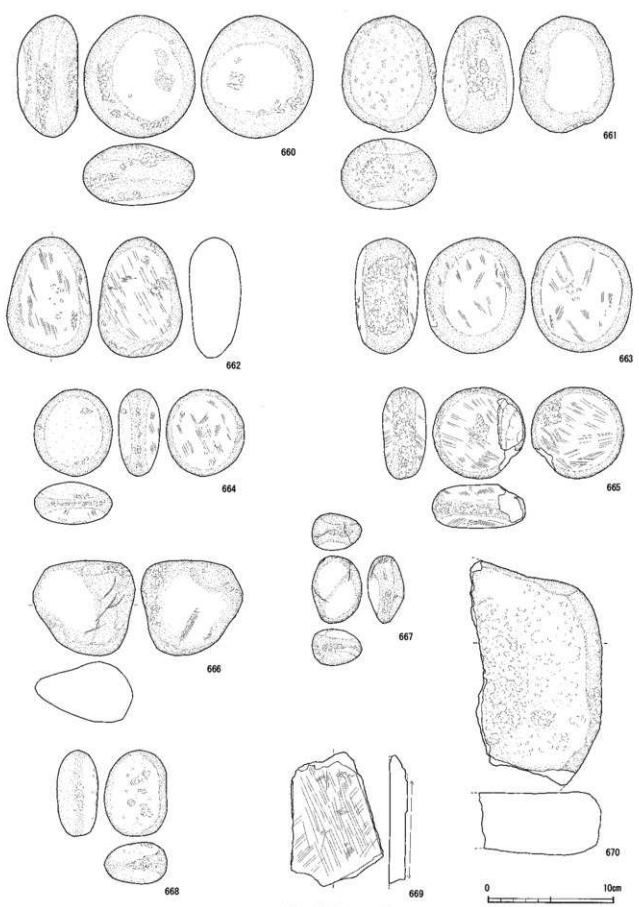
磨石・敲石 (第89・90図 651～668)

砂岩や安山岩の円礫を用いて磨石や敲石に使っている。1点だけ花崗岩の磨石が出土した。

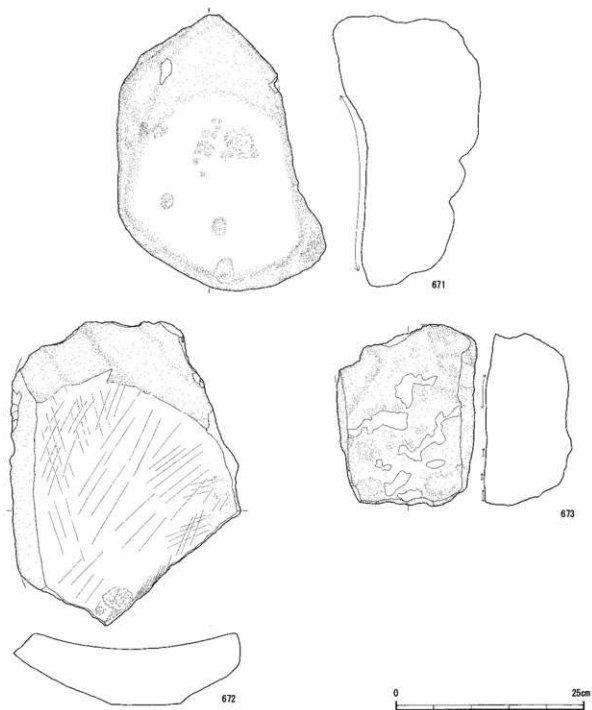
磁石・台石・石皿 (第90・91図 669～673)



第89図 縄文時代早期の石器18



第90図 縄文時代早期の石器19



第91図 縄文時代早期の石器20

669は細粒砂岩の砥石であり、砥面はほぼ平坦である。鼠歯状痕が散見され、研磨前のチッピングもこの砥石で行われたようである。砥面が湾曲面でなく平坦面であることは石斧の研磨は想定しがたい。他には磨製の石器は磨製石鏃しかないので、この砥石は磨製石鏃の製作に用いられたと考えたい。

670は安山岩の厚さ5cmほどの扁平な円礫を用いた台石で、表面には平滑面は認められず、敲打痕が多数残る。

671は安山岩の人頭大の亜円礫を用いた石皿である。

表面の凹みは平滑であり良く磨られている。また、この傾斜が使用に際して便利であったように思える。

672は柱状節理が発達した安山岩の岩体から割れた角礫を用いた凹みの浅い石皿である。このような石皿は上野原遺跡第10地点で数多く出土している。

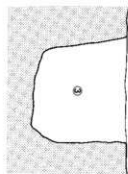
673は安山岩の人頭大の亜角礫を用いた石皿である。凹みは形成されていないが、表面の凸部は研磨されたような平滑面を呈している。

第24表 縄文時代早期の石器観察表 1

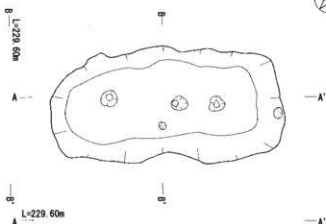
種別番号	地帳番号	出土区	番	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
511	L-29	VI	石製	黒色安山岩	(2.00)	1.55	0.55	1.00		
512	L-29	VI	石製	黒色安山岩	(1.70)	1.10	0.40	0.56		
513	J-24	IX上	磨製石皿	頁岩	2.30	1.90	0.15	0.70		磨製
514	F-35	Ⅷ上	磨製石皿	頁岩	1.80	(1.80)	0.20	0.70		磨製
515	M-29	VI	石製	黒曜石	2.00	1.55	0.45	0.84		
516	I-25	Ⅷa	石製	黒曜石	1.85	1.70	0.30	0.83		
517	H-26	VI	石製	珪質頁岩	(1.55)	1.40	0.45	0.59		
518	H-26	VI	石製	珪質頁岩	(2.00)	1.45	0.27	0.82		
519	H-33	Ⅷ	石製	チャート	2.60	1.40	0.30	0.70		
520	H-32	VI	石製	黒曜石	2.00	1.55	0.30	0.66		
521	K-29	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.60	2.00	0.70	3.28		
522	S T	Ⅷa	石製	玉髄	1.85	1.60	0.25	0.38		
523	50 T	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.19	1.20	0.50	1.26		
524	S T	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.30	(1.85)	0.25	1.20		
525	H-31	VI	石製	黒曜石	(1.70)	1.60	0.60	1.36		
526	I-31	VI	石製	黒曜石	(1.80)	(1.55)	0.43	0.81		
527	4 T	Ⅷa	石製	黒色安山岩	2.00	1.65	0.45	1.08		
528	H-24	VI	石製	黒色安山岩	2.30	(1.75)	0.40	0.92		
529	34 T	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.35	1.90	0.40	1.00		
530	I-32	Ⅷ上	石製	黒色安山岩	1.70	1.45	0.40	0.58		
531	H-33	Ⅷ	石製	黒色安山岩	1.60	1.50	0.55	0.79		
532	Q-38	VI	石製	黒曜石	1.45	1.20	0.35	0.41		
533	H-24	VI	石製	黒曜石	1.35	1.25	0.40	0.43		
534	L-28	VI	石製	黒曜石	(1.40)	1.20	0.38	0.43		
535	41 T	Ⅷ	石製	チャート	1.40	1.55	0.25	0.37		
536	I-33	Ⅷ	石製	黒曜石	3.20	2.20	0.75	3.55		
537	L-27	VI	石製	黒曜石	2.85	3.35	0.40	1.90		
538	H-30	Ⅷ	石製	黒色安山岩	3.10	2.10	0.55	2.76		
539	K-29	VI	石製	黒曜石	(3.10)	2.95	0.45	3.07		
540	G-30	Ⅷ上	石製	黒色安山岩	3.35	1.65	0.55	2.08		
541		Ⅷ	石製	黒曜石	3.60	1.85	0.55	2.19		
542	I-26	Ⅷa	石製	チャート	(3.10)	(1.25)	0.60	2.46		
543	I-32	Ⅷ上	石製	黒色安山岩	2.90	1.90	0.50	2.80		
544	L-27	Ⅷa	石製	黒色安山岩	3.40	(2.00)	0.45	2.45		
545	K-27	Ⅷ	石製	黒色安山岩	(3.15)	1.90	0.50	2.15		
546	F-35	VI	石製	黒色安山岩	(2.70)	(1.80)	0.40	1.20		
547	Q-39	Ⅷ上	石製	チャート	2.75	2.10	0.40	1.63		
548	J-27	VI上	石製	黒色安山岩	3.05	2.05	0.52	2.72		
549	K-26	VI上	石製	チャート	2.35	2.10	0.30	0.86		
550	L-26	VI	石製	黒色安山岩	3.25	(2.40)	0.45	1.46		
551	M-30	VI	石製	黒色安山岩	(2.70)	1.70	0.50	1.57		
552	N-29	VI	石製	黒色安山岩	2.30	1.50	0.50	1.04		
553		Ⅷa	石製	黒色安山岩	2.40	1.60	0.50	1.23		
554	H-32	VI	石製	黒色安山岩	2.65	1.55	0.45	1.04		
555	54 T	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.20	(1.40)	0.45	0.75		
556	I-31	Ⅷ	石製	黒色安山岩	1.65	1.65	0.55	0.89		
557	I-34	Ⅷ	石製	黒曜石	(1.90)	1.60	0.40	0.80		
558	J-28	Ⅷ	石製	黒色安山岩	(2.00)	1.70	0.20	0.67		
559		Ⅷa	石製	黒色安山岩	2.15	(3.60)	0.40	1.90		
560	L-31	VI	石製	黒色安山岩	(2.40)	1.60	0.55	1.40		
561	I-32	VI	石製	黒色安山岩	2.50	(1.75)	0.40	0.86		
562	I-31	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.80	(1.70)	0.55	1.80		
563	F-30	Ⅷ	石製	黒曜石	2.70	(1.82)	0.25	1.16		
564	H-33	Ⅷ	石製	黒色安山岩	(2.70)	(1.55)	0.40	0.81		
565	I-27	Ⅷa	石製	黒曜石	(2.40)	(1.35)	0.55	1.34		
566	L-30	Ⅷ上	石製	黒曜石	(1.85)	(1.62)	0.40	0.94		
567	L-25	VI	石製	黒色安山岩	(2.50)	(1.70)	0.50	1.71		
568	L-32	VI	石製	黒色安山岩	1.60	(1.25)	0.25	0.30		
569	H-25	Ⅷ	石製	黒曜石	(1.65)	(1.85)	0.50	1.14		
570		Ⅷ	石製	黒曜石	1.60	(1.20)	0.60	0.79		
571	G-30	VI	石製	黒色安山岩	2.40	(1.70)	0.50	1.23		
572	H-30	Ⅷ	石製	黒曜石	3.90	(1.60)	0.50	2.71		
573	H-32	Ⅷ	石製	黒色安山岩	4.65	2.05	0.25	1.83		
574		Ⅷ上	石製	黒曜石	2.60	3.50	0.60	1.53		
575	G-29	Ⅷ	石製	黒色安山岩	1.65	1.58	0.60	1.23		
576	F-30	Ⅷ	石製	黒曜石	2.20	2.20	0.80	2.90		
577	H-32	Ⅷ	石製	黒色安山岩	(1.75)	(1.65)	0.20	0.59		
578	F-35	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.60	1.70	0.40	1.40		
579	G-31	Ⅷ	石製	黒色安山岩	(2.00)	3.30	0.30	1.70		
580	54 T	Ⅷ	石製	黒色安山岩	3.10	2.00	0.50	2.90		未製品
581	G-26	Ⅷa	石製	黒色安山岩	2.10	1.45	0.25	0.78		未製品
582	M-29	VI	石製	黒色安山岩	(1.60)	(0.85)	0.25	0.27		
583	L-29	Ⅷ	石製	黒色安山岩	3.40	3.50	0.85	16.43		未製品
584	H-24	Ⅷ	磨製石斧	頁岩	15.85	8.20	2.95	379.00		
585	K-31	Ⅷ上	磨製石斧	頁岩	9.65	5.90	2.00	170.07		
586	G-31	VI	磨製石斧	頁岩	(6.80)	4.60	1.80	69.80		
587	G-26	Ⅷ	磨製石斧	頁岩	3.70	4.60	0.90	15.50		
588	K-38	Ⅷ	磨製石斧	赤千ツェルス	15.00	5.10	1.90	170.00		
589	L-28	Ⅷ	磨製石斧	赤千ツェルス	11.90	12.20	2.80	481.00		
590	L-27	Ⅷ	石製	黒曜石	4.70	5.70	2.00	20.75		
591	H-31	Ⅷ	石製	黒色安山岩	5.00	4.95	1.05	16.33		
592	F-31	Ⅷ	石製	黒色安山岩	2.90	2.35	0.70	3.52		
593	K-31	VI	石製	黒色安山岩	4.10	2.65	0.60	6.06		
594	G-31	VI	石製	チャート	3.30	1.90	0.60	4.00		
595	I-31	VI	石製	頁岩	2.10	1.80	—	1.40		

第25表 縄文時代早期の石器観察表 2

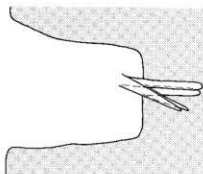
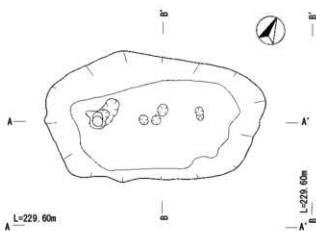
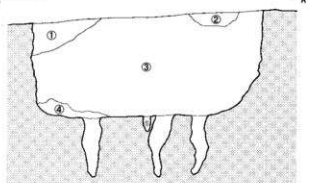
球団番号	掲載番号	出土区	層	器種	石材	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
77	596	M-30	VI	石斧	黒色安山岩	3.95	8.60	1.00	21.68		
	597	G-25	Ⅷa	石斧	黒曜石	4.80	9.65	1.30	37.04		
	598	J-1	Ⅷ	削器	頁岩	3.30	8.90	0.90	23.14		
	599	K-27	Ⅷ上	削器	黒色安山岩	4.90	5.00	1.00	22.61		
78	600	K-29	Ⅷ	削器	チャート	5.10	2.60	1.00	15.23		
	601	L-29	VI	削器	黒白石	3.70	3.80	1.00	12.30		
	602	H-31	Ⅷ	削器	黒色安山岩	4.50	4.75	1.05	15.50		
	603	K-27	VI	削器	黒色安山岩	3.15	2.50	0.55	4.70		
79	604	L-29	VI	削器	黒色安山岩	2.50	3.30	1.10	7.30		
	605	H-26	VI	削器	黒色安山岩	1.60	2.70	0.50	1.74		
	606	S-T	Ⅷ上	削器	黒色安山岩	1.80	3.45	0.45	2.51		
	607	L-29	Ⅷ	削器	黒色安山岩	2.90	4.05	1.00	9.23		
	608	H-28	VI	削器	黒色安山岩	3.20	3.30	1.10	15.20		
	609	F-32	Ⅷ	削器	頁岩	7.90	7.00	2.00	79.80		
	610	54 T	Ⅷ	鎌状	黒曜石	4.50	6.70	2.20	47.20		
	611	H-30	VIa	鎌状	硬砂岩	2.30	2.85	0.70	2.90		
	612	L-32	Ⅷ上	鎌状	黒曜石	3.90	2.70	2.00	14.80		
	613	G-30	Ⅷ	鎌状	黒曜石	2.10	1.45	0.40	1.10		
	614	H-33	Ⅷ	櫛形石部	黒曜石	2.15	1.75	1.10	3.20	櫛指状	
	80	615	E-32	Ⅷ	櫛形石部	チャート	2.20	2.45	0.90	6.70	
616		G-26	Ⅷa	櫛形石部	黒色安山岩	3.30	2.00	1.00	7.30		
617		J-31	Ⅷ上	葉状	黒曜石	(3.30)	2.10	0.70	4.50		
618		H-28	Ⅷa	小型前歯状石部	黒色安山岩	3.10	2.50	0.75	7.40		
619		N-39	Ⅷ	小型前歯状石部	黒色安山岩	(4.40)	2.70	0.50	11.10		
620		N-31	Ⅷa	小型前歯状石部	黒色安山岩	3.70	2.10	0.80	7.30		
621		H-32	Ⅷ	小型前歯状石部	黒色安山岩	2.90	2.80	1.00	6.00		
622		M-28	Ⅷ	小型前歯状石部	黒曜石	1.85	1.20	0.70	1.50		
623		L-32	Ⅷ	鎌状	頁岩	12.25	11.00	3.20	468.00		
624		K-27	Ⅷ	砂岩	砂岩	13.40	7.70	2.30	510.00		
81		625	G-25	Ⅷ	砂岩	砂岩	9.65	11.65	3.60	464.00	
		626	I-25	VI	砂岩	頁岩	8.70	8.10	3.70	369.00	
	627	I-30	Ⅷ	砂岩	ポルフィユルス	9.70	11.20	2.70	463.00		
	628	H-34	Ⅷ	砂岩	安山岩	10.30	9.40	4.10	550.00		
82	629	F-32	Ⅷ	砂岩	黒色安山岩	9.90	7.80	4.00	528.00		
	630	H-32	Ⅷ	砂岩	ポルフィユルス	12.40	9.50	4.20	528.00		
	631	H-31	Ⅷ	砂岩	ポルフィユルス	9.50	15.20	3.40	530.00		
	632	J-29	Ⅷ	砂岩	安山岩	8.10	15.65	3.00	418.00		
83	633	J-31	Ⅷ	砂岩	安山岩	7.40	14.90	4.00	514.00		
	634	K-31	Ⅷ上	砂岩	ポルフィユルス	8.95	13.55	3.65	495.00		
	635	J-23	Ⅷa上	砂岩	ポルフィユルス	9.80	10.85	3.60	485.00		
	636	H-27	Ⅷ	砂岩	頁岩	16.70	10.40	2.50	786.00		
84	637	54 T	Ⅷ	磨石	黒色安山岩	3.40	2.85	0.50	3.38		
	638	J-29	Ⅷ	磨石	黒色安山岩	1.80	1.80	0.45	1.34		
	639	J-30	VI	磨石	黒曜石	(2.30)	(1.05)	0.50	1.20		
	640	J-30	Ⅷ	使用痕跡片	結實頁岩	3.20	3.30	0.70	7.70		
	641	M-29	VI	加工痕跡片	黒色安山岩	2.60	1.65	0.40	1.50		
	642	J-29	Ⅷ	加工痕跡片	黒色安山岩	2.05	0.80	0.40	0.70		
	643	K-28	Ⅷ	加工痕跡片	黒色安山岩	2.30	1.50	0.80	2.86		
	644	L-36	Ⅷ	加工痕跡片	黒色安山岩	(2.60)	0.90	0.30	0.60		
	645	54 T	Ⅷ	石核	黒色安山岩	3.65	6.50	3.40	106.00		
	646	K-27	Ⅷ	使用痕跡片	黒色安山岩	2.70	2.80	0.70	4.00		
	647	J-32	Ⅷ上	石核	黒色安山岩	2.20	3.00	1.10	10.00		
	85	648	J-29	Ⅷ	石核	黒色安山岩	2.20	2.60	1.30	7.30	
649		H-27	VI	石核	黒色安山岩	3.60	4.50	1.00	18.10		
650		L-28	VI	石核	黒曜石	2.80	3.25	1.20	8.90		
651		4 T	Ⅷ	磨石	砂岩	10.30	7.20	4.00	515.00		
652		G-33	Ⅷ	磨石	砂岩	10.10	7.60	4.95	550.00		
653		54 T	Ⅷ	磨石	安山岩	9.40	7.65	3.80	359.00		
654		M-32	Ⅷa	磨石	砂岩	6.40	4.10	3.45	110.84		
655		M-29	Ⅷ	磨石	砂岩	6.27	5.40	4.50	214.69		
656		K-29	Ⅷ	磨石	砂岩	5.90	4.90	4.34	170.77		
657		54 T	Ⅷ	磨石	安山岩	4.65	4.10	3.60	100.91		
658		H-34	Ⅷ	磨石	安山岩	10.70	9.10	6.20	464.00		
86		659	G-33	Ⅷ	磨石	安山岩	9.30	6.30	4.30	377.00	
	660	H-32	Ⅷ	磨石	安山岩	10.70	8.80	4.80	602.00		
	661	J-29	Ⅷ	磨石	安山岩	9.20	7.50	5.60	489.00		
	662	I-34	Ⅷ	磨石	安山岩	9.40	6.70	4.00	385.00		
	663	H-34	Ⅷ	磨石	安山岩	9.90	7.90	4.90	414.00		
	664	J-36	VI	磨石	安山岩	6.80	6.10	3.20	189.00		
	665	H-34	Ⅷ	磨石	花崗岩	7.20	7.30	3.40	256.00		
	666	J-34	Ⅷ	磨石	安山岩	7.40	8.10	4.70	394.00		
	667	H-31	Ⅷ	磨石	砂岩	5.30	3.90	2.90	71.00		
	668	H-29	Ⅷ	磨石	安山岩	6.70	4.90	3.30	161.00		
	669	F-31	Ⅷ	磨石	砂岩	10.60	7.20	1.40	158.00		
	87	670	J-23	VI	石皿	安山岩	(17.30)	(10.40)	5.00	1300.00	
671		J-24	Ⅷ	石皿	安山岩	36.30	27.60	19.30	1360.00		
672		F-35	Ⅷ	石皿	安山岩	40.20	30.50	9.80	1900.00		
673		54 T	Ⅷ	石皿	安山岩	24.00	18.40	11.60	870.00		



4号落とし穴

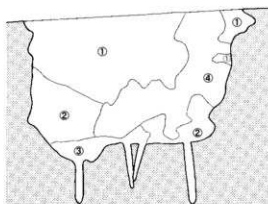


- ①暗褐色土 (アカホヤ軽石を含む)
- ②褐色土 (アカホヤ軽石を含む)
- ③黄褐色土 (アカホヤを多く含む)
- ④黒褐色土 (アカホヤ軽石を含む)
- ⑤樹痕

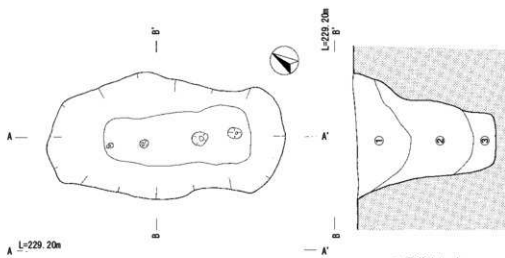


5号落とし穴

- ①黄褐色土 (P7を多く含む)
樹痕付近はやや暗い
- ②黒褐色土 (樹痕の影響色調変化)
- ③暗赤褐色土 (アカホヤを含む)
- ④樹痕

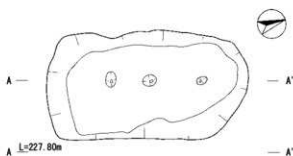
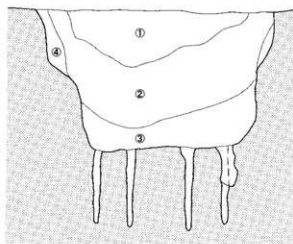


第93図 縄文時代中・後期の落とし穴 1



6号落とし穴

- ①P7に似た砂質土
- ②黄褐色土（灰黄色軽石層）
- ③黄褐色土（P7）＋黒褐色土（P13混）
（暗黄褐色土を含む）
- ④黄褐色土（アカホヤ火山灰）
＋灰黄色軽石層（P7を含む）



イ 土坑

縄文時代中・後期該当の土坑は18基検出された。

4号土坑 K-25区, IV b層上面で検出された。埋土は, IV b層の灰黄色軽石（P7）層がベースとなっていた。平面形は, 長楕円形で, 長軸105cm, 短軸60cm, 検出面からの深さが25cmを測る。

5号土坑 N-27区, IV b層上面で検出された。埋土は, 灰黄色軽石（P7）を含むオリーブ褐色土であった。平面形は, 直径30cmの円形で, 検出面からの深さが65cmを測る。

6号土坑 G-27区, IV b層上面で検出された。埋土は, 灰黄色軽石（P7）を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は, 直径40cmの円形で, 検出面からの深さが80cmを測る。

7号土坑 G-27区, IV b層上面で検出された。埋土は, 灰黄色軽石（P7）を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は, 直径25cmの円形で, 検出面からの深さが45cmを測る。

7号落とし穴

- ①黄褐色土（P7にオリーブ褐色土混）
- ②オリーブ褐色土＋P11（黄褐色土）
- ③黄色バミス＋黒褐色土（黄褐色火山灰に類似）



第94図 縄文時代中・後期の落とし穴2

8号土坑 H-24区, V b層で検出された。埋土は、灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、直径40cmの円形で、検出面からの深さが約70cmを測る。

9号土坑 J-25区, V b層で検出された。埋土は、灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、直径約40cmの円形で、検出面からの深さが80cmを測る。

10号土坑 J-25区, V b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、楕円形で、長軸30cm、短軸20cm、検出面からの深さが40cmを測る。

11号土坑 G-26区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、楕円形で、長軸30cm、短軸20cm、検出面からの深さが50cmを測る。

12号土坑 G-26区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、長楕円形で、長軸25cm、短軸20cm、検出面からの深さが30cmを測る。

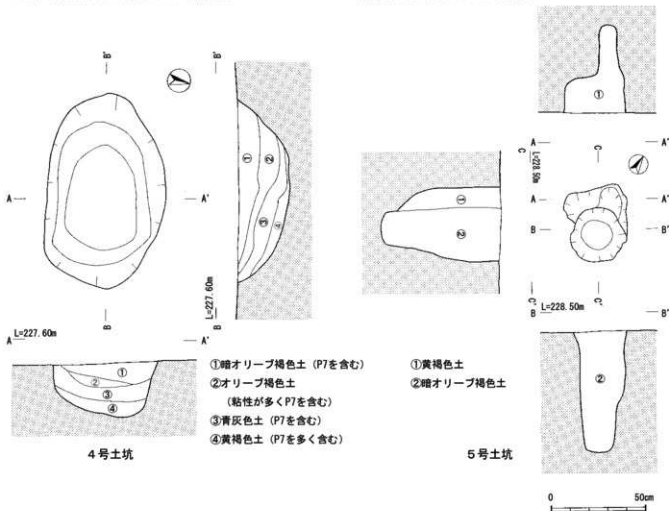
13号土坑 N-27区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、直径20cmのほぼ円形で、検出面からの深さが40cmを測る。

14号土坑 G-26区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、直径20cmの円形で、検出面からの深さが20cmを測る。

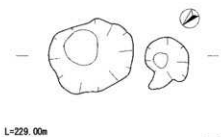
15号土坑 G-26区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、長楕円形で、長軸30cm、短軸15cm、検出面からの深さが30cmを測る。

16号土坑 G-27区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、直径35cmのほぼ円形で、検出面からの深さが35cmを測る。

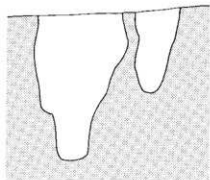
17号土坑 G-26区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、楕円形で、長軸40cm、短軸25cm、検出面からの深さが45cmを測る。



第95図 縄文時代中・後期の土坑 1

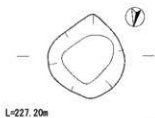


L=229.00m

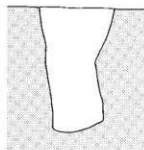


オリーブ褐色土
(P7を含む)

6・7号土坑

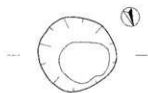


L=227.20m

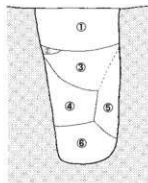


暗オリーブ褐色土
(P7を少し含む)

8号土坑



L=207.60m

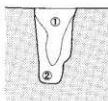


9号土坑

- ①オリーブ褐色土 (P7を含む)
- ②アカホヤ次層石
- ③暗オリーブ褐色土 (P7を含む)
- ④明青灰色土 (P7を多く含む)
- ⑤暗オリーブ褐色土 (黒色土のブロックを多く含む)
- ⑥暗青灰色土 (P7を含む)



L=227.60m

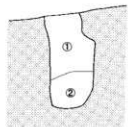


10号土坑

- ①オリーブ褐色土 (P7を含む)
- ②オリーブ褐色土



L=228.80m

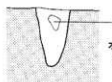


- ①オリーブ褐色土 (P7を含む) (黒色土のブロック含む)
- ②オリーブ褐色土 (P7を少し含む)

11号土坑

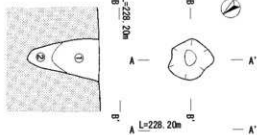


L=228.80m



12号土坑

- P7
- オリーブ褐色土 (黒色土のブロックを含む)



L=228.20m

L=228.20m

- ①暗オリーブ褐色土 (P7を含む) (黒色土のブロック含む)
- ②暗オリーブ褐色土 (P7を少し含む)

13号土坑

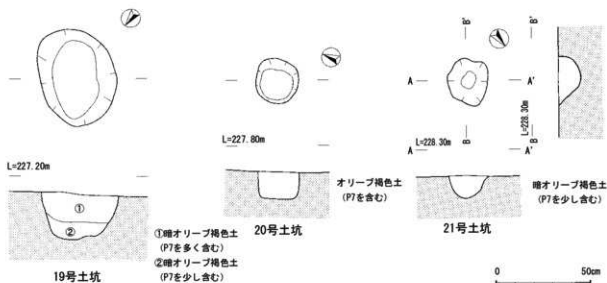
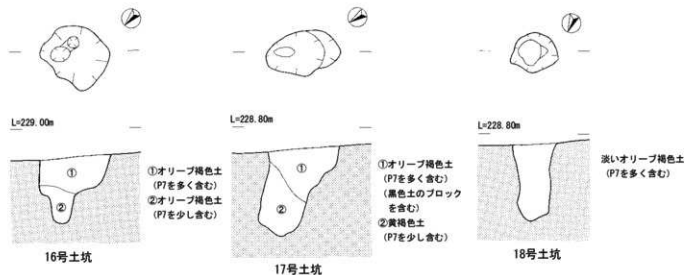
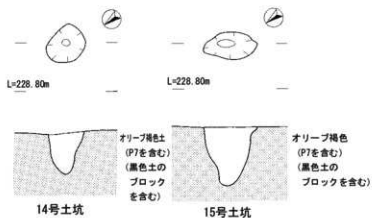
第96図 縄文時代中・後期の土坑 2

18号土坑 G-26区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、直径20cmの円形で、検出面からの深さが40cmを測る。

19号土坑 N-27区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土がベースとなっていた。平面形は、楕円形で、長軸50cm、短軸40cm、検出面からの深さが15cmを測る。

20号土坑 J-25区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、直径25cmの円形で、検出面からの深さが15cmを測る。

21号土坑 N-27区, IV b層で検出された。埋土は灰黄色軽石(P7)を含むオリーブ褐色土の単一層であった。平面形は、楕円形で、直軸25cm、短軸20cm、検出面からの深さが10cmを測る。



第97図 縄文時代中・後期の土坑 3

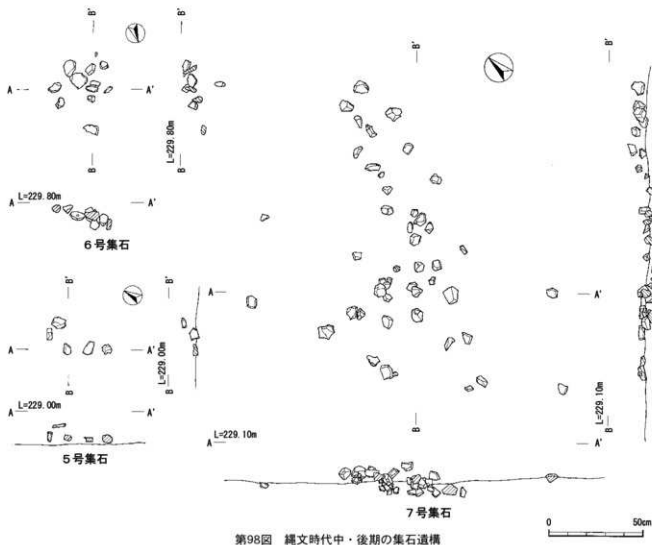
ウ 集石遺構

縄文時代中・後期該当の集石遺構は3基検出された。3基とも遺構の時期を特定するような他の遺構は確認されず、また、検出面や遺構周辺の出土遺物等でも特定することが困難であったため、遺構の詳細な時期については不明である。

5号集石 M-28区, IV a層で検出された。下部に掘り込みは見られず、礫は長軸35cm, 短軸20cmの範囲に平面的に広がって検出された。遺構を構成している礫は、数が5個, 石材は安山岩が多くを占めていた。

6号集石 M・N-39区, IV a層で検出された。下部に掘り込みは見られず、礫は長軸45cm, 短軸35cmの範囲に平面的に広がって検出された。遺構を構成している礫は、数が12個, 石材は花崗岩と凝灰岩だけで、花崗岩が多くを占めていた。

7号集石 M-28区, IV a層で検出された。下部に掘り込みは見られず、礫は長軸170cm, 短軸165cmの範囲に平面的に広がって検出された。遺構を構成している礫は、数が48個, 石材は安山岩が多くを占めていた。



第98図 縄文時代中・後期の集石遺構

第26表 縄文時代中・後期の集石遺構観察表

集石No.	検出区	検出層	長軸 (cm)	短軸 (cm)	掘り込み	礫数	構成礫の石材別個数				被熱痕跡のある礫数 (重複あり)			平均重量 (g)	備考	
							安山岩	凝灰岩	頁岩	砂岩	花崗岩	スス	ひび			赤化
5	M-28	IV a	35	20	無	5	3	1	0	0	1	0	1	4	131.3	
6	M-39	IV a	45	35	無	12	0	2	0	0	10	1	7	36	182.5	
7	M-28	IV a	170	165	無	48	17	8	6	10	7	0	8	6	143.9	

(3) 遺物

ア 土器

中期の土器 (第99・100図 674～681)

中期の土器を8点図化した。主たる出土層はV a層であるが、IV a層から出土したのものもある。

出土層、器形、文様体等から8点とも全て深浦式土器に比定できる土器である。

674～676は深鉢の口縁部である。674は口縁部がやや外傾し、内外面とも貝殻連点文と横位の貝殻条痕が施されている。口唇部には棒(串)状の施文具による刺突文が施されている。675は外傾する口縁部をもち、口縁部内面に貝殻連点文が施されている。口唇部は棒(串)

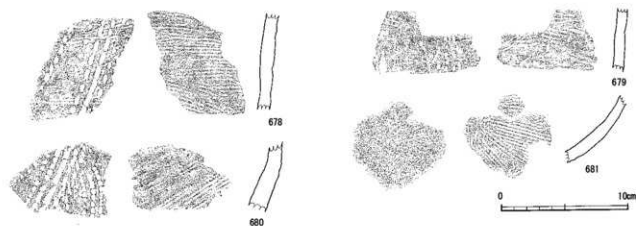
状の施文具による刺突文が施されている。676は口縁部が外反する。主な文様構成は縦位の貝殻連点文と横位の突帯文で、縦位の貝殻条痕も施されている。突帯は貝殻連点文が施されており、口縁部に3条、頸部に2条巡らされている。口唇部は刻み目が施されている。

677～680は深鉢の胴部である。677は外面に横位の貝殻条痕の上に斜位の貝殻連点文が「く」「逆く」の字状に施され、交差する箇所も観察できる。678～680は縦位ないし斜位の貝殻連点文が施されているが、677よりも小片のため情報が少なく全体的な文様は不明である。

681は底部に近い破片である。内外面とも貝殻条痕による調整が施されている。



第99図 縄文時代中期の土器 1



第100図 縄文時代中期の土器 2

第27表 縄文時代中期の土器観察表

採掘 番号	出土 区	層	器種	部位	色調		器面調整		胎土					焼成	取上番号	備考		
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石				その他	
99	674	1-29	Va	深鉢	口縁部	赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	4356	
	675	1-29	Va	深鉢	口縁部	明褐色	にぶい赤褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	4368	
	676	G-35	IVa	深鉢	口縁部	赤褐色	にぶい褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	3926・3928・3931・3932・3933	
	677	1-29	Va	深鉢	胴部	灰褐色	にぶい赤褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	227・228・4332・4333・4339	
	678	1-29	Va	深鉢	胴部	赤褐色	赤褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	4354	
100	679	0-39	Va	深鉢	胴部	赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	3935・3938	
	680	L-37	IVa	深鉢	胴部	灰褐色	にぶい赤褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	10197	
	681	1-29	Va・VI	深鉢	底部付近	にぶい赤褐色	赤褐色	ナデ・貝殻条痕	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	4397・442・4470	

後期の土器 (第101図 682～685)

後期の土器を4点図化した。主たる出土層はIV層である。

682はやや外傾する深鉢の口縁部である。文様は外面に貝殻押し連続文と段差をもつ横位の幅広沈線文が施されている。器面調整は外面がナデ、内面が貝殻条痕である。器形や文様等から判断すると岩崎上層式土器に比定できる。683は外反する深鉢の口縁部である。文様は外面に磨消縄文と横位の沈線文、内面の口唇部内側に横位の工具による沈線文が施されている。器面調整は内外面

ともナデである。器形や文様等から鐘崎式土器に比定できる。684は深鉢の口縁部で、断面が三角形に肥厚している。文様は外面に工具による連点文と沈線文が、内面の口唇内側に横位の沈線文が施されている。器面調整は内外面ともミガキ気味に仕上げ、研磨土器に近い。文様や器面調整等から中岳式土器に比定できる。685は外反する深鉢の口縁部で、断面が三角形に肥厚している。文様は外面にヘラ状工具による縦位の刺突連続文を施している。器面調整は外面が貝殻条痕、内面がナデである。器形や文様等から市来式土器に比定できる。



第101図 縄文時代後期の土器

第28表 縄文時代後期の土器観察表

採掘 番号	出土 区	層	器種	部位	色調		器面調整		胎土					焼成	取上番号	備考		
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石				その他	
101	682	H-32	横鉢	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	黄褐色・沈線	黄褐色・沈線	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	7558	IV a 該当層
	683	2 T	IV b	口縁部	にぶい黄褐色	黄褐色	磨消縄文・沈線	磨消縄文・沈線	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	340	口唇部は縄文
	684	—	表採	口縁部	褐色	褐色	ナデ・沈線	ナデ・沈線	ナデ・貝殻条痕	○	○	○	○	○	○	良	—	
	685	—	横片	口縁部	にぶい赤褐色	にぶい褐色	沈線・爪形文	沈線・爪形文	ナデ・磨消縄文	○	○	○	○	○	○	良	—	

イ 石器

中・後期の石器は、発掘区のほぼ全面から満遍なく出土している。器種による片寄りも見いだせない。ただし、図化できるような遺物は、第102図に示すように若干の空白域をもって出土している。

なお、表土や掘込層からの採集品のうち、明らかに縄文時代の所産と判断できる石器については、早期の石器として扱うよりも層位的に近い中・後期の石器として扱うべきと考え、ここで叙述する。

ア) 中・後期包含層中の石器

石鏃 (第103図 686～704)

686はタンバク石の剥片を素材とする石鏃である。ガス孔や不純物があり良質の素材ではない。周縁からの調整剥離は体部中央まで届かず、厚みを減ずるには至っていない。基部の調整はほとんど施されず、円基に作っている。素材の厚みを活かしてこのように仕上げたものであるうか。

687は黒色安山岩の剥片素材の石鏃である。頭部を重くするためか、素材剥片のバルブ部分が先端になるように作ってある。裏面基部に二つの大きめの調整剥離が施され、小さい基部を作り出した有茎の石鏃であるのが特徴である。有茎の石鏃は、南九州では類例が少ない。

688は不純物の少ない良質の黒曜石を用いており、丁寧な器面調整と精緻な鋸歯縁が特徴的である。抉りの浅い凹基で、左脚はごく微かに欠損している。

689は黒色安山岩の剥片を素材とするもので、器面調整や周縁の刃部調整は丁寧である。基部は表裏とも一回の剥離で抉りを作り、抉入部分の縁辺をチッピングして、逆刺を鋭く仕上げた浅い凹基式である。頭部を微かに欠損している。

690は黒曜石の剥片を素材とするもので、素材に難があるためか、器面調整はやや粗いものの、周縁調整は精緻であり、それによって作り出された側縁形状に特徴がある。中央やや下寄りに三角形の突起が作られ、中・後期に散見されるいわゆるロケット鏃のような形状となっている。基部は689と同じ形状であるが、抉りの剥離が最後に入っているのが観察できる浅い凹基式である。

691は良質の黒曜石を用いた剥片鏃である。器面調整を行わず、周縁調整のみで形状と刃部を作ったものである。縄文時代早期に多い石鏃であるが、この時期の出土例は珍しい。

692は黒色安山岩の剥片を素材とするもので、器面調整、周縁の刃部調整共に丁寧な作りの凹基鏃である。裏面中央下に研磨が施されているが、器面調整として施されたものであろう。このような局部磨製石鏃は縄文時代草創期から早期前葉にかけては類例があるものの、この時期の類例については寡聞にして聞いたことがない。初例であるかもしれない貴重な出土例である。

693は姫島産黒曜石の剥片を素材とするもので、器面調整も丁寧であり、側縁には精緻な調整剥離で三角形の突起を三つ作りだし、大ぶりの鋸歯縁に仕上げている。残念なことには右側縁の一番上の突起は尖端がごく微かに欠損している。692までの石鏃よりは基部は深く作り、逆刺は丸みを帯びて仕上げられている。

694は黒色安山岩製であり、ていねいな周縁調整で側縁を直線的に仕上げている。抉りの深い凹基式であるが、右脚を欠損する。

695も黒色安山岩製で、器面調整や周縁調整に比べ基部の抉りが急角度で施してあり、脚は左右非対称である。

696も黒色安山岩製で、側縁に二つの三角形の突起をつけ、大ぶりの鋸歯縁を作っている深い凹基の鋸歯縁鏃である。体部に比べ、脚部は薄くなっている。

697はチャート製で、右側縁下部は明瞭な鋸歯縁を呈するが、左側縁は鋸歯縁が明瞭でない。また、器面調整もやや雑である。尖端と左脚を欠損する。

698は黒色安山岩製で、脚の長いタイプの凹基式鏃である。左脚を欠損する。

699～704は石鏃の破片である。699～701は黒色安山岩、702・704は黒曜石、703は珪質頁岩製である。699は先端部への衝撃で裏面中央が剥離され、さらに、ケトル・バツとして左脚を截断したようである。703・704は鋸歯縁鏃の破片で、703は脚の下端まで鋸歯縁を施した類例の少ないものである。

石錐 (第103図 705)

705は頁岩のやや厚めの剥片を素材とする石錐である。表面上半分には平坦剥離による器面調整があり、裏面右側は階段状剥離になっている。錐刃は表裏両面右側からの小剥離で作られており、先端が折れる形状を呈する。

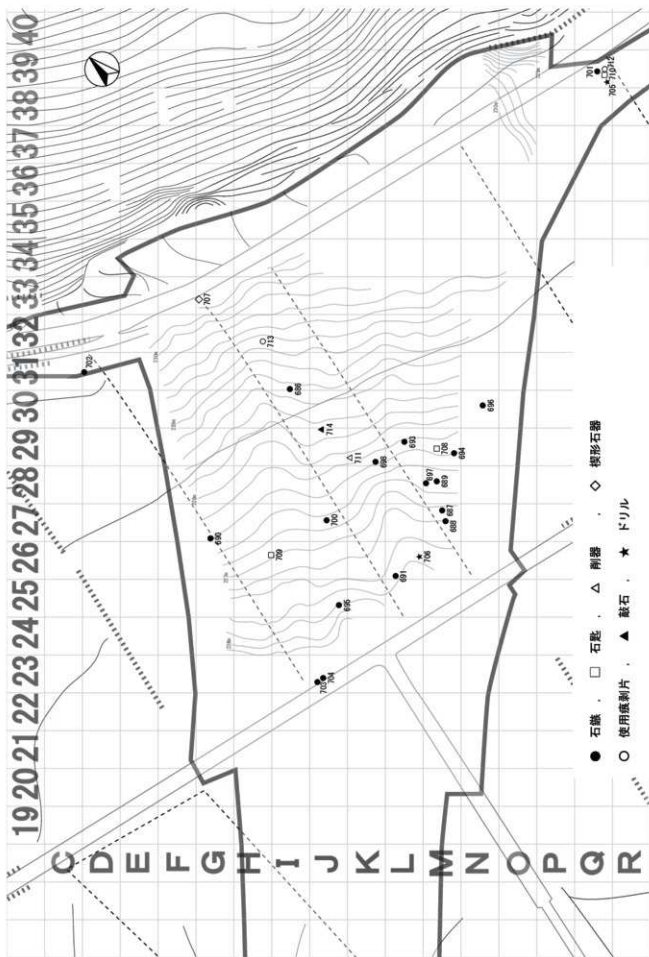
楔形石器 (第103図 707)

707はタンバク石の剥片を素材とする楔形石器である。表面は周囲からの平坦剥離によって器面調整され、裏面では上縁と右側縁からの階段状剥離が目立つ。

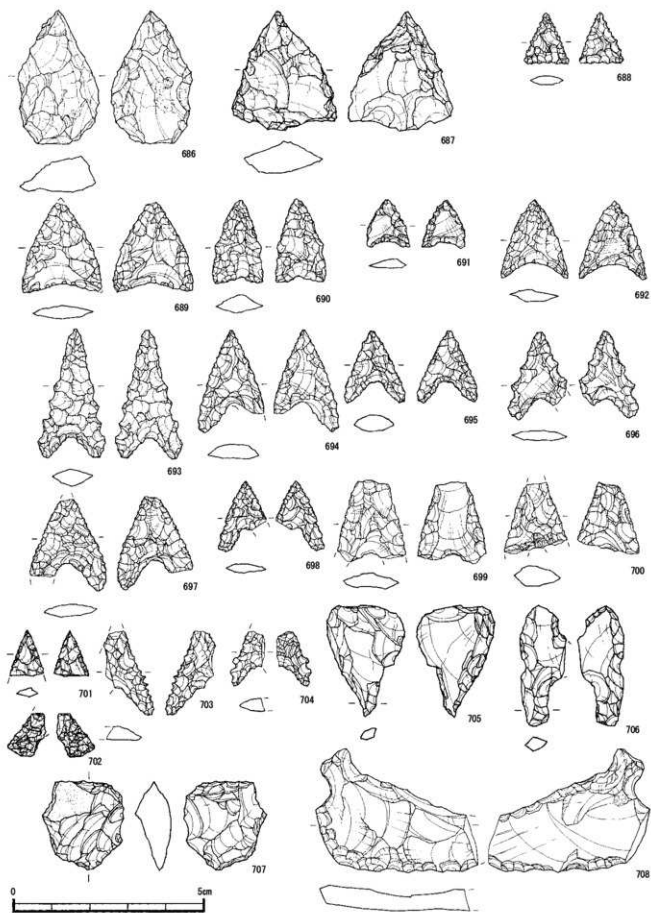
石匙 (第103・104図 708～710)

708は黒色安山岩の横長剥片を素材とするもので、つまみ部の裏面が素材剥片のポジティブバルブであろう。その下にはバルブ・スカーが見える。左側面は素材剥片の側面を残したままである。おそらく、表面も器面調整ではなく、素材剥片の背面をそのまま残しているようである。石匙としての加工はつまみ部の作り出しと表面左側縁、裏面上縁の整形剥離と刃部調整の剥離だけである。左端は調整剥離を切るように折れており、作成中もしくは完成後の折れであることが分かる。また、素材剥片の形状のまま刃部が反った横型の石匙である。

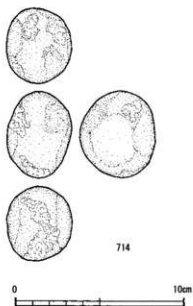
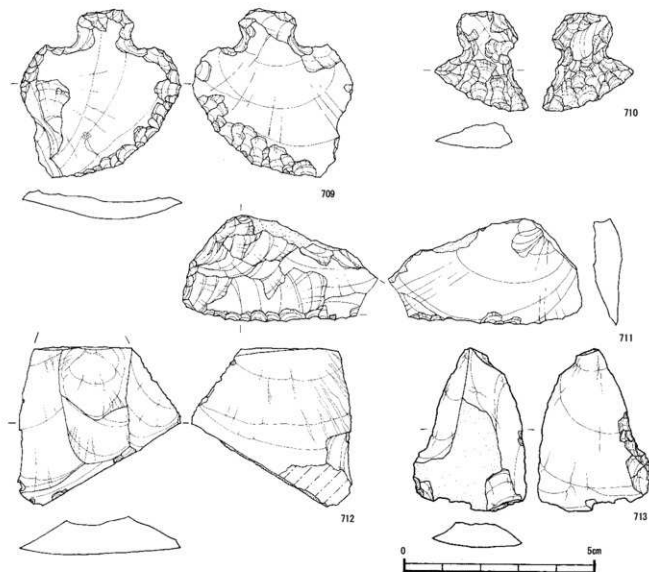
709も黒色安山岩の横長剥片を素材とするもので、708と同様につまみ部裏面に素材剥片のポジティブバルブが残る。このバルブを利用して厚みのあるつまみを作



第102図 縄文時代中・後期の石器出土状況



第103図 縄文時代中・後期の石器 1



り出し、周縁に刃部加工を施して斜刃型の石匙に仕上げ
てある。708と同様簡略的に作られた印象である。

710はチャート製で、全体的な形状から方形に近い剥
片を素材としているかと思われる。708・709とは逆
に素材のポジティブバルブを体部にし体部全面に器面調整
を施し、刃部調整も丁寧である。つまみは大ぶりに作っ
てあるが、周縁調整のみで体部に比べればやや雑な作り
である。また、刃部幅2.6cmと小さめのサイズである。

削器 (第104図 711)

711は黒色安山岩の縦長剥片を素材とするもので、表
面左側に複数見える平坦剥離は素材剥片に先行する剥離
であり、裏面にはポジティブバルブ等がそのまま残る。
このような剥片に刃部調整を加えただけの簡素な作りの
削器である。先端部を欠く。

使用痕剥片・加工痕剥片・敲石 (第104図 712)

712は流紋岩の縦長剥片で、末端部分である。右側縁

第104図 縄文時代中・後期の石器2

に多数の微細剥離痕が残る。

713 は黒色剥片の縦長剥片で、表面左の縦の剥離は、この剥片剥離の際に頸部がはじけた剥離であり、この剥片に加えられた剥離ではない。この剥片の加工は表面左側縁下部と裏面右側縁下部に見られる平坦剥離であり、あたかも石匙のつまみを作り出したかのような印象を受ける。製作途中で放棄されたものであろうか。

714 は安山岩の亜円礫を用いた敲石である。端部に敲打痕を多数残す。

イ) 表土・攪乱層採集の石器

石鏃 (第 105 図 715～738)

715・716 はチャート製で抉りの深い凹基である。器面調整が丁寧な施されており、素材剥片の形状は不明である。716 は両側縁に細かな鋸歯縁を作り出している。

717・718 は黒曜石製でこれも抉りの深い凹基で、見事な斜行平行剥離によって器面調整、刃部形成が施され、718 は細かな鋸歯縁となっている。

719 は珪質頁岩製で、抉りの浅い凹基である。表面は器面調整が器体中央まで延びるが、裏面は器体中央に素材剥片の腹面を残す。刃部の調整は左側縁の方が丁寧であり、みごとな鋸歯縁を作り出しているが、右側縁は剥離が乱れ、鋸歯縁が整っていない。

720 も珪質頁岩製で、抉りの浅い凹基である。不純物の多い部分の剥片であったためか、器面調整がうまくいかず、先端部にかけて分厚くなっている。特に、右側縁からの剥離は節理面で止まり階段状剥離になっている。先端の欠損は、剥離の切り合いから完成後のようである。

721 はチャート製で、浅い凹基である。刃部は鋸歯縁に作ってある。先端の欠損は、剥離の切り合いから完成後のようである。

722 は頁岩製で抉りの浅い凹基である。先端の軸縁と体部・基部の軸縁が一致しない。また、左側縁はチッピングによる最終調整が成されているのに右側縁にはそれが観察できない。これらのことから、この石鏃は、製作途中でであったと見た方が妥当であろう。

723～725 は大ぶりのサイズの凹基の石鏃である。723 は頁岩製、724 は黒曜石製、725 は黒色安山岩製である。

723 と 724 は器面調整・刃部形成共にやや粗い調整であり、両側縁が若干外湾している。725 は表面に礫皮面を、裏面に素材剥片(縦長剥片)の腹面を残し、素材剥片のポジティブバルブを除去する剥離を除けば、刃部調整のみの加工であり、基部は、抉入と脚の調整が不整合で終わり、右脚が折れている。これらのことから緩く外湾する側縁に仕上げられている。先端の欠損は完成後であるが、制作途中での放棄のような印象が強い。

726 はチャート製で、緩く外湾する側縁に仕上げられ、脚が左右対称になっている。

727 は礫岳産黒曜石製で、裏面は器面調整で素材剥片

のポジティブバルブを除去できておらず、右脚裏面は素材剥片が薄かったためか、調整剥離は施されていない。周縁はチッピングによって最終調整されている。石鏃の作製に難がある素材を、押圧剥離の技術で作り上げた印象のある石鏃である。

728・730・731・732・735 は全形が分からないほど大きく欠損したものである。特に、732 は右脚だけであるが、その特異な大きさに留意したい。

729 は黒色安山岩製で、調整剥離は723と同様な特徴を持つが、右側縁が若干内湾する。

733・734 は黒色安山岩製で、薄く丁寧な作りであり、733 は片脚の作り、734 は外湾側縁に特徴がある。

736 は黒色安山岩製、737 は頁岩製であるが、これらも素材剥片のポジティブバルブ除去が上手にできておらず、分厚く偏った断面形を呈する。また、736 は外湾側縁であり、737 は内湾側縁である。しかしながら、調整剥離の全体的な様態から、石鏃型の石鏃には分類しがたい。

738 は礫岳産の黒曜石製の石鏃未製品で、作製段階を知る貴重な資料である。素材剥片は、裏面のリング等から判断するとこのサイズの信ほどのようである。

搔器 (第 105 図 739)

739 は涎垢器と言われるチャート製の搔器である。器体より大きな剥片のバルブ部分を用いていることが、まず特徴的であり、次に、両側縁と上縁に刃部があることに特徴がある。搔器は通常1側縁だけに刃部を作るものであるが、これは3側縁に刃部を持つ。側縁刃部の搔器特有の潰れが著しい。

石匙・楔形石器・石鏃 (第 106 図 740～743)

740 は珪質頁岩製の楔型で、体部左右両端は欠損している。つまみの作りだしは入念に行っているが、刃部調整は素材剥片のエッジを活かすように表面だけである。

741 はチャート製の上野原型である。つまみ部の上縁に浅い抉りを意図したような剥離がある。

742 は黒曜石の楔形石器であり、左右両側縁の階段状剥離が著しい。剥離の切り合いから、上下両端は素材剥片を截断したものである。

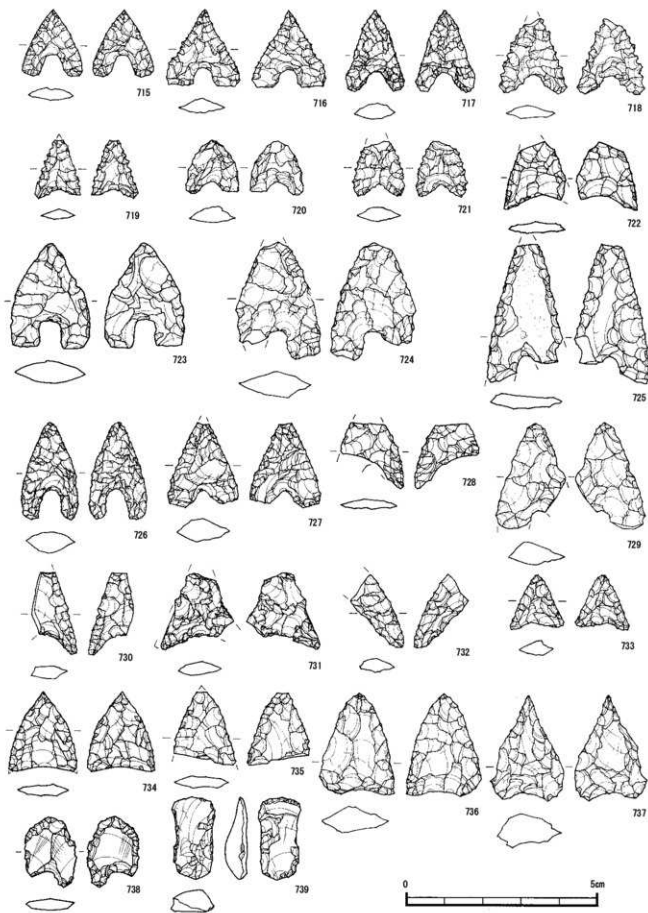
743 は黒曜石の断面三角形になる剥片を利用した石鏃である。刃部は三面からの剥離で作られ、先端に使用による刃こぼれか、種族剥離に近い小剥離がある。

石棒 (第 106 図 744)

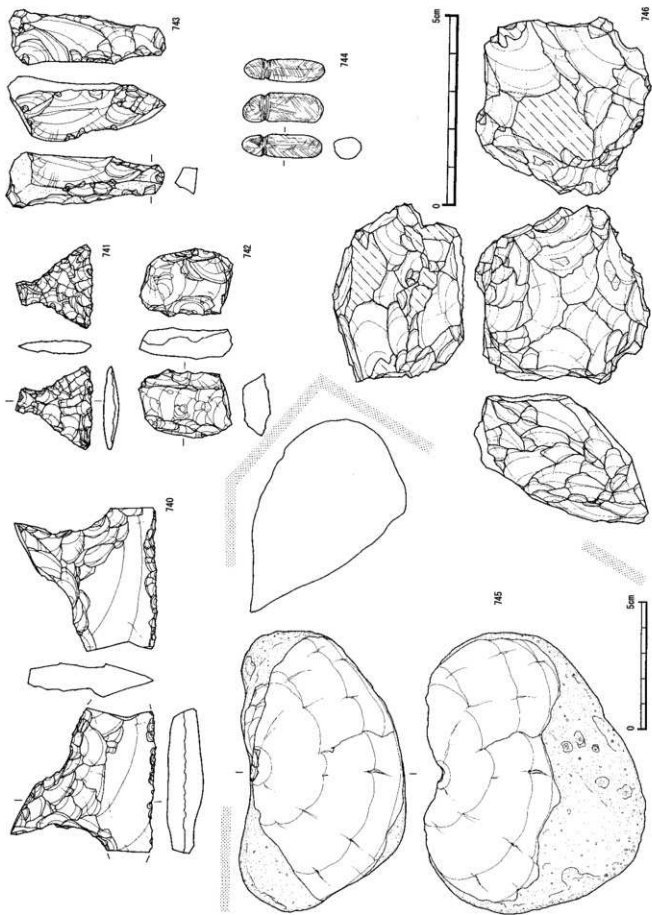
744 は極小サイズの石棒である。素材となったのは砂岩で、断面形が鶏卵のような形で、長径が7mm、短径が5mmあり、長さは20mmである。上端がやや湾曲し、そこに一条の溝が切っており、男性器を上手に表現している。

石核 (第 106 図 745・746)

745 は日東産の黒曜石製、746 はタンバク石製の石核である。745 は円礫を截断しただけで終わり、対照的に746 は盤状になるまで剥片剥離を行っている。



第105図 表土・攪乱層の石器 1



第106図 妻土・掘乱層の石器2

第29表 縄文時代中・後期の石器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
103	686	I-30	V a	石織未製品	蛋白石	3.50	2.15	0.95	6.52	
	687	M-27	VI	石織未製品	黒色安山岩	3.10	2.75	0.85	4.85	
	688	M-27	IV	石織	黒曜石	1.35	1.15	0.25	0.26	
	689	M-28	IV b	石織	黒色安山岩	2.40	2.10	0.40	1.54	
	690	2 T	IV a	石織	黒曜石	2.20	1.33	0.47	1.18	
	691	L-26	IV a	石織	黒曜石	1.25	1.15	0.25	0.25	
	692	H-25	IV a	石織	黒色安山岩	2.10	1.80	0.30	0.68	
	693	L-29	V a	石織	黒曜石	2.40	1.75	0.45	1.65	
	694	M-29	V a	石織	黒色安山岩	2.70	(1.70)	0.40	1.22	
	695	J-25	V a	石織	黒色安山岩	1.90	1.60	0.45	0.70	
	696	5 T	V b	石織	黒色安山岩	2.30	(1.55)	0.28	0.77	
	697	M-28	IV b	石織	チャート	(2.45)	2.00	0.35	1.20	
	698	K-29	V a	石織	黒色安山岩	1.85	(1.25)	0.25	0.39	
	699	H-26	V b	石織	黒色安山岩	(2.15)	(1.80)	0.43	1.45	
	700	J-27	V e	石織	黒色安山岩	(1.90)	(1.60)	0.55	1.42	
	701	Q-39	V a	石織	黒色安山岩	(1.20)	(0.90)	0.20	0.20	
	702	54 T	VI	石織	黒曜石	1.15	1.00	-	0.30	
	703	I-24	V a	石織	珧質頁岩	(2.20)	(1.30)	0.37	0.62	
	704	I-24	V b	石織	黒曜石	(1.45)	(0.90)	0.35	0.28	
	705	Q-39	V a	石織	頁岩	2.90	2.10	0.30	3.90	
	706	L-26	V c	石織	黒色安山岩	3.10	1.50	0.40	1.70	
707	G-33	IV a	楔形石器	蛋白石	2.30	2.10	1.00	5.40		
708	M-29	V c	石匙	黒色安山岩	3.25	4.25	0.70	8.31		
709	G-26	V b	石匙	黒色安山岩	4.45	4.20	0.50	8.88		
710	Q-39	V a	石匙	チャート	2.60	2.45	0.65	3.28		
711	K-29	V e	削器	黒色安山岩	2.80	(5.10)	0.75	9.58		
712	Q-39	IV a	削器	珧紋岩	(4.20)	4.20	1.70	20.30		
713	H-32	オウケシ	使用痕跡片	黒色安山岩	4.25	3.60	0.60	7.97		
714	J-29	V a	敲石	安山岩	5.10	4.40	3.80	112.00		

第30表 表土・攪乱の石器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
105	715	J-28	攪乱	石織	チャート	1.70	1.60	0.40	0.70	
	716	G-32	攪乱	石織	チャート	2.00	2.00	0.40	0.90	
	717	G-30	攪乱	石織	黒曜石	2.15	1.60	0.40	0.18	
	718	P-38	攪乱	石織	黒曜石	(2.00)	1.80	0.30	0.90	
	719	溝	-	石織	珧質頁岩	(1.50)	1.20	0.30	0.40	
	720	J-27	攪乱	石織	蛋白石	1.40	1.40	0.40	0.70	
	721	H-30	攪乱	石織	チャート	(1.50)	1.40	0.40	0.60	
	722	6 T	表探	石織	頁岩	(1.80)	(1.60)	0.30	0.80	
	723	G-31	表探	石織	頁岩	2.80	2.05	0.60	2.33	
	724	K-32	攪乱	石織	黒曜石	(3.10)	(2.20)	0.70	3.50	
	725	表探	-	石織	黒色安山岩	(3.60)	(2.00)	0.40	2.40	
	726	M-32	攪乱	石織	チャート	2.55	1.50	0.55	1.57	
	727	溝	-	石織	黒曜石	(2.20)	1.90	0.60	1.70	
	728	表探	-	石織	蛋白石	(1.70)	(1.70)	0.30	0.50	
	729	M-33	攪乱	石織	黒色安山岩	(2.80)	(1.80)	0.60	2.40	
	730	J-27	攪乱	石織	珧質頁岩	(2.20)	(1.20)	0.50	0.70	
	731	表探	-	石織	黒曜石	(2.00)	(1.90)	0.40	1.30	
	732	I-31	攪乱	石織	蛋白石	(1.90)	(1.40)	0.40	0.70	
	733	溝	-	石織	頁岩	1.40	1.40	0.40	0.50	
	734	8 T	攪乱	石織	黒色安山岩	2.10	1.80	0.20	1.00	
	735	I-29	攪乱	石織	黒色安山岩	(1.90)	(1.60)	0.20	1.00	
	736	H-31	攪乱	石織	黒色安山岩	2.70	2.00	0.70	2.90	
	737	H-29	攪乱	石織	頁岩	2.80	1.90	0.90	3.30	
	738	1 T	表探	石織	黒曜石	1.80	1.40	0.30	0.70	
	739	排土中	-	拇指状掘器	チャート	2.10	1.10	0.60	1.30	
	740	J-28	攪乱	石匙	珧質頁岩	3.80	(3.80)	0.90	10.60	
	741	G-27	-	石匙	チャート	2.00	2.20	0.40	1.30	
742	溝	-	楔形石器	黒曜石	2.40	1.80	0.80	3.70		
743	4 T	-	掘器	黒曜石	4.10	1.50	1.70	8.00		
744	溝	-	石棒	砂岩	2.10	0.60	0.80	1.20		
745	F-32	攪乱	石核	黒曜石	6.50	11.10	7.60	589.00		
746	I-28	攪乱	石核	蛋白石	4.60	4.70	3.40	70.00		

4 弥生時代の調査

(1) 調査の概要

弥生時代の該当層はⅢ層である。弥生時代の遺構は確認できなかった。弥生時代の遺物はⅢ層及びⅣ a 層から出土した。

(2) 遺物 (第 107 図 747～752)

弥生時代の遺物を 6 点図化した。

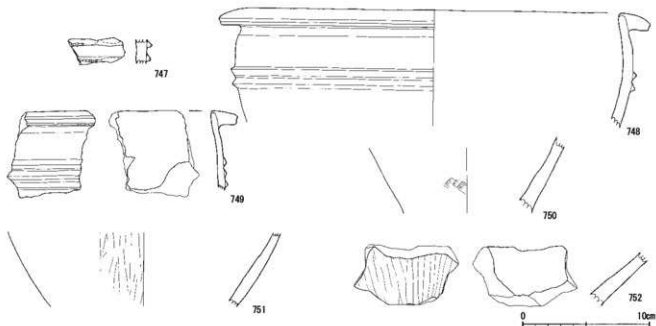
747 は下城式の甕で、口縁下の突帯部分である。暗褐色を呈し、2 条の刻目突帯が貼付されている。突帯間には板状工具によるナデ調整が施され、条線が確認できる。内面はナデ調整である。

748・749 は入来Ⅱ式の甕の口縁部である。いずれも暗褐色を呈し、金雲母を多く含むなど、大隅地域の弥生中期土器の特徴を良く示している。口縁部は短く張り出してやや垂下し、口縁端部は凹んでいる。口縁部から 4 cm ほど下がった所には三角形の突帯が廻っている。749 は外面は横位のナデ調整であるが、内面は使用または埋蔵によってナデ調整が剥落しておりザラザラしている。

口縁部上面には一部スズ状の付着物が認められる。胴部の突帯は二条である。749 は器壁が薄く、0.5cm ほどで 748 の半分ほどしかない。外面は横位のナデ、内面は横位と斜位のナデが施されている。胴部の突帯は三条以上である。

750 は甕の胴部片で、胴部と脚部の付け根あたりと思われる。金雲母を多く含んでいる。外面は、ハケ目調整のあとにナデが施されているが、完全に消されておらず、一部にハケ目が確認される。内面はナデ調整であるが、一部に輪積みした粘土紐を密着させた際のユビオサエの痕跡が認められる。胎土等の特徴から中期の土器と思われるが、様式は不明である。

751・752 は壺の胴部片と思われる。いずれも金雲母を多く含み、縦位のミガキが施されている。751 は器壁が薄く、内面に炭化した付着物が認められる。これらの特徴から甕の胴部片の可能性も考えられるが、外面調整などから壺と判断した。壺の場合、何らかの液状のものを煮沸した可能性も考えられる。



第 107 図 弥生時代の土器

第 31 表 弥生時代の土器観察表

補図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	器面調整		色調		胎土					焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	珪石				その他
107	747	G-27	攪乱	甕	口縁下	ナデ	ナデ	暗褐色	橙	○	○	○	○	○	○	良	—	
	748	K-25	Ⅲ b	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	○	○	○	○	○	○	良	1324 他	口径 34cm
	749	L-26	Ⅳ a	甕	口縁部	ナデ	ナデ	暗赤褐色	にぶい褐色	○	○	○	○	○	○	良	1396 他	
	750	—	表探	甕	胴部	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○	○	○	○	良	—	胴径 15.1cm
	751	L-26	Ⅳ a	壺	胴部	ミガキ	ナデ	橙	黒褐色	○	○	○	○	○	○	良	1397 他	胴径 21.2cm
	752	H-30	表探	壺	胴部	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	黒褐色	○	○	○	○	○	○	良	—	

5 近世以降の調査

(1) 調査の概要

本遺跡の近世の該当層はⅡ層であるが、道跡は渠道下から検出された。調査の結果、遺構は道跡1条が、遺物は陶磁器・煙管・寛永通宝等が確認された。

(2) 遺構

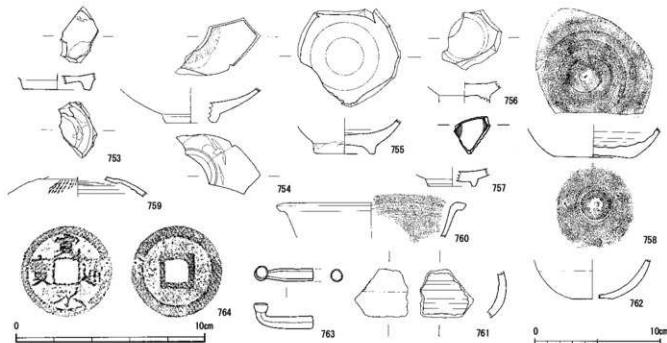
道跡 (第109図～第112図)

F～O-33～39区の渠道下から検出された。幅約2～3m、長さ約110mにわたって検出された。調査はA～Lまで12のミニトレンチを設定し断面を確認しながら、掘り下げを行った。調査の結果、数層の硬化面が溝状に形成され、最深部までは約50～60cmであった。遺構内遺物や断面から主たる硬化面の形成は、18世紀後半から現代にかけて少なくとも3～4回あり、幅を広げながら道の造成・改修が行われたことがうかがえる。

(3) 遺構内遺物 (第108図 753～764)

753～757は碗の底部片である。753は高台が断面逆

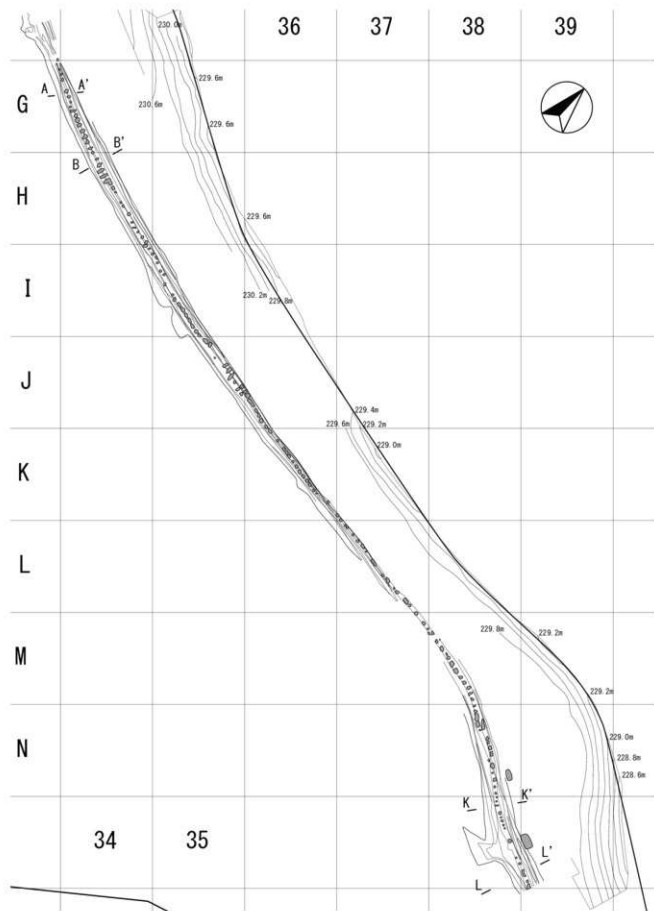
台形で皿付は無軸である。内面に砂目積みの痕が2か所残る。年代は17世紀第2四半期と考えられる。754は高台は断面台形で内面は軸葉を剥ぎ取っている。755の高台内側は緩やかな傾斜で削りだされている。軸葉は外面が高台外側までかかり、内面は蛇の目軸刺ぎを行っている。龍門司系の製品と考えられる。756の内面は蛇の目軸刺ぎを行っている。757は内面に青緑色の軸葉がかかり、蛇の目軸刺ぎが行われている。758はカラカラもしくは鉢などの底部片と考えられる。底部外面は切り離しの痕が、内面は溝状の成形痕が残る。龍門司系(加治木始良系)の製品と考えられる。759はカラカラなどの酒器の肩部片で外面に飛びカンナの文様が施される。龍門司系の製品と考えられる。760は島の顔用の鉢である。761は土版の胴部片で残存部下半は軸葉がかからない。内面は成形痕が筋状に残る。762は土版の底部片で外面の体部下半から底部は無軸である。763は煙管である。764は寛永通宝である。



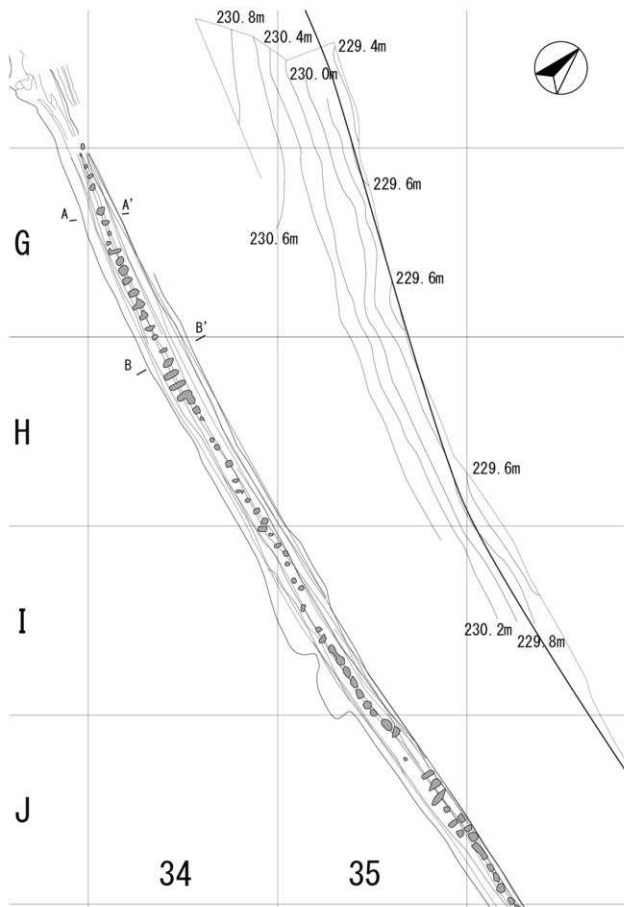
第108図 近世の遺構内遺物

第32表 近世の遺物観察表 (遺構内遺物)

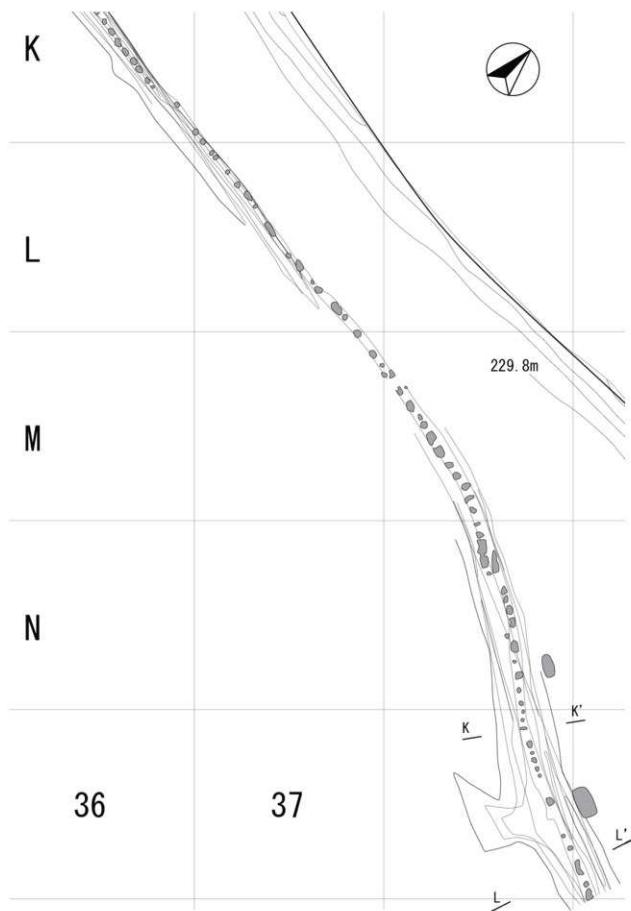
種別 番号	掲載 番号	種類	器類	器種	部位	法量 (cm)		色調	備考
						口縁径	底面径		
108	753	肥前	碗類	白磁碗	底部	5.4		灰黄	灰黄
	754	龍門司	碗類	白磁碗	底部	4		灰白	灰白
	755	龍門司系	碗類	碗	底部	4.8		黒褐	黒褐
	756	不明	碗類	碗	底部			灰黄	にぶい黄緑
	757	不明	碗類	碗 or 鉢	底部	3.8		にぶい黄緑	にぶい黄緑
	758	龍門司系	変形	からから or 鉢	底部	6.2		暗褐	にぶい黄緑
	759	龍門司系	瓶類	酒器(からから等)	肩部			オリーブ 褐	にぶい黄緑
	760	當代川	鉢類	島の顔用の鉢	口縁部	14.8		暗赤褐	にぶい赤褐
	761	當代川	水注類	土版	胴部			黒褐	黒褐
	762	當代川	水注類	土版	底部	3.2		黒褐	灰褐



第109図 近世以降の道跡 1



第110図 近世以降の道跡 2



第111圖 近世以降の道跡3

(4) 包含層出土遺物

ア 碗類 (第113図 765～770)

765は染付の小杯である。体部外面に文様が、高台外面には横線が描かれている。766は小杯である。高台は断面三角形を呈し、体部は腰が張り、口縁部は外反する。外面には緑色の釉薬をかけ、さらに内外面とも透明釉をかけている。畳付は釉薬が削られている。767の高台は外側がなだらかで、内側が直に整形されている。畳付には砂が付着している。内面は蛇の目軸剥ぎされ、砂が付着している。768は青磁染付碗の底部片である。内面と高台内は透明釉だが、外面は青磁釉がかかる。内面には花のような文様が描かれている。畳付は釉薬がかからず、赤くなっている。769は龍門司系の碗の口縁部片である。口縁部付近は白化胚土をかけ、その上から褐釉をかけている。770は肥前(京焼風)の底部片である。底部は高台が剥がれており、体部は外に開く。釉薬は黄色がかっており、細かな貫入がみられる。内面には文様が描かれている。

イ 皿類 (第113図 771～772)

771は溝縁皿の口縁部片である。口縁は水平方向に折れ、体部は中位で屈曲する。口縁内面は溝状に凹んでいる。体部内面は中位で削られて、圏線状に凹んでいる。年代は17世紀前半(1620～50年ごろ)である。772は色絵皿である。高台は断面三角形を呈し、口縁部は直口する。内面には見込みの花弁文を、体部には雷文に似た文様が描かれている。

ウ 鉢類 (第113図 773～780)

鉢 (773～774)

773は口縁部片である。外面に刷毛目の波状文が描かれている。774は鉢の口縁部片でL字状に折れ、口縁部直下には沈線が3条横位に巡っている。口唇部の釉薬は削り取られている。年代は18世紀後半と考えられる。

植木鉢 (775)

775は他の器種の可能性もあるが植木鉢の口縁部と考えられる。口縁部は一度外側に折り、その上に粘土を貼り付けて装飾を行っている。

摺鉢 (776～780)

776～777は口縁部片である。776は口縁部を外側に一度折り返して肥厚させ、口縁直下に突帯を2条貼り付けている。口唇部には釉薬はかからず、貝目の痕が残る。年代は堂平2期、17世紀後半と考えられる。777は口縁部を一度外側に折った後に内側に折り返しており、L字状を呈する。口唇部には釉薬はかかっていない。778は胴部片で、内面には櫛目が残っている。内外面に釉薬がかかっている。779～780は底部片で、内面には櫛目が残る。

エ 蓋類 (第113図 781～782)

781・782は蓋の口縁部片である。口縁部は一度外側に折った後に内側に折り返している。

オ 壺類 (第114図 783～784)

783は口縁部片である。口縁部はL字状に折れる。釉薬は口唇部のみかかっていない。784は壺の胴部片と考えられる。外面に横位の沈線が施されている。

カ 壺類 (第114図 785)

785は壺の肩部の破片である。外面には横耳の痕が残る。

キ 瓶類 (第114図 786～788)

786は肩部片である。外面には褐釉がかかる。787は底部片で萐萐底状を呈する。体部外面には釉薬がかかる。788は底部片である。胎土は白色であるが、外面には青磁釉がかかっている。外面には片切彫りで文様が描かれている。

ク 水注類 (第114図 789～793)

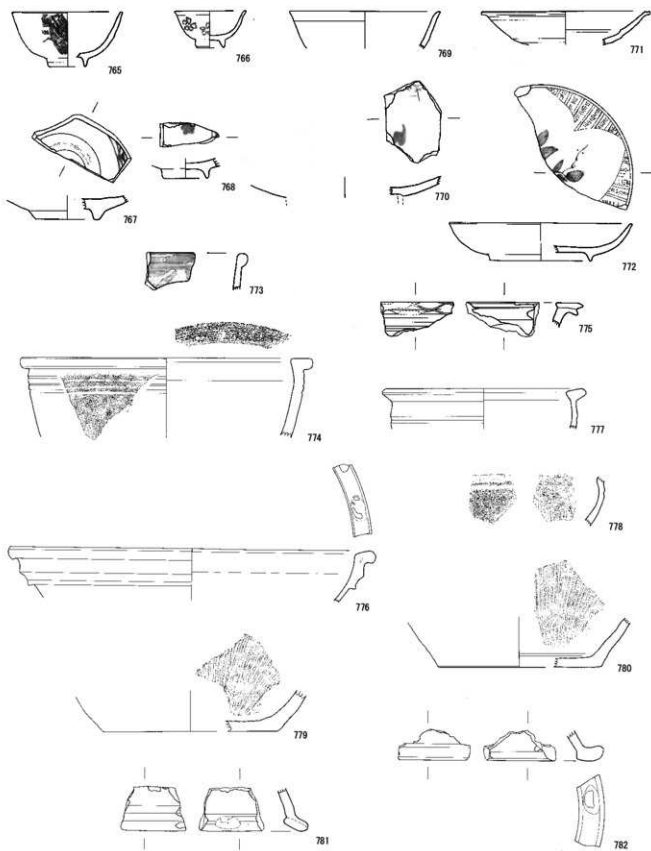
789・790は土瓶の蓋である。外面には飛びカンナで文様が描かれ、黄褐色の釉薬がかけられる。龍門司系の製品と考えられる。790は肩部から上に釉薬がかかる。

791・792は土瓶の口縁部から肩部である。口縁部は直に立ち上がり、肩部は丸みをもつ。791は釉薬が口唇部と口縁部内側にはかかっておらず、色調は緑褐色である。792は口縁部内側に釉薬がはみ出し、色調も茶褐色である。

793は土瓶の把手の破片である。

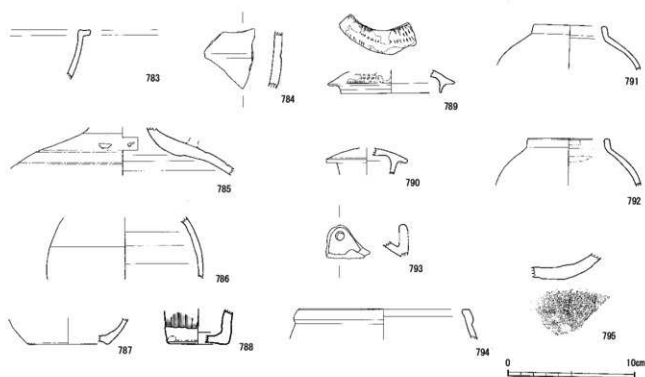
ケ 鍋類 (第114図 794～795)

794は鍋(山茶家)の口縁部片である。口縁部外面に断面カマゴ状の突帯がつく。口唇部はやや凹み、釉薬はかからない。年代は19世紀ごろと考えられる。795は山茶家の底部と考えられる。釉薬は内面のみかかり、外面は無釉で成形時の痕が残る。また、外面にはススも付着している。



第113図 近世の遺物 1





第114図 近世の遺物2

第34表 近世の遺物観察表(包含層出土遺物)

挿図 番号	掲載 番号	種類	器類	器種	部位	法量 (cm)			色調			備考
						口縁 径	底面 径	器高	外	内	胎土	
113	765	不明	碗類	小碗	口縁～底部	8.7	2.9	5.4	灰白	灰白	灰白	
	766	不明	碗類	小杯	口縁～底部	5.7	2.2	2.9	緑	灰白	灰白	
	767	不明	碗類	染付碗	底部			5	灰白	灰白	灰白	
	768	肥前	碗類	青磁染付碗	底部			3.2	白～灰	明赤～灰	灰白	
	769	龍門司系	碗類	碗	口縁部			12	黄褐	暗赤～黄	黄灰	
	770	肥前・京焼風	碗類	碗・皿	底部				淡黄	淡黄	淡黄	
	771	唐津	皿類	濃緑皿	口縁部	13.3			灰白	灰白	灰白	ITC前半 (1620～50)
	772	不明	皿類	色絵皿	口縁～底部	14.4	8	3	灰白	灰白	灰白	
	773	肥前	鉢類	鉢	口縁部				暗褐	にぶい褐	にぶい赤褐	17C 前半
	774	苗代川	鉢類	鉢	口縁部				白～褐	白～褐	にぶい褐	18C 後半
	775	苗代川	鉢類	植木鉢	口縁部				にぶい橙	にぶい橙	にぶい褐	
	776	苗代川	鉢類	摺鉢	口縁部				黒褐	黒褐	褐	ITC後, 変手2期, 貝目
	777	苗代川	鉢類	摺鉢	口縁部				暗赤～灰	暗赤～灰	暗赤～灰	
	778	苗代川	鉢類	摺鉢	胴部				黒褐	黒褐	灰褐	18C 前半
	779	苗代川	鉢類	摺鉢	底部			14	暗赤～褐	にぶい赤褐	明赤褐	
	780	苗代川	鉢類	摺鉢	底部			13.8	暗赤～褐	灰褐	にぶい赤褐	
	781	苗代川	壺類	壺	口縁部				暗灰黄	褐	にぶい褐	
	782	苗代川	壺類	壺	口縁部				暗赤～褐	灰黄褐	明赤褐	
	783	苗代川	壺類	壺	口縁部				暗赤褐	にぶい赤褐	橙	
784	苗代川	壺類	壺	胴部				灰黄褐	灰黄褐	黄灰		
785	苗代川	壺類	壺	肩部				暗灰黄	暗赤～褐	にぶい褐		
786	苗代川	瓶類	瓶(袋物)	肩部				暗褐	褐	褐		
787	苗代川	瓶類	瓶類	底部			6.4	暗褐	にぶい黄褐	にぶい黄褐		
788	不明	瓶類	青磁瓶類	底部			4.6	灰白	灰白	灰白		
114	789	龍門司系	水注類	土瓶蓋	肩部	10.6	8.4		白～灰	灰黄	にぶい黄褐	
	790	苗代川	水注類	土瓶蓋	肩部		6.4		暗褐	褐	灰褐	
	791	苗代川	水注類	土瓶	口縁部	5.8			白～灰	暗褐	にぶい赤褐	18C 後半
	792	苗代川	水注類	土瓶	口縁部	6.4			褐	白～灰	にぶい褐	
	793	苗代川	水注類	土瓶	把手				にぶい赤褐	にぶい赤褐	黒褐	
	794	苗代川	鉢類	山茶家	口縁部				白～灰	にぶい褐	にぶい褐	19C
	795	苗代川	鉢類	山茶家	底部				にぶい赤褐	にぶい黄褐	明赤褐	

第4章 自然科学分析

宮ヶ原遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定) 1

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

宮ヶ原遺跡は、鹿児島県曾於市大隅町大谷（北緯 31° 33' 17"，東経 130° 56' 31"）に所在し、標高約 230m の台地上に位置する。測定対象試料は、Ⅱ層出土土器付着炭化物 (No. 1: IAAA-91256, No. 2: IAAA-91257), V a 層出土土器付着炭化物 (No. 3: IAAA-91258), 合計 3 点である。

2 測定の意義

土器の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA: Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に Aaa と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°C で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°C で 30 分、850°C で 2 時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 95DH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシェウ酸 (Hox II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。
- (2) 14C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta 13C$ によって補正された値である。14C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) $\delta 13C$ は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により 13C/12C を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度を元に描かれた較正曲線と示した値である。過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal10 データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCal v4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

14C 年代は、No. 1 が 7870 \pm 40yrBP, No. 2 が 8000 \pm 40yrBP, No. 3 が 4600 \pm 40yrBP である。No. 1 と No. 2 は縄文時代早期、No. 3 は縄文時代前期末から中期初頭頃の年代を示している。

炭素含有率は 60% 前後で、化学処理、測定上の問題は認められない。

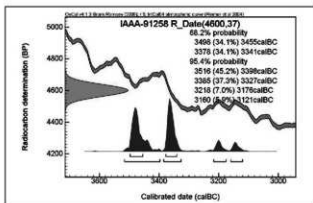
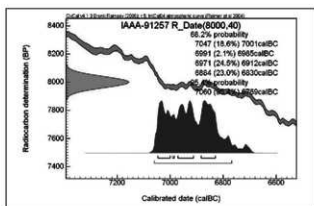
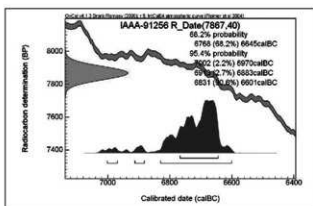
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91256	No. 1(掲載番号 347)	VII層	炭化物	AaA	-25.43 ± 0.52	7,870 ± 40	37.55 ± 0.19
IAAA-91257	No. 2(掲載番号 407)	VII層	炭化物	AaA	-26.21 ± 0.28	8,000 ± 40	36.94 ± 0.19
IAAA-91258	No. 3(掲載番号 667)	Va層	炭化物	AaA	-29.97 ± 0.57	4,600 ± 40	56.40 ± 0.26

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91256	7,870 ± 40	37.52 ± 0.19	7,867 ± 40	6768BC - 6645BC (68.2%)	7002BC - 6970BC (2.2%) 6913BC - 6883BC (2.7%) 6831BC - 6601BC (90.6%)
IAAA-91257	8,020 ± 40	36.84 ± 0.18	8,000 ± 40	7047BC - 7001BC (18.6%) 6991BC - 6985BC (2.1%) 6971BC - 6912BC (24.5%) 6884BC - 6830BC (23.0%)	7060BC - 6769BC (95.4%)
IAAA-91258	4,680 ± 40	55.83 ± 0.25	4,600 ± 37	3498BC - 3455BC (34.1%) 3378BC - 3341BC (34.1%)	3516BC - 3398BC (45.2%) 3385BC - 3327BC (37.3%) 3218BC - 3176BC (7.0%) 3160BC - 3121BC (5.9%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考] 暦年較正年代グラフ

宮ヶ原遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）2

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ
伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史
山形秀樹・小林祐一・Zaur Lomtadze
Ineza Jorjoliani・菊地有希子

1. はじめに

鹿児島県曾於市大隅町大谷に位置する宮ヶ原遺跡より検出された炭化物について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-18724	試料 No. 1 (掲載番号: 676) 遺跡名: 宮ヶ原遺跡 調査区: G-35 区 層位: IV a 層 (P7 火山灰の腐植土層)	試料の種類: 土器附着炭化物 採取位置: 深溝式 (深鉢) 胴部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.5N, 塩酸: 1.2N)

試料は、宮ヶ原遺跡から1点である。

宮ヶ原遺跡の試料は、G-35 区の IV a 層 (P7 火山灰の腐植土層) から出土した縄文時代前期末～中期初頭の深溝式土器の口縁部～胴部が残る深鉢破片の、主に胴部外面に付着した炭化物 (試料 No. 1: PLD-18724) である (図版 1-1)。現場所見によれば、試料の土器が出土した IV a 層は縄文時代後期の遺物を主体とする層であり、本来、深溝式土器が伴う時期の堆積層ではない。他の深溝式土器は V 層から出土しており、IV a 層から出土した深溝式土器は今回測定対象となった 1 点のみである。

なお、測定遺物の掲載番号は 676 である。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-18724 試料 No. 1 掲載 No. 676	-24.16 \pm 0.12	4582 \pm 22	4580 \pm 20	3484BC (5.9%) 3476BC 3371BC (62.3%) 3344BC	3493BC (12.9%) 3468BC 3375BC (70.6%) 3335BC 3211BC (7.0%) 3190BC 3154BC (5.0%) 3136BC

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図1に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正には OxCal 4.1 (校正曲線データ: IntCal10) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

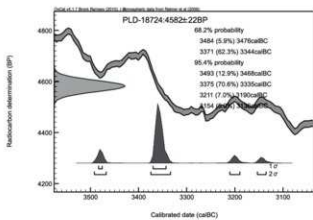
4. 考察

各試料の暦年校正結果のうち、2 σ 暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。

宮ヶ原遺跡では、縄文時代前期末から中期前葉に位置づけられている深浦式土器の深鉢外面に付着した炭化物（試料 No. 1: PLD-18724）は 3493-3468 cal BC (12.9%), 3375-3335 cal BC (70.6%), 3211-3190 cal BC (7.0%), 3154-3136 cal BC (5.0%) の暦年代範囲を示した。得られた暦年代範囲は、これまでの深浦式土器付着炭化物の測定事例（相美, 2008）の年代と整合的である。今回の年代測定試料を採取した深浦式土器は、縄文時代後期の遺物主体層から出土したものの、得られた暦年代から少なくとも火にかけられたのは縄文時代中期前半であり、何らかの理由で後世の IV a 層に混入したと考えられる。

参考文献

- 相美伊久雄 (2008) 深浦式土器。小林達雄編「総覧縄文土器」: 516-521, アム・プロモーション。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.



第5章 総括

1 旧石器時代について

本遺跡ではX・XI・XII層にわたって旧石器が出土したが、本文でも述べたように、その垂直分布は下図に示すように重なっており、文化層としては同一のものであると見なしうる。

これは、各ブロックで出土している石器が、細石刃及び細石刃核とそれに関連する剥片・砕片に限られることから首肯できる。

ブロックの形成は、ごく限られた時間の中で行われたと見なすことは自明の理であると考えられているが、本遺跡でのこのような出土状況は、ブロックの形成後、それが埋没する過程で、土壌の凍結・溶融が繰り返されたため、石器が垂直移動したのであろうか。

今後、大隅地域における旧石器の発掘調査では、このような事情を考慮して、ブロックの認定に当たっては、石材ごとに平面分布・垂直分布を作成したうえで、その両方が重なることを確認するなど、十分注意していかねなければならない。

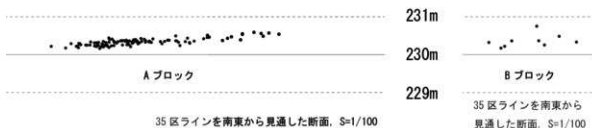
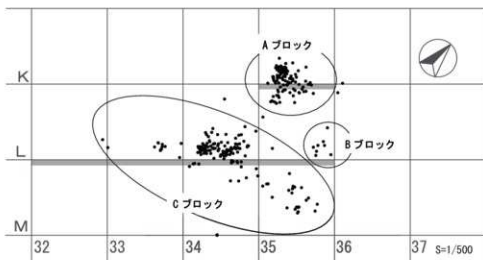
つぎに、個々のブロックについて総括しておきたい。

Aブロックでは頁岩の細石刃核が出土したものの、その細石刃は検出されない。水晶や黒曜石の細石刃が検出されても、その細石刃核が検出されていない。このような状況はBブロック、Cブロックでも同様であり、ブロック外からの持ち込みとブロック外への持ち出しが顕著であることを示しており、ブロックを形成した石器制作に携わった人の行動を、複数遺跡に渡って検証する必要があることを示すものであろう。

また、これらのブロックで出土している器種の少なさもまた特徴的であることを指摘しておきたい。

1点のサイド・スクレイパーを除けば、細石刃核・細石刃とそれに関わる剥片・砕片だけである。

このような出土状況は、狩猟先でのキャンプサイトで、細石刃を植刃した槍先の刃こぼれした箇所を修理するために、細石刃を作り、埋め込んだ行動が想起される。出土した細石刃核は、残核であり、その後の狩猟行動に必要なと判断されたものであろうか。そうであるならば、細石刃核の技術形態学的分類に一定の基準をもたらすものと見なしうるであろう。



2 縄文時代早期の土器について

(1) 土器から見る縄文時代早期の宮ヶ原遺跡

宮ヶ原遺跡では縄文時代早期の時期に属する土器は、第1類土器から第10類土器までの10種類に分類できた。そのうち、早期前葉の時期に属する土器が第1類土器の1種類、早期中葉の時期に属する土器が第2類土器から第5類土器の4種類、早期後葉前半の時期に属する土器が第6類土器から第10類土器の5種類に分類でき、早期後葉後半の時期に属する土器の出土は確認できなかった。

また、総数の把握は行っていないものの、早期前葉に属する土器群の出土量は少なく、早期後葉に属する土器群の出土量が多いという特徴を指摘できる。

これらのことから、宮ヶ原遺跡という「場」の機能について次の4点が想定できる。

ア 宮ヶ原遺跡では縄文時代早期のほぼ全般にわたり「場」が使用されたものの、早期前葉の時期には資料化の可能な土器の出土がほとんど無く、この時期には土器の使用に伴う生活はほとんどみられないことが想定できる。

イ 早期中葉の時期には土器の使用に伴う生活は、継続してみられるようになるものの、各土器型式のうちさらに細別した土器型式では資料化の可能な土器の出土量は多いとはいえず、この時期にはキャンプサイトの「場」の機能が想定できる。

ウ 早期後葉前半の時期のうち第6類土器から第8類土器の時期には、土器の使用に伴う生活がピークに達する。特徴として、各土器型式のうちさらに細別した土器型式での出土量が多いこと、各土器型式で多形式の土器使用が継続的に確認できることを挙げることができる。ここでいう多形式の土器とは、深鉢や壺などの複数の器種だけでなく、深鉢の器種のうち、中型土器や小型土器、ミニチュア土器など大きさに違いのある土器を指すものである。このような土器の出土から、この時期にはベースキャンプないしは母村的な「場」の機能が想定できる。

また、資料化した第7類及び第8類土器の出土分布では、中央に未出土区域のある環状の出土が認められる。

エ 早期後葉前半の時期のうち第9類及び第10類土器の時期には、資料化の可能な土器の出土がほとんど無くなり、この時期には土器の使用に伴う生活はほとんどみられないことが想定できる。

さらに、第10類土器以降に現在編年されている土器群が、これまで多くの遺跡で出土しているのに対し、宮ヶ原遺跡では出土していない。

このことから、第10類土器以降からの早期後葉後半の間に何らかの理由により「場」の機能が一切

失われたことが想定できる。

以上4点から宮ヶ原遺跡では、縄文時代早期の各時期の「場」の機能について、

- 1 時期によって、前の時期と比較して継続する「場」の機能を有する場合と、異なる「場」の機能を有する場合があること。
- 2 時期によって異なる「場」の機能を有する場合、第8類土器の時期から第9・10類土器の時期のように、「場」の機能が急激に変化した時期のあること。
- 3 早期前葉や早期後葉後半の時期のように、「場」の機能を完全に失う時期のあること。

の3点が指摘できる。

では次に、宮ヶ原遺跡が所在する大隅半島で調査された同時期の遺跡で、どのように「場」の機能が変化しただけか注目して例を挙げる。すると、

オ 壽島市国分市に所在する上野原遺跡や曾於市末吉町及び財部町に所在する桐木耳取遺跡のように、縄文時代早期のほぼ全時期をおとして「場」の機能が徐々に変化する遺跡が確認されること。

カ 曾於市大隅町に所在する定塚遺跡や壽島市福山町に所在する城ヶ尾遺跡のように、宮ヶ原遺跡で「場」の機能がほぼ失われている時期に、ベースキャンプないしは母村的な「場」の機能が想定できる遺跡があること。

の2点が指摘できる。

これらオ・カの特徴から、宮ヶ原遺跡で縄文時代早期の時期に「場」の機能が変化した原因が、当時の大隅半島での自然環境等の変化を理由としたものではなく、立地等の宮ヶ原遺跡そのものを理由としたものであったことを示している。

今後の課題として、当時の人びとがどのような古地の選択決定を行ったのか、その原理は何に基くものだったのか明らかにすることを挙げておきたい。

<引用・参考文献>

- 小林達雄 1975 『タイボロジ』『日本の旧石器文化』1 雄山閣出版
- 八木澤一郎 2002 『南九州における回廊地系土器の承襲と接相—縄文早期後葉前半期について—』『鹿児島考古』第36号 鹿児島県考古学会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター-発掘調査報告書28 鹿児島県立埋蔵文化財センター-発掘調査報告書28 『第2～7地点』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001 『上野原遺跡(第10地点)』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター-発掘調査報告書41 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『城ヶ尾遺跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター-発掘調査報告書60 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『桐木耳取遺跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター-発掘調査報告書91 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 『定塚遺跡・福山遺跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター-発掘調査報告書153

(2) 第8類土器について

ここでは、縄文時代早期後葉の時期に属する土器のうち、出土土器の主体の1つである第8類に帰属する土器について述べる。

第8類土器の形式(器種)には、深鉢と壺が出土した。深鉢には中型土器と小型土器がみられた。

次に、それぞれの器種の器形的特徴及び施文の特徴をまとめる。

まず、深鉢の器形的特徴には、

ア 口縁形態は平口縁あるいは非常に緩やかな波状口縁を呈すること。

イ 頸部はラッパ状に屈曲し、口縁部は下半では内湾状に外反し、中程で屈曲し、上半で外傾あるいは直立する、いわゆる二重口縁を呈すること。

ウ 胴部は若干膨らむ器形であること。

の3点が挙げられる。

また器形的特徴イのうち、口縁部屈曲部の器形的特徴には、

エ 外面の稜線が不明瞭で、かつ内面の稜線が観察できないこと。

オ 外面の稜線が明瞭で、内面は稜線が観察できないこと。

の2種類がみられた。

さらに、口唇部の器形的特徴には、

カ 内傾する平坦面を作出すること。

キ 山形状を呈すること。

ク 丸く収めること。

の3種類がみられ、波頂部口唇部の器形的特徴には、

ケ 舌状にのぼすこと。

コ 通常の口唇部形態を呈すること。

の2種類があった。

これら波頂部を含む口唇部の器形的特徴カ・キ・クと器形的特徴ケ・コとの間には有意な相関関係を認められなかった。

また、器形的特徴カ・キ・ク・ケ・コと器形的特徴ア・イ・エ・オの間にも、以下に述べるいかなる施文の特徴との間にも、有意な相関関係を認められなかった。

次に、深鉢の施文の特徴には、

サ 口縁部には、刻目微隆帯文、沈線文及び刺突連点文を横位もしくは波状に巡らすこと。

シ 胴部には、結節縄文の縄文部をなで消した「結節文」を縦位方向及び斜位方向に施すこと。

の2種類がある。

まず口縁部及び口唇部の施文の特徴に注目する。

第1に、口縁部の施文の特徴とした特徴サには

ス 数条の刻目微隆帯文及び沈線文と刺突連点文を横位及び山形状に巡らすこと。

セ 数条の刻目微隆帯文と沈線文を横位及び山形状に

施し、刺突連点文を施さないこと。

ソ 刻目微隆帯文のみを横位及び山形状に巡らすことの3種類がある。また、口縁部には、

タ 無文帯を設けること。

チ 無文帯を設けないこと。

の2種類がある。

第2に、口唇部上端の施文の特徴には、

ツ 木製捲付工具による刻みを施すこと。

テ 木製棒状工具による沈線を施すこと。

ト 施文を施さないこと。

の3種類がある。

また、特徴ツの中には、

ナ 口唇部上端のみに刻みを施すこと。

ニ 口縁部上端に施す刻みとあわせて、上面観が羽状を呈すること。

の2種類がある。

第3に、波頂部下の口縁部上端あるいは口縁屈曲部の施文の特徴には、

ヌ 瘤状突起を貼付すること。

ネ 瘤状突起を貼付しないこと。

の2種類がある。

これら施文の特徴ス・セ・ソと特徴タ・チ、特徴ツ・テ・ト・ナ・ニ、特徴ヌ・ネの相互の間には有意な相関関係は認められなかった。

また、施文の特徴ツ・テ・ト・ナ・ニ・ヌ・ネと器形的特徴ア・イ・エ・オの間にも有意な相関関係が認められなかった。

ここまで深鉢の特徴とした器形的特徴ア・イ・エ・オ・カ・キ・ク・ケ・コの9種類の特徴及び施文の特徴サ・ス・セ・ソ・タ・チ・ツ・テ・ト・ナ・ニ・ヌ・ネの13種類の特徴、合計22種類の特徴を挙げた。

次に、第8類土器より古い第7類に帰属する土器の特徴を比較する。第7類土器に認められる器形的特徴にはカ・キ・ク・コの5種類の特徴が挙げられ、施文の特徴にはタ・チ・ツ・テ・ト・ナ・ニ・ネの8種類の特徴が挙げられる。

つまり、第8類土器独自の特徴として、器形的特徴ではア・イ・エ・オの4種類の特徴を、施文の特徴ではサ・ス・セ・ソ・ヌの5種類の特徴を挙げられる。

このことから、第7類土器と比較したときの第8類土器の特徴として、

A 器形的特徴では、特徴ア・イ・エ・オが型式組列の変化の特徴であり、波頂部を含む口唇部の器形的特徴カ・キ・ク・ケ・コが器形上の種類の豊富さを示す要素となりうる。

B 施文の特徴では、特徴サ・ス・セ・ソ・ヌが型式組列の変化の特徴であり、特徴タ・チ・ツ・テ・ト・ナ・ニ・ネが施文上の種類の豊富さを示す要素とな

りうる。

という2点を指摘することができる。

さらに、第8類土器内の型式組列を考えた時に、第8類土器より古く位置付けられる第7類土器及び、より新しく位置付けられる第10類土器と比較すると、器形的特徴エからオへの型式組列が考えられる。このとき、施文の特徴サ・ス・セ・ソ・ヌのいずれも器形的特徴と有意な相関関係が認められなかったことから、いずれの施文の特徴も型式組列の変化の特徴とは言えず、施文上の種類の豊富さを示す要素と判断できる。

つぎに胴部の施文の特徴に注目すると、

ノ 結節文のみを施すこと。

ハ 胴部中央に刻目微隆帯文を横方向に巡らすこと。

ヒ 結節文と沈線文を組み合わせて施すこと。

の3種類の土器が宮ヶ原遺跡では出土した。

これらの土器のうち、口縁部と接合した資料は少なく、胴部の施文の特徴と口縁部の器形的特徴及び施文の特徴との有意な相関関係は判断できなかった。

次には、壺の器形的特徴及び施文の特徴を示す。

まず、器形的特徴のうち口縁部形態の特徴は宮ヶ原遺跡では出土がなく不明である。胴部では500の土器が特筆される。

500は胴部上面観及び胴部下端部が楕円形を呈する壺で、胴部上半部が屈曲し、底部に向けて緩やかに広まる土器である。胴部屈曲部と胴部下中央部には刻目微隆帯文を横方向に3条ずつ巡らすのが特徴である。また刻目微隆帯文間には胴部全面に3条の結節文を1組にした原形を用いて、縦位あるいは斜位方向に施すのが特徴である。

胴部中央部の上面観や胴部下端部が楕円形あるいは隅丸長方形を呈する土器の出土例には、霧島市国分所在する上野原遺跡で出土した平格式土器に帰属する壺や、霧島市福山町に所在する城ヶ尾遺跡で出土した塞ノ神A a式土器に帰属する壺を挙げることができる。

宮ヶ原遺跡の調査で第8類土器に帰属する同様の器形を呈する土器の出土が確認されたことで、

C この器形の土器が形式(器種)の1つとして、縄文時代早期後葉前半期に継続的に認識され、作り分けや使い分けがなされていたことを明らかにした。

D 上記の出土例では、胴部はいずれも無文だが、本遺跡例では施文され、施文部位の異なること。

の2点を指摘することができる。

以上、A・B・C・Dの指摘から、宮ヶ原遺跡出土の第8類土器は、平格式土器や塞ノ神A a式土器と同じ系譜にありながら、型式上一線を画する土器として新型式の設定が可能な土器であることを指摘して、まとめとする。

3 縄文時代早期の石器について

本遺跡の縄文時代早期包含層での土器の出土量は後葉段階の土器が多いようであり、石器について絶括するに当たり、早期後葉段階の石器群として認識するべきであろうことを、前提にしたい。

はじめに、器種構成の特徴を列挙しておきたい。

- ・石槍を持つ。
- ・石鏃の細分形態が多様である。
- ・石斧が少なく、その細分形態も単純である。
- ・上野原型の石匙を持つ。
- ・掘指状搔器を持つ。
- ・彫器を持つ。
- ・異形石器を持つ。

以上のような特徴は、石斧に関するものを除けば、上野原遺跡第十地点を代表とする南九州の縄文時代早期後葉段階の石器群とよく整合しており、奇異なところはないようである。ただし、本文中で述べたように、磨製石鏃が出土しており、早期後葉段階では前例がないので、他の時期の所産であるのか、早期後葉段階の器種構成の一部としてとらえるかは、種類の増加を待って判断することとして、ここでは留保したい。

本遺跡の石器群の器種構成で、最大の特徴は、石斧の数が少ないうえに、その細分形態も単純であることである。このことは、この遺跡を残した人たちに、樹木の伐採や木材加工などの石斧の需要が少なかったことを意味しているであろうと推測できる。

つぎに個々の器種について、本遺跡の特徴を挙げ、その分布を見ていきたい。

はじめに、石槍についてであるが、本文でも述べたように、直接加撃による調整剥離で器面調整がなされた、おそらくは木葉形の石槍であり、早期後葉段階まで石槍が残る南九州の縄文石器群の特徴を端的に示すものである。また、その石材も他の遺跡にもよくあるように黒色安山岩が用いられている。

つぎに磨製石鏃についてであるが、本文や器種構成の特徴で述べたように早期後葉段階の所産であるかどうかは留保した上で、その特徴を再度確認しておく。頁岩製であり、全面研磨によって作られおり、形状は両側縁が緩く外湾し、直線的な基部の平基式である。早期前葉の貝殻紋円筒土器に共存する磨製石鏃と同じ特徴である。この2点は遺跡の両端で出土しており、出土分布に何らかの意味を見いだすことは困難である。

石鏃は、器種構成のところでも述べたように、他遺跡の例と同じであり、細分形態が多様であることを含めて特に指摘するような特徴はない。なお、その出土分布は早期後葉段階の土器と同様に、ほぼ全面的に散らばっており、特に指摘しておくような特徴はない。

石斧についても、器種構成のところでも述べたことを除

けば特に指摘しておくような特徴はない。77・78の刃部破片の出土位置から、刃こぼれた場所、すなわち石斧が使われた場所を示す可能性を探りたかったが、取り立てて有意な出土位置ではないようである。より数多い刃部破片＝刃こぼれた破片の集積するような箇所はないものだろうか。

環状石斧について再度その特徴を挙げておきたい。ホルンフェルス製であり、孔の周囲を除く全面が研磨され、良く使い込まれている。平面形状が不正円形になるほど刃こぼれも多数あり、その研ぎ直しも目立つ。刃部は全周に渡ってつぶれたような状況であり、石斧のような刃部を形成していない。このことは、この石器に石斧のような切れ味は求められておらず、重量と遠心力を利した加撃力が求められていたためと推測できる。他の遺跡では割れて出土する例が多いが、本遺跡ではかなり使い込まれたようでありながらも完形で出土している。

石匙は、縦型・横型・上野原型の三種類が出土しており、このような状況も早期後葉段階の他遺跡例によく整合している。上野原型は黒色安山岩の剥片を素材とし、器体の全面に面調整を加え、三角形もしくは台形に作り、その底辺に直線の刃部を作るのがその特徴である。つまりは頂部に作られるが、二股に割れるつまみも希ではない。本遺跡でも出土している。また、石材は、他遺跡でも黒色安山岩以外のものはほとんど作られていないほど、強い結びつきが見られる。まれに黒色のチャートが用いられているものの、「黒色」への強いこだわりがあったようである。横型の石匙について付言したい。第77図に示すように横型の石匙と同図最下段の削器とは、大きさはほとんど変わらない。刃部調整が石匙は丁寧であるのに比べ、この削器はややラフである。ただし、第78図90の削器は、石匙と同様に丁寧に作られた刃部である。このことは何を意味するのであろうか。刃部調整は全く同一であるから、そのあり方からは機能の違いを想定することはできない。刃部は同じ機能を持ちながらもつまみをつけるか否かが、削器と石匙との唯一の違いである。つまみこそが、石匙の用途にとって重要な部分なのであろうと考えられる。石匙と削器は、機能は同一でも用途が異なると言える。機能は同一でも用途が異なる器種の存在があるとすると、ここに縄文時代の石器全般を考える上での重要な手がかりがあるのではなかろうか。今後研究したいテーマである。なお、石匙の分布についても有意な位置関係を見いだしたい。

指拵挿器と彫器が1点づつではあるが出土していることも、南九州の縄文時代早期後葉の石器群の特徴を考える上で重要である。この二つの器種は、複数の遺跡で出土例があり、本遺跡例はそれをあつづける例として重要である。より多い種類の増加を待たねばならないが、この二つの器種が早期後葉段階まで残存することはほぼ

確実ではないかと考えている。これらの器種が旧石器時代以降連続と継続するのであれば、縄文文化の中石器の性格を物語るものであり、これもまた、今後追求したいテーマである。

異形石器が3点出土している。異形石器は一つ一つが異なった形態をしているかのようにその類型が多様であるが、上野原遺跡例で、統一の基準を設定して類型化を行ったところである。それは、「Y」の字形の異形石器を基本形態と仮定し、その上部を「又状部」、中央の棒状の部分を「体部」、下端の部分を「尾部」と分け、その三者の強調と省略の有様からつぎの3類型を設定したものである。

A I類：体部が幅広になり、又状部と一体化する一群
A II類：又状部が小さくなって（省略されて）体部と一体化し、かつ体部が長大化する一群。

B類：又状部が強調・拡大され、体部が省略されるが尾部は又状部とともに拡大する一群。

この分類を適用すれば、637はB類となり、638はA I類に、639はA II類になる。

637は上に開く「C」の字形であり、上縁の大きな斜入と下縁裏面の器面調整によってその形が作られている。下縁には二カ所のごく小さな、浅い切りがあり、尾部と又状部との区別が、痕跡器官のように残る。上野原遺跡例のB類は又状部に複数の斜入が入るが、この637には又状部の斜入が施されていない。

638は体部と一体化した、単純な斜入で作られる又状部が強調されており、A I類に分類できる。尾部にも浅い斜入が施されていることも留意したい。

639は又状部を欠損しているが、浅い斜入が施された尾部と長大化した体部の形態からA II類に分類できるものである。

このように分類すると、上野原遺跡例との顕著な違いが目につく。それは、又状部・体部尾部に限らず、周縁に複数の斜入が施されているか否かである。施されているのが上野原遺跡例であり、施されていないのが本遺跡例である。

この斜入の有無は、「祭器」としての異形石器をより荘厳する行為として解釈したい。多数の斜入によって、より複雑な形状にすることが、この石器を、より荘厳することを意味するのではなかろうか。

祭器の一種と推測されているこの異形石器が遺跡ごとに違いを見せるのは、その出土した遺跡の性格によって違いが生じるのではなかろうか。つまり、上野原遺跡は「祭器の場」であった、という見方が半ば定説化しており、その上野原遺跡は、より荘厳された祭器＝「異形石器」を必要とする「祭祀」が行われた場所であり、本遺跡例は荘厳の度合いが低いものでもかまわない「祭祀」が行われた場所であったのではなかろうか。

4 縄文時代中期の土器について

本報告書に掲載した縄文時代中期の土器は、深浦式土器に比定できる土器だけである。

深浦式土器の時間的位置づけについては、研究者の間で議論が活発に行われ見解の相違はあるが、縄文時代前期末～中期前葉に位置づける見解が概ね容認されている。また、深浦式土器の細別編年については、各研究者の基本的な変遷観は共通している。

本報告書に掲載した深浦式土器に比定できる土器は8点である。この8点の文様や器形等を、研究者の一人である相美伊久雄氏（鹿児島県志布志市教育委員会）の細別編年案（相模 2008）を基に細別したところ、すべて日本山段階にあてはまる（図1 深浦式土器の編年細別模式図参照）。日本山段階は、「文様は貝殻連点文や突帯文や交弧文、貝殻連点文+突帯文の3種類を用いて、直線的モチーフを描く。貝殻連点文+突帯文の場合、突帯文は口縁部に放射状に巡らせるだけで、2条の突帯を縦位に施すものもある。器形は口縁部が外傾・外反し、口縁部に山形突起が付くものもある。」という特徴である。8点のうち、掲載番号676だけは、口縁部だけでなく口縁部から胴部へ変化するくびれ部分にも2条の突帯文が巡らされていることから日本山段階の終わりの時期に位置づけられるのではないかととらえている。

<引用・参考文献>

南九州縄文研究会 2009 「鹿児島の縄文時代中期土器」
p 1～p 4

5 近世以降の道跡について

県道495号線下から検出された道跡から、薩摩焼、キセル、寛永通宝等が出土した。出土した薩摩焼の中では、道跡の最下層から出土した掲載番号755の龍門寺系の碗が最も古く18世紀後半のものである。掲載番号764のキセルについても三垣恵一氏（国分中央高校教諭）の研究に拠ればV段階の時期、つまり18世紀後半のものである（表1、図2参照）。寛永通宝は古寛永（17世紀半ば）である。したがって、道跡の時期は、17世紀半ば或いは最下層から出土した薩摩焼やキセル等から18世紀後半以降であると判断した。

宮ヶ原地区やその周辺地区の人々にとって、昔の土器や石器、落とし穴や集石等が確認されたことは興味深いものであろう。しかし、それ以上に生活に密着した「道」が、江戸時代から現代まで規模は違っても同じ位置に作られ続けてきたことが垣間見えたことの方がより興味深いのではないだろうか。

今後、県道下を調査する場合は、細心の注意を払って調査を行う必要がある。

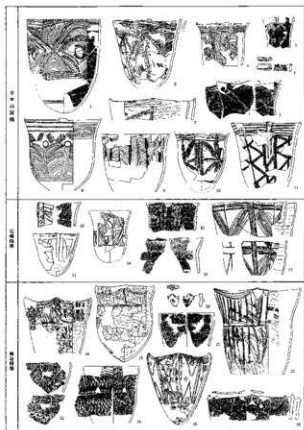


図1 深浦式土器の編年別模式図（相模 2008より引用）

表1 雁首の形態変化と時期区分（三垣 2000より引用）

段階	雁首の特徴	時期
I	「肩付」	16C～17C
II	「阿形形」	17C前半
III		17C後半
IV	「筒状龍首」	18C前半
V		18C後半
VI	高曲龍首	19C

段階	出土遺跡名
I	
II	
III	大野原跡 長谷川跡
IV	新宮原跡 緑島跡・高野跡
V	原山高成跡 緑島跡
VI	緑島跡 小野原跡 緑島跡

図2 鹿児島県内道跡出土の雁首分類（三垣 2000より引用）

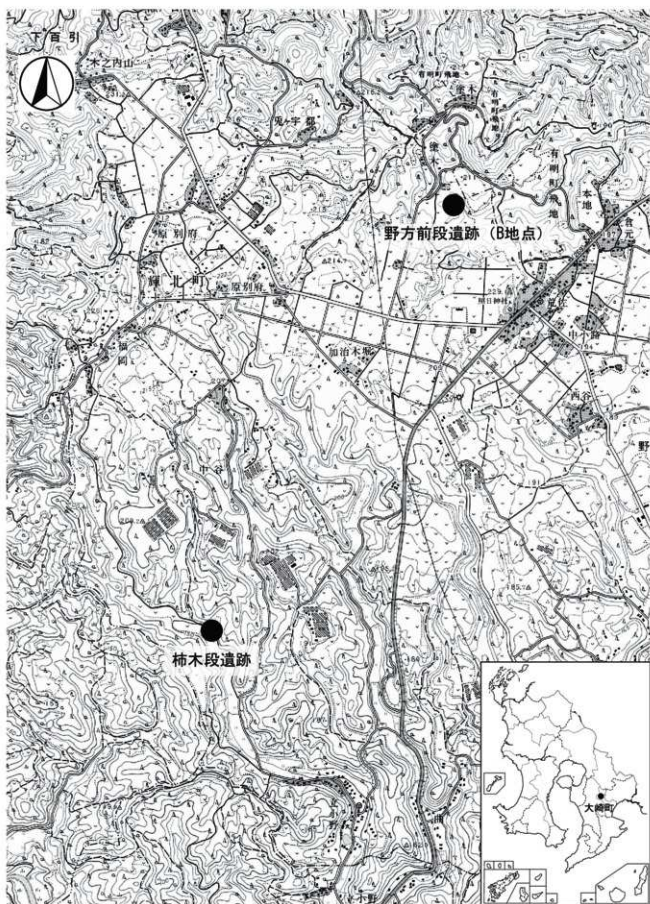
<引用・参考文献>

兵庫埋蔵銭調査会 1996 「日本出土銭総覧」
大河同人 2000 「大河 7号」 p 115

野方前段遺跡 B 地点・
柿 木 段 遺 跡 2

報告書抄録（野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2）

ふりがな	みやがはらいせき・のがたまえだんいせきびーちてん・かきのきだんいせきに							
書名	宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2							
副書名	東九州自動車道建設（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第173集							
編集者名	松下建生							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 Tlx 0995-48-5811							
発行年月	西暦 2012年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
野方前段遺跡 B地点	鹿児島県 曾於郡 大崎町 野方	46468	70-63	31° 30′ 13″	130° 55′ 41″	確認調査 2007.05.16～ 2007.07.13 本調査 ①2007.07.17～ 2007.11.8 ②2008.07.03～ 2008.09.05	3400	東九州自動車道建設（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）による記録保存調査
柿木段遺跡	鹿児島県 曾於郡 大崎町 小立		25-139	31° 28′ 59″	130° 54′ 29″	本調査(追加) 2010.06.01～ 2010.07.16 ②2010.10.05～ 2010.10.28		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
野方前段遺跡 B地点	散布地	縄文時代	早期	集石遺構 6基 土坑 5基	吉田式土器、石坂式土器、 下剝釜式土器、塞ノ神式土器、石鏃、磨製石斧、磨石、 磁石			
			前・中期	落とし穴 9基 土坑 4基				
	散布地	弥生時代			入来Ⅱ式土器			
	散布地	古代・中世			土師器（坏、埴、甕）、 須恵器（坏、甕、壺）			
柿木段遺跡	散布地	縄文時代晩期			入佐式土器			
		古墳時代			成川式土器（甕、壺）			
	散布地	古代	古道12条、溝1条 土坑3基	土師器（埴、甕） 須恵器				
		中世～近世	古道7条、溝10条	中世：陶器 近世：陶磁器				
遺跡の概要	<p>野方前段遺跡B地点は縄文時代早期～中期、弥生時代、古代・中世の遺跡であることが判明した。確認された遺構や遺物から遺跡の中心となる時期は縄文時代早期中葉から後葉と考えられ、特に、完形に近い形で復元された下剝釜式土器は、製作技法を紐解く貴重な資料の1つになると考える。</p> <p>柿木段遺跡は平成19年度・平成20年度の調査で確認された古代から近世にかけての古道や溝状遺構の続きや新たな遺構が多く確認され、当時の人々の生活を明らかにしていく上で貴重な資料の1つとなるものと考えられる。</p>							



野方前段遺跡 (B地点)・柿木段遺跡位置図 (S=1/25,000)

例 言

- 1 本編は、東九州自動車道建設（鹿屋串良IC～曾於弥五郎IC間）建設に伴う宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2発掘調査報告書の野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡編である。
- 2 野方前段遺跡B地点は鹿児島県曾於郡大崎町野方、柿木段遺跡は曾於郡大崎町小野に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査事業は、野方前段遺跡B地点を平成19・20年度に、柿木段遺跡を平成19・20・22年度に実施し、整理・報告書作成事業は、平成23年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
なお、柿木段遺跡のうち、平成19・20年度に実施した発掘調査については、平成21年度に既に刊行しており、今回は平成22年度に実施した発掘調査の報告書である。
- 5 掲載遺物番号は遺跡ごとの通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は野方前段遺跡B地点が「NGM・B」、柿木段遺跡が「カキノキ」である。
なお、柿木段遺跡の遺跡記号は平成21年度に刊行された報告書において「KD」で報告してあったが、遺跡記号が重複していることが判明したため、「カキノキ」とし、これまでの遺物の注記も全て修正してある。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海抜絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は柳スカイサーベイ九州に委託した。
- 11 遺構実測図、遺物出土状況図の作成及びトレースは平木場秀男・永濱功治・岩永勇亮が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、土器を松下建生・岩永、石器を富田逸郎が担当し、整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 14 本報告に係る自然化学分析は、放射性炭素年代測定を柳加速器分析研究所、隼パレオ・ラボに委託した。
- 15 本編の執筆は次のように分担し、編集は松下が行った。

第1章・第2章	松下
第3章 第1節・第2節	松下・岩永
第3節	富田・松下・岩永
第4章	平木場・松下
第5章	委託（体裁：田畑哲治）
第6章	平木場・岩永
- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は、東九州自動車道（志布志IC～末吉財部IC間）の建設を計画し、当該事業区における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて県文化財課は、平成11年1月に鹿屋串良IC～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋串良IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡（854,100㎡）が存在を報告した。

分布調査の結果を基に、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化という政府方針が提起され、事業見直しと建設コスト削減も検討され、併せて遺跡の緻密な把握が求められることとなり、詳細な分布調査や試掘調査を実施することとした。

そこで、県文化財課と埋文センターは、まず、平成13年1月29日から平成13年2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石松遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日から7月26日に鹿屋串良IC～末吉財部IC間の33遺跡についての詳細分布調査や平成13年9月17日から10月26日までと、平成13年12月3日から12月25日までの2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

上記の詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されている本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、間山西遺跡、間山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日から平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

また、平成14年4月には、志布志IC～鹿屋串良IC間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅IC（平成21年4月28日、「曾於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整

備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。

また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部分は国土交通省からの受託事業となった。

野方前段遺跡B地点の調査は、確認調査を平成19年5月16日から7月13日まで実施し、引き続き本調査を平成19年7月17日から平成19年11月8日までと、平成20年7月3日から平成20年9月5日までの2か年にわたり実施した。整理・報告書作成作業は、平成22年4月から平成23年3月までと、平成23年4月から平成24年3月までの2か年にわたり県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で実施した。

柿木段遺跡の調査は、確認調査を平成19年7月4日から7月27日まで実施し、本調査を平成20年5月22日から平成21年3月19日まで実施したが、町道部分を含む用地が取得できていなかったため未調査地として残された。その後用地取得が終了したため、平成22年6月1日から7月16日までと、平成22年10月5日から10月28日までの2期間にわたり実施した。整理・報告書作成は、2回に分けて県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で実施した。1回目は、平成21年4月から平成22年3月まで実施し、未調査部分以外の調査について報告書を作成した。2回目は、平成22年度に実施した未調査部分についての調査報告書作成を平成23年4月から平成24年3月まで実施した。

第2節 事前調査

1 分布調査

野方前段遺跡B地点、柿木段遺跡に関する分布調査は、日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道第13次区間のうち、鹿屋串良IC～末吉財部IC間の分布調査依頼を受け、平成11年1月に実施した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（平成10年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課 課長 内村正弘
	〃 調査課長補佐 庭月野慎一
調査企画	〃 埋蔵文化財係長 戸崎勝洋
調査担当	〃 文化財主事 倉元良文
	〃 〃 堂込秀人
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	主任文化財主事 長野眞一

2 試掘調査

野方前段遺跡B地点、柿木段遺跡の試掘調査は、分布調査の結果を受け、包含層等の残存状況等より詳細な情報を得るため実施した。

野方前段遺跡B地点の試掘調査は、平成13年10月1日～2日の2日間に実施した。調査方法は、4.5m～9mの試掘トレンチを5か所設定し、重機を使用し、地層と遺構・遺物の有無を確認しながら、1.0～2.2mまで掘り下げた。調査の結果、地層の残存は確認できたが遺構・遺物は確認されなかった。

柿木段遺跡の試掘調査は、平成13年9月19日に実施した。調査方法は、3mの試掘トレンチを3か所設定し、重機を使用し、地層と遺構・遺物の有無を確認しながら、1.7～2.1mまで掘り下げた。調査の結果、地層の残存は確認できたが遺構・遺物は確認されなかった。

試掘調査の調査体制は次のとおりである。

調査体制（平成13年度）

事業主体	日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 井上明文
調査企画	〃 次長兼総務課長 黒木友幸
	〃 主任文化財主事兼 調査課長 新東晃一
	〃 主任文化財主事兼 調査課長補佐 立神次郎
	〃 主任文化財主事兼 第二調査係長 彌榮久志
	〃 主任文化財主事 長野真一
調査担当	〃 文化財主事 岩澤和徳
	〃 〃 山崎省一
	〃 文化財研究員 桑波田武志
事務担当	〃 総務係長 前田昭伸
	〃 主 査 栗山和己

3 確認調査

野方前段遺跡B地点の確認調査は、平成19年5月16日から平成19年7月13日まで実施した。調査は、確認トレンチを7か所設定し、重機で表土を剥いた後、人力で掘り下げた。調査の結果、地層の残存と遺構・遺物が確認できたので引き続き本調査を行うこととした。

柿木段遺跡の確認調査は、平成21年度刊行の発掘調査報告書（鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書154）で報告済みなので今回は割愛する。調査体制は次のとおりである。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
	鹿児島県土木部高速道路対策室
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 宮原景信
調査企画	〃 次長兼総務課長 平山 章
	〃 次長兼南の縄文室長 新東晃一
	〃 調査第二課長 立神次郎
	〃 主任文化財主事兼 調査第二課 第一調査係長 彌榮久志
調査担当	〃 文化財主事 平木場秀男
	〃 〃 木内敏生
	〃 文化財調査員 佐藤真人
事務担当	〃 総務係長 寄井田正秀
	〃 主 事 五百路真

調査の詳細（日誌抄より週単位で記載）

5月16日～5月18日	発掘作業開始に伴うオリエンテーション。重機による表土剥ぎ。確認トレンチを7か所設定。グリッドの設定。
5月21日～5月25日、5月28日	確認トレンチ調査（掘り下げ、遺物取り上げ、遺構確認作業、遺構配置図作成、写真撮影）。遺跡への進入路整備。
6月1日、6月4日～6月8日	確認トレンチ調査（掘り下げ、遺構実測）。
6月11日～6月15日	確認トレンチ調査（掘り下げ、土層断面実測）。
6月18日～6月22日	確認トレンチ調査（掘り下げ、遺構実測）。
6月25日～6月28日	確認トレンチ調査（掘り下げ、写真撮影）。
7月2日～7月6日	確認トレンチ調査（掘り下げ）。遺跡内及び周辺の除草作業。雨対策。
7月9日～7月13日	確認トレンチ調査（掘り下げ、遺物取り上げ）。耐風対策。

第3節 本調査

野方前段遺跡B地点は、確認調査の結果をもとに、本調査を平成19年度と平成20年度に実施した。平成19年度は平成19年7月17日から平成19年11月8日まで、平成20年度は平成20年7月3日から平成20年9月5日まで実施した。

柿木段遺跡は平成19・20年度の調査時に用地取得が済んでいなかった未調査地の調査を平成22年6月1日から7月16日までと、平成22年10月5日から10月28日までの2期間にわたり実施した。

各年度の調査体制及び調査の詳細(日誌抄より)については次のとおりである。

調査体制(平成19年度、野方前段遺跡B地点)

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
	鹿児島県土木部高速道路対策室		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所長	宮原景信	
調査企画	〃 次長兼総務課長	平山章	
	〃 次長兼南の縄文室長	新東晃一	
	〃 調査第二課長	立神次郎	
	〃 主任文化財主事兼調査第二課		
	第一調査係長	彌榮久志	
調査担当	〃 文化財主事	平木場秀男	
	〃	木内敏生	
	〃 文化財調査員	佐藤真人	(平成19年5月～9月)
	〃	岩永勇亮	(平成19年10月～平成20年3月)
事務担当	〃 総務係長	寄井田正秀	
	〃 主事	五百路真	

調査の詳細(日誌抄より週単位で記載)

7月17日～7月20日

G-23～26区:掘り下げ。H～K-23～26区:Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。遺構確認作業。遺構配置図作成。遺物取り上げ。

7月23日～7月27日

H～K-23～26区:遺物取り上げ。遺構実測。写真撮影。地形コンター図作成。

8月1日～8月3日

H～K-23～26区:Ⅳ層掘り下げ。遺構の埋土除去。耐風対策。

8月6日～8月10日

H～K-23～26区:Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。遺構の調査(確認作業、埋土除去、実測、写真撮影)。

8月16日～8月17日

H～K-23～26区:Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。遺構の調査(実測、写真撮影)

8月20日～8月24日

H-27区:Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。遺物取り上げ。遺構の調査(埋土除去、実測)。I・J-25・26区:Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ。

8月27日～8月28日

H-27区:Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ。遺構実測。I・J-25・26区:Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ。

9月3日～9月7日

H-27区。I-23区:Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ。遺構の調査(埋土除去、写真撮影)

9月10日～9月14日

I～K-25・26区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ。遺構実測。写真撮影。

9月18日～9月21日

I～K-25・26区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ。土層断面実測。J～L-24区:旧石器時代該当層の確認調査。

9月25日～9月27日

I～K-25・26区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ。遺構の埋土除去。写真撮影。

10月4日～10月5日

I～K-25・26区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺構確認作業。

10月9日～10月12日

H～K-24～27区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺構の調査(埋土除去、実測、写真撮影)

10月15日～10月19日

G・H-23・24区:Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ。遺構確認作業。地形コンター図作成。G・H-25・26区:表土剥ぎ。Ⅵ層掘り下げ。G～K-27・28区:Ⅴ層掘り下げ。遺構の調査(埋土除去、写真撮影)。地形コンター図作成。I～L-25・26区:遺物取り上げ。

10月22日～10月26日

G-25・26区:Ⅵ層掘り下げ。G・H-24区:土層断面実測。G・H-27・28区:遺物取り上げ。地形コンター図作成。I・J-25～28区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ。

11月1日～11月2日

G～J-23～26区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ(一部、Ⅲ層掘り下げ)。土層断面実測。

11月5日～8日

G-23～28区:Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。土層断面実測。※工事の計画上、野方前段遺跡B地点の調査は中断し、残りの調査は次年度へ。

調査体制（平成20年度、野方前段遺跡B地点）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 宮原景信

調査企画 〃 次長兼総務課長 平山 章

〃 次長兼南の縄文室長 池畑耕一

〃 調査第二課長 彌榮久志

〃 主任文化財主事兼

調査第二課

第一調査係長 中村耕治

調査担当 〃 文化財主事 大久保浩二

〃 〃 堅山貴理

〃 文化財調査員 岩永勇亮

(平成20年5月～9月)

〃 〃 森幸一郎

(平成20年10月～平成21年3月)

事務担当 〃 総務係長 紙屋伸一

〃 主 事 五百路真

調査の詳細（日誌抄より週単位で記載）

7月3日～7月4日

Ⅶ層掘り下げ。集石1号写真撮影。ベルトコンベアー設置。環境整備。壁面清掃。

7月7日～7月11日

I・J-23-24区：遺物取り上げ。J・K-26区：

Ⅶ層下位重機による掘り下げ。J・K-27区：Ⅵ層掘り下げ。集石9・10号実測。落とし穴2号完掘。大崎町教育長他5名来跡。国土交通省来跡。

7月14日～7月18日

G・H-25-26区：Ⅶ層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影。G・H-27-28区：Ⅵ層掘り下げ。落とし穴3号掘り下げ、断面実測。

7月22日～7月25日

G・H-24～28区：Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ。落とし穴3号実測。

8月1日～8月8日

G・H-27-28区：Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。G・H-24～26区：遺物実測。G・H-23区：Ⅵ層掘り下げ。I・J-24～27区：ベルト掘り下げ。J-24-25区：Ⅵ層掘り下げ（旧石器確認の為）。H-24区：Ⅶ層上面遺構調査。落とし穴4・5号掘り下げ、写真撮影、実測。早期土坑掘り下げ。旧石器確認トレンチ掘り下げ（遺物なし）。除草環境整備。大崎町教育委員会同留・内村氏来跡。有川文化財課長・前追文化財主事来

跡。

8月18日～8月22日

H・I-27区：ベルト掘り下げ。G・H-26区：Ⅲc層遺物取り上げ。集石11号検出、写真撮影、実測。落とし穴4・5・6号掘り下げ、写真撮影、実測。道路部分掘り下げ。

9月1日～9月5日

H-24～26区：Ⅵ層掘り下げ。落とし穴6号実測。環境整備。黎明館東氏来跡。大崎町教育委員会内村氏来跡。

調査体制（平成22年度、柿木段遺跡）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 山下吉美

調査企画 〃 次長兼総務課長 田中明成

〃 次長兼南の縄文室長 中村耕治

〃 調査第二課長 井ノ上秀文

〃 文化財主事兼

調査第二課

第一調査係長 前迫亮一

調査担当 〃 文化財主事 平木場秀男

〃 文化財調査員 岩下直樹

事務担当 〃 総務係長 大園祥子

〃 主 事 高崎智博

調査の詳細（日誌抄より週単位で記載）

6月1日～6月4日

表土剥ぎ。Ⅱb・Ⅱc層掘り下げ、遺構検出。環境整備、写真撮影。

6月7日～6月11日

Ⅱa・Ⅱb層掘り下げ、遺構検出（古道・溝状遺構）、配置図実測、写真撮影。Ⅲ層～Ⅴ層掘り下げ。調査範囲図、土層断面図作成。現場内点検及び環境整備。

6月14日～6月18日

Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ、遺構検出。実測（古道・溝状遺構）。図面整理。環境整備（梅雨対策）、危険箇所安全点検。

6月21日～6月25日

Ⅲ層～Ⅴ層掘り下げ。遺構掘り下げ、平板実測（古道・溝状遺構）、写真撮影。図面整理。環境整備（大雨対策、安全対策、流入土の除去）。

6月28日～7月2日

Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ、遺構検出。平板実測、写真撮影

- (古道・溝状遺構)。環境整備。
- 7月5日～7月9日
- Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。遺構掘り下げ、平面実測、写真撮影(古道・溝状遺構)。図面整理、環境整備(大雨対策、流入土の除去)
- 7月12日～7月16日
- Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。遺構掘り下げ、平面実測、写真撮影(古道・溝状遺構)。土層断面図作成準備。コンター図作成、環境整備(流入土の除去)。発掘機材等片付け。第一次発掘調査終了。
- 10月1日～10月8日
- 事前調査、整地作業。作業確認及び範囲確認。表土剥ぎ。E・F-7・8区:Ⅱa～Ⅱc層掘り下げ、遺構検出。Ⅱb～Ⅱc層掘り下げ。土層断面清掃。調査範囲図作成。下層確認トレンチ、土層断面図作成。環境整備。
- 10月12日～10月15日
- E-7・8区:Ⅱ層掘り下げ、遺構検出。E～G-7・8区:調査範囲図作成、Ⅱc層掘り下げ、遺構検出。古道・溝状遺構検出、写真撮影。
- 10月18日～10月22日
- E・F-7・8区:Ⅱc・Ⅲ層掘り下げ、古道検出、実測、遺物取り上げ。G-8区:古道掘り下げ、検出、断面図作成、写真撮影、平板実測、遺物取り上げ。E-7・8区:溝状遺構掘り下げ、写真撮影。
- 10月25日～10月28日
- E・F-7・8区:Ⅲ層掘り下げ、コンター図作成。E-7・8区:古道検出、平板実測、写真撮影。G-8区:古道実測、遺跡全景写真撮影。安全対策。調査終了。

第4節 整理・報告書作成作業

野方前段遺跡B地点の整理・報告書作成作業は平成22年4月～平成24年3月の2年間、柿木段遺跡の平成22年度に実施した発掘調査の整理・報告書作成作業は平成23年4月～平成24年3月の1年間、鹿児島県立埋蔵文化財センター-東九州整理作業所で実施した。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制(平成22年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 山下吉美

作成企画 //

次長兼総務課長 田中明成
次長兼南の縄文室長 中村耕治
調査第二課長 井ノ上秀文
文化財主事兼
調査第二課
第一調査係長 前迫亮一

作成担当 //

文化財主事兼
調査第二課
第一調査係長 前迫亮一
文化財主事 長崎慎太郎
文化財調査員 岩永勇亮

事務担当 //

総務係長 大園祥子
主 事 高崎智博

作成体制(平成23年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺田仁志

作成企画 //

次長兼総務課長 田中明成
次長兼南の縄文室長 井ノ上秀文
調査第二課長 富田逸郎
文化財主事兼
調査第二課
第一調査係長 八木澤一郎

作成担当 //

文化財主事 松下建生

事務担当 //

総務係長 大園祥子
主 事 高崎智博

企画委員 //

文化財 研究員 岩永勇亮

報告書作成検討委員会 平成23年11月29日
寺田所長ほか9名

報告書作成指導委員会 平成23年11月24日
井ノ上次長ほか6名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

野方前段遺跡B地点は曾於郡大崎町野方に、柿木段遺跡は曾於郡大崎町立小野に所在する。

2つの遺跡が所在する大崎町は、鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し、東西に約8km、南北約18km、総面積は100.82km²である。東側は志布志市、西側は鹿児島市、南側は肝属郡東串良町、北側は曾於市の3市1町と接しており、南東部は黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は、九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地によって形成されている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山ともいう）である。主峰は宮崎県の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湧奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など標高500～600m級の山々で、南部の大隈嶺岳（1,236.8m）を主峰として横岳・御岳など標高1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森に覆われている。

大隅半島に関する地質は、高隈山周辺に分布している新生代古第三紀の日南層群によって大隅半島の基盤を成している。山間地を埋めるような形で洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。

この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湧奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は、堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され、断片的な台地を残すだけの丘陵地形や原面はほとんど浸食されずに残った広大な台地となっている。

一方、低地は高隈山地や鰐塚山地などに水源をもつ大小の河川が流れており、狭い谷底平野や河岸段丘等を形成しながら志布志湾や鹿児島湾へと流れ出ている。

大崎町の地形は、志布志湾に面した大崎地区と内陸部の野方地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。北部は標高150m～200mの丘陵地帯・台地であり、台地上では畑作が盛んである。北端部では谷間の多い起伏の激しい地形で、高隈山系などに端を発する菱田川・田原川・持留川の3つの川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部は海岸線に向い緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形で、河川によってシラス台地が開折された水田地帯がひろがっている。

大崎町の地質は、シラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く、低地部に位置する水田の一部では泥炭層

を成しているところがある。

野方前段遺跡B地点及び柿木段遺跡が立地する野方・立小野地区は、標高200mのシラス台地を菱田川の支流である大島川が浸食し、小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は、畜産や畑作として利用されている。また、谷間では小川や湧水が存在し、現在でも水田として利用されている。

野方前段遺跡は八つ手状になった台地の縁辺部に位置し、調査の便宜上、間に谷を挟んで南西部をA地点、北東部をB地点とした。B地点が天神段遺跡と隣接している。

柿木段遺跡は台地との比高差約50mで貫入している谷部に位置している。

第2節 歴史的環境

野方前段遺跡B地点及び柿木段遺跡が所在する大崎町では、主に菱田川、田原川、持留川、菱田川支流の大島川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布が見られる。

2つの遺跡周辺ではこれまで本格的な発掘調査が行われていなかったため、歴史的にどのような環境にあったのかは考古学的には不明であった。しかし、東九州自動車道建設に伴う発掘調査により次第に様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

大崎町内における旧石器時代の遺跡の報告はこれまでなかった。しかし、野方前段遺跡に隣接し、平成19年度から現在（平成23年度）も発掘調査が実施されている天神段遺跡では、ナイフ形石器文化期の石器と細石器文化期の石器製作跡と考えられる遺構や石器が確認されている。

縄文時代

主な縄文時代の遺跡としては、金丸城跡（早期）、二子塚A遺跡（早期）、立山B遺跡（前期・中期・晩期）、下堀遺跡（後期）、細山田遺跡（後期）等が挙げられる。東九州自動車道建設関連遺跡では、加治木堀遺跡と天神段遺跡が挙げられる。加治木堀遺跡では縄文時代中期の落とし穴が7基確認されている。天神段遺跡では縄文時代の遺構としては早期の堅穴住居跡・連穴土坑・落とし穴・集石、前期の落とし穴、晩期の土坑等が確認されている。遺物としては早期から晩期まで多種多様の土器が確認されている。

弥生時代

主な弥生時代の遺跡としては、沢目遺跡（中期から後期）、下堀遺跡（中期）、板迫遺跡（中期）等が挙げられ、中期の遺跡が多い。また、田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に、河口付近にある横瀬地域では甕破片が採集されてい

る。東九州自動車道関連遺跡では、加治木堀遺跡と椿山遺跡が挙げられる。加治木堀遺跡では中期の山ノ口式土器が、椿山遺跡では同じく中期の入室Ⅱ式（吉ヶ崎式）土器が確認されている。

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは、南九州では数少ない前方後円墳をはじめとする古墳群が存在する。畿内との関連を窺わせる重要な遺跡が多い。

主な古墳群としては、横瀬古墳、神領古墳群、飯隈古墳群、田中古墳群、後追古墳群、飯隈地下式横穴墓群、鷲塚地下式横穴墓群等が挙げられる。

横瀬古墳は、古墳時代中期（5世紀後半頃）の大型前方後円墳で、隣接する肝属郡東車良町唐仁大塚古墳について県内第2の規模を誇る。平成2年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では、全長160m、墳長132m、前方部幅68m、後円部径64m、くびれ部幅48mを測り、墳丘からは円筒埴輪片、象形埴輪片が確認されている。また、昭和53年の大隅地区埋蔵文化財分布調査で実施した範囲確認調査では周濠跡も確認され、周濠跡からは、伽耶系陶質土器及び大阪府陶器産の須恵器も確認されている。なお、濠の幅は12～23m、深さは約1.5mである。墳丘の高さについては、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、実際の後円部は現在より高かったと考えられる。被葬者については明らかにされていないが、明治35年に盗掘を受け、その際に腐食した直刀や鏡、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと伝えられ、被葬者の実力を窺わせる。

神領古墳群では、前方後円墳4基、円墳8基で構成され、また、地下式横穴墓7基の存在が知られている。特に、6号墳は全長43m、後円部径19m、高さ3m、前方部幅16m、高さ2mの前方後円墳で、後円部に堅穴石室がある。昭和37年に日光鏡・銜製帯帯鏡各1面が採集され、昭和43年の調査では、石室は花崗岩質板石6枚を使用した組合せ石棺で、鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が確認された。神領遺跡群の地下式横穴墓1号は、昭和35年に調査され、長方形で家形の玄室、妻入りの羨道部取り付け・鉄剣・イモガイ製貝銅が出土した。地下式横穴墓3・4号は、昭和55年に調査された。地下式横穴墓5号は、昭和62年に調査され、イモガイ製貝銅が出土した。地下式横穴墓6号は、平成2年に調査され、玄室内には南側に甕が数本、北側に大腿骨が残存しており、副葬品は確認できなかった。

古代・中世

古代の遺跡としては下堀遺跡、東九州自動車関連遺跡の天神段遺跡が挙げられる。下堀遺跡では土坑や土師器が、天神段遺跡では掘立建物跡や墨書土器が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野御城跡・竜相城跡・金丸城跡・杵谷城跡・遠見ヶ丘が挙げられる。特に、金丸城跡は平成11・12年に調査され、溝状遺構・土坑・龍泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前系播鉢・天目碗等が確認されている。東九州自動車関連遺跡では天神段遺跡が挙げられ、掘立建物跡、青銅鏡、和鏡等多くの副葬品を伴った土坑墓等が確認されている。

近世

近世の野方地区は、寛永年間（1624～1643年）に薩摩藩の私領主（一門家）である加治木島津家の領地（持切在）として開墾された。一方、荒佐野お照日神社には、大阪夏の陣後の元禄2年（1689年）に摂津・河内・和泉から薩摩藩へ移住し、荒佐野を開拓した人々の記念碑がある。荒佐野の氏神として移住の際に勧進された伊勢神社は、明治期に田野方村の村社であった照日神社に合祀され、現在の照日神社となった。

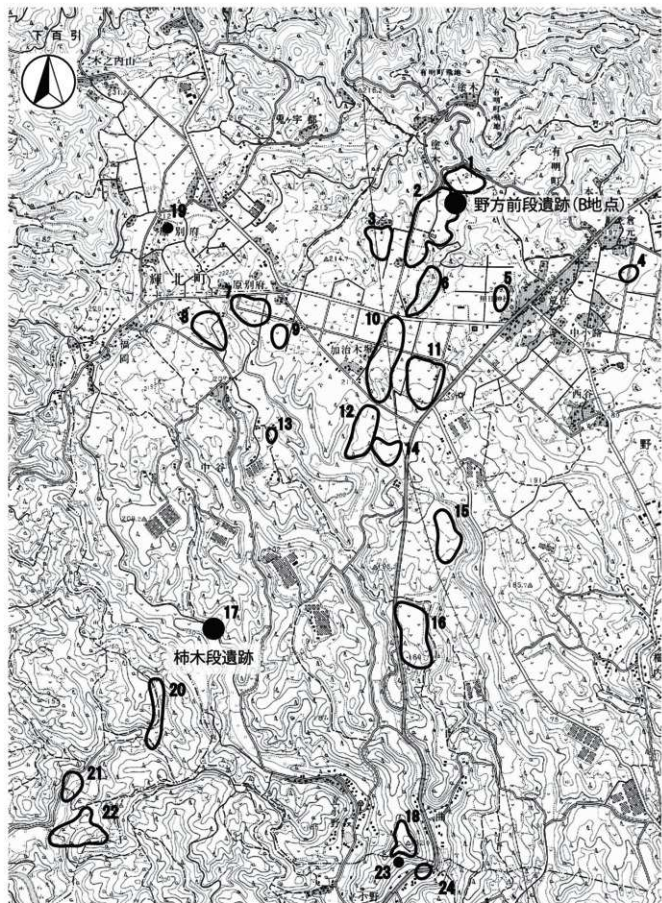
近世の遺跡としては金丸城跡が挙げられ、掘立建物跡・塼土を伴う土坑・軽石集積・肥前系染付・龍門司窯および當代窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄卒等が確認されている。東九州自動車道関連遺跡では天神段遺跡が挙げられ、安永ボラ（1779年）を埋土とする畝状遺構・薩摩焼等が確認されている。

【参考文献】

- 「大崎町誌」1951年 救仁郡新二
- 「大崎町誌（明治百年）」1975年 大隅町役場
- 「立山B遺跡」2001年 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 「金丸城跡」2005年 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 「下堀遺跡・大崎町細山田段遺跡」2005年 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点」2010年 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺物等	備考
1	天神段	鹿児島県曾於郡大崎町野方天神段	散布地		縄文	台地	貝殻・炭・灰文・ 前平式・土師器・ 白磁	H9年農政分布 H19～23年発掘 調査
2	野方前段	鹿児島県曾於郡大崎町野方前段	散布地		縄文、古墳	台地	塞ノ神式・黒川 式・吉ヶ崎式・ 土師器	本報告書
3	内ヶ道	鹿児島県曾於郡大崎町野方内ヶ道	散布地		古墳	台地	成川式	H9年農政分布
4	倉元	鹿児島県曾於郡大崎町野方倉元	散布地			台地	土器片	H3年農政分布
5	荒佐野	鹿児島県曾於郡大崎町野方荒佐野	散布地	畑地	弥生(中)	台地	土器片・磨製石斧	
6	宮ノ本	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		弥生	台地		H19年発掘調査
7	龜形	鹿児島県曾於郡大崎町野方2622-1外	散布地		弥生	台地	土器	H12年農政分布
8	岩井場	鹿児島県曾於郡大崎町野方2572-2外	散布地		古墳	台地	土器	H12年農政分布
9	原別府	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地	畑地	縄文(後)	台地	土器片・打製石斧	
10	加治本塚	鹿児島県曾於郡大崎町野方加治本塚	散布地	畑地	縄文、弥生、 中世	台地	土器片・山之口 式・鉄鏝	H19年発掘調査
11	樺山	鹿児島県曾於郡大崎町野方3179-5	散布地		縄文、弥生、 古代	台地	岩崎式・吉ヶ崎 式	H19～20年発掘 調査
12	樺山	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		古墳	台地		
13	岩井場段	鹿児島県曾於郡大崎町野方中段	散布地		縄文、弥生	台地		H8年農政分布
14	瀬ノ塚A	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ塚・ 樺山・又合流	散布地		縄文、古墳	台地	破石・土器片・ 成川式	H9年農政分布
15	瀬ノ塚B	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ塚	散布地			台地		H9年農政分布
16	二松	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ塚	散布地		弥生、歴史	台地		
17	柿木段	鹿児島県曾於郡大崎町立小野柿木段	散布地		縄文、古代、 中世	低地	入佐式・石斧・ 土師器・須恵器・ 鉄族	本報告書
18	遠見ヶ丘	鹿児島県曾於郡大崎町野方立小野	散布地		中世	台地		
19	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿屋市輝北町下百引東原別府	散布地		縄文 (前・後・晩)	台地	春日式・岩崎式・ 草野式・破石・ 夜臼式	S56年度 分布調査
20	大牧	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古代			H19年分布調査
21	樋ノ口I	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古墳、古代			H19年分布調査
22	樋ノ口II	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地		古墳、古代			H19年分布調査
23	立小野A、 B	鹿児島県鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	畑地	市来式・指宿式・ 石器	
24	立小野	鹿児島県鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文(後)、 弥生	畑地	弥生土器	



(S=1/25,000)

第1圖 周辺遺跡位置圖 (柿木段遺跡と共通)

第3章 野方前段遺跡B地点の調査の方法と成果

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理・報告書作成作業の方法、出土遺物の分類について簡潔に述べていくこととする。

1 発掘調査の方法

野方前段遺跡は谷を挟み2つの台地上に位置する。調査の便宜上、谷の南側の台地をA地点、北側の台地をB地点とし調査を行うこととした。

調査を進めるにあたり、東九州自動車道建設予定地の工事用基準杭「STA74+80」と「STA75+00」を結ぶ線を基軸とし、東西方向にA～Nまで、南北方向に1～30までとする10m×10mのグリッドを用い調査区を設定した。これにより野方前段遺跡B地点の調査区の範囲は、F～L-19～29となった(第2図)。

このグリッドを基にして、遺構や遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで行う際の測量座標は、M-19区の左下を原点(0,0)とし、縦軸をX、横軸をYとした。

調査は、基本的には人力(主に山楾・鋤盤を使用)で掘り下げを行い、表土剥ぎ、無遺物層、火山灰のブロック等で硬い地層は重機を使用した。遺構の調査は移植ごて等遺構に適した道具を用いて慎重に調査を進めた。

2 遺構の認定と検出方法

(1) 遺構の認定

野方前段遺跡B地点では、縄文時代の早期～中期の遺構が検出された。検出面や埋土の状況、規模等を総合的に判断して遺構の認定を行った。土坑の中には底部に明瞭な小ピット等(遊茂木痕)が確認されなかった場合、「落とし穴状遺構」として報告されることもある。しかし、今回は、落とし穴の可能性があっても不確定要素があるものについては土坑として報告することとした。

遺構の時期の判断については、検出面や埋土の状況から大まかには判断できた。しかしながら、遺構の時期を判断する際に1つの指標となる遺構内や周辺遺物の時期が2時期以上あったため詳細な時期については判断できなかった。

(2) 遺構の検出方法

落とし穴や土坑等の遺構の検出については、調査担当者全員が「検出面を当時の掘り込み面に限りなく近いところで検出しよう」という共通の意識をもって調査に臨んだ。結果としては、遺構の一部は当時の掘り込み面より下位の層で検出したものもあり、「掘りすぎ」であったことは否めない。したがって遺構の深さにもばらつき

が出たことは今後の調査における課題とする。

3 整理・報告書作成作業の方法

野方前段遺跡B地点の整理・報告書作成作業は、平成22年度～平成23年度に県立環境文化センター東九州整理作業所で実施した。

(1) 平成22年度

平成22年度は、分類・接合・遺物ドット図作成のためのデータ処理・土層断面トレース・遺構分類・遺構トレース・石器実測委託等を実施した。

遺物の水洗い・注記・周辺地形図のデジタルトレースについては、平成21年度に刊行された野方前段A地点の整理・報告書作成作業の中で行われた。

水洗いについては、発掘現場でも行われたが、未洗いや洗いが不十分な遺物について行った。また、石器の中には微細剥離等の認定を行うため超音波洗浄機を使用して行った。

注記はこれまで刊行された遺跡の注記と重複することがないようにデータを管理している南の縄文調査室と連携を図り、「NGM.B」と注記することとした。注記をする際は、薬品使用などで換気等作業環境には十分留意して作業を進めた。

遺物の分類・接合は、石器については、剥片石器と礫石器に大別し、石鏃、磨石、敲石等に分類した。土器については、胎土や文様等を基に分類後、接合作業を行った。

遺物ドット図作成のためのデータ処理は、遺物を平板とトータルステーションで取り上げたためデータを統合する必要があった。トータルステーションで設定した測量座標を用いて平板で取り上げた遺物は出土状況図からデジタルタイザーを使用してデータ化し、まとめた。

遺構の認定・分類は、発掘調査時に行われていたのを基に、実測図や写真等を用いて検出面、埋土の状況等から遺構の種類や時期を再検討し、確定した。

土層断面や遺構のトレースは、はじめに鉛筆トレースを行い、点検・修正を行った後、本トレースを行った。

石器実測委託については、縄文時代該当の石鏃を中心に14点行った。

(2) 平成23年度

平成23年度は、宮ヶ原遺跡編でも述べたとおり、宮ヶ原遺跡、柿木段遺跡との3遺跡合本の報告書ということで3遺跡の整理作業を計画的に実施することとした。

野方前段遺跡B地点は、土器実測、拓本、一部石器実測が残っていたが、遺物量の多い宮ヶ原遺跡と平成22年度に調査が実施された柿木段遺跡の整理作業を優先し、進捗状況を確認しながら整理作業を進めた。

その後、レイアウト、遺物写真撮影、現場写真選別、原稿執筆等を経て報告書刊行の運びとなった。



第2図 周辺地形図及びグリッド配置図

第2節 層序

野方前段遺跡B地点の基本土層は第2表のとおりである。遺物包含層、火山灰等の詳細については、以下の通りである。

I層は表土(旧耕作土)である。

II層はP2(安永ボラ, 1779年の桜島起源の噴出物)が点在する層である。耕地改良等でボラ抜きが行われており、集めたボラを使った畦状の「ボラ塚」もみられた。

III層は黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで3層に分層した。

III a層: 黒色土で、中世～近世の遺物包含層であるが、近世の遺物は出土しなかった。

III b層: 暗茶褐色土で、弥生時代～古代の遺物包含層である。

III c層: オリーブ褐色土で、III b層と同じく、弥生～古代の遺物包含層である。

IV層はP7(約5,000年前の桜島起源の噴出物)を含む層で、色調の違いで2層に分層した。

IV a層: 茶褐色土で、P7の腐植土層である。

IV b層: 黄褐色パミス(P7)層

V層はアカホヤ火山灰関連の層である。縄文時代前期～中期の遺物包含層であるが、遺物は確認されず、遺構のみ確認された。

第2表 野方前段遺跡B地点の基本土層

I	層	表土	平均厚
II	層	明黄色パミス(P2)混土層	8cm
III a	層	黒色土	10cm
III b	層	暗茶褐色土	10cm
III c	層	オリーブ褐色土	5cm
IV a	層	茶褐色土	8cm
IV b	層	黄褐色パミス層(P7)	12cm
V a	層	褐色土	20cm
V b	層	赤褐色土	10cm
V c	層	明赤褐色パミス層(7a計一次)	12cm
VI	層	明黄褐色土(P13混)	10cm
VII	層	黒褐色土(P13混)	14cm
VIII	層	薩摩火山灰層(P14)	24cm
IX	層	黒色粘質土	16cm
X	層	暗茶褐色土	12cm
X I	層	黒褐色弱粘質土	10cm
X II	層	暗茶褐色土	14cm
X III	層	褐色土(P15混)	16cm
X IV	層	暗黒褐色硬質土(P15混)	20cm
X V	層	暗褐色土(P17混)	12cm
X VI	層	黄白色硬質土	20cm
X VII	層	黄白色砂質土	16cm
		シラス(上面まで調査終了)	-

色調の違いで3層に分層した。

V a層: 褐色土で、アカホヤ火山灰の腐植土層である。

V b層: 赤褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。

V c層: アカホヤ火山灰一次の軽石(約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物)層

VI層は明黄褐色土で、縄文時代早期の遺物包含層である。P13(約10,600年前の桜島起源の噴出物)を含む。VII層は黒褐色土で、縄文時代早期の遺物包含層である。VI層よりP13を多く含む層である。

VIII層は薩摩火山灰層(P14, 約12,800年前の桜島起源の噴出物)である。

IX層は黒色粘質土である。この層から下位の層は旧石器時代該当層となるが、B地点では旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。

X層は暗茶褐色弱粘質土である。

X I層は黒黄褐色弱粘質土で、IX層より粘質が弱い。

X II層は暗茶褐色土である。X層より粘質が弱い。

X III層は褐色土で、P15(桜島起源の噴出物)で、詳細な年代は不詳と呼ばれるオレンジパミスが点在する。

X IV層は暗黒褐色硬質土で、オレンジパミス(P15)が密に含まれる。

X V層は暗褐色土で、P17(約28,000年前の桜島起源の噴出物)と呼ばれるオレンジパミスを含む層である。

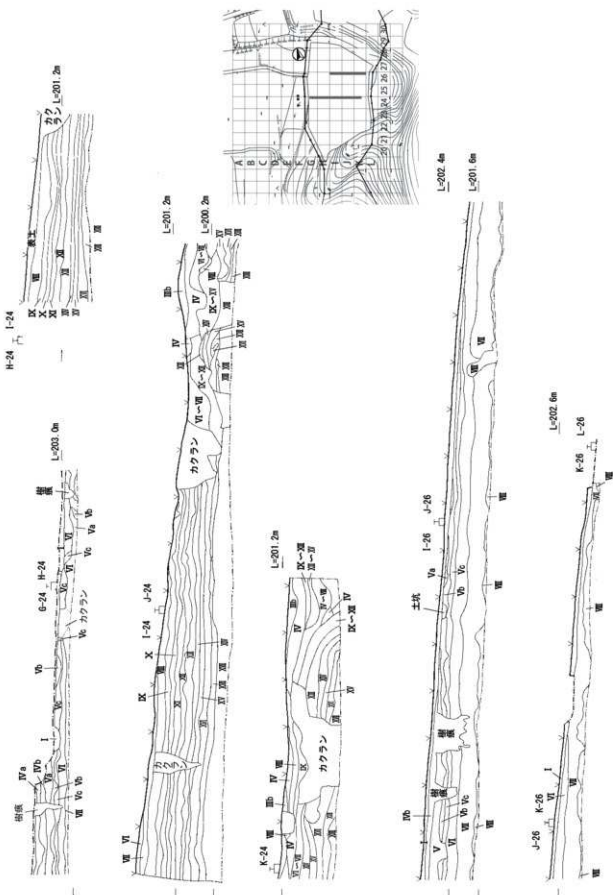
X VI層は黄白色硬質土である。

X VII層は黄白色砂質土である。

※シラス(約26,000～29,000年前の給良カルデラ起源の噴出物)。上面で掘り下げをやめ調査終了。

※火山灰の年代については、2003 町田洋 新井房夫 著 東京大学出版会『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—』(p108～110)から引用した。

なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。



第3区 土層断面図

第3節 調査の成果

1 縄文時代早期の調査

(1) 調査の概要

本遺跡における縄文時代早期の該当層は、VI・VII層である。

調査の結果、遺構は集石と土坑が検出され、遺物は多種多様の土器・石器が出土した。土坑については、可能な限り掘り込み面で検出するために細心の注意を払って調査を進めたが、下位のVIII層（薩摩火山灰層）上面でしか検出できなかった。

(2) 遺構

縄文時代早期に該当する遺構は、6基の集石遺構と5基の土坑を検出した。

検出層や埋土の堆積状況等から、遺構を早期前半と中期後半の2時期に大別した。

ア 縄文時代早期前半（VII層）の遺構

検出された集石遺構6基、土坑5基のうち、縄文時代早期前半に該当する遺構は、集石遺構が4基、土坑が2

基である。

第4図の遺構配置図（等高線はVIII層上面のもの）を見て分かるとおり、1・2号集石、2号土坑は尾根の先端部付近に、3・4号集石は東側の緩やかな斜面上で比較的平坦な場所に、1号土坑は、3・4号集石よりさらに40～50cm下ったところに位置している。

集石遺構（第5・6図）

1号～4号集石はVII層で検出された。3号集石以外は、VI層検出の集石遺構（縄文時代早期後半該当）と比較すると、礫の数や大きさが多大で、礫の集中が見られる。4基とも明確な掘り込みや焼土は確認できなかった。

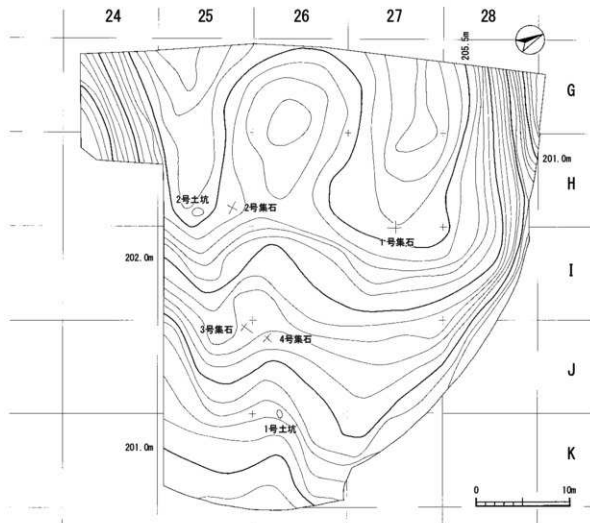
1号集石

H・I-27区、VII層中で検出された。礫は2個を除き、長軸60cm、短軸50cmの範囲に集中して検出された。

集石を構成する礫数は23個で、そのうち22個が安山岩である。遺構に関連する遺物の出土は無かった。

2号集石

H-25区、VII層上で検出された。礫は長軸90cm、



第4図 縄文時代早期前半の遺構配置図

短軸 50cm の範囲に最も集中しているが、その周囲にも散在する。

集石を構成する礫数は 46 個であり、安山岩の角礫・亜角礫が多い。遺構に関連する遺物の出土は無かった。

3号集石

J-25区, VII層上面で検出された。礫は長軸 90cm, 短軸 75cm の範囲に平面的に広がっている。

集石を構成する礫数は 12 個であるが、破砕礫が多い。近くに土器片が 1 点出土しているが、3号集石との関連ははっきりしていない。土器片は小破片のため土器型式は不明である。

VII層中で検出された集石遺構の中では、唯一礫が散在気味な集石であり、4号集石と隣接しているために、3・4号集石は何らかの関連性も考えられる。

4号集石

J-26区, VII層中で検出された。礫は長軸 90cm, 短軸 65cm の範囲に最も集中しているが、散在的な礫まで含めると半径 45cm の範囲にやや重なりながらまとまりが見られる。

礫は火熱を受けて砕けているものも確認でき、集石を構成する礫数は破砕礫を含めて 41 個であり、全体的に 10cm 程度の大きさの礫で構成されている。また、軽石

が 1 個確認されている。遺構に関連する遺物の出土は無かった。

土坑 (第7図)

1号土坑

J・K-26区, VII層上面で検出された。平面形は南側が一部突出する不定形で、長軸 120cm, 短軸 50cm である。検出面からの掘り込みの深さは最深部で 27cm を測り、底面はVII層を貫通しIX層が確認できる。

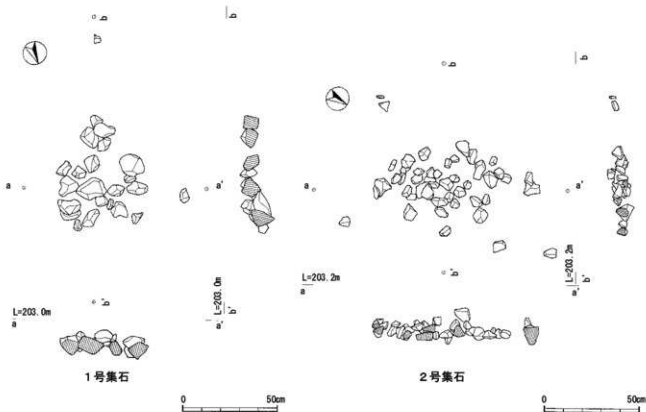
埋土は 5~10mm 大の黄橙色パミス (現在のところ P13 と考えられている。) を多く含む黒褐色土であり、VII層の土に該当する。部分的にパミスを含まない粘性のある暗茶褐色土のブロックが混在している。遺物は出土していない。

2号土坑

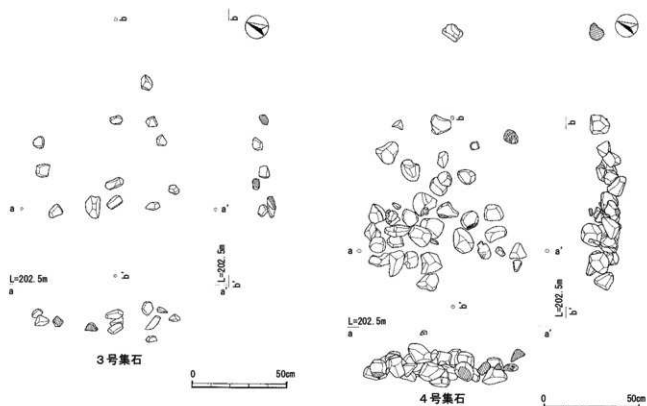
H-25区, VII層上面で検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸 105cm, 短軸 65cm を測る。

検出面からの掘り込みの深さは最深部で 28cm を測り、底面は 30cm の厚さで堆積しているVIIを貫きIX層まで達している。

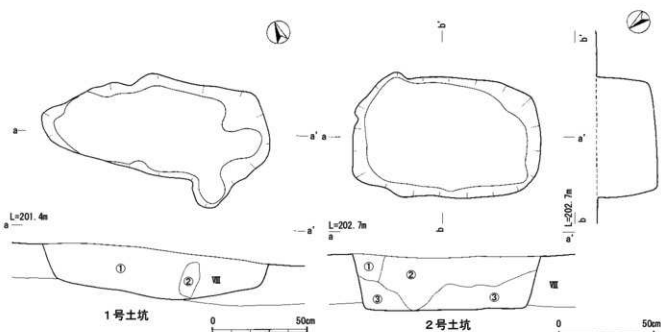
埋土はVI・VII層に類似した土が堆積している。遺物は出土していない。



第5図 縄文時代早期前半の集石遺構 1



第6図 縄文時代早期前半の集石遺構2



①	黒褐色土	黄橙色バミス(5-10mm)P13を多く含む(VII層の土)
②	暗茶褐色土	粘質で黄橙色バミスは含まない

①	黄茶褐色土	弱粘質, 黄白色バミス(1-10mm)
②	暗黄褐色土	弱粘質(VII層に類似)
③	暗黄茶褐色土	弱粘質(2-10mm)黄橙色バミスを含む

第7図 縄文時代早期前半の土坑

イ 縄文時代早期後半（VI層）の遺構

検出された集石遺構6基、土坑5基のうち、縄文時代早期後半に該当するのは、集石遺構が2基、土坑3基がある。

第8図の遺構配置図（等高線はVI層上面のもの）と第4図の遺構配置図を比較すると、第4図で確認できた2か所の尾根の間が埋まり、尾根が1か所になったことが分かる。

5・6号集石はその尾根の先端部から高低差で1m程下った斜面で、3号土坑は尾根の先端部の内側で、4・5号土坑は調査区中央付近の1-26区で隣接して検出された。

集石遺構（第9図）

5・6号集石は早期前半の集石遺構と比較すると、礫の数が少なく、大きさも小さく、礫の集中は見られない。2基とも明確な掘り込みや焼土は確認できなかった。

5号集石

1-28区のVI層上面、地形に沿った形で検出された。周辺には同じ標高にIV～VI層が不規則に混在している。礫は散在的ではあるが長軸80cm、短軸65cmの範囲に

平面的に広がっている。集石を構成する礫数は8個である。遺構に関連する遺物の出土はなかった。

6号集石

J-27区のVI層、地形に沿った形で検出された。5号集石と同様に周辺には同じ標高にIV～VI層が不規則に混在している。

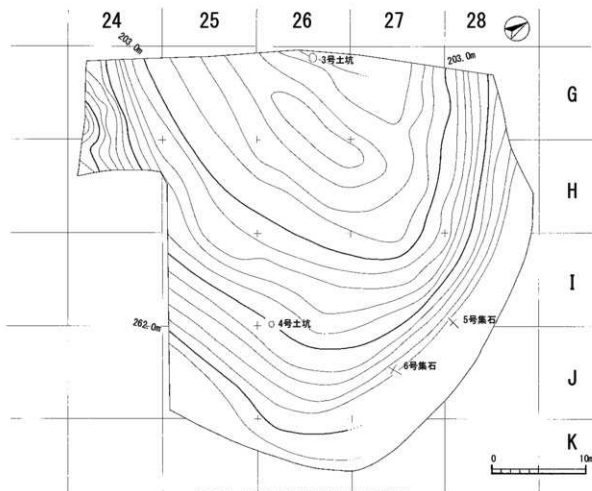
礫は散在的ではあるが長軸100cm、短軸85cmの範囲に広がっている。集石を構成する礫数は11個であり、遺物の出土は無かった。

土坑（第10図）

3号土坑

G-26区、調査区内では最も標高が高くなっている北西端部のVII層上面で検出された。平面形は楕円形に近い不定形で、長軸66cm、短軸60cmを測る。西側が深くっており、東側は一段高く作られている。

埋土は硬くしまった横橙色土の単一埋土であり、1cm大の黄白色パミスが混ざるアカホヤ火山灰の1次堆積である。このことから3号土坑は鬼界カルデラの爆発前のそう遠くない時期に掘られた可能性が考えられ、早期末頃の遺構と考えられる。遺物の出土は無かった。

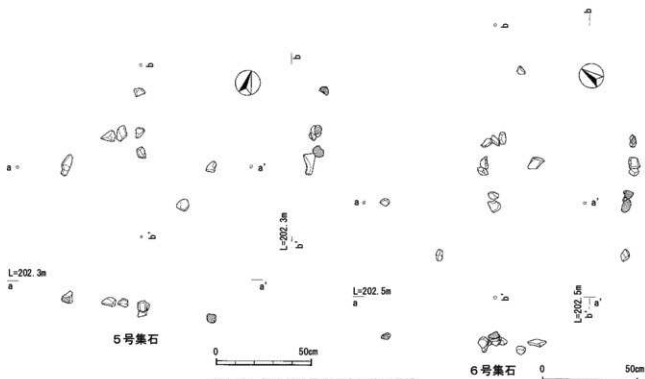


第8図 縄文時代早期後半の遺構配置図

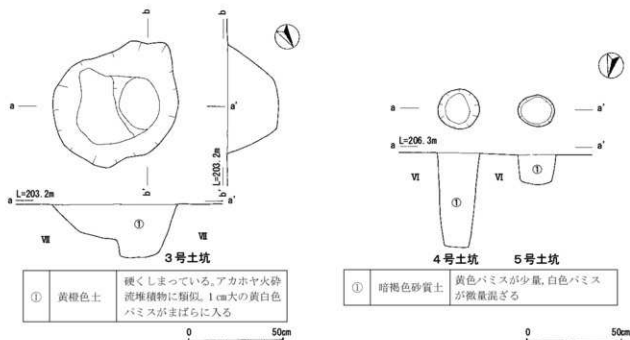
4・5号土坑

2基の土坑は調査区の中央付近1・J-26区、VI層上面で隣接して検出された。平面形は2基とも円形で、4号土坑が直径22cm、深さ50cm、5号土坑が直径20cm、深さ20cmを測る。埋土は4・5号土坑ともに同じ単一埋土で、暗褐色砂質土に黄色バミスが少量と、白色バミスが微量混ざる。埋土から観察すると、アカホヤ

火山灰によりバックされていた土坑であるが、埋土内にはアカホヤ火山灰は堆積しておらず、VI層に近い特徴をもつ暗褐色の、若干サラサラとした埋土が堆積している。このことから4・5号土坑は鬼界カルデラの爆発以前に掘られたが、火山灰が降下する前にはすでに埋まっていたと考えられる早期末頃の遺構である。遺物の出土は無かった。



第9図 縄文時代早期後半の集石遺構



第10図 縄文時代早期後半の土坑

(3) 遺物

A 土器

I類土器 (第12図 1~10)

1・2は口縁部片である。口唇部にヘラ状工具により浅いキザミを施し、口縁部上端に2条の横位貝殻刺突文、その下に鋭い鋸歯状の貝殻刺突文を施している。1では胴部に横位方向の押し引文が施されている。

3~10は胴部片である。3は上部に鋸歯状の貝殻刺突文が施されている。胴部には全て貝殻押し引文が施されているが、施文の強弱により2種類の押し引文が施され、さらにそれが交互に施されていることが分かる。

II類土器 (第12図 11)

11は口唇部にヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部上端には3条の横位貝殻刺突文が施され、その下位には貝殻押し引文が施されている。

III類土器 (第13・14図 12~29)

12~21は口縁部片であり、12~18は口縁部が外反するもの、19~21は口縁部が直行もしくはほぼ直行するものや、瘤状突起が付くものである。基本的には口縁部上端に貝殻刺突文を綾杉状や横位に施し、胴部には貝殻条痕文を綾杉状・横位・縦位に施している。口唇部は無文やキザミを施すもの他に、16や17の口唇部に見られるように細かな連点状の刺突文を施すものがある。

22~26は胴部片である。22~25は貝殻条痕が綾杉状に、26は縦位に施されている。27~29は底部片である。27・28は底部付近は貝殻条痕が横位になり、29は底部付近まで綾杉状に施されている。

IV類土器 (第14~16図 30~36)

36は口径26.6cm、底径14.1cm、器高24.3cmの完形品

である。胴部で外反し口縁部でわずかに内湾する器形を呈する。外面には貝殻刺突文が綾杉条に3列施されている。30・31・35は口縁部片、31・32は胴部片、34は底部片である。基本的には全面に貝殻刺突文が施されているが、32は無文が見られる。35は口縁部上端に2条の横位、その下位に斜位の貝殻刺突文が施され、貝殻を少し押し引いた様な文様が横位方向に施されている。

V類土器 (第17図 37~43)

37・38は口縁部片である。波状口縁を呈し、縦方向の貼付け突帯が波頂部に施されており、突帯には貝殻刺突文が施される。口縁部上端に35と同様の貝殻押し引文状の文様、その下位には貝殻条痕文が共に横位方向に施されており、それが胴部まで交互に施されている。

39は口縁部上端に細沈線の様な横位方向の筋が入る。その下位には深い斜位の貝殻刺突文が施されている。

40~43は同一個体である。口唇部には細かなキザミ、口縁部上端には深い斜位の貝殻刺突文が「X」字状に施されている。胴部には貝殻条痕文が格子状に施されているが、たまに斜位方向に入る貝殻条痕文も見られる。

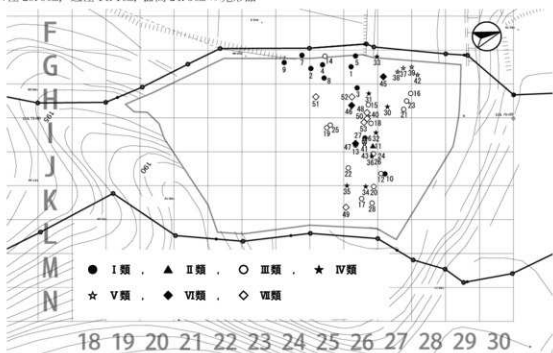
VI類土器 (第18図 44~47)

44~47は胴部片である。44は楕円形、45~47は山形の押し文様が施されている。

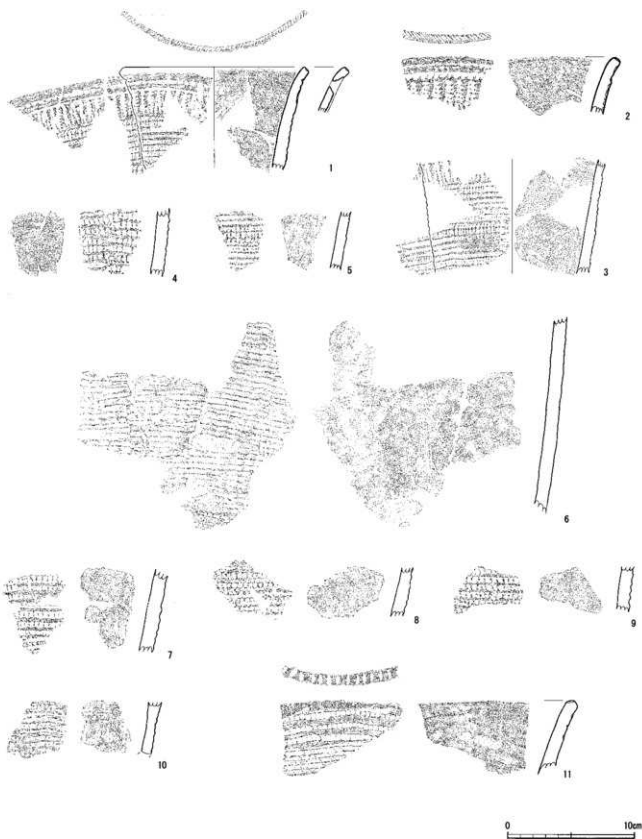
VII類土器 (第18・19図 48~53)

48は口縁部に貝殻刺突文が連続して帯状に施され、胴部には沈線文を施し、その内部を摺糸文で充填している。

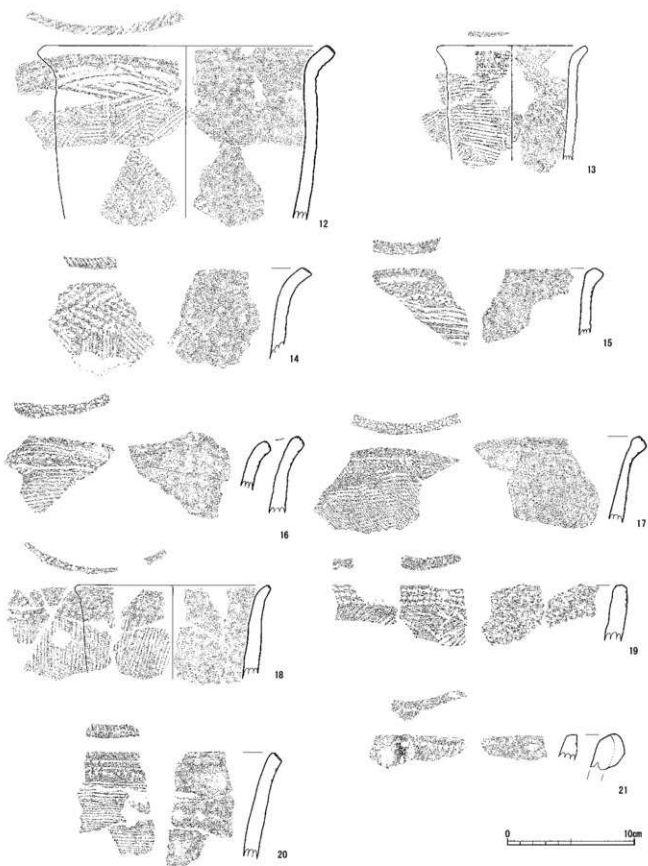
49~51は胴部片である。49は丁寧なナゲ調整を行った後に沈線文を施し、その内部を摺糸文で充填している。52・53は底部片である。底部はやや上げ底となる。



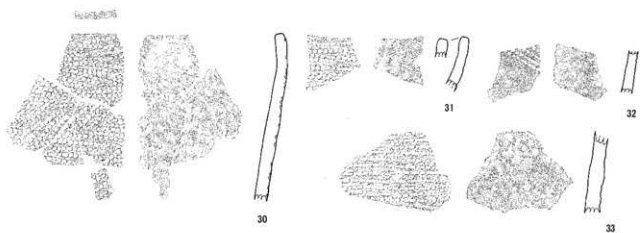
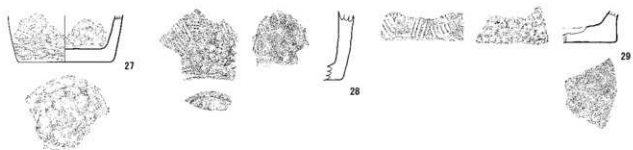
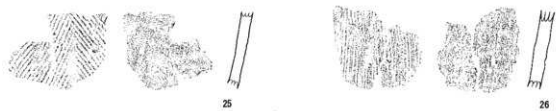
第11図 縄文時代早期の遺物出土状況図



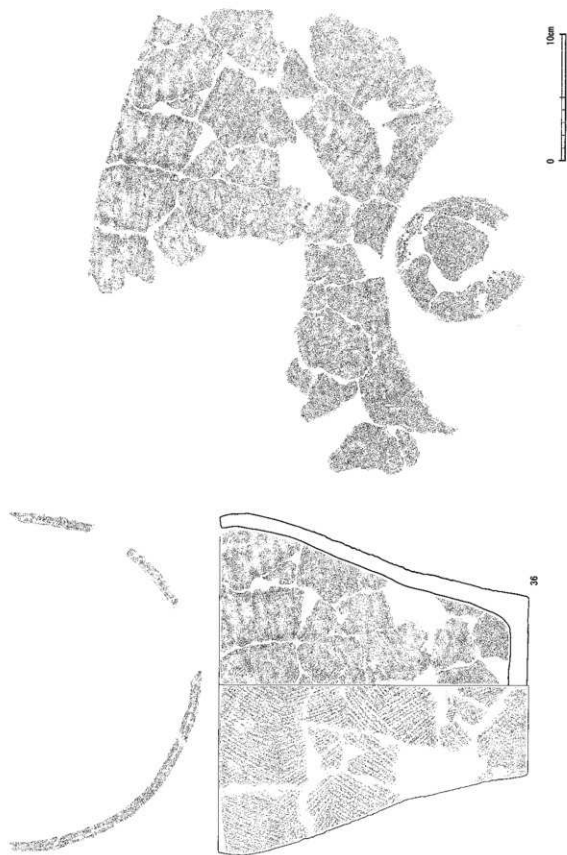
第12図 縄文時代早期の土器 1



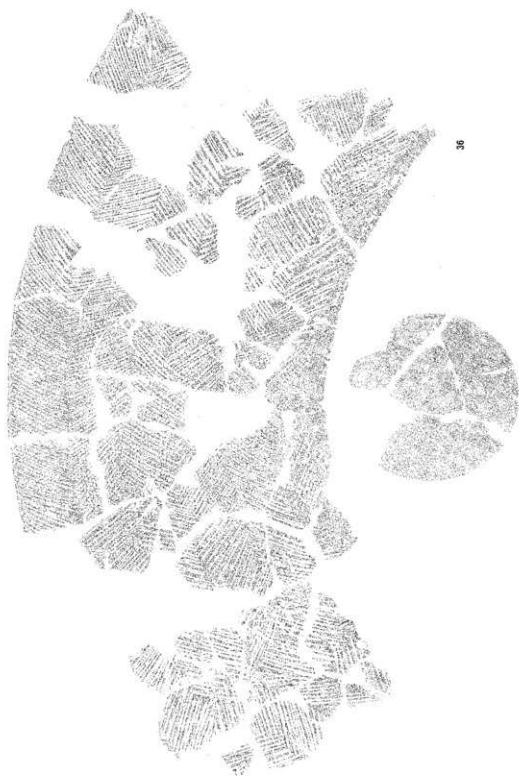
第13図 縄文時代早期の土器 2



第14図 縄文時代早期の土器 3



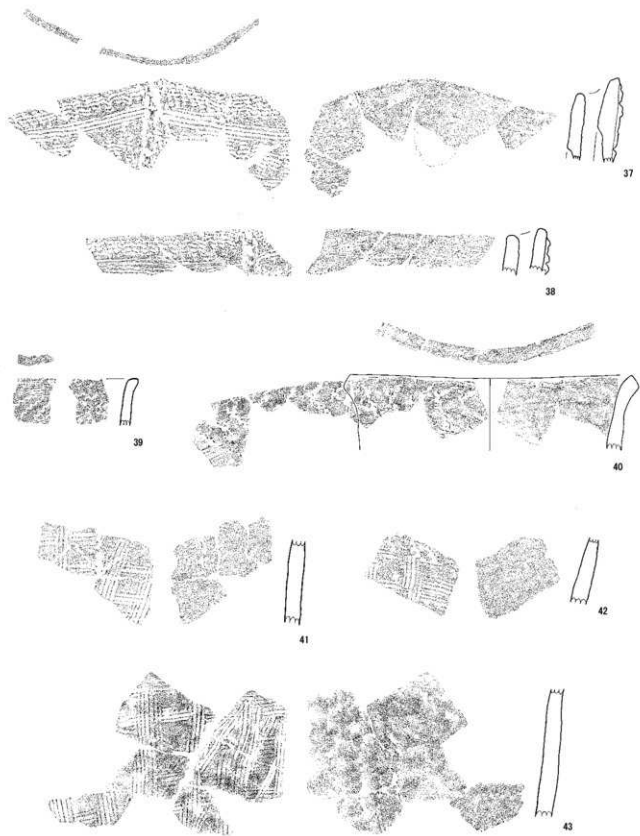
第15図 縄文時代早期の土器 4



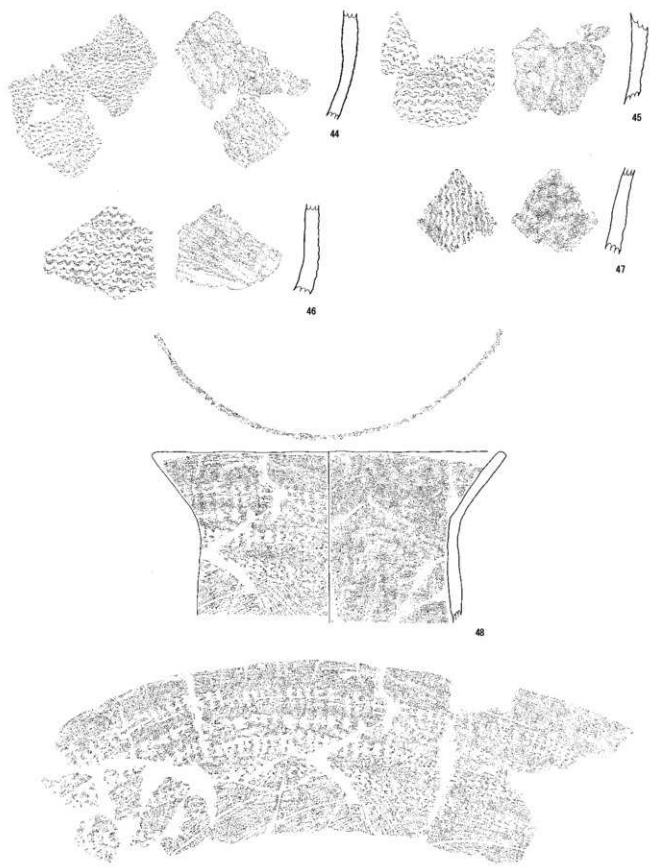
36



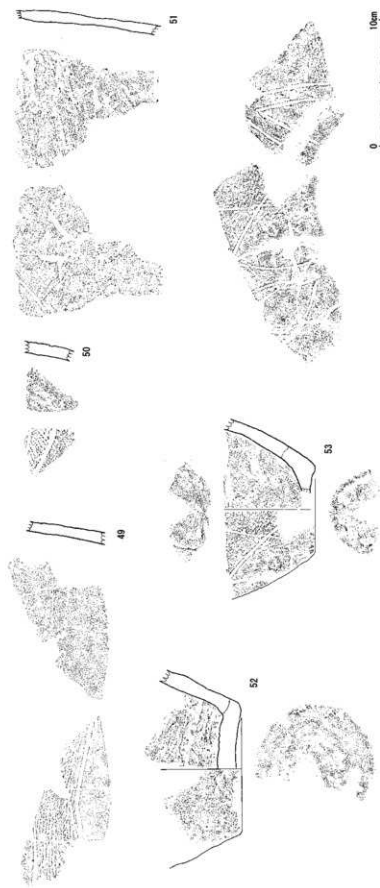
第16図 縄文時代早期の土器5



第17図 縄文時代早期の土器 6



第18図 縄文時代早期の土器 7



第19図 縄文時代早期の土器 8

第3表 縄文時代土器観察表 1

神宮 番号	掲載 番号	出土区 番号	出土 層位	分層	部位	文様	断面調整		胎土			色澤		焼成	標高 (m)	出土番号	備考	
							外面	内面	石片	長石	黒色鉱物	その他	外面					内面
1	6-26	VI	Ⅴ		口縁部	貝殻碎突・貝殻押引	ナデ	ナデ	○	○	角閃石	雲母	赤褐色	にぶい褐色	良好	203.3	133313小	補修孔あり 口徑14.2cm
2	6-25	Ⅴ			胴部	貝殻碎突文	ナデ	ナデ	○	○	角閃石	雲母	黒褐色	黒	良好	202.9	2499	
3	6-26	Ⅴ			胴部	貝殻碎突・貝殻押引	ナデ	ナデ	○	○	角閃石	雲母	黒	黒	良好	202.5	241313小	
4	6-25	Ⅴ			胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	黒石	炭黄褐色	炭黄褐色	炭黄褐色	良好	203.2	2425	
5	6-26	VI			胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	黒石	炭	黒	にぶい黄褐色	良好	203.5	1337	
12	6	1-26	Ⅴ	I	胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ・貝条→ナデ	○	○	角閃石	明赤褐色	暗灰褐色	黒	良好	202.6	21713小	
7	6-24	VI			胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	雲母	にぶい黒褐色	黒褐色	黒褐色	良好	205.2	1396	
8	6-25	Ⅴ			胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	202.5	2427	
9	6-24	Ⅴ			胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	雲母	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	201.6	2495	
10	J-27	Ⅴ			胴部	貝殻押引文	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	雲母	にぶい黒褐色	炭黄褐色	炭黄褐色	良好	202.2	2401	
11	1-26	VI		II	口縁部	キザミ・貝押引	ナデ	ナデ	○	○	角閃石	炭黄褐色	炭黄褐色	炭	良好	202.9	696	

第4表 縄文時代土器観覧表2

標本番号	出土区	出土層位	分類	部位	文様	外面	断面形状	石野	粘土	胎土	その他	外観	内観	色澤	底感	標高	取上番号	備考
12	J-26他	VI・VII	I	口縁部	△刺突・目線・目条	ナナ	工具ナナ	○	角四石	麻石	横	横	明黄褐色	良好	202.4	1316 1318a	口径22.2cm	
13	J-26他	VI・VII		口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ・クズリ・ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	203.1	415 1318a	口径11.4cm
14	J-26他	VI		口縁部	ナナ・目線・目条	ナナ	ナナ	○	角四石	○	○	横	横	横	良好	203.3	1411	
15	H-26	VI		口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	○	○	横	横	横	良好	203.1	2762	
16	H-27	VI		口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	○	○	横	横	横	良好	203.1	1282	
17	J-27他	VI・VII		口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.1	2311, 2400	一部スズ付着
18	G-26他	VI・VII		口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.6	2017 1318a	口径14.6cm
19	J-25他	VI		口縁部	目線刺突・目線条痕	工具ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.6	1134 1318a	
20	K-26他	VI		口縁部	ナナ・目線・目条	工具ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.9	1022 1318a	
21	H-27	VI		口縁部	目線刺突	工具ナナ	ナナ	○	角四石	雲母・麻石	横	横	横	横	良好	202.9	2078	
22	I-29他	VI・VII		胴部	目線刺突	ナナ	クズリ・工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.4	502, 2403	胴縁が著しい
23	H-27	VI		胴部	目線刺突	ナナ	クズリ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.0	2452, 2454	胴縁が著しい
24	J-26	VI		胴部	目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	○	○	横	横	横	良好	202.6	981	
25	J-25・27	VI・VII	胴部	目線条痕	ナナ	クズリ・工具ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	202.8	336, 2464		
26	J-26他	VI	胴部	目線条痕	ナナ	クズリ・ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	202.6	980 1318a		
27	J-26他	VI	底部	目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	202.6	1089 1318a	底径7.6cm	
28	K-26	VI	底部	目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	201.7	890		
29	I-27	VI	底部	目線条痕	ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	—	—	一枚	
30	G-27	VI	口縁部	目線刺突	工具ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.0	2465 1318a		
31	H-26	VI	口縁部	目線刺突	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.3	2603		
32	I-26	VI	胴部	目線刺突	工具ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.6	1260		
33	G-26	VI	底部	目線刺突	ナナ	ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	203.3	2683		
34	J-26	VI	底部	目線刺突	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.3	558 1318a		
35	K-26	VI	口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	工具ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	202.0	497 1318a		
36	J-26他	VI・VII	口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	202.6	842 1318a		
37	I-27	VI	口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	203.3	2432 1318a	口径16cm 底径11.6cm	
38	H-27他	VI	口縁部	目線刺突・目線条痕	ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	204.3	2437 1318a	一部スズ付着	
39	G-27	VI	胴部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.2	1283		
40	39.3, 39.5	VI・VII	底部	ナナ・目線・目条	工具ナナ	工具ナナ	○	角四石	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	良好	202.2	2648 1318a	口径22.0cm	
41	I-26	VI・VII	胴部	目線刺突・目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.9	13, 35 1318a	11-4312同一胴体	
42	G-28	VI	胴部	目線刺突・目線条痕	ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.9	2486	41-4312同一胴体	
43	H-26他	VI・VII	胴部	目線条痕	ナナ	ナナ	○	角四石	明赤褐色	横	横	横	横	良好	202.8	602 1318a	41-4312同一胴体	
44	K-26	VI	胴部	押型文	ナナ	クズリ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.1	2493	一部スズ付着	
45	G-27	VI	胴部	押型文	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.2	2431, 2441		
46	H-26	VI	胴部	押型文	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.1	2733		
47	I-26	VI	胴部	押型文	ナナ	ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	202.5	1203		
48	H-26	VI	胴部	目線刺突・目線条痕・目条	工具ナナ	工具ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.6	2542 1318a		
49	H-26	VI	胴部	沈線文・刺突文	ナナ	工具ナナ	○	角四石	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	良好	201.7	965 1318a		
50	H-26	VI	胴部	沈線文・刺突文	ナナ	ナナ	○	角四石	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良好	203.1	2377		
51	H-25	VI	底部	沈線文・刺突文	ナナ	クズリ・ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	202.9	1340, 1342	底径16.0cm	
52	H-26	VI	底部	刺突文	ナナ	クズリ・ナナ	○	角四石	麻石	横	横	横	横	良好	203.3	2351 1318a	底径7.0cm	
53	I-26	VI	底部	沈線文・刺突文	ナナ	クズリ・ナナ	○	角四石	雲母	横	横	横	横	良好	203.1	721, 2640	底径7.0cm	

イ 石器(第20・21図)

石鏃

58は表土からの採集品であり、珪質頁岩製である。側縁が左右で異なり、左側縁は精緻に鋸歯縁をなすのに対し、右側縁はやや粗い調整になっている。これは、体部中央下に残る瘤を取ろうとして強い剥離を加えたために側縁が直線的に仕上がっていない。しかし、その強い剥離が階段状剥離となって、瘤の除去に失敗している。

56・68は、それぞれV a層、IV a層からの出土で、縄文時代前期以降の所産である。56・68とも黒色安山岩製で、器面調整を丁寧に施し薄く作られている。周縁調整も丁寧であり、56はチッピングによって直線的に仕上げられており、68は先端から脚部末端まで細かな鋸歯縁が作られている。

以上の3点を除く12点はVI層、VII層からの出土で、早期後葉に位置づけられる。

54は黒色安山岩製で、器面調整、周縁調整ともに精緻であり、左側縁脚部と右側縁体部の下半は鋸歯縁に作ってある。体部中央下、袂のすぐ上の部分が一番厚く、先端に向かって薄く作られている。袂の部分が最後の剥離である。

55も黒色安山岩製で、薄い剥片を素材にしているため、裏面には器面調整が施されていない。周縁調整も精緻であるが、左側縁先端部分ごく微かに主剥離面が残り、エッジを作ることにより、平面形状と長さを維持することを優先して作製されたようである。

57も珪質頁岩製で、器面調整、周縁調整共に精緻で、側縁下半は大きな鋸歯を作っている。鋸歯縁への加工は袂入の後で施されているが、剥離の切り合いから分かる。鋸歯は左が三つ、右が四つであり、上三つが対称の位置にあるが、一番下の突起が左には無く、右だけに作ってある。

59は珪質頁岩製であり、脚部の幅に比べ、先端部分が極端に狭い独特な形状をしており、内湾する側縁と強い。これは、素材剥片から薄い器体を作るため、強い剥離で器面調整をした結果、側縁が基軸に近く残ったためであろう。また、両側縁は先端の見出しが直線になっていない。さらに、側縁の最終仕上げであるチッピングも施されていない。左脚の折れ面には球果があり、袂入部の調整剥離で折れたようである。この3点から、この石鏃は制作途中での放棄であろうと思われる。

60も珪質頁岩製で、器面調整、周縁調整ともに精緻である。周縁はチッピングによって直線的に仕上げている。先端の欠損は発掘時の傷による。

61は黒色安山岩製で、薄い剥片を素材としたため、器面調整は奥まで届かず、周縁部のみにとどめてある。

62は姫島産黒曜石製で、被熱によって表面は白濁しているが、器面調整、周縁調整ともに精緻であることは、

見て取れる。左脚の欠損は発掘時の傷による。

63も姫島産黒曜石製である。左側縁が、発掘時の傷で何か所か小さくかけているため、右側縁と同じ形状ではないが、右側縁と同様の作りであったであろうと思われる。側縁下半は三角形の突起を付けた鋸歯縁であり、長さ比べ幅の狭い細身に作られている。

64は在地産の黒曜石製で、厚みのある剥片を丁寧な器面調整によって仕上げている。

65は黒色安山岩製で、59と同様に脚部の幅と先端部分の幅が極端に異なり、内湾する側縁を持つ独特の形状である。これは、素材が薄かったことに起因して、直線的な側縁よりも長さを優先した結果であろう。59と異って側縁はチッピングによる最終調整が施されている。

66は黒曜石の蝶番剥離で得られた剥片末端の厚みのある部分を折り取って用いたものである。そのため、表面の器面調整は丁寧であるが、裏面は蝶番剥離の影を除去しきっておらず、素材剥片の腹面を一部残す。

67は黒色安山岩製であり、素材となった剥片は表裏のリングを見ると、これより二回りほど大きかったようで、大きな剥片を截断して用いたものである。周縁調整は、器面調整をする際に押圧剥離具をあてる打面として施されたものであり、未製品であろう。

以上の石鏃15点を通観する。

未製品と判断した58・59・61に共通するのは、側縁(刃縁)にチッピングによる直線にする仕上げが施されていないことである。未製品も含めて共通するのは、素材剥片に特定の剥片を用いるのではなく、どのような剥片でも押圧剥離の技術で石鏃を作り出していることである。その結果として、59・63・65のような形状の石鏃が作られるのである。平行剥離が見られるものとならない物は石材の違いに由来するようである。黒曜石素材のものにはそれが見られ、黒色安山岩素材のものにはそれが見られない。

石斧

69は頁岩の横長剥片素材である。裏面中央に素材剥片の腹面を大きく残していることからわかる。ラフな剥離による器面調整が施され、厚みは整えてある。頭部調整と刃部調整もラフな剥離によって施されている。側面の調整は、左側縁の全てと右側縁の上半分を敲打による調整があるが、右側縁の途中で止まっており、表面の平面図で見るとおり中程で出っ張りが出てきている。この出っ張りの部分を側面図で見ると、側縁が裏面に大きく湾曲しており、敲打調整を続けても、直線の側縁が形成されないことが予想される。直線の側縁が形成されないとは基軸面が歪んでしまいか、器体に薄くなる部分や細くなる部分ができ、その部分は脆弱になってしまう。そのため、柄から器体、器体から刃先に伝わる力がその捻れ部分で刃先に届かず、その力は脆弱になった部分を

破壊する作用を起こす。その歪みを修整できない、もしくは修正しても、求める大きさを維持できないために、ここで製作が放棄され、表裏両面の敲打調整や刃部等の研磨が見られないのであろう。磨製石斧の未製品である。

70は、表面の風化が激しいので断言できないが、おそらく頁岩の扁平な円礫素材と思われる。表面は礫皮面に覆われ、裏面は器面調整の剥離や敲打調整が残らないほぼ全面研磨である。素材の形状をそのまま活かして、敲打による側面調整・頭部調整と研磨による刃部作製とが施されたものである。このような省力的な作製手法を持つ磨製石斧は、縄文時代各時期を通じてみられるものであり、早期前葉から見られる。

磨石・敲石

10点を図示したが、75は表土からの採集、71・73・74はIV層からの出土で、前期以降の所産であらう。72・80はVI層からの出土、76～79はVII層からの出土で、

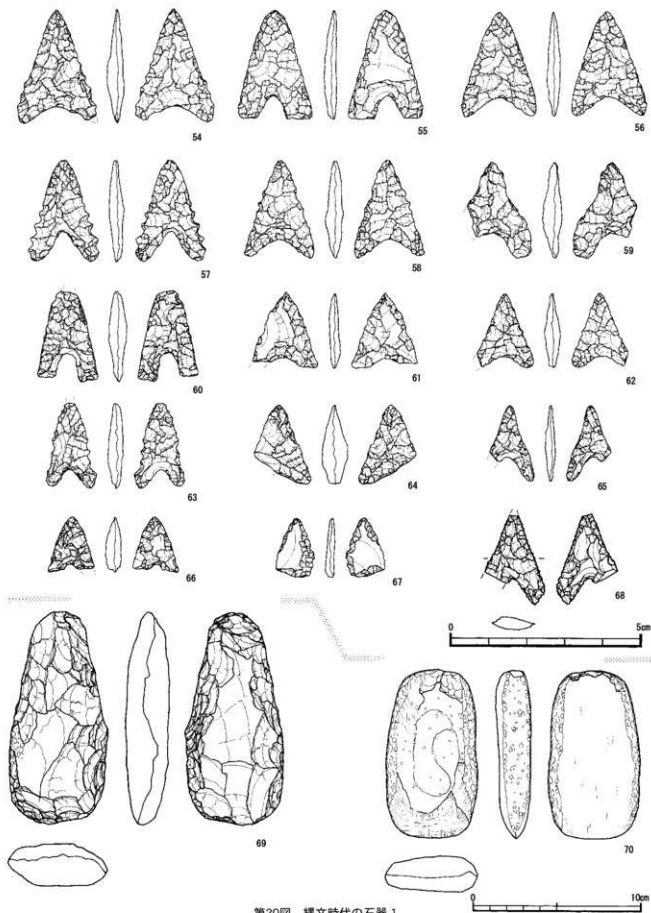
早期の所産である。

72は安山岩の円礫素材で、研磨面はさほど顕著でなく扁平化も始まっていない。71も安山岩の円礫素材で、特に表面が平滑な局面を作る。73も安山岩の円礫素材で、良く使い込まれ扁平化している。74は花崗岩の円礫素材で、表面は挫れた曲面となるよう使われている。

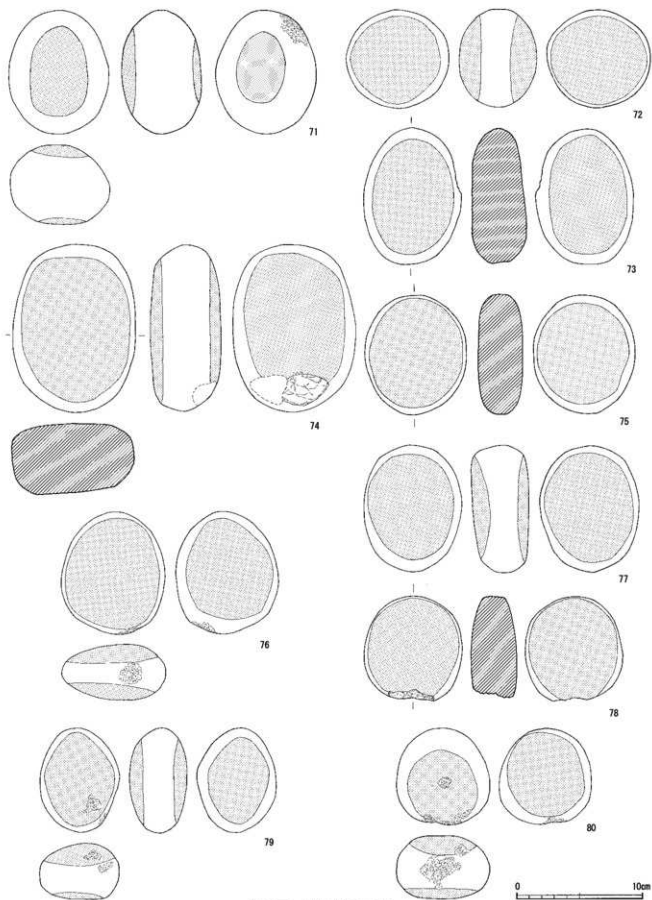
75～79は安山岩の円礫素材である。75は表裏両面が使い込まれ、かなり扁平化している。76は下側面に敲打痕を持ち、表面が主に使われ、若干扁平化している。77は側面の全周に渡って敲打痕が残る、整った形状である。表裏両面とも使い込まれ、扁平化している。78も77と同様全周の側面に敲打痕が残る、表裏両面が使い込まれ扁平化している。特に図上側へ傾斜するような曲面になっている。79は扁平化していないが、裏面の研磨痕が顕著である。80は花崗岩の円礫素材で表面中央に敲打痕が残る。裏面の研磨痕が顕著である。

第5表 縄文時代の石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
20	54	G-24	VI	石鏃	黒色安山岩	(3.00)	(2.10)	0.45	1.50	
	55	J-26	VI	石鏃	黒色安山岩	3.90	2.00	0.35	1.40	
	56	I-26	V a	石鏃	黒色安山岩	2.80	2.50	0.30	1.20	
	57	H-27	VI	石鏃	珪質頁岩	2.60	1.85	0.40	1.00	
	58	G-26	表採	石鏃	珪質頁岩	2.50	1.85	0.45	1.30	
	59	G-28	VI	石鏃	珪質頁岩	(2.55)	(1.65)	0.55	1.20	
	60	H-26	VI	石鏃	珪質頁岩	(2.40)	1.60	0.50	1.10	
	61	I-26	VII	石鏃	黒色安山岩	(2.00)	(1.80)	0.30	0.60	
	62	I-26	VI	石鏃	黒曜石	(2.00)	(1.50)	0.45	0.50	
	63	I・J-26・27	VII	石鏃	黒曜石	(2.20)	1.30	0.40	0.80	
	64	I-25	VI	石鏃	黒曜石	(2.10)	(1.65)	0.70	1.10	
	65	G-26	VI	石鏃	黒色安山岩	(2.00)	(1.20)	0.30	0.30	
	66	H-27	VI	石鏃	黒曜石	(1.50)	(1.20)	0.40	0.50	
	67	J-26	VII	石鏃	黒色安山岩	1.50	1.00	0.20	0.30	
	68	H-26	IV a	石鏃	黒色安山岩	(2.30)	(1.60)	0.35	0.80	
	69	I-25	VII	磨製石斧未製品	頁岩	12.50	5.80	2.50	236.50	
70	I-26	VI	磨製石斧	頁岩	9.90	5.40	2.10	184.50		
21	71	H-28	IV a	磨石	安山岩	9.70	7.80	6.20	725.50	
	72	I-26	VI	磨石	安山岩	8.10	7.70	6.10	532.00	
	73	I-27	VII	磨石	安山岩	10.70	7.80	4.30	558.00	
	74	H-28	IV	磨石	花崗岩	13.30	9.70	5.60	1084.50	
	75	H-20	表採	磨石	安山岩	9.50	8.00	3.60	410.50	
	76	J-26	VII	磨石	安山岩	9.70	8.25	4.40	487.00	
	77	J-27	VII	磨石	安山岩	10.10	7.80	4.50	505.00	
	78	I-27	VII	磨石	安山岩	8.30	7.75	3.60	411.50	
	79	I-27	VII	磨石	安山岩	8.30	6.30	4.50	336.00	
	80	H-28	VI	磨石	花崗岩	8.70	7.40	5.10	395.00	



第20図 縄文時代の石器 1



第21図 縄文時代の石器 2

2 縄文時代前・中期の調査

(1) 調査の概要

本遺跡における縄文時代前・中期の該当層Ⅳ・Ⅴ層である。

調査の結果、遺構は落とし穴を9基、土坑を4基検出している。埋土の状況から落とし穴・土坑ともども桜島を起源とするP7バミスが堆積しており、P7降下以前に作られたものであると考えられる。

(2) 遺構

落とし穴 (第23～26図)

落とし穴はⅥ・Ⅶ・Ⅷ層で検出されているが、埋土状況から全てP7バミス降下以前に作られた遺構であることが分かる。落とし穴に関しては第4章第5節で詳しく考察を行う。

1号落とし穴

1号落とし穴は調査区の北西壁際G-25区のⅥ層中位で検出された。形状は隅丸の長方形で、北西角に一部

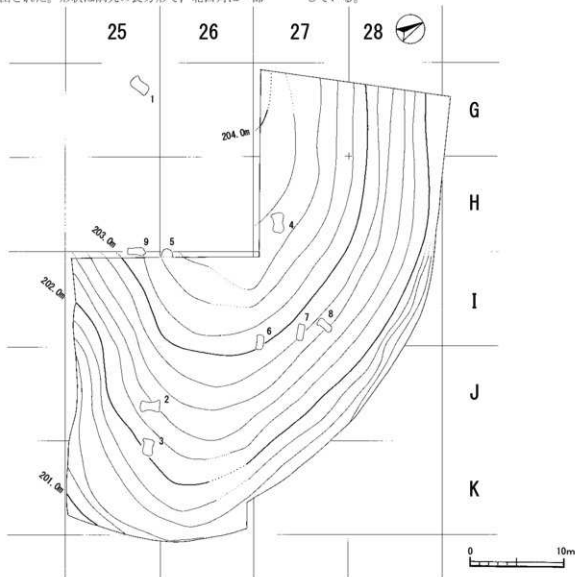
突出が見られるが、これが人為的なものなのか、自然の崩落なのかは確認できていない。

大きさは長軸148cm、短軸70cmを測る。検出面から底面までの深さは73cmで、底面にはⅧ層(薩摩火山灰層)を掘り込んで(に打ち込まれて)作られた3か所の小ピットが確認できた。小ピットは長軸の中央線上に等間隔で3つ並んだ状態で検出され、中央の小ピットは直径13cm、深さ33cmで、左右の小ピットは直径約10cm、深さ約20cmとなっている。

埋土は4つに分層でき、上位に桜島起源のP7バミスを含むⅣb層と同じ黄茶褐色土が堆積しており、下位にはアカホヤ火山灰のブロックをわずかに含む茶褐色土が堆積している。遺構内からの遺物の出土は無かった。

2号落とし穴

2号落とし穴は調査区の南側J-25区のⅥ層上面で検出された。形状は四隅が外側に出っ張る隅丸長方形をしている。



第22図 縄文時代前・中期の落とし穴配置図

大きさは長軸146cm、短軸64cmを測る。検出面から底面までの深さは39cm、底面には3か所の小ピットが確認できた。また、北東側の四隅の突出部は、底面までその形状のまま掘り込まれている。小ピットは長軸の中央線上に3つ並んだ状態で検出されている。中央と南東側の小ピットが直径約15cmの円形、北西側の小ピットが長軸16cm、短軸8cmの楕円形をしている。小ピットの深さは中央の小ピットに関しては、中心軸での断面図が残されていないため正確な数値は確認できないが、小ピット断面検出写真で確認する限りでは、ほぼ同じ深さであることが分かる。また北西側の小ピットの断面形状から、直径3cm程の杭が打ち込まれていた可能性が考えられる。

埋土は4つに分層でき、1号落とし穴と同様に上位にP7パミスを含むIV b層と同じ土が堆積しており、下位にはアカホヤ火山灰のブロックを含む黒褐色土が堆積している。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

3号落とし穴

3号落とし穴は調査区の南東側K-25区のVI層上面で検出された。形状は隅丸の長方形で、北西角に一部突出部が見られる。これが、人為的なものなのか、自然の崩落なのかは確認できていない。

大きさは長軸123cm、短軸70cmを測る。検出面から底面までの深さは60cmで、底面には中央付近に小ピットが2か所検出されているが、一般的な落とし穴に見られる柱穴痕の形状とは少し異なった形状をしている。

埋土は5つに分層でき、上位にP7を含むIV b層と同じ土が堆積しており、中位にはアカホヤ火山灰の二次堆積層V b層の黄褐色土がブロックで帯状に堆積している。下位には暗褐色土の堆積が見られる。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

4号落とし穴

4号落とし穴は調査区の中央よりやや北側のH-27区のVII層上面で検出された。形状は四隅が外側に出張する隅丸長方形に近い形状をしている。

大きさは長軸148cm、短軸73cmを測る。検出面から底面までの深さは27cmで、底面にはVIII層を掘り込んで作られた3か所の小ピットが確認できた。小ピットは長軸の中央線上に等間隔で3つ並んだ状態で検出され、深さは中央の小ピットが31cmとやや浅く、左右の小ピットが36cmとなっている。南東側の小ピットの断面形状から、直径3cm程の杭が打ち込まれていたと考えられる。

埋土は3つに分層でき、上位にP7パミスを含むIV b層と同じ土が堆積している。その下位の遺構中央部のみアカホヤ火山灰の二次堆積層V b層の黄褐色土のブロックが堆積しており、その周囲には暗褐色土の堆積が見られる。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

5号落とし穴

5号落とし穴は調査区の中央よりやや東側のI-26

区のVI層で検出された。形状に関しては、半分以上が先行して掘り下げられ破壊されてしまっているが、残存部の形状から隅丸長方形であると考えられる。

大きさは長軸は不明だが、残存部の短軸は86cmを測る。検出面から底面までの深さは40cmで、底面には1か所の小ピットが確認できた。小ピットは長軸の推定中央線より、やや北寄りの位置に掘り込まれており、深さ33cmでVIII層上位にまで達している。

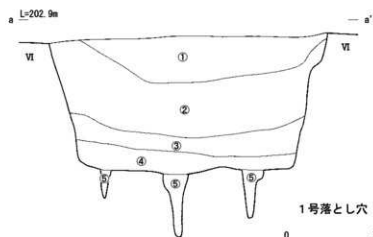
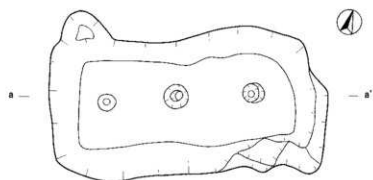
埋土は2つに分層でき、上位に暗黄褐色土が、下位に暗褐色土が堆積している。上位の暗黄褐色土は色調こそやや白色化し、色調が薄くなっているが、アカホヤ火山灰の二次堆積層V b層と同様の土である。下位の暗褐色土は、調査時は落とし穴の埋土としていたが、その後の検討により、写真で確認する限りはパミスの入り方や色調の明確な違いを見ていくと、地山であるVIII層が落とし穴内の埋土の影響を受けて変色しただけの可能性が考えられた。しかしながら、埋土である暗褐色土と、VII層の土の比較などの特徴が明記されていなかったため詳細は不明である。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

6号落とし穴

6号落とし穴は調査区の中央よりやや東側のI-27区のVIII層上面でまず底面が検出され、その結果、隣接して残存していた土層確認用のベルトの断面で上部構造が確認できた。形状は隅丸長方形をしている。

大きさは長軸111cm、短軸48cmを測る。ベルトで確認できた検出面の最上部から底面までの深さは80cmで底面には4か所の小ピットが確認できた。小ピットは長軸の中央線上に等間隔で4つ並んだ状態で検出されている。小ピットの直径は約3cmで、北西側から2番目の小ピットのみやや大きく直径約6cmである。深さは中央の2か所がやや浅く20cm、両端の2か所が27cmである。

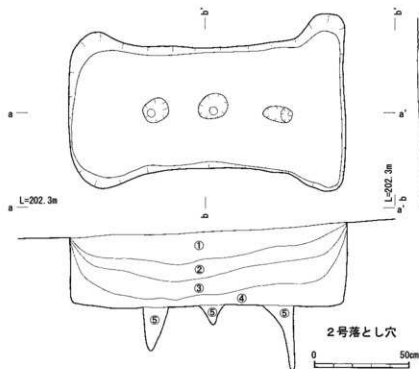
埋土は3つに分層でき、上位から中位にかけてはP7パミスを含むIV b層と同じ明黄褐色土が堆積しているが、P7パミスが入る量により上位と中位に分層され、中位の方がP7パミスを含む割合が大きくなっている。下位には粘性のある乳褐色土が堆積している。土の感じから何らかの水の影響を受けたアカホヤ火山灰の二次堆積層である可能性が考えられるが断言はできない。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。



1号落とし穴

0 50cm

①	明黄茶褐色土	硬くしまった層で、黄白色バミスをよく含む
②	明黄茶褐色土	硬くしまった層で、黄白色バミスをよく含む
③	暗茶褐色土	土質はやわらかく、黄白色バミスがまばらに混ざる
④	黄茶褐色土	土質はやわらかく、黄白色バミスがまばらに混ざる
⑤	暗茶褐色土	土質はやわらかく、やや粘性がある

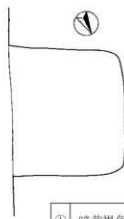
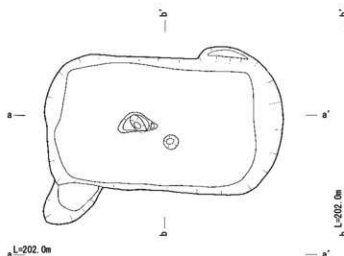


2号落とし穴

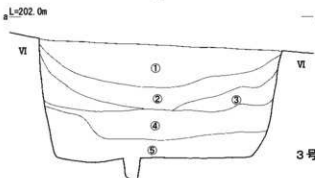
0 50cm

①	黄褐色土	砂質で黄白色バミス(2-3mm)をよく含む
②	暗黄褐色土	砂質で①よりも黄白色バミスが少ない、黄褐色バミスも少し混ざる
③	暗黒褐色土	やや粘性があり、暗褐色土が少量混ざる
④	黒褐色土	粘性があり、黄褐色土や黄褐色土がブロック状に混ざる
⑤	黄橙色土	粘性がある

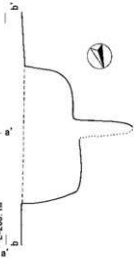
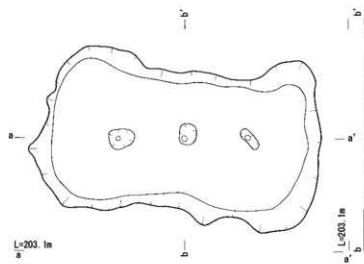
第23図 縄文時代前・中期の落とし穴 1



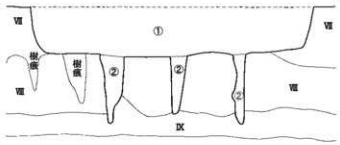
①	暗黄褐色土	砂質で黄白色バミスが多く含む
②	黄褐色土	粘性があり、黄色土や褐色土のブロックを含む
③	黄褐色土	わずかに黄褐色バミスが混ざる
④	暗褐色土	砂質で黄褐色バミスがわずかに混ざる
⑤	暗灰黄色土	粘性がある



3号落とし穴



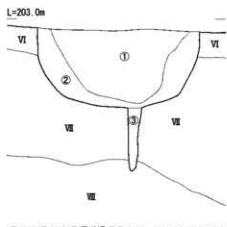
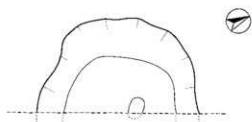
①	黄褐色土	硬くしまった層で、黄白色バミスが多く含む、底部に近い部分でやや黄褐色土が混ざる
②	暗茶褐色土	黄褐色のバミスが混ざる、粘性はない



4号落とし穴

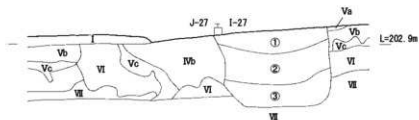


第24図 縄文時代前・中期の落とし穴 2

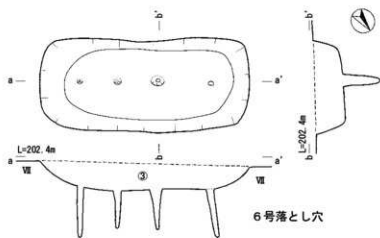


①	明黄褐色土	硬くしまった層で、黄褐色・黄白色バミスを含む
②	暗茶褐色土	黄白色バミスを含む
③	茶褐色土	粘性がある

5号落とし穴

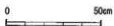


6号落とし穴隣接土層断面 (S=1/40)



6号落とし穴

①	明黄褐色土	黄白色バミス (1-5mm) を多く含む
②	明黄褐色土	黄白色バミスを非常に多く含む
③	乳茶褐色土	粘性があり、黄褐色バミス (5mm) をまばらに含む



第25図 縄文時代前・中期の落とし穴 3

7号落とし穴

7号落とし穴は調査区の東側1-27区のⅦ層上面、6号落とし穴の東側に隣接して検出された。形状は隅丸の長方形をしている。

大きさは長軸116cm、短軸49cmを測る検出面から底面までの深さは25cmで、底面には3か所の小ピットが確認できた。小ピットは長軸の中央線上に3つ並んだ状態で検出されている。小ピットの直径は約9cm、深さは22～26cmである。小ピットの断面形状から直径3cmほどの杭が打ち込まれていたと考えられる。

埋土は単一埋土でP7バミスを含むIV b層と同じ明黄褐色土が堆積している。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

8号落とし穴

8号落とし穴は調査区の東側1-27区のⅦ層上面、7号落とし穴の東側に隣接して検出された。形状は隅丸長方形であるが、西側の角部がやや角張っている。

大きさは長軸が117cm、短軸が46cmを測る。検出面から底面までの深さは10cmで、底面には4か所で小ピットが確認できた。小ピットは長軸の中央線上に4つ並ん

だ状態で検出されているが、間隔は不均等である。小ピットの直径はまちまちで最大で直径10cm、最小で直径5cmである。深さは最も西側の小ピットが深く20cmで、残りの3か所は15cmである。

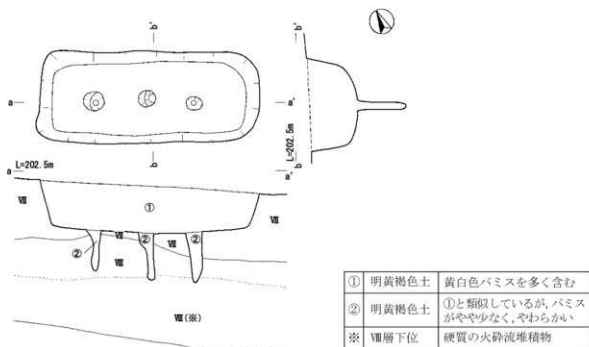
埋土は単一埋土でP7バミスを含むIV b層と同じ明黄褐色土が堆積している。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

9号落とし穴

9号落とし穴は調査区の中央よりもやや西側H-25区と1-25区の境界線あたりのⅦ層上面で検出されている。形状は隅丸長方形をしているが、北西側の短辺部に一部突出部が見られる。

大きさは長軸123cm、短軸53cmを測る。検出面からの深さは30cmで、底面には3か所で小ピットが確認できた。小ピットは長軸の中央線上に3つ並んで検出されているが、中央の小ピットから左右の小ピットまでの距離は、北東側の小ピットまでの距離の方が幅がやや広い。

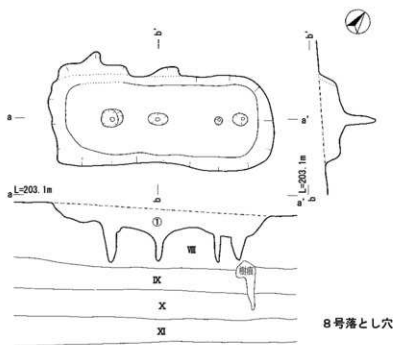
埋土は単一埋土でP7を含むIV b層と同じ明黄褐色土が堆積している。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。



7号落とし穴

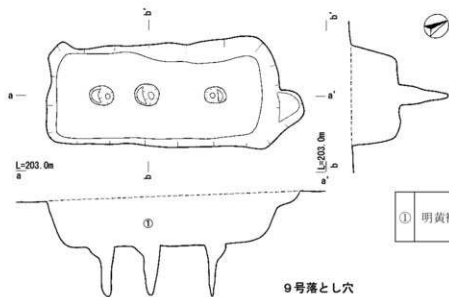
第26図 縄文時代前・中期の落とし穴4





8号落とし穴

① 明黄褐色土	黄白色バミスを多く含む、小ピット内の埋土も同様である
---------	----------------------------



9号落とし穴

① 明黄褐色土	黄白色バミスを多く含む、小ピット内の埋土も同様である
---------	----------------------------



第27図 縄文時代前・中期の落とし穴5

土坑 (第29・30図)

6号土坑

6号土坑は調査区南側K-25区のⅧ層上面で検出された。形状は隅丸の長方形をしており、非常に明瞭なプランを呈している。大きさは長軸140cm、短軸70cmを測る。検出面から底面までの深さは12cmで、底面を精査したが小ピット等は確認できなかった。

埋土はP7バミスを含むIVb層と同じ明黄褐色土と、IVb層およびV a層の腐植土が堆積しており、アカホヤ火山灰の二次堆積層がブロック状に所々に見られる。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

6号土坑に関しては、底面に小ピットが見られないということを除けば、形状や埋土などが落とし穴と類似している。そのため、明確に落とし穴とすることはできないが、それに準ずる遺構として、落とし穴状遺構として

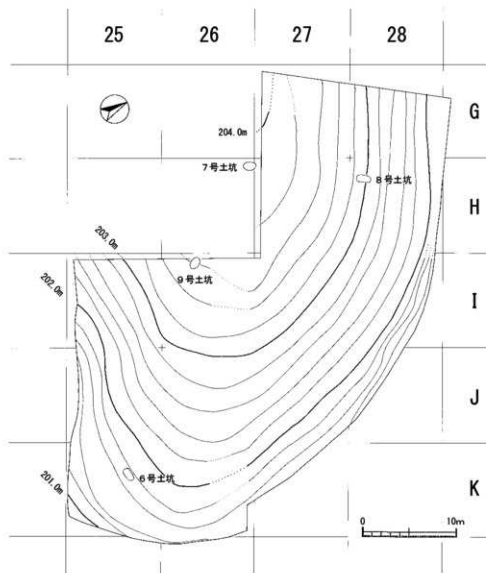
扱うこととした。

7号土坑

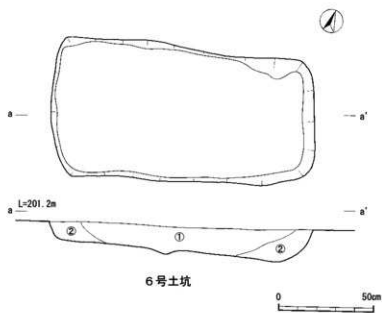
7号土坑は調査区の北西側H-26区のⅧ層上面で検出された。形状はやや歪んでいるが、楕円形に近い形状を呈している。

大きさは長軸140cm、短軸100cmを測る。検出面から底面までの深さは27cmで、底面は南東側がやや高く、北西側が一段低くなる形状をしている。底面を精査したが小ピット等は確認することができなかった。

埋土は上位にP7バミスを含むIVb層と同じ明黄褐色土が堆積しているが、その中に黄橙色のアカホヤ火山灰の二次堆積(Vb層)がブロック状に含まれている。また、上位から下位全体にかけてIVb層やV a層の腐植土と考えられる埋土が、明黄褐色土と混在する形で堆積している。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

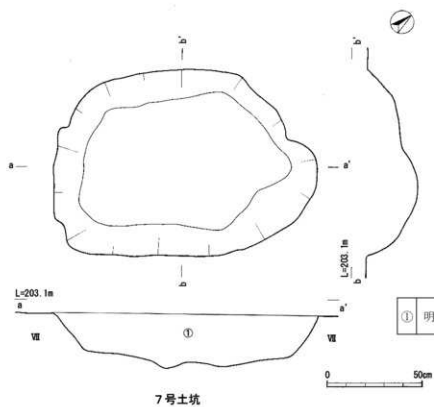


第28図 縄文時代前・中期の土坑配置図



① 明黄茶褐色土	黄白色バミスを非常に多く含む, 粘性はない
② 暗黄茶褐色土	①よりも黄白色バミスの量が少ない

6号土坑



① 明黄褐色土	黄白色バミスを多く, 黄橙色バミスを少量含む
---------	------------------------

7号土坑

第29図 縄文時代前・中期の土坑 1

8号土坑

8号土坑は調査区の北側H-28区のⅧ層上面で検出された。形状は隅丸の長方形に近いが、やや歪んでおり、長辺の2辺の中央あたりが若干えぐれた形状をしている。

大きさは長軸142cm、短軸約60cmを測る。検出面から底面までの深さは25cmで、東側に一段高い段が作られている。底面を精査したが小ピット等は確認することができなかった。

埋土は上位にP7バミスを含むIV b層と同じ明黄褐色土が堆積しており、下位には明黄褐色土とチョコ層（IX層）が混ざった色調の、非常に粘性の強い埋土が堆積しており、アカホヤ火山灰の二次堆積層がブロック状に含

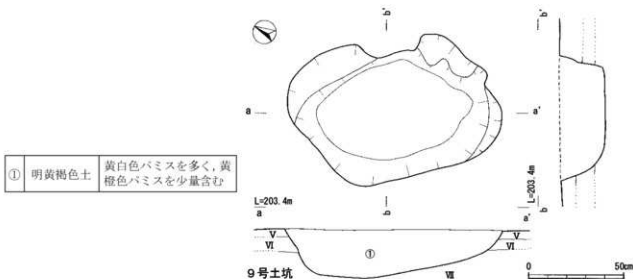
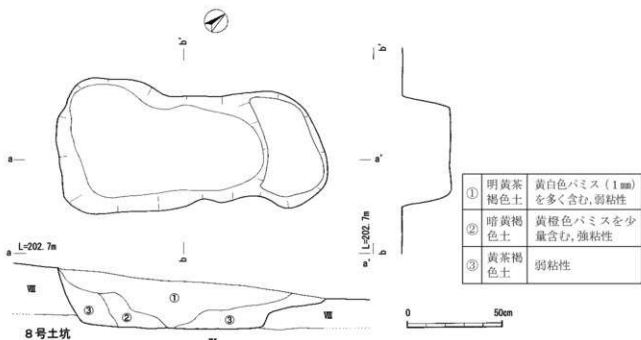
まれている。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

9号土坑

9号土坑は調査区のはぼ中央1-26区のV b層中で検出された。形状は楕円形に近い形状をしているが、北側が一部えぐれる形状をしている。

大きさは長軸113cm、短軸約70cmを測る。検出面から底面までの深さは26cmである。底面を精査したが小ピット等は確認することができなかった。

埋土は単一埋土でP7バミスを含むIV b層と同じ明黄褐色土が堆積している。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。



第30図 縄文時代前・中期の土坑 2

3 弥生時代の調査

(1) 調査の概要

弥生時代の遺物包含層はⅢb層を主体とする。旧地形が傾斜していたり、削平を受けたりしていたためⅡ層は残存しておらず表土下はⅢa層であった。

調査は重機による表土剥ぎ後、人力で包含層の掘り下げを進めた。

調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物はⅢb層を中心にⅢa・Ⅲc層のⅢ層から出土した。一部、Ⅳ・Ⅵ層と下位層から出土しているが、本来の層ではない。

(2) 遺物

土器（第32・33図 81～87）

7点を図化した。81～86は甕形土器である。81～83は口縁部～胴部で、84・85は胴部である。

81は口縁部が厚みのあるL字口縁である。口唇部は幅が広く、少し丸みを帯び、内から外へ向かって下がっており、外側に浅いM字状の沈線が施されている。胴部は断面形が三角形を呈する突帯が4条施されている。器面調整は内外面ともナデだが、口縁内部に若干ケズリが見られる。色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色で煤が付着している。焼成はよい。

82は口縁部がやや厚みのあるL字口縁であるが81よりは薄い。口唇部は81と同じく幅が広く、少し丸みを帯び、内から外へやや下がっており、外側に浅いM字状の沈線が施されている。胴部は断面形が三角形を呈する突帯が3条施されている。器面調整は内外面ともナデだ

が、内面に一部工具を用いたケズリが見られる。色調は内面が茶褐色、外面が明茶褐色で煤が付着している。焼成はよい。

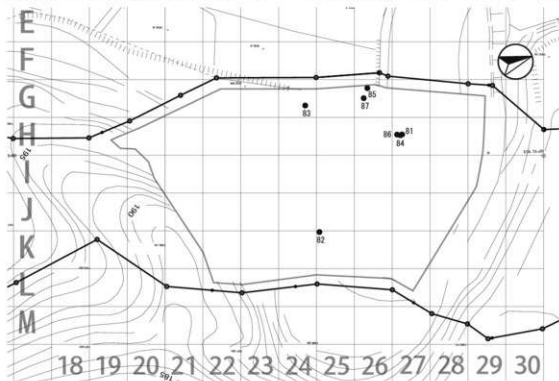
83は口縁部が81・82よりも厚みがなく、「く」の字に近い口縁である。口唇部は81・82よりも狭く、平坦・水平に近く、外側に浅いM字状の沈線が施されている。胴部は断面形が三角形を呈する突帯が2条施されている。器面調整は内外面ともナデ及び工具を用いたケズリが見られる。色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色で煤が付着している。焼成はよい。

84は断面形が三角形を呈する突帯が4条施された口縁部に近い胴部である。器面調整は内外面ともナデ及び工具を用いたケズリが見られる。色調は内外面とも明茶褐色で、外面にわずかだが煤が付着している。焼成はよい。

85は断面形が三角形を呈する突帯が1条施されている胴部である。しかし、上部が剥離しているため実際に突帯が何条あったかは不明である。器面調整は内外面ともナデが主体だが、外面に工具を用いたケズリが一部見られる。色調は内外面とも茶褐色で、焼成はよい。

86は断面形が三角形を呈する突帯が2条施された胴部である。器面調整は内外面ともナデだが、外面にわずかだが工具を用いたケズリが見られる。色調は内面が茶褐色、外面が暗茶褐色で黒い煤が付着している。焼成はよい。

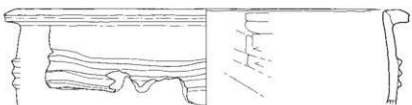
87は壺形土器の胴部である。断面形が三角形を呈する突帯が4条施されている。器面調整は内外面ともナデが主体だが、外面に工具を用いたケズリが一部見られる。



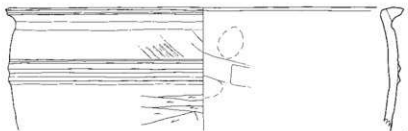
第31図 弥生時代の遺物出土状況図



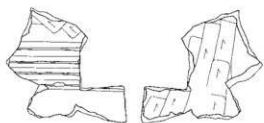
81



82



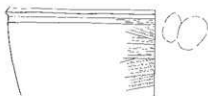
83



84



85



86



88

0 10cm

第32図 弥生時代の土器 1



第33図 弥生時代の土器 2

第6表 弥生時代の土器観察表

種別 番号	記載 番号	出土区	層	器種	部位	形面調整		胎土					色調		焼成	取上番号	備考		
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	礫石	その他	外面				内面	
32	81	G-26 H-27	Ⅲ b Ⅲ c Ⅵ	甕	口縁部 へ胴部	ナデ	ナデ		○			○	○		暗茶褐色	茶褐色	良	242 1279 2500	
	82	K-25	Ⅲ b	甕	口縁部 へ胴部	ナデ	ナデ	○	○			○			明茶褐色	茶褐色	良	402 404 405	
	83	G-24	Ⅲ b	甕	口縁部 へ胴部	ミガキ ナデ	ナデ		○			○	○		暗茶褐色	茶褐色	良	1349	
	84	H-27	Ⅲ c Ⅳ b	甕	胴部	ナデ	ナデ		○	○		○			明茶褐色	明茶褐色	良	2514 2523 2530	
	85	G-26	Ⅲ b	甕	胴部	ナデ	ナデ	○	○			○			茶褐色	茶褐色	良	174・242 244・249	
	86	H-27	Ⅲ c	甕	胴部	ナデ	ナデ		○			○	○		暗茶褐色	茶褐色	良	2501・2506	
33	87	G-26 K-25	Ⅲ a Ⅲ b	壺	胴部	ナデ	ナデ		○			○	○	明赤褐色	靑	良	164 166 394		

4 古代・中世の調査

(1) 調査の概要

古代・中世の遺物包含層はⅢ a・Ⅲ b層を主体とする。旧地形が傾斜していたり、削平を受けたりしていたためⅡ層は残存しておらず表土下はⅢ a層であった。

調査は重機による表土剥ぎ後、人力で包含層の掘り下げを進めた。

調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物はⅢ a・Ⅲ b層から出土したが、2点が表採、1点がⅣ a層から出土しているが、本来の層ではない。

(2) 遺物

土器 (第34・36図 88～104)

17点を図化した。個別の詳細な時期については、遺構等が確認されていないこともあり不明である。

88は口縁部が欠損し、体部から底部が残存している土師器の坏である。薄手で外面にナデ痕があり、立ち上がりりがはっきりしている。底部から口縁部へ外へ向かって直行する。

89は土師器の甕で、体部を主として一部高台が残存している。高台付きを塙とした。高台見込みに指で押した痕跡がうかがえる。

90・91は土師器の口縁部であるが、底部が残存して

いないため坏か塙かは判断できない。2点とも薄手で、外面に回転ナデの痕が顕著に見られる。

92～101は土師器の甕である。口縁部は長めのもの、やや短めのもの、短めのものに分類した。

92・93は長めの口縁部である。胴部から口縁部に至る屈曲部が急で、内面にしっかりと稜線が出ている。92は胴部の内外面に一部、ケズリ幅が大きく斜め上方向へのケズリが見られ、重ねてケズリが入るところも見られる。93は口縁部内面に右方向へのケズリがみられる。

94は傾き等から長めの口縁部であると想定した。内面は丁寧なナデ調整が行われ、外面は工具を用いたナデ調整が行われている。

95は屈曲部をもつ胴部である。傾き等から長めの口縁部をもつ甕と考えた。内面の屈曲部の上側はナデ調整が行われ、屈曲部の下側は上方向へのケズリが見られる。外面はナデ調整が行われているが、ナデ調整前に行われたケズリが一部残っている。

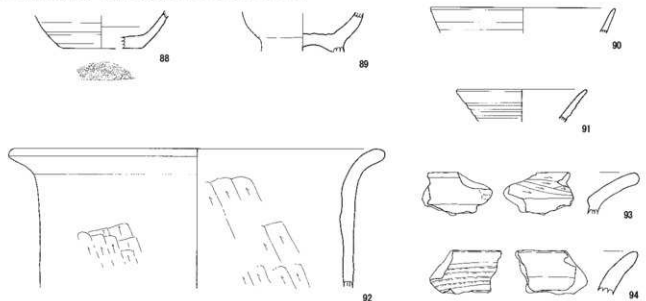
96～99は傾き等からやや短めの口縁部であると想定した。96は内外面とも工具を用いたナデ調整が行われている。97～99は内外面とも丁寧なナデ調整が行われている。98は墨書の可能性はあるが、小片のため特定はできない。

100は厚手で短めの口縁部である。内面は屈曲部の上

側は工具を用いたナデ調整が、屈曲部の下側は工具を用いたケズリ幅の大きいケズリが見られる。外面はナデ調整が行われている。101は底部である。外面に一部横及び斜め方向のケズリが見られる。ケズリの後、丁寧なナデ調整が行われている。

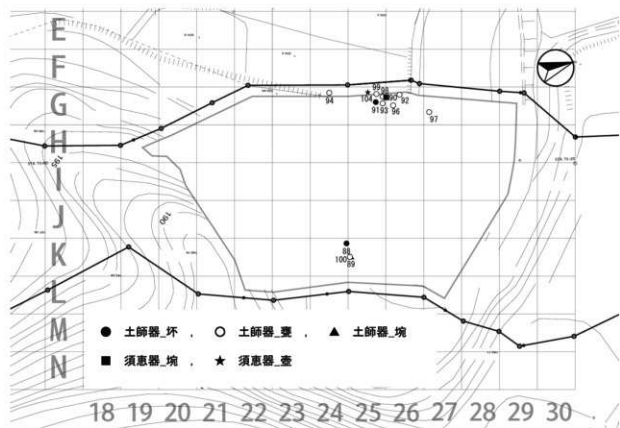
102～104は須恵器である。出土点数は3点だが3点とも器種が違う。102は須恵器の坏の底部である。小破

片のため全体の器形は不明である。内外面ともナデ調整が行われている。103は須恵器の壺の胴部である。内面は同心円の当て具痕及びび指によるナデ調整が、外面は格子目のタタキが見られる。104は須恵器の壺の口縁部である。口縁部の反りが2段階に行われている。内外面ともナデ調整が行われている。

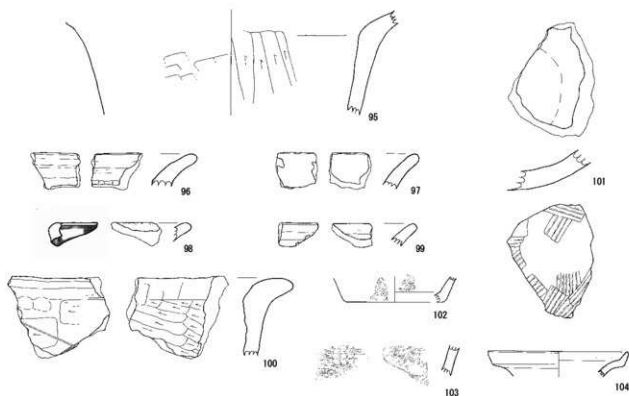


第34図 古代・中世の遺物 1

0 10cm



第35図 古代・中世の遺物出土状況



第36図 古代・中世の遺物2

第7表 古代・中世の土器観察表

陣区 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	器面調整						胎土				色澤		焼成	取上番号	備考
						外面	内面	石灰	長石	角閃石	雲母	礫石	その他	外面	内面	灰ヤ リープ	灰ヤ リープ			
34	88	K-24	Ⅲ b	土師器 (灰)	底部~底面	ナデ	ナデ	○								橙	橙	良	410	
	89	K-25	Ⅲ b	土師器 (灰)	底部~底面	ナデ	ナデ		○				○	○		橙	橙	良	398・399	
	90	G-26	Ⅲ b	土師器 (不明)	口縁部	ナデ	ナデ		○					○		浅黄	浅黄	良	151	
	91	G-25	Ⅲ b	土師器 (不明)	口縁部	ナデ	ナデ	○		○						橙	橙	良	141・142	
	92	G-24	Ⅲ a	土師器 (黄)	口縁部	ヘラケズリ ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○	○						浅黄橙	にぶい 黄橙	良	103・158・ 160・243・ 244・248	
	93	G-25	Ⅲ a	土師器 (黄)	口縁部	ナデ	ヘラケズリ	○	○	○						橙	橙	良	148	
	94	G-24	Ⅲ b	土師器 (黄)	口縁部	ハケメ ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○				○			橙	橙	良	83	
	95	-	表採	土師器 (黄)	胴部	ヘラケズリ ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○				○			橙	橙	良	-	
	96	G-26	Ⅲ a	土師器 (黄)	口縁部	ヘラケズリ ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○				○			橙	橙	良	163	
	97	G-27	Ⅳ a	土師器 (黄)	口縁部	ナデ	ナデ	○	○							橙	橙	良	2519	
36	98	G-25	Ⅲ b	土師器 (黄)	口縁部	ナデ	ナデ	○		○					橙	橙	良	146		
	99	G-25	Ⅲ b	土師器 (黄)	口縁部	ナデ	ナデ	○	○	○			○		橙	橙	良	144		
	100	K-25	Ⅲ b	土師器 (黄)	口縁部	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ	○	○				○		橙	橙	良	401		
	101	-	表採	土師器 (黄)	底部	ハケメ ナデ	ケズリ ナデ	○	○				○		にぶい 橙	にぶい 橙	良	-		
	102	-	懐丸	須恵器 (灰)	底部	ナデ	ナデ	○	○				○		灰ヤ リープ	灰ヤ リープ	良	-		
	103	-	表採	須恵器 (黄)	胴部	格子目タ タキ	同心円あ て具						○	○	灰黄橙	灰黄橙	良	-		
	104	G-25	Ⅲ b	須恵器 (灰)	口縁部	ナデ	ナデ	○	○				○		灰黄橙	橙灰	良	231		

第4章 柿木段遺跡の調査の方法と成果

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理・報告書作成作業の方法等項目に沿って遺跡ごとに簡潔に述べていくこととする。

1 発掘調査の方法

平成22年度の調査は、平成20年度に調査ができなかった谷部の一部と現町道下部分の調査を行った。

調査面積は1,131㎡で、調査範囲は平成20年度に設定した10m×10mのグリッドを引き続き用いて、D～G7～11区となった(第1図)。グリッドの設定については、平成21年度刊行の報告書で述べてあるので割愛する。

調査は、重機による表土剥ぎと人力による掘り下げを行った。出土遺物は、平板実測後、取り上げを行った。検出遺構は、写真撮影、実測を行った。南側に向かって調査面が深くなったため、2mを越える部分は、二段掘りや土嚢の設置等安全対策を施しながら調査を行った。

また、遺構に影響のない部分で下層確認トレンチを設定し調査を実施した。今回の結果やこれまでの確認トレンチの結果に基づき、IV層までで調査を終了した。

2 遺構の認定と検出方法

遺構の認定や時期の判断は、検出面や埋土の状況、切り合い関係、規模等を総合的に判断して行った。しかしながら、遺構の詳細な時期については、決め手となる情報量が少なく、判断できなかった。

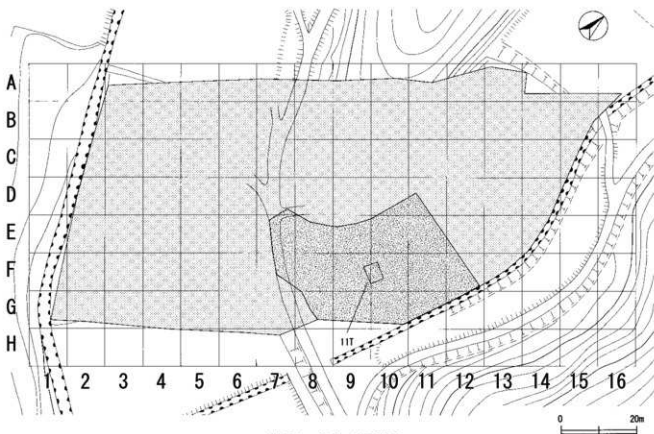
遺構の検出方法は、遺構が検出されたII層の全体的な色調が黒褐色土で、層厚もそれほど厚くない地層であったため、わずかな色調の違いを見逃さないよう細心の注意を払って行った。しかし、僅かな色調の違いを見逃し、削りすぎた点もあるので今後の課題としたい。

3 整理・報告書作成作業の方法

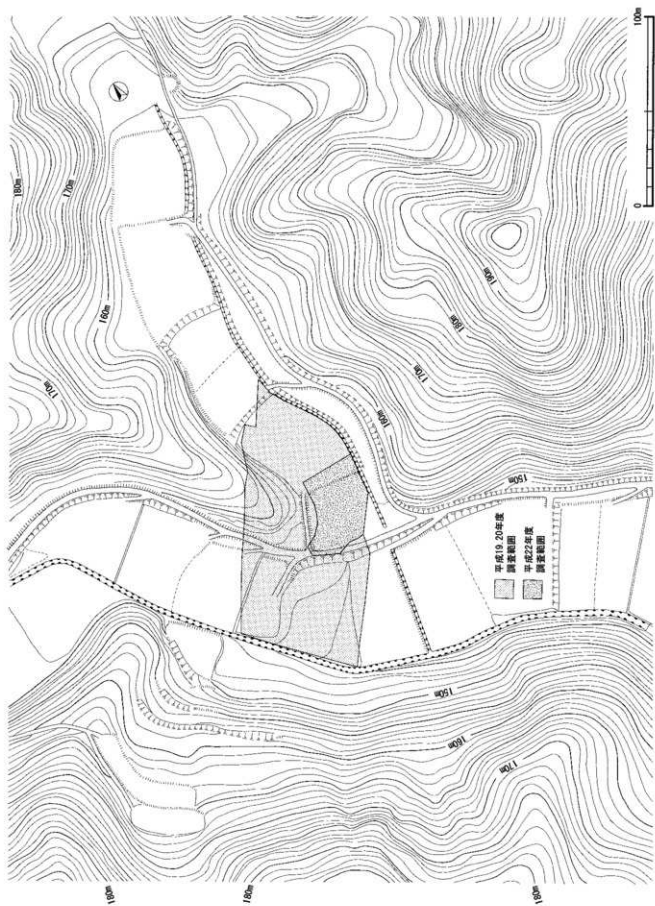
柿木段遺跡の整理作業は、ゼロからのスタートだったので、ほかの2遺跡より優先して行った。

まず、水洗い・注記から始めた。注記をする際は、薬品を使うので換気等作業環境には十分留意して作業を進めた。その後、遺跡周辺地形図、土層断面や遺構トレース、遺物の分類・接合・実測・トレース等を行った。土層断面や遺構のトレースは、はじめに鉛筆トレースを行い、点検・修正を行った後、本トレースを行った。

最後に、レイアウト、遺物写真撮影、現場写真選別、原稿執筆等を経て報告書刊行の運びとなった。



第1図 グリッド配置図



第2図 周辺地形図

第2節 層序

柿木段遺跡の層位は北東に位置する椿山遺跡、南に位置する石籠・十三塚遺跡の層位とは若干異なり、板島起源のP7と呼ばれる火山灰層や、池田降下軽石は確認されていない。

遺跡全体が谷地形のため、両端から中央へ向かって層が徐々に厚く堆積している。特にII層は両端が1m前後であるが、中央部は2mを越えている。また、南側に向かって下るため、現町道付近では3m近くに達している。II層はII a、II b、II cの3層に分けられ、さらにII a層がII a-1～II a-4層に分けられる。しかし、本遺跡の遺構や遺物はII b～III層に集中しているため、本報告書ではII a-1～II a-4層を「II a層」とまとめて表記した。

III～IV層は遺跡全体に安定して堆積しているが、谷地形の中央部へ向かって各層とも厚く堆積している。両端は近世以降の畑地造成のため削平され、II層下からVI層（アカホヤ火山灰）確認された。板島起源のP14火山灰層は、場所により堆積状況がやや異なるが良好に確認できた。

柿木段遺跡の基本層位については、第1表の柿木段遺跡基本土層の通りである。遺物包含層、火山灰等の詳細については、以下の通りである。

I層は表土である。

II層は黒色系の色調を基本に、わずかな色調の違いで3層に分層した。

II a層：やや硬質で白色バミスが混ざる暗茶褐色土、1cm前後の白色バミスがわずかに混ざる暗灰褐色土、弱粘質の黒褐色土、暗黄茶褐色土の4層に分けられる。いずれも上流からの流れ込みによる土砂堆積であると思われる。

現耕作面の下位にある時期差を伴う水平

堆積であることから、いずれも耕作面であった可能性が高い。中・近世の遺物包含層であり、古道や溝状遺構など遺構検出面である。

II b層：暗黄褐色土で、黒に近い砂質層白色バミスが少量混ざる。中・近世の遺物包含層である。

II c層：黒褐色土である。古代の遺物包含層であり、古道や溝状遺構など遺構検出面である。

III層は暗茶褐色土で、弥生～古代の遺物包含層である。砂質土が混ざる。

IV層は黒褐色土で、主に縄文時代晩期の遺物包含層である。やや粘性がある。

平成22年度の調査は、この層の調査までで終了。

V層は灰褐色土で、黄白色バミスをわずかに含む。

VI層はアカホヤ火山灰関連の層である。火山灰の含有量や色調の違いで2層に分層した。

VI a層：褐色土で、VI b層（アカホヤ火山灰）の二次堆積土である。遺跡全体に安定して堆積している。

VI b層：黄褐色火山灰土で、アカホヤ火山灰一次の軽石（約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物）層である。

VII層は薩摩火山灰に関連する層である。火山灰の含有量や色調の違いで2層に分層した。

VII a層：灰黄褐色土で、部分的にVII b層の細かいバミスを含む二次堆積土である。

VII b層：黄色火山灰層（P14、約12,800年前の板島起源の噴出物）である。場所により厚い堆積も見られる。

VIII層は黒褐色土で、粘質のある土層である。

IX層は褐灰色土で、砂質の層である。

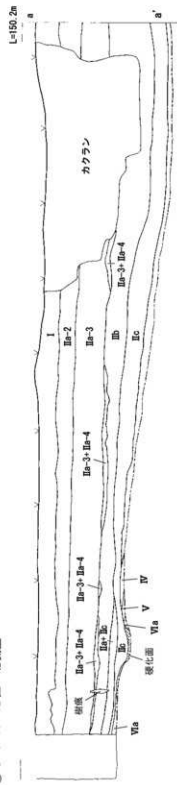
※火山灰の年代については、2003 町田洋 新井房夫 著 東京大学出版会『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—』（p 108～110）から引用した。

なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。

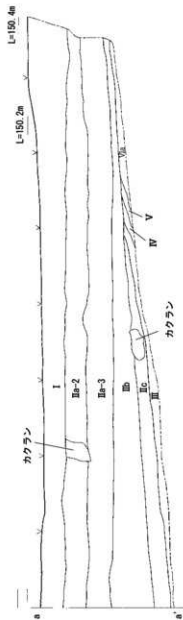
第1表 柿木段遺跡の基本土層

I 層	表土	平均厚
II a 層	暗茶褐色土	100cm
II b 層	暗黄褐色土	40cm
II c 層	黒褐色土	21cm
III 層	暗茶褐色土	20cm
IV 層	黒褐色土	20cm
V 層	灰褐色土	11cm
VI a 層	褐色土	40cm
VI b 層	黄褐色火山灰土	40cm
VII a 層	灰黄褐色土	—
VII b 層	黄色火山灰層	—
VIII 層	黒褐色粘質土	—
IX 層	褐灰色土	—

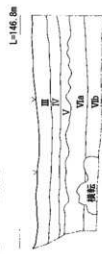
① D~F-11~12区 北側壁



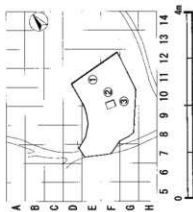
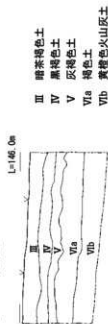
- 表土
 I 暗灰褐色土 白色ハミス(100前後)がわずかに混ざる
 IIa-2 黒褐色土 やや粘りのある砂質土
 IIa-3 黒褐色土が暗灰褐色土にブロック状に多く混ざる
 IIa-3+IIa-4 暗灰褐色土 やや硬質で砂質の層
 IIb 暗褐色土 古運の礫出面
 IIb+IIc 暗茶褐色土 砂質が少し混ざる
 IIc 黒褐色土 砂質がある
 III 黒褐色土 やや粘りがある
 IV 灰褐色土 黄色ハミスを少量含む
 V 褐色土 アカホヤ火山灰の二次堆積



② 11T 北側壁



③ 11T 東側壁



第3図 土層断面図

第3節 調査の成果

1 縄文時代の調査

(1) 調査の概要

縄文時代の遺構は確認されなかったが、遺物は3点出土し、出土層はⅡc層及びⅢ層であった。しかしながら、柿木段遺跡における縄文時代の該当層はⅣ層～Ⅶ層であるため、3点とも何らかの理由により後世のⅡc層及びⅢ層に混入したと考える。

(2) 遺物

ア 土器 (第4図 1)

1は外反する口縁部を有する土器で晩期の深鉢形土器に該当する。内外面の調整はナデであり、外面にはケズリ様のヘラナデも確認できる。

イ 石器 (第4図 2・3)

2は黒曜石製の石鏃で、浅い袈りをもち、逆刺は鈍く作つてある。

3は頁岩製の打製石斧である。おそらく頭部の破片で、体部中央や刃部は欠損している。

2 古墳時代の調査

(1) 調査の概要

柿木段遺跡における古墳時代の該当層はⅢ層である。今回の調査では、古墳時代該当の遺構は確認されず、遺物は古代の遺構内及びⅡc層 (古代の遺物包含層) 及びⅢ層から出土した。

(2) 遺物 (第4・5図 4～24)

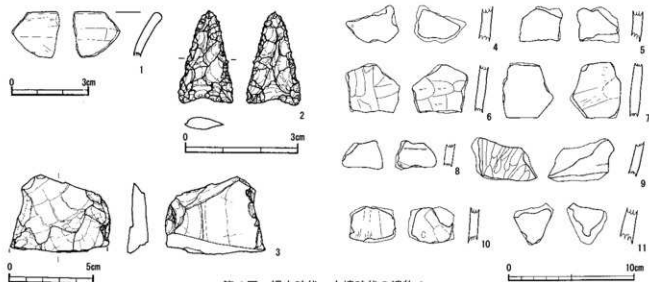
古墳時代の遺物を21点図化した。

4～11は甕の胴部片である。いわゆる成川式であるが、いずれも小片のうえ、突帯等の特徴が残っていないため、細分型式は不明である。4・5・8は溝1から、11は溝9から出土した遺構内遺物である。その他はⅡc層から出土した。

4は内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。胎土には石英・長石に加えて、1mm以下の白粒や2・3mm程の赤化した粒が含まれている。5は残存状態が不良で表面が剥落している。6は外面の一部が加熱のためか黒化している。外面は丁寧なナデ調整であるが、一部ユビオサエの痕跡が認められる。内面は横位のケズリのちナデ調整である。7は外面はナデ調整で、内面は横位のケズリのちナデ調整である。胎土には角閃石に加え、1～3mmほどの白粒や茶粒が認められる。8は内外面ともナデ調整である。内表面には1mmほどの赤粒が認められる。9は外面が縦位のハケ目調整のち、丁寧なナデ調整が施されている。内面は横位のナデ調整である。5mm程の大きめの茶粒が含まれている。10は外面が縦位のハケ目調整のちナデ調整が施されている。内面は丁寧なナデ調整であるが、ユビオサエの痕跡も認められる。3～5mm程の比較的大粒の石英が含まれている。11は内外面ナデ調整が施されているが、外面にはユビオサエの痕跡も認められる。胎土に含まれる鉱物量が他に比べて少なく、1mm以下の石英・白粒がわずかに認められる程度である。

12～24は壺の胴部片である。いわゆる成川式と思われるが、甕と同様、いずれも小片で特徴を示すものがないため、細分型式は不明である。12・15は溝1から、14・21・22は古道7から、16・18・23は古道6から、13・24は1号土坑から出土した遺構内遺物である。その他は、Ⅱc層及びⅢ層から出土した。

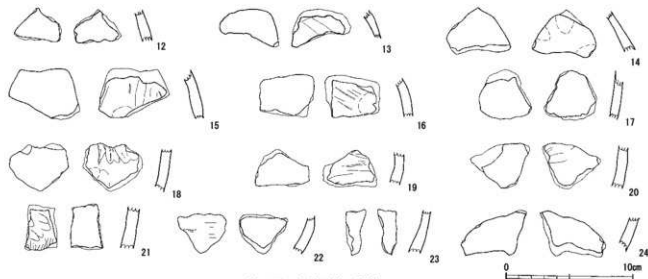
12は内外面ともにナデ調整が施されている。粘土生地は緻密で、石英・白粒・茶粒といった鉱物の混和剤が含まれている。13は1号土坑内で出土した。外面がやや摩滅しており、ザラザラしている。2mm程の石英と5mm程の比較的大粒の茶粒が目立つ。14は内面にナデ消しきれなかったハケ目が一部残存しているほか、ユビ



第4図 縄文時代・古墳時代の遺物 1

オサエの痕跡が認められる。外面には1mm以下の非常に細かい石莢が、胎土中には1・2mm程の白粒及び茶粒が認められる。15は外面はナデ調整で、内面は縦位のハケ目のちナデ調整が施されている。16は内外面ともにナデ調整であるが、内面の一部に斜位のハケ目調整の痕跡が残存している。17は内外面ナデ調整で、胎土には1～3mm程度の白粒と茶粒が多く含まれる。18は内外面ともにナデ調整であるが、内面には縦位のケズ

リとユビオサエの痕跡が一部残存している。19は外面がナデ調整で、内面は横位のハケ目のちナデ調整である。胎土に大粒の赤色鉱物を含む。20は内外面ともにナデ調整である。21は外面はハケ目のちナデ調整であるが、ハケ目の痕跡が比較的明瞭に認められる。胎土には白粒が多く含まれる。22はやや摩滅気味で、表面がザラザラしている。23・24はともに内外面ナデ調整で、いずれも胎土に1～3mm程度の茶粒を含む。



第5図 古墳時代の遺物2

第2表 縄文時代の遺物観察表

種別番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	器面調整		胎土						色調		焼成	取上番号	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	外面	内面			
4	1	F-11	B.c	深鉢	口縁部	ヘラナデ	ナデ	○	○	○				にぶい	黒褐色	良	4020	
種別番号	掲載番号	出土区	層	器種	分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上番号	備考						
	2	F-9	IV	石皿	一分	黒曜石	2.50	1.50	0.40	1.2	4006							
4	3	F-10	Ⅲ	打割石斧	—	頁岩	(4.65)	6.00	1.25	37.0	4073							

第3表 古墳時代の遺物観察表

種別番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	器面調整		胎土						色調		焼成	取上番号	備考	
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	外面	内面				
4	4	F-11	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○					にぶい	褐色	良	4020		
	5	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい	褐色	良	4047		
	6	F-11	B.c	壺	胴部	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○					灰褐色	にぶい	褐色	良	4067	
	7	F-11	B.c	壺	胴部	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○	○				褐色	褐色	良	4068		
	8	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				黒	明赤褐色	良	4059		
	9	F-11	B.c	壺	胴部	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○		○			褐色	褐色	良	4066		
	10	F-11	B.c	壺	胴部	ハケ目・ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい	褐色	良	4030		
	11	F-9	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○	○			明赤褐色	明赤褐色	良	4051		
	12	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○	○			褐色	褐色	良	4046		
	13	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○	○			褐色	褐色	良	4071		
5	14	F-12	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	褐色	良	4022		
	15	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ハケ目・ナデ	○	○					褐色	褐色	良	4061		
	16	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				褐色	にぶい	褐色	良	4045	
	17	F-12	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい	褐色	良	4028		
	18	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい	褐色	良	4018		
	19	F-11	B.c	壺	胴部	ナデ	ハケ目・ナデ	○	○		○			明赤褐色	明赤褐色	良	4031		
	20	F-11	B.c	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○	○			褐色	褐色	良	4069		
	21	F-10	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○	○			褐色	灰褐色	良	4048		
	22	F-11	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい	褐色	黄灰	良	4001	
	23	F-8	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○					褐色	褐色	良	4079		
24	F-11	Ⅲ	壺	胴部	ナデ	ナデ	○	○	○				褐色	褐色	良	4072			

3 古代の調査

(1) 調査の概要

古代の調査は、Ⅱc層からⅢ層にかけて行った。古代の包含層は谷地形の最深部にあたる部分に厚く堆積し、両端は削平を受けている。また、中世から近世にかけて数度にわたる大量の土砂堆積や畑地のための整地が繰り返されたと思われる、現地表面からの深さは約2～3m程度である。

北側の丘陵地から南側の低地部へ延びる連絡通路であったと考えられ、谷地形に沿うようにほぼ南北方向へ延びる古道、溝状遺構が最深部に集中して検出された。いずれも重なるように位置しており、硬化面に盤築などの人工的で明確な整備痕が見られないことから、短い時間差でわずかにルートを変えながら自然発生的に作られた道であると推定される。(第7～9区)

古代の検出遺構は、古道が12条、溝が1条、土坑が3基検出された。

(2) 遺構

古道(第7～8区)

古代の古道は、平成20年度調査により検出された古道2条を含む計14条検出している。一部消失により全体像が不明のものも多く、部分的な検出にとどまったものも含まれる。

古道1(第7区)

F・G-8・9区のⅡc層中位、古道6の西側約4mを並行するように検出された。F-9区以北については消失していたが、南側は緩やかに下りながら調査区外へと延びている。

硬化面は、古道6と同様に、踏み固められたと思われる黒色土が主体で、砂や小石がわずかに混ざり下位は砂質が強い。

検出された硬化面の長さは5m、幅58cmで、厚さ10～11cmである。古道6と並行し、検出面や埋土状況も似ているためほぼ同時期のものと思われるが、前後関係については不明である。

古道2(第7区)

E・F-9区のⅡc層中位、南北方向に延びる古道群から西寄り上がっていくように検出された。

北側については消失のため不明であるが、西側が小高い丘であることからこの丘に沿って緩やかに上がっていくように延びていくと思われる。

検出された硬化面の長さは22.5m、幅48～62cmで、厚さ4～13cmであり、Ⅱc層中位に硬化面があることから、近接する古道1とほぼ同時期である。

硬化面は黒色土が硬化したものが主体であり、硬化面上面の間には大量の砂粒が何層にも堆積しており、数回に渡る雨水による土砂の流れ込みがあったと推定される。

古道3(第7区)

F・G-8・9区のⅡc層下位、北西から南東方向に向かって下るように検出された。西側は削平により消失しているが、西側の丘から東側の平坦部へと下るように延びており、調査区外へと続く。南北方向に延びる古道群とは方向が異なり、谷を横切るように下っている。また、古道群より下位に位置し、Ⅲ層上面に近いところでの検出であるので、本遺跡の中では古い古道の可能性が高い。

検出された硬化面の長さは9m、幅30～60cmで、厚さ5～7cmであり、硬化面は非常に締まっている。

硬化面は青みを帯びた黒褐色土が主体であり、黒色土や黄褐色土の小ブロックが混ざる。他の古道と異なり自然に踏み固められたものではなく、歩きやすくするための意図的に粘土質の土を薄く敷き詰めたと推定される。

古道4(第7区)

古道3と同じようにF・G-8・9区のⅡc層下位、北西から南東方向に向かって下るように検出された。西側は古道3の南側約40cmに並行しているが、F-9区付近からは古道3とほぼ同じ方向へ重なるようにして東側の平坦部へと下るように延び、調査区外へと続く。このことから、古道3とほぼ同時期の古道であるが、古道3よりはやや新しいものである。

検出された硬化面の長さは17m、幅36～56cmで、厚さ2～11cmであり、硬化面は非常に締まっており厚みもある。

硬化面は淡黄褐色土が主体であり、灰褐色土や黒褐色土の小ブロックが混ざる。また、砂や小石も多く混在している。古道3と同様に自然に踏み固められたものではなく、歩きやすくするために意図的に粘土質の土を薄く敷き詰めたと推定され、古道3のルートをもとに何らかの理由で修復されたものと思われる。

古道5(第7区)

E・F-7区のⅡc層上位、古道2の上位を横断しほぼ東西方向へ延びるように検出された。

西側は消失しているが、東方向へ向かって緩やかに下りながら直線状に延び調査区外へと続いている。谷の最深部が土砂で埋まり、やや浅くなった後に作られた古道であることから古代の遺構群の中でも比較的新しいものである。谷地形が開ける部分にあたり、現在東西方向へ延びる市道の位置とほぼ同じであることから、古代の終り頃には現在と同じルートで東西の往来があった可能性がある。

検出された硬化面の長さは7m、幅36～64cmで、厚さ10～15cmである。

硬化面は非常に締まっており、意図的に敷き詰められた灰褐色土主体としたもので、多くの砂粒や小石の小ブロックを含んだ暗褐色土と互層を成している部分も見られることから溝としての機能も兼ねていたと思われる。

古道6 (第8回)

E・F-9～11区、Ⅲ層に近いⅡc層下位で検出された。ほぼ南北方向に向かって直線的に伸び、北側から緩やかな斜面を下っていくように硬化面が残存していた。

検出された硬化面の長さは37.7m、幅18～39cmで、厚さ4～7cmである。

硬化面は、黒色土主体でわずかに茶褐色土の小ブロックが混ざり表面はわずかに凹む。表面は硬く締まっている。下位は砂質が強く黒色土が踏み固められたと思われる。

南側方向は、F-8区付近方向へ伸び調査区外へと続いていると想定される。

北側のB～D-12～14区部分については、前回調査が終了しており、検出された古道の総延長は65.2mである。

古道7 (第8回)

E・F-9～11区のⅡc層、古道6の東側を並行するように検出された。

硬化面はほぼ南北方向に向かって直線的に伸びるが、南側を下るにつれて東寄りに緩やかな弧を描くように残存し、古道群から離れるように伸びているが、南側は消失している。

検出された硬化面の長さは22.6m、幅18～29cmで、厚さ5～14cmである。

硬化面の表面は硬くしまっており、踏み固められたと思われる黒褐色土が主体で、黒色土、黄褐色土の小ブロックがわずかに混ざる。表面には砂が広く覆っており、埋土中にも小石や砂溜りが確認される。

北側のB～D-12～14区部分については、古道6と同様に前回調査が終了しており、検出された古道の総延長は58.9mである。

古道8 (第8回)

E-10・11区のⅡc層、古道6の西側を並行し、一部が重なり覆うように検出された。

硬化面は、古道6と同様に、南側に緩やかに下って直線的に伸びるが、中位付近でわずかな蛇行が見られる。南北両方向とも消失しており、全体像は不明である。

検出された硬化面の長さは10.8m、幅20～25cmで、厚さ2～4cmである。硬化面の残存状況は良好である。

硬化面は、踏み固められたと思われる黒色土が主体で、砂や小石がわずかに混ざる。下位は砂質が強い。

前回調査で特徴が類似する硬化面がD-12区に残存しており、方向も延長線方向にあることから同じ古道の可能性も考えられるが、途中が消失し全体像は不明のため別の遺構として取り扱った。

古道9 (第8回)

F-9・10区のⅡc層、古道7下位に重なるように検出された。硬化面はほぼ南北方向から、南側を下るに

つれて西寄りに緩やかなカーブを描いて残存していた。

検出された硬化面の長さは6.5m、幅32～43cmで、厚さ5cmである。

硬化面の表面は硬くしまっており、踏み固められたと思われる黒色土が主体で、表面の凹みに砂粒が堆積している。

南側方向は古道6の上位を通り、F-9区付近で消失しているが、古道6より新しい古道である。F-11区以北については、古道7とほぼ同じ方向に伸びると思われるが、明確に検出することができなかった。

古道10 (第8回)

E-10・11区、Ⅱc層で検出された。古道6の東側を並行するように検出され、古道8の直下に位置し、ほとんど時期差はないと思われる。方向や残存状況など古道8とほぼ同じで、南側は消失している。

検出された硬化面の長さは3.8m、幅34～39cmで、厚さ4～5cmである。黒色土が硬く締まっており、表面は砂粒に覆われ部分的に鉄分の沈着と思われる赤褐色土が見られた。

古道11 (第8回)

F・G-9・10区のⅡc層からⅢ層にかけて検出された。中央を南北に伸びる古道群から約2m東側に離れて並行するように伸びており、東側に向かって緩やかに下りながら調査区外へと続いている。南北両端が消失しているため全体像は不明であるが、東側のG-9区方向の丘へ再び上がって行くことから、行き先が異なる同時期のものと思われる。

検出された硬化面の長さは20.5m、幅35～47cmで、厚さ8～12cmである。

硬化面は、踏み固められたと思われる黒色土が主体で、一部に硬化した茶褐色土も混じる。また、砂や小石の層を挟み直上に再び黒色土の硬化面が覆っていることから、天候により雨水の通り道としても存在していた推測される。

古道12 (第8回)

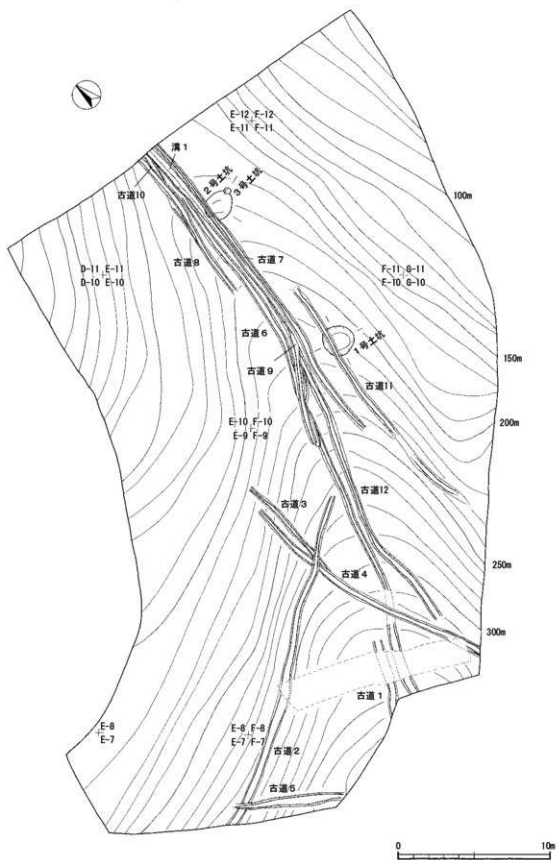
F・G-8～10区のⅡc層中位、古道7、9に挟まれるように検出された。

硬化面はほぼ南北方向から、F-9区付近から南側を下るにつれて東寄りに向きを変えながら調査区外へと続いている。

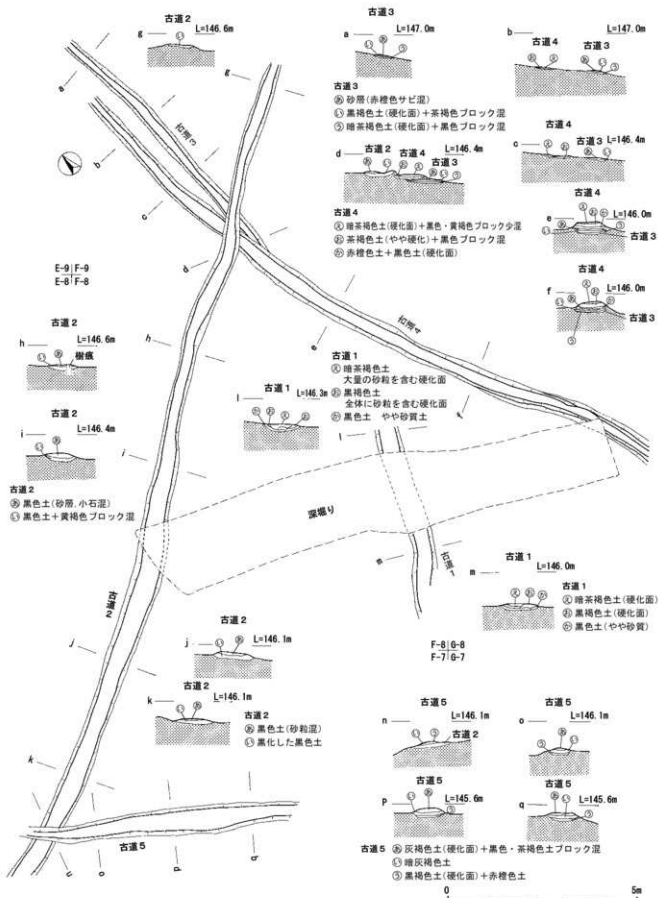
検出された硬化面の長さは21.6m、幅15～38cmで、厚さ5～10cmである。

硬化面の表面は硬くしまっており、色調は踏み固められたと思われる黒色土が主体である。埋土中には砂粒や小石が大量に含まれている部分も認められる。

何条もの古道が重なっていることから明確に検出することができなかった部分も残るが、F-10区付近から残存していると思われる。



第6図 古代の遺構配置図



第7図 古代の古道1

(断面 1/60)

溝 (第8図)

古代の溝は、1条検出している。なお、南側では溝下面にある硬化面のみを検出となったが、一体のものとしてえ溝として取り扱った。

溝 1

E・F-10・11区、Ⅲ層に近いⅡc層中で検出された。谷地形の最深部を北側から南側に向かって伸びている。E-11区当たりまでは深さ30cm近いしっかりとした掘り込みが残存しているが、南側の下っていくと徐々に上位が削平され浅くなり、F-10区付近は底面のみを検出である。底面には茶褐色土主体の硬化面があり、非常に硬く締まっており水性作用による鉄分の沈着が多く残っている。検出された溝状遺構の長さは17mであり、残りの良いE-11区付近の幅は50cmで、深さ14~20cmの断面形状は逆台形を呈している。埋土は砂質の強い黒色土主体で、下位には大量の砂粒が堆積している。細かい黒色土と砂質の互層が数回繰り返されているので、しばらくは溝としての機能があったと思われる。東隣には古道7が並行して検出されており、ほぼ同じ時期のものと考えられる。上位には古道6, 9, 12が埋まった後に作られている。埋土上位からは土師器片(Na. 28・38・41)が出土し、炭化物も多く採取できた。炭化物の炭素年代結果は13世紀代という結果が得られたことや埋土から、古代の溝と判断した。

土坑 (第9図)

古代の土坑は、Ⅲ層上面で計3基検出している。埋土はⅡc層の黒褐色土が中心である。

1号土坑

F-10区、古道7の東隣、古道11の直下より検出された。古道11よりは古く、古道7と同時期と思われるが、ほとんど時期差はないと思われる。検出された土坑は、平面形がほぼ円形を呈し、長径250cm、短径200cm、深さ30cmを測る。断面形は深皿状である。埋土中には非常に多くの炭化物が含まれ、灰白色の砂粒も多く混在している。谷地形の最深部に近い緩斜面に位置し、古道群とほぼ同時期で隣接していることから、何らかの関連があると推定される。

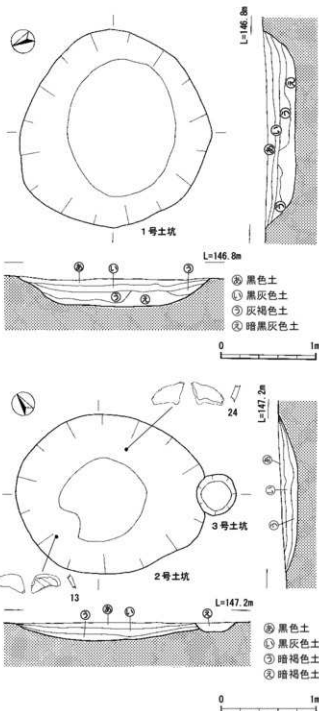
2号土坑

E・F-11区、古道7の東隣、1号土坑の北側約10m離れて検出された。検出された土坑は、平面形がほぼ円形を呈し、長径200cm、短径170cm、深さ18cmを測る。断面形はレンズ状である。埋土は黒褐色土が主体であり、炭化物はあまり見られない。下位には黒色土や茶褐色土が小ブロック状に混ざっている。1号土坑と規模や形状が似ており、古道群に隣接するなど類似点が多いことから、1号土坑と2号土坑はほぼ同時期に同じ目的で掘られた可能性が高い。埋土からは成川式土器(Na.

13・14)が出土している。採取した炭化物の年代測定は7世紀後半~9世紀後半という結果を得たため古代の土坑とした。

3号土坑

F-11区、2号土坑の東側をわずかに切るように検出された。検出された土坑は、平面形がほぼ円形を呈し、長径45cm、短径42cm、深さ9cmを測る。断面形は皿状である。埋土は黒褐色土が主体であるが、色調が淡く砂質が強い。1・2号土坑より新しく、関連は薄いと思われる。



第9図 古代の土坑

(3) 遺物 (第10図 25～42)

18点を図化した。27は古道10から、28・38・41は溝1から、29は溝9から、32・39は古道6から、33は古道7から、34・37・40は古道1から、35は古道4から、36は古道9から出土した遺構内遺物である。

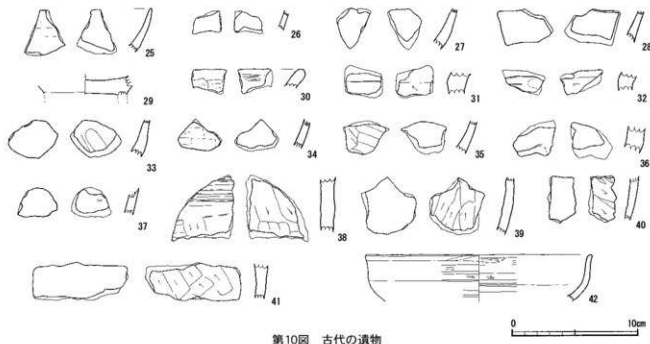
25は埴の口縁部であると思われる。体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は丸く収められる。体部下端は段状になっており、高台の接合部分と思われる。

26～28は坯もしくは埴の体部である。いずれも小片のため詳細は不明である。

29は黒色土器A類の埴である。底部のみ残存しており、高台部分は欠損している。

30～41は土師甕である。30は口縁部で、端部は丸く収められる。31・32は頸部である。内面には横位のヘラケズリが認められる。33～41は胴部である。33～37の内面はヘラケズリで、38～41は内面はヘラケズリののちナデ調整が施されている。

42は須恵器で埴状の形態を呈するものと思われる。胎土は荒く大粒の鉱物を多く含む。外面調整も粗い。



第10図 古代の遺物

第4表 古代の遺物観察表

神岡 番号	掲載 番号	出土区	層・ 遺構	器種	部位	断面調整		胎土					色調		焼成	取上番号	備考		
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	外面				内面	
	25	F-9	Ⅱc	埴	口縁部	ナデ	ナデ	○	○			○			橙	橙	良	4005	
	26	G-9	Ⅱc	埴or埴	体部	ナデ	ナデ	○	○			○	○		橙	橙	良	4058	
	27	E-11	古道10	埴or埴	体部	ナデ	ナデ	○	○			○	○		橙	橙	良	4038	
	28	F-10	溝1	埴or埴	体部	ナデ	ナデ	○	○	○					淡黄	淡黄	良	4010	
	29	E-9	溝9	埴	底部	ナデ	ナデ	○	○	○		○		明黄褐色	黒	良	4050		黒色土器A類
	30	G-8	Ⅱc	土師甕	口縁部	ナデ	ナデ	○	○	○		○	○	明黄褐色	明黄褐色	良	4077		
	31	G-8	Ⅱc	土師甕	頸部	ナデ	ヘラケズリ	○	○			○		明褐色	にぶい橙	良	4090		
	32	F-8	古道6	土師甕	頸部	ナデ	ヘラケズリ	○	○			○	○	橙	明褐色	良	4078		
	33	E-11	古道7	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ	○	○	○				○	橙	橙	良	4062	
	34	F-8	古道1	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ	○	○			○	○	明茶褐色	にぶい橙	良	4084		
	35	F-8	古道4	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ	○	○			○		明赤褐色	にぶい橙	良	4056		
	36	F-9	古道9	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ	○	○	○		○		橙	灰	良	4009		
	37	F-8	古道1	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ	○	○			○		橙	灰褐色	良	4082		
	38	E-11	溝1	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○			○		橙	橙	良	4037		
	39	F-10	古道6	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○				○	黄灰	黄灰	良	4011		
	40	F-8	古道6	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○			○		橙	明黄褐色	良	4081		
	41	F-10	溝1	土師甕	胴部	ナデ	ヘラケズリ ナデ	○	○			○		橙	橙	良	4060		
	42	F-7	表探	須恵器	口縁部	ナデ	ナデ	○	○			○	○	にぶい橙	にぶい橙	良	-		

4 中・近世の調査

(1) 調査の概要

中・近世の調査は、II b層からII c層にかけて行った。調査の結果、遺跡の東側と西側で、古道や溝が集中して検出された。遺跡の中央部では、遺構は検出されなかったが、遺跡の東西で検出された遺構の最深部に当たる古代の包含層が上流からの土砂で埋まり、堆積でできた平坦面を畑地として利用していたと考える。また、古道や溝の再構築の痕跡が認められることから、土砂堆積や畑地拡大のための整地が繰り返し行われたと推察できる。

さらに、谷地形を横断するような溝が検出されたが、これは畑地の区割りを示すものと考えられる。(第12～16図)

以上のことから、遺跡及び遺跡周辺の現在における土地利用のあり方は中・近世に始まったと考える。

(2) 遺構

中・近世の遺構は、古道7条、溝10条が検出された。先述のように、遺構は、遺跡の東側と西側に集中していることから、東側と西側に分けて報告する。

ア 調査区東側 (第12・13図)

調査区東側では、古道3条、溝5条(平成20年度の調査で検出された溝1条の続きを含む。)が検出された。ほとんどが小高い丘の裾野を巡るように北側から南側へ直線状に伸びていることが分かるが、一部は消失により部分的な検出にとどまり、全体像が不明のものもある。

また、これらの古道や溝は、作り直すたびに削平された東側へと広がっていったことが確認でき、「大きな溝と畑」という土地利用のあり方も近世では行われていたと推察できる。

古道13 (第12図)

F・G-9～12区、主に削平されたIV層からV層にかけての面、古道13の東側を並行するように検出された。検出面は部分的に違いが見られ、北側ではVI a層、南側ではIV層からIV層にかけての面が検出された箇所もある。硬化面が、北端や途中に消失している部分もあるが、残存状況は良好で、南側に向かって緩やかに下りながら直線状に伸びる。南端は調査区外へと伸びていたため全体像は不明である。隣接している古道14より残存状況がよく、やや高い位置に作られていることから、古道14よりは新しく、古道14に代わる新しい道として作られた可能性もある。検出された硬化面は非常に硬く、長さ30.8m、幅32～60cm、厚さ5～11cmであった。埋土の色調は暗茶褐色をベースとしている。埋土中に小石や砂、少量ではあるが黒色土のブロックなどが混ざっていた。このことから、硬化面は、古道14と同じく地山が踏み固められてきたのではなく、粘質のある土を歩くために意図的に小石や砂などを敷き

詰めできたことが推察できる。

古道14 (第12図)

G-10区、削平されたIV層上面、古道13の西側を並行するように検出された。南北両端が削平され、検出された硬化面は表面が硬くしまっており、長さ2m、幅48cm、厚さ6cmであった。検出された長さはわずかであるが、硬化面はほぼ南北方向に向かって直線状に伸びると推察する。埋土の色調は暗茶褐色をベースとしている。埋土中に小石や砂などが混ざっていた。このことから、硬化面は、地山が踏み固められてきたのではなく、粘質のある土を歩くために意図的に小石や砂などを敷き詰めできたことが推察できる。

古道15 (第12図)

F-11区、削平されたVI a層上面で検出された。検出された硬化面は表面が硬くしまっていたが、中央部の凹みには大量の砂が埋まっていた。硬化面は長さ3.7m、幅58cm、厚さ8cmで、検出された長さはわずかであるが、硬化面はほぼ南北方向に向かって直線状に伸びると推察する。直下に溝2があり、上面の東側半分以上を古道15の硬化面が覆っている。このことから、溝2が堆積物で埋まり、その後、踏み固められてきた道である。ただし、部分的な検出のため、溝2の全面を覆っていたかは不明である。埋土の色調は黒色をベースとしている。埋土中には黄色土のブロックや白色バミスをわずかに含んでいる。

溝2 (第12図)

F・G-9～11区、古道13の東側を並行するように検出された。検出面は削平されたVI a層が大部分を占めるが、南側では一部IV層からV層にかけての面が検出された。残存状況は良好で、南側に向かって直線状に伸び、緩やかに下りながら調査区外へと続く。検出された溝は、長さ30.5m、幅50～70cm、深さ10～30cmであった。溝の断面形がしっかりと逆台形を呈しているため、意図的・計画的に掘られた溝であることが分かる。埋土は黒色土をベースにした色調で、砂質が強い。底面には非常に硬くしまった茶褐色の硬化面があり、鉄分の沈着が多く残っていた。溝2は、この溝より上面で検出された古道13・15や上の位置に存在する溝3・4よりも古いことが分かる。

この溝は平成20年度の調査時にA～F-12～15区で検出された溝19(平成21年刊行報告書のP89参照)の延長部分である。検出された溝の総延長は46.7mで、谷筋の東側に沿って計画的に作られたものである。

溝3 (第12図)

F・G-10・11区、溝2と4に挟まれるようにして検出された。検出面は、削平されたVI a層で溝2より高い位置に掘られており、ほぼ同じ方向へ伸びている。斜面に沿って掘られているため、東側は二段掘りになっており、掘り

込みは比較的浅い。断面形が皿状を呈した底面には小ピットが連続し、一部階段状に続いている。埋土は、底面付近は砂質の強い茶褐色土主体で、黄色土の小ブロックが混ざり、上位はやや粘性をもった黒色土である。検出された溝は長さ28m、幅50～85cm、深さ2～8cmである。

溝4 (第12図)

G-9・10区、溝3に並行するように検出された。検出面は、削平されたVI a層で溝3よりもさらに高い位置に掘られている。西側に二段掘りの痕跡が確認でき、緩やかに南へ下りながら調査区外へと続く。北端は攪乱により消失している。埋土は、砂質の強い暗茶褐色土が主体であり、黒色土や黄色土の小ブロックが混ざり、検出された溝は、長さ9m、幅70～100cm、深さ10cmである。並行する3つの溝では最も新しいものである。

溝5 (第13図)

F-11区、谷地形を横切るようにほぼ東西方向で検出された。検出面は、III～VI a層であるが、掘り込み面はまだ上位であると推定される。南北方向に延びる溝2・3を切っており、調査区東側の遺構群の中では新しいものである。検出された溝は長さ7.8m、幅50～90cm、深さ6～15cmである。東端は調査区外へと続き、西端は谷部中央付近で消失しているが、延長上に溝10が位置しており同一の可能性が高い。浅い皿状に掘り込まれた溝の埋土は、砂粒の混ざったやや粘性のある黒色土であり、底面付近に暗茶褐色土や黄褐色土の小ブロックが混ざり、東側の断面は北側が高く、南側が低く作られており高低差がある。意図的に段差をつけて、谷地形を横断するように作られていることから、耕作地の境界を明確にするための区割り溝の役割を果たしていた可能性が高い。

溝6 (第13図)

G-10区、溝5と同じように谷地形を横切るようにほぼ東西方向で検出された。検出面は、IV層であるが、南北方向に延びる古道13・14を切るように検出され、比較的新しい溝と思われる。西端は消失しているが、延長上の溝11が位置しており同一の可能性が高い。埋土は、黒色土である。溝の検出状況が悪く、長さ2.2m、幅20cmとわずかに痕跡が確認できるだけであった。掘り込みははっきりと確認できなかったが、溝5と同じように耕作地の区割り溝の役割を果たしていた可能性がある。

イ 調査区西側 (第13～16図)

調査区西側では、古道4条、溝5条(平成20年度の調査で検出された溝1条の続きを含む)が、谷地形の斜面部を削平して作られた平坦面に集中して検出された。ほとんどが西側の台地の裾野に沿って、西側に緩やかな弧を描きながら北側から下るようにして南側へと直線状に延びている。一部は消失により部分的な検出にとどまり、全体像が不明なものもある。

また、これらの古道や溝は、作り直すたびに削平され

た西側へと広がっていったことが確認できる。

古道16 (第13図)

E・F-9区、削平されたIII～VI a層上面で検出された。造成による平坦面が形成されてから作られたと思われる。北側から南側へ向かって緩やかに下るようにして検出されているが、両端が消失しているため全体像は不明である。やや検出面が最深部寄りであるため、西側の遺構群の中では古い時期のものとして推定される。検出された硬化面は長さ10.5m、幅37～100cm、厚さ2～16cmで、表面が硬くしまった暗茶褐色土である。硬化面直下に浅い皿状を呈した約15cm程度の凹みが、約20cm間隔で連続して見られたので確認できたものについては図化した。

古道17 (第13図)

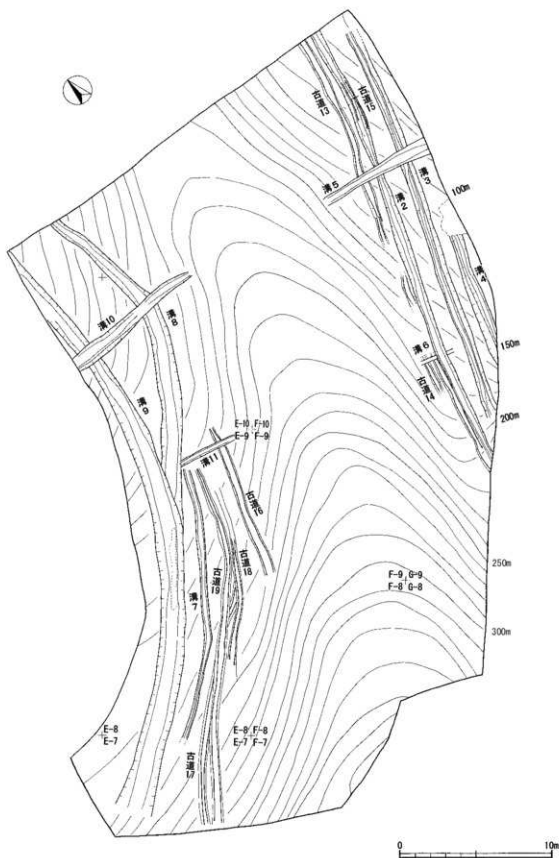
E-7・8区、削平されたIII～VI a層、南側の一部はII c層上面で、やや蛇行しながらほぼ南北方向へ延びるように検出された。古道16より西側の高い位置にあり、古道16よりも新しく、西側約30cmを並行するように位置する溝7とほぼ同時期に当たると考えられる。検出された硬化面は、表面が硬くしまった小石混じりの暗茶褐色土で表面が覆われており、下位は白色バミスを含んだ黒褐色土である。検出された硬化面は長さ15.8m、幅43～55cm、厚さ9～10cmである。

古道18 (第13図)

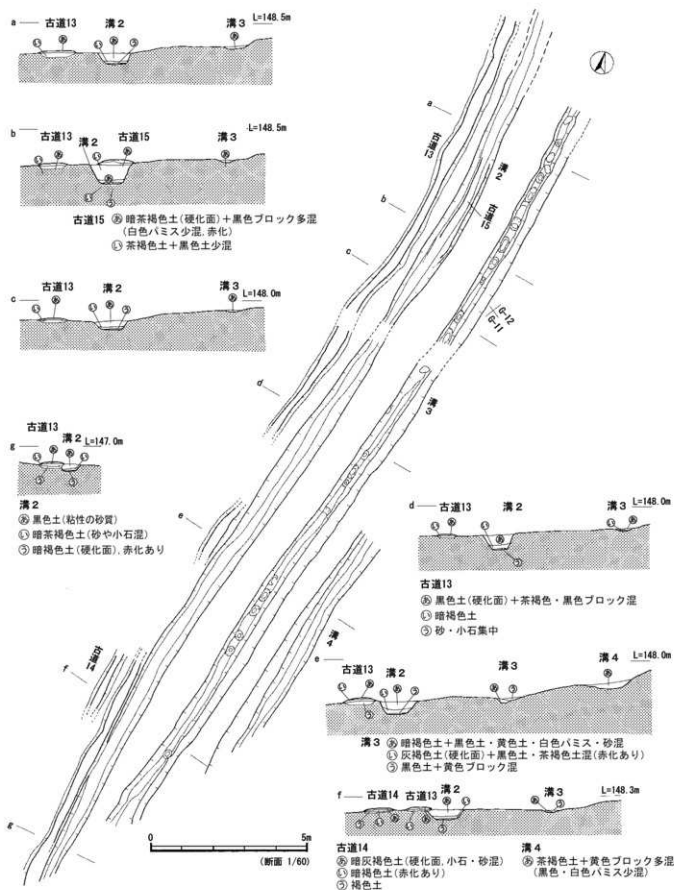
E-8・9区、北側は削平されたIII、IV層上面、南側はII b層で検出され、ほぼ南北方向へやや西寄りに弧を描きながら直線的に延びている。南北両端とも消失しており、検出された硬化面は、長さ12.4m、幅27～40cm、厚さ3～11cmである。埋土は暗茶褐色土が主体で、表面は砂粒で覆われている。並行する古道19より東寄りに位置し低いことから、古道19よりわずかに古いと思われるが、ほとんど時期差はなく、ルートが同じことから古道19が作られる以前に使用されていたと推定される。また、南端の硬化面が急に消えており、古道19を造成の際に破壊された可能性も考えられる。

古道19 (第13図)

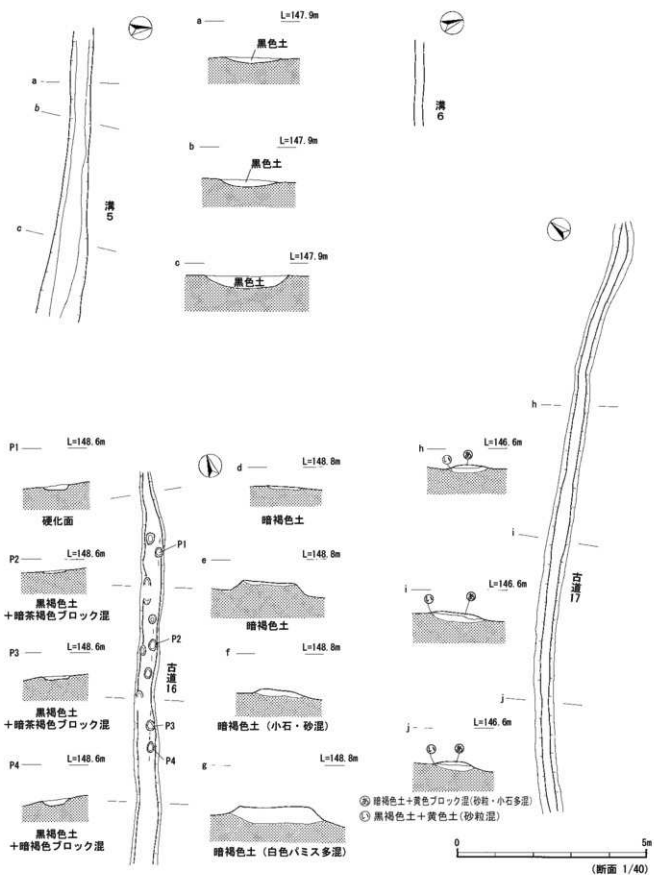
E-8・9区、北側は削平されたIII・IV層上面、南側はII b層で検出され、古道18と同じく、ほぼ南北方向へやや西寄りに弧を描きながら直線的に延びている。北端は消失しているが、南側は平地部へと延びている。検出された硬化面は、長さ23m、幅22～63cm、厚さ2～14cmを測る。埋土中に黄色土の小ブロックや白色バミスが多く含まれることから、並行する古道18とはほぼ同時期と思われるが、古道18よりも新しいものである。また、下位から検出された古道17や溝7よりも新しい。時期的に古い古道17とはほぼ同じルートで一部重なりを持つ。これは、新たに造成された地帯が東側へは拡張されたが、西側は小さい丘があるためあまり広がらず、畦道の位置がほぼ同じ位置であったのではないかと



第11図 中・近世の遺構配置図



第12図 中・近世の古道1・溝1



第13図 中・近世の古道2

な役割を果たしていたと思われる。検出された溝は、長さ22m、深さ6～10cmで、溝の断面形が浅い大皿状を呈している。埋土は砂質の強い黒色土をベースにした色調で、底面近くには黄色土の小ブロックが混ざり、上位には砂粒の互層が確認されるほど大量の砂粒が混在している。

溝9 (第15図)

D・E-7～11区、溝8を切るようにして検出された。検出された溝は、長さ40m、幅12.2～16.6cm、深さ1.5～4.3cmと本遺跡の中では最大のものである。現在の畑地面が作られる前の段階の溝と思われる、削平や埋め立てによって作られた畑地を維持するために、大量の水が必要となり計画的に作られた溝であり、北側は直線的に、南に下るに従って西側に弧を描くように延びている。検出面は東側にせり出した丘を削平して作られたVI a層が西側、東側は溝のために作られた黄色土、黒色土、赤橙色土などが混在した硬く締まった造成土である。埋土はやや粘性を帯びた黒色土が中心であるが、底面付近から黒色土と黄色土の混在土、黒色土、黄色バミス混じりの暗褐色土などが数回に渡り堆積を繰り返している。埋土中より陶器片(Na 11)が出土している。底面には部分的に非常に硬くしまった鉄分の沈着が多く残る硬化面が確認される。

この溝は平成20年度の調査時にA～D-11～13区で検出された溝11の延長部分であり(平成21年度刊行

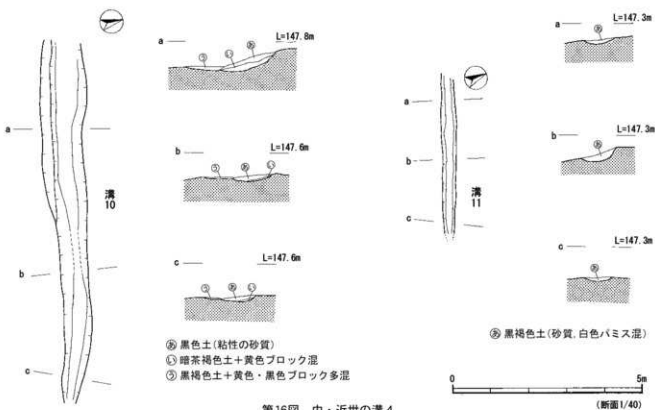
報告書P 89参照)、検出された溝の総延長は75mである。

溝10 (第16図)

D・E-10区、谷地形を横切るようにほぼ東西方向で検出された。検出面は、削平されたIII～VI a層である。検出された溝は長さ9.8m、幅56～95cm、深さ2～12cmであり、西端は調査区外へと続き、東端は谷部中央付近で消失しているが、延長上に溝5が位置しており同一の可能性が高い。南北方向に延びる溝8・9を切っており、調査区西側の遺構群の中では新しいものである。溝の埋土は、砂粒の混ざったやや粘性のある黒色土であり、底面付近に暗茶褐色土や黄橙色土の小ブロックが混ざる。溝5と同じく、断面は北側が高く、南側が低いという特徴があり、耕作地の境界を明確にするための区割り溝の役割を果たしていた可能性が高い。

溝11 (第16図)

E-9区、溝10と同様谷地形を横切るように、ほぼ東西方向で検出された。検出面は削平されたIII～VI a層であり、南北方向に延びる溝7、古道14・16を切るように検出されたことから比較的新しい溝と思われる。両端とも消失しているが、東端の延長上には溝6が位置しており同一の可能性が高い。断面形状が皿状を呈した溝の埋土は、砂質の強い黒色土であり、暗茶褐色土や赤橙色土が小ブロック状に混ざる。検出された溝は、長さ4.4m、幅27～32cm、深さ4～8cmである。溝10と同じく、耕作地の区割り溝の役割を果たしていた可能性がある。



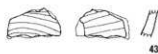
第16図 中・近世の溝4

(3) 遺物

ア 中世の遺物 (第17図 43)

中世の遺物を1点図化した。

43は古代の遺構である古道6の直上から出土した中世の陶器で、赤褐色を呈し、内外面ともに水引による轆轤筋が認められる。胎土は緻密であるが、1mm以下の石英・白・茶粒が含まれる。



43



44



45

第17図 中・近世の遺物

第5表 中世の遺物観察表

種別 番号	掲載 番号	出土区	層・ 遺構	器種	部位	器面調整		胎土					色調		焼成	取上番号	備考		
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	輝石	その他	外面				内面	
17	43	E-11	古道6	陶器	胴部	ナデ	ナデ	○	○				○		赤褐色	赤褐色	良	4021	中世

第6表 近世の遺物観察表

種別 番号	掲載 番号	出土区	層・ 遺構	種類	器類	器種	部位	法像 (cm)			色調			備考
								口縁径	底面径	器高	外	内	胎土	
17	44	E-9	Ⅱa	苗代川系	鉢類	鉢類	口縁部	—	—	—	暗赤褐色	暗赤褐色	橙	
	45	E-7	Ⅱa	在地系	碗類	碗器碗	口縁部	—	—	—	明緑灰	明緑灰	灰白	端反口縁

第5章 自然科学分析

柿木段遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史
山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadize
Ineza Jorjoliani・菊地有希子

1. はじめに

鹿児島県曾於郡大崎町野方に位置する柿木段遺跡より検出された炭化物について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、表 1 の遺構名は、報告書の遺構番号と同一である。

表 1 測定試料および処理

PLD-18725	試料 No. 2 遺跡名: 柿木段遺跡 調査区: E・F-11 区 遺構: 2 号土坑 層位: III 層 (古代・中世の遺物 包含層) 上面 その他: 土坑内採取炭化物	試料の種類: 炭化材 (針葉樹) 試料の性状: 最外以外部位不明 採取位置: 外側-1 年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-18726	試料 No. 3 遺跡名: 柿木段遺跡 遺構: 古道 7 層位: 不明 その他: 古道内採取炭化物	試料の種類: 炭化材 (針葉樹: 小枝) 試料の性状: 最外以外部位不明 採取位置: 外側-3 年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-18727	試料 No. 4 遺跡名: 柿木段遺跡 遺構: 溝 1 層位: 不明 その他: 溝状遺構内採取炭化物	試料の種類: 炭化材 (針葉樹: 小枝) 試料の性状: 最外年輪付近 採取位置: 外側-3 年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値である。今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は、柿木段遺跡から 3 点である。

柿木段遺跡の試料は、2 号土坑内より採取された炭化材小片 (試料 No. 2: PLD-18725)、古道 7 内より採取された炭化材小片 (試料 No. 3: PLD-18726)、溝 1 内より採取された炭化材小片 (試料 No. 4: PLD-18727) である。2 号土坑は古代・中世の遺物包含層である III 層上面で確認された遺構である。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

PLD-18725 試料 No. 2	-22.87 ± 0.13	1240 ± 19	1240 ± 20	694AD (44.7%) 748AD 765AD (14.6%) 780AD 792AD (8.9%) 805AD	687AD (95.4%) 869AD
PLD-18726 試料 No. 3	-19.33 ± 0.14	1440 ± 19	1440 ± 20	608AD (68.2%) 641AD	580AD (95.4%) 650AD
PLD-18727 試料 No. 4	-25.45 ± 0.14	785 ± 18	785 ± 20	1225AD (68.2%) 1264AD	1220AD (95.4%) 1271AD

4. 考察

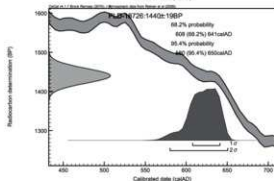
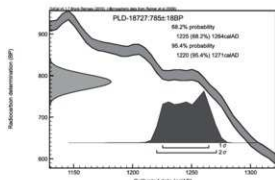
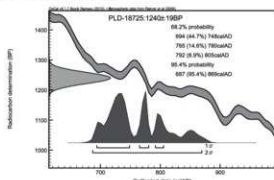
各試料の暦年校正結果のうち、2σ 暦年範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

柿木段遺跡では、2号土坑から採取された炭化材片（試料No. 2: PLD-18725）が687-869 cal AD (95.4%) の暦年範囲を示した。これは7世紀後半～9世紀後半におさまる範囲で、飛鳥～平安時代に相当する。古道7号から採取された炭化材片（試料No. 3: PLD-18726）は、580-650 cal AD (95.4%) の暦年範囲を示した。これは6世紀後半～7世紀中頃に収まる範囲で、古墳時代末～飛鳥時代に相当する。溝1から採取された炭化材片（試料No. 4: PLD-18727）は1220-1271 cal AD (95.4%) の暦年範囲を示した。13世紀代であり、鎌倉時代に相当する。

ただし木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の柿木段遺跡の試料No. 2と試料No. 3は最外年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受けている可能性、すなわち木材が実際に枯死・伐採された年代よりも古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

参考文献

- 相美伊久雄 (2008) 深浦式土器。小林達雄編「総覧縄文土器」: 516-521, アム・プロモーション。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughes, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第6章 総括

1 野方前段遺跡B地点

(1) 野方前段遺跡B地点の特徴について

野方前段遺跡B地点は、天神段遺跡と野方前段遺跡A地点の中間に位置し隣接している。標高約200mの八つ手状に延びた台地の先端部分に立地している。主体となるのは縄文時代早期の遺構と遺物および、縄文時代前・中期の遺構である。

(2) 縄文時代早期について

ア 遺構について

野方前段遺跡B地点の縄文時代早期に該当する遺構・遺物は、その遺構内埋土の堆積状況や、出土部位から大まかに早期前半と早期後半に分類することができる。

集石遺構は早期前半で2基が根根の先端部分、2基が斜面に、早期後半では2基が斜面に作られている。早期後半の集石遺構に関しては、礫数も少なく散石状態ではあるが、周囲に礫の出土が見られないことから、今回は集石として扱っている。

イ 遺物について

早期の遺物としては、土器がⅠ～Ⅷ類と石鏃・石斧・磨石・蔽石が出土している。

Ⅰ類土器は吉田式土器である。全て同じ文様施文をもつ土器であると考えられる。

Ⅱ類土器は吉田式土器に後続する岩之上式土器に該当すると考えられるが、口縁部片のみ1点の出土しか確認できていない。

Ⅲ類土器は石坂式土器である。「石坂式土器再考」(前迫2003)の分類から見ていくと、野方前段遺跡では石坂Ⅰ式・石坂Ⅱ式の双方の出土が確認できる。

隣接する野方前段遺跡A地点からも石坂Ⅰ式土器が出土しているが、口縁部小破片が1点のみの出土となっている(鹿児島県立埋蔵文化財センター2010)。

Ⅳ類土器は下刺釜式土器である。口径26.6cm、器高24.3cm、底径14.1cmの完形品も出土している。

Ⅴ類土器は下刺釜式土器・桑ノ丸式土器の段階の土器であると考えられる。3個体が出土している。

Ⅵ類土器は押型文土器である。楕円と山形の2種類が出土しているが、量も少なく胴部片のみが出土している状況である。

Ⅶ類土器は塞ノ神式土器である。口縁部片は1点しか確認されていないが、胴部上半で「く」の字に大きく外反する器形をしている。文様は口縁部から胴部半程にかけて縦位の貝殻刺突文を4列施し、その下位に沈線文で幾何学文様を施し、それを区画とし、内部を燃系文等で充填している。燃系文を用いて施文していることから塞

ノ神A式土器の範疇に入ると言えよう。

野方前段遺跡A地点からも塞ノ神式土器の出土は見られるが、同じ塞ノ神式土器でもB地点とは異なり、胴部で燃系文を縦方向に施すタイプのもので、貝殻刺突文と貝殻条痕文のみで文様が構成される塞ノ神B式土器が出土している。また、塞ノ神式土器に後続する苦浜式土器や早期末の轟A式土器(報告書内では石京西式と表記されている)が出土している。

野方前段遺跡B地点から出土している縄文土器は全て縄文早期該当の土器であり、その量も少ない。しかしながら、下刺釜式土器の完形品が出土していることなどから、一概に流れ込みによるものとは言えず、時期によっては小規模ながら何らかの生活が営まれていた可能性が考えられる。

(3) 縄文時代前・中期の遺構について

前・中期の遺構としては落とし穴が9基検出されている。野方前段遺跡B地点では大型の土坑の底面に逆茂木痕と考えられる小ピットが確認できたもののみを、落とし穴遺構として認定している。

すべての落とし穴の埋土に板島起原のP7バミスと考えられる黄白色バミスが堆積しており、且つアカホヤ火山灰の堆積が見られないことから、アカホヤ火山灰降下以後～板島P7バミス降下以前に造られた落とし穴であることが分かり、縄文時代前期～中期の間に造られた遺構であると言える。

落とし穴の形状は、平面形が隅丸の長方形と長方形の四隅が突出するもの2タイプがある。大きさで見ると、四隅が突出するタイプのものが、隅丸の長方形タイプのものよりやや大きな落とし穴となっている。

ほとんどの落とし穴の検出面がⅥ・Ⅶ層あり、落とし穴の上部の構造や深さは確認することができないが、唯一6号落とし穴のみ土層確認ベルトから2m以上の深さがあることが確認できる。残念ながら6号落とし穴が検出された周囲は層の堆積が不安定であり、特に南側は地層の横断の影響を受け層が攪乱されているが、北側の層位で確認する限りでは、6号落とし穴は少なくともVb層よりも上位から掘り込まれていると考えられる。

落とし穴底面で確認できる小ピットは、どの落とし穴も長軸に平行に3,4か所並ぶものが多い。

落とし穴は、1・4・5・9号が根根部分に、2・3・6・7・8号が斜面に造られており、特に6～8号落とし穴は隣接して造られており、形状や、埋土の堆積状況の類似性から同時期に造られた可能性も考えられる。

遺構の底面に小ピットが確認できなかったため落とし穴と認定しなかったが、平面形状や埋土の堆積状況から、落とし穴に類似するものとして6号土坑があげられる。6号土坑はいわゆる底面に小ピットを持たないタイ

ブの落とし穴である可能性があるため、土坑のなかでも「落とし穴状遺構」として、他の土坑とは別のものとして考えている。6号土坑はK-25区で検出されており、落とし穴2・3号と隣接しているが、落とし穴6～8号がほぼ同じ形状で3つ隣接しているのに対して、落とし穴2・3号は四隅突出形、6号土坑は隅丸長方形という点と、落とし穴2・3号は桜島P7バミスが埋土の上位で確認されているのに対して、6号土坑は埋土の底面近くでP7バミスが確認されている点の2つで異なっており、落とし穴2・3号との関係性を述べるのは難しい。落とし穴に関しては、南側に隣接する野方前段遺跡A地点でも5基が検出されており、遺構内の埋土の状況から、縄文時代前・中期の落とし穴とされている。埋土には野方前段遺跡B地点で検出された落とし穴と同様に桜島起源のP7バミスと考えられる黄白色バミスを含む土が堆積しており、埋土としては非常に類似している。しかしながら、野方前段遺跡A地点で検出された落とし穴はどれも平面形が円形、もしくは隅丸の方形をしており、落とし穴の底面には小ピットは確認されていない。これは長方形を主体し、多くの落とし穴の底面に小ピットをもつ野方前段B地点の落とし穴とは大きく異なっていると言えよう。

さらに野方前段遺跡A地点から南に100mの地点の加治木堀遺跡でも落とし穴が7基確認されている（県立埋蔵文化財センター2010）。加治木堀遺跡で確認された落とし穴はすべて桜島P7バミスの堆積している面から掘り下げられており、野方前段遺跡B地点の落とし穴と比較すると新しい時代の落とし穴であることが分かる。形状は平面形が円形を呈しており、小ピットはあるものでも中央に1か所確認できるのみである。

以上のように、野方前段遺跡A・B両地点では類似した埋土の堆積状況を持ちながら、形状が大きく違う落とし穴が検出されているという特徴をもつ。また、野方前段遺跡A・B両地点では縄文時代前・中期に該当する土器の出土は少なく、縄文時代前期の縄文系の土器と考えられる小破片が2点出土しているのみである。それに対して発掘途中ではあるが、隣接する天神段遺跡では縄文時代前・中期の土器が一定量出土しているようであり、生活のすぐ近くに存在している土器と、生活域から少し離れた場所に存在しているであろう落とし穴の関係性も考えていかなければならない。野方前段遺跡は天神段遺跡の報告を待ち、その後もう一度、遺跡群として検討していく必要がある遺跡である。

最後に、野方前段遺跡（A地点・B地点）と加治木堀遺跡で検出された落とし穴の時期や規模等について比較できるように表にまとめた。

野方前段遺跡と加治木堀遺跡の落とし穴観察表

①野方前段遺跡B地点

番号	時期	形状	大きさ	深さ	小ピット
1	前・中期	隅丸長	148×70	(73)	3
2	前・中期	四隅突出	146×64	(39)	3
3	前・中期	隅丸長	123×70	(60)	2
4	前・中期	四隅突出	148×73	(27)	3
5	前・中期	不明	？×(86)	(40)	(1)
6	前・中期	隅丸長	111×48	(80)	4
7	前・中期	隅丸長	116×49	(25)	3
8	前・中期	隅丸長	117×46	(10)	4
9	前・中期	隅丸長	123×53	(30)	3

②野方前段遺跡A地点

番号	時期	形状	大きさ	深さ	小ピット
1	前・中期	円形	110×90	(93)	なし
2	前・中期	円形	70×67	(77)	なし
3	前・中期	円形	66×60	(63)	なし
4	前・中期	隅丸方	84×68	(90)	なし
5	前・中期	円形	81×70	(87)	なし

③加治木堀遺跡

番号	時期	形状	大きさ	深さ	小ピット
1	中期	円形	直径188	192	なし
2	中期	円形	直径167	206	なし
3	中期	円形	直径190	186	なし
4	中期	円形	直径96	122	1
5	中期	円形	直径110	172	1
6	中期	円形	直径110	172	なし
7	中期	円形	直径96	142	1

大きさはすべてc mで表記

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・棒山遺跡・柿山遺跡・林木段遺跡・野方前段遺跡A地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター
前迫亮一 2003 「石版式土器再考」『縄文の森から』創刊号鹿児島県立埋蔵文化財センター

2 柿木段遺跡

(1) 柿木段遺跡の特徴について

柿木段遺跡は、東西に位置する丘陵地に挟まれた急傾斜の谷筋と、丘陵地の根野に沿って続く高低差のない谷筋の特徴の異なる二つの谷が合流する部分にあたる。

南北方向に位置する谷筋は、両側を急峻な丘陵地に挟まれ、谷幅も狭く、高低差も約20m程度あることから、人々が住居を構え定住したとは想定しにくい地形である。

しかし、上流方向へ上りが着くと台地が開け、現在は交通の要衝となる道路も存在することから、人々が往来する道としての割合が高いと推定され、前回の調査でも遺物の出土量は少なく、谷の最深部に沿って多くの道路や溝が重なり合うように発見されている。

それに対して東西方向に位置する谷筋は、谷幅も広く、あまり高低差もなく緩やかであることから平坦面が多い。周辺の山々から水も豊富に流れ込むので、定住域と考えてもおかしくない地形であり、前回の調査では住居跡は検出されなかったが、埴や坏、甕などの生活用具の遺物が多く出土した。検出された遺構の多くは同じく道路と溝であった。ただ違うのは、方向は同じ東西方向に伸びているが、道路の重なりが少なくある程度の間隔を開けながら広く位置している。また、道の幅を広くし造成したものも見られることから、南北方向に伸びる道よりもはるかにゆつたりとした造りで、多くの人や物が往来していたと思われる。

このように、本遺跡は二つの特徴の異なる谷が合流する部分にあたり、谷筋を利用した人や物資の往来を示す多くの古道群や溝が検出されるのが特徴であり、周辺の遺跡の特徴と合わせ、野方・立小野地域の人の流れを知るうえで大変重要な遺跡である。

今回の調査は、遺跡全体のわずかに1/6程度であるので、今回の調査結果に前回までの成果を併せながら時代ごとにまとめ、本遺跡の総括としたい。

(2) 縄文時代について

縄文時代の遺物は、土器1点、石器2点の計3点とわずかであった。上流からの流れ込みと思われるが、前回の調査で北側の上流域では縄文時代晩期の遺物が出土しており、同じく晩期該当の遺物と思われる。南側の平地部では、落とし穴状遺構、土坑、石斧埋納遺構などの遺構や、深鉢形土器や浅鉢形土器など多様な土器片が多数出土していることから、本遺跡全体に縄文時代晩期の包含層があり、その当時の人々が往来していたと推測される。また、縄文時代前期-後期の遺物は発見されなかった。前回も南側の平地部のみで出土しているため、その当時、南北に伸びる谷筋には人の往来は無く、南側の平地部を東西に往来していた可能性が高い。

(3) 弥生～古墳時代について

古墳時代はⅡ層が遺物包含層であるが、Ⅱc層や古代～中世の遺構内からの出土も見られるなど、流れ込みと思われるものも少なくない。いずれもいわゆる成川式土器であり、今回の調査区が地形的に流速が速くなる場所であることが影響して表面が摩耗したものが多く、しかし、前回の調査では、南側の平地部で状態の良い土器片も見つかっており、遺物の出土量も多く遺跡全体に広がっていることから、その当時の人々も往来があったと思われる。なお、前回南側の平地部で山ノ口式土器が1点出土しているが、今回の調査では弥生時代の遺構・遺物は発見されなかった。弥生時代については、出土点数が少なく、極めて限定的であることから、その当時の人々の往来があったかについては不明である。

(4) 古代について

古代の包含層はⅡc～Ⅲ層であり、厚く堆積したⅡ層の下位に当たる。遺構は谷地形の最下部付近に重なるようにして、古道12条、溝1条、土坑3基が検出されている。このことから南北方向の谷は、すぐ側まで丘陵地が迫っており、人々の歩くスペースが非常に狭かったことが分かる。また、硬化面が何条も重なり合っていることから、一定期間道として使用された後に大雨などで運ばれてきた土砂により埋没、または破損したと考えられ、比較的短期間の間に繰り返されたと推測される。また、谷筋が合流するあたりは、やや開けて傾斜が緩やかになるので土砂の堆積量も多くなる。その結果、古道間のレベル差が大きくなり、向きも東西方向へ伸びるにつれて乱れてくる傾向にある。中には粘土質の土を敷き詰めた強固な道も出現してくる。遺物の出土量も多く、埴や坏、甕など生活に密着した土器が多いことから、交通の要衝として数多くの人や物が往来していた時期と言えよう。

(5) 中・近世について

中～近世の遺構は、谷の両側に迫る丘陵地を削平した、厚く硬度のあるⅥa層で検出されたものが多く、古道や溝は両端に集中しているが、いずれもしつかりと造成され、特に溝は硬いⅥa層を規格的に掘り込み、水の流れを考えながら直線的に作られている。この頃になると、古道は自然堆積した土砂により埋没し、通路としての役割は終わったと考えられる。そこに出来た平坦面は畑地として利用し始められ、その後、耕作面積を広げるために両側を削平して溝や道を整備する。これを繰り返すことで、現在の畑地へと続いていくのである。今回の出土遺物は少量であるが、前回の調査では、輸入陶磁器から肥前系の染付や薩摩焼など多彩な遺物が出土している。

生活道路から畑作地への土地利用の変化という点からも、本遺跡は大隅地方の貴重な資料と言えよう。

写 真 图 版



土層断面 1



土層断面 2



作業風景 1



作業風景 2



2号集石遺構

宮ヶ原遺跡 土層断面, 作業風景, 集石遺構

図版 2



3号集石遺構



4号集石遺構



6号集石遺構



7号集石遺構



1号落とし穴半裁状況



1号落とし穴完掘状況



2号落とし穴半裁状況



2号落とし穴完掘状況

宮ヶ原遺跡 集石遺構，落とし穴



3号落とし穴逆茂木痕検出状況



3号落とし穴逆茂木痕完掘状況



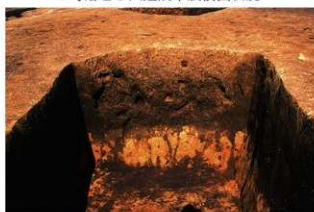
4号落とし穴逆茂木痕



6号落とし穴逆茂木痕検出状況



5号落とし穴検出状況



5号落とし穴半裁状況



7号落とし穴逆木痕検出状況



7号落とし穴逆茂木痕完掘状況

宮ヶ原遺跡 落とし穴

図版 4



道跡検出状況



道跡半堀状況



道跡半堀状況



道跡ベルト埋土状況



道跡完掘状況

宮ヶ原遺跡 道跡



環状石斧出土状況



環状石斧

宮ヶ原遺跡 環状石斧出土状況

図版 6



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況

宮ヶ原遺跡 土器出土状況



土层断面



1号集石遺構



2号集石遺構



5号集石遺構



6号集石遺構

野方前段遺跡 B 地点 土层断面, 集石遺構

図版 8



1号土坑半裁状況



2号土坑検出状況



2号土坑半裁状況



2号土坑完掘状況



3号土坑半裁状況



3号土坑完掘状況



1号落とし穴検出状況



1号落とし穴半裁状況

野方前段遺跡B地点 土坑、落とし穴 1



1号落とし穴完掘状況



2号落とし穴検出状況



2号落とし穴完掘状況



3号落とし穴検出状況



3号落とし穴半掘状況



3号落とし穴完掘状況



4号落とし穴検出状況



4号落とし穴半掘状況

野方前段遺跡B地点 落とし穴 2



4号落とし穴完掘状況



5号落とし穴半裁状況



5号落とし穴完掘状況



6号落とし穴検出状況



6号落とし穴半裁状況



6号落とし穴完掘状況



7号落とし穴半裁状況



7号落とし穴逆落木痕完掘状況

野方前段遺跡B地点 土坑、落とし穴3



8号落とし穴検出状況



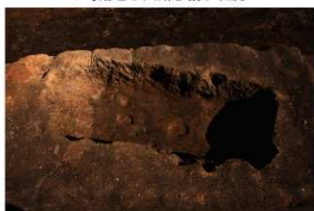
8号落とし穴完掘状況



8号落とし穴断ち割り状況



9号落とし穴検出状況



9号落とし穴完掘状況



9号落とし穴逆茂木痕完掘状況



遺物出土状況



調査風景

野方前段遺跡B地点 落とし穴4, 遺物出土状況, 調査風景



遺物出土状況



調査風景

野方前段遺跡B地点 遺物出土状況，調査風景



遺跡遠景



遺跡遠景（10月）



遺跡遠景（南から）



調査風景（6月）



調査風景（10月）

柿木段遺跡遠景，調査風景

図版 14



土層断面 (南壁)



土層断面 (東壁)



古道 55 ~ 58, 溝 22 (北から)



古道 55 ~ 58, 溝 22 (南から)



遺構断面 (溝 22)



遺構断面 (古道 55, 溝 22)

柿木段遺跡, 土層断面, 古代の調査 1



古道 57, 62



古道 52



古道 66



古道 67, 68



古道 78



古道 78 (断面)



土坑 101



土坑 102, 103

柿木段遺跡，古代の調査 2



古道 53, 溝 24



古道 53, 54, 溝 24



古道 53, 溝 23, 24



溝 30



溝 24 (硬化面)



古道 73, 溝 24 (断面)

柿木段遺跡, 中世～近世の調査 1



古道 73



溝 26



古道 51, 溝 21



古道 51, 溝 21 (完掘)



溝 27



古道 74, 75

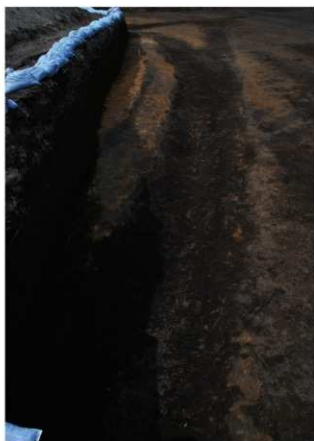


古道 76, 溝 31



古道 76, 溝 31 (完掘)

柿木段遺跡，中世～近世の調査 2



溝 28, 29



溝 27, 28, 29



溝 29



溝 28 (完掘)



溝 28, 29 (完掘)

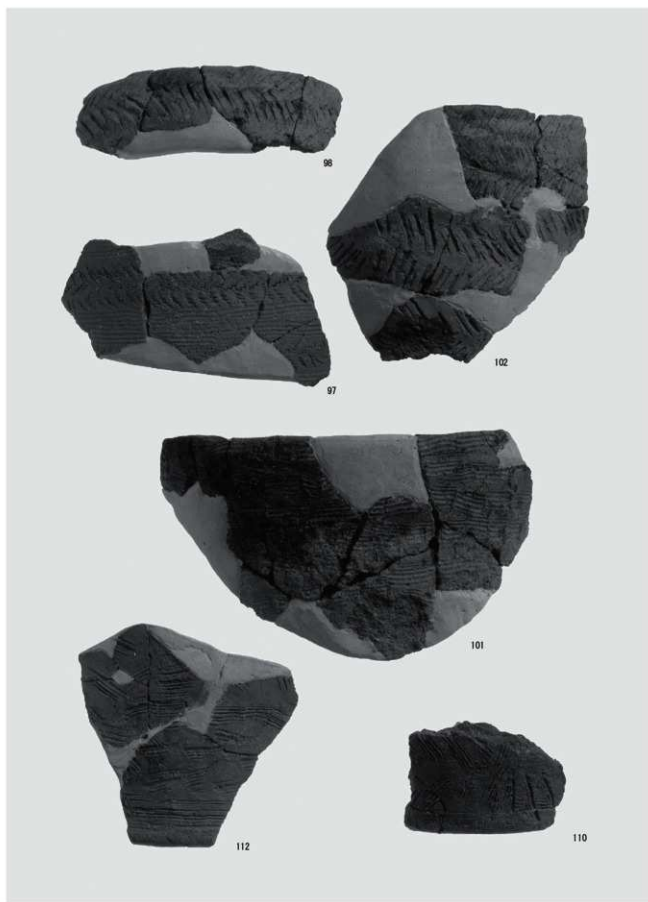


溝 28 (10月, ①)

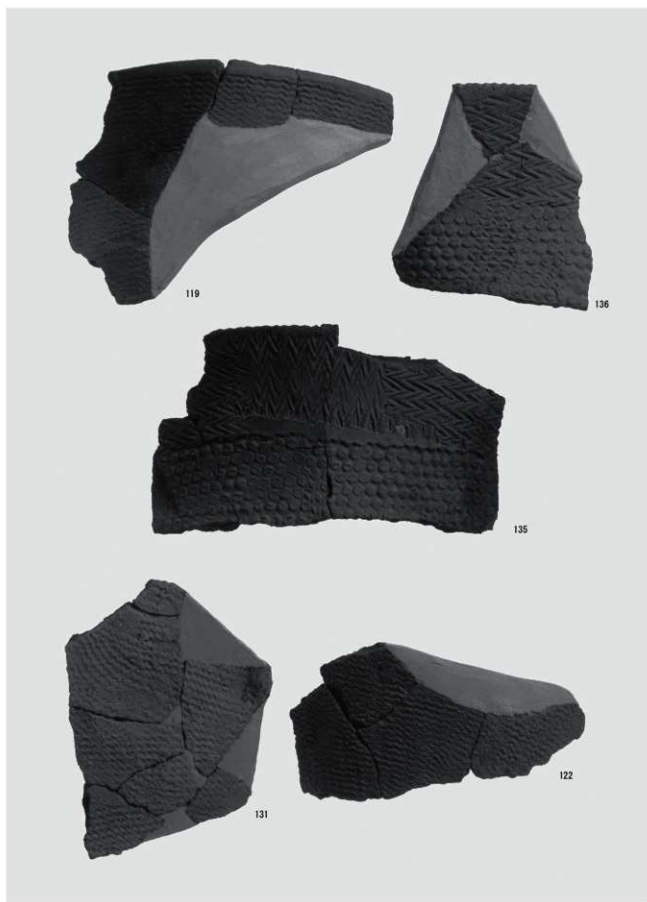


溝 28 (10月, ②)

柿木段遺跡, 中世～近世の調査 3



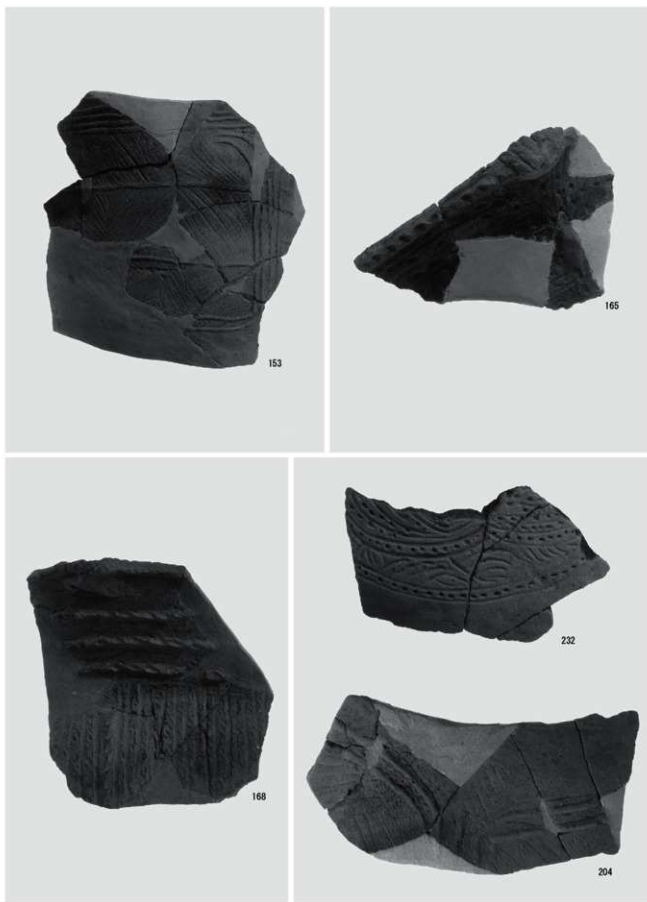
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 1



宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 2



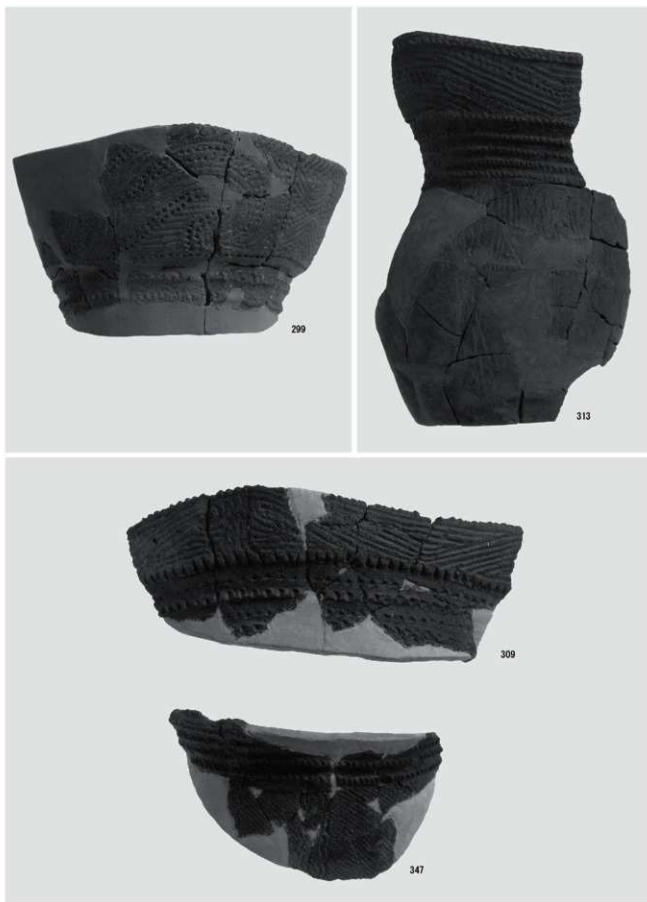
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 3



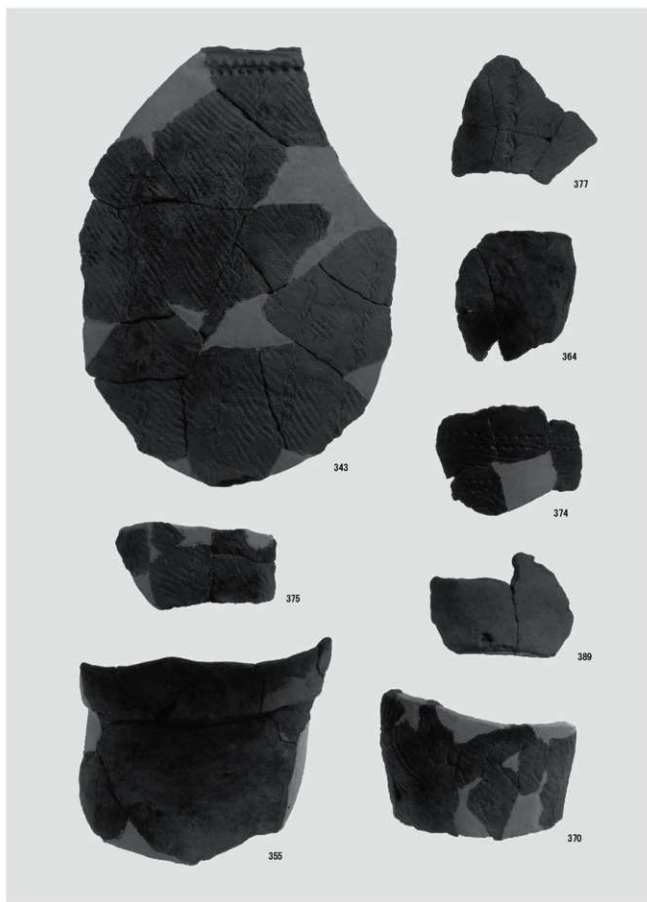
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 4



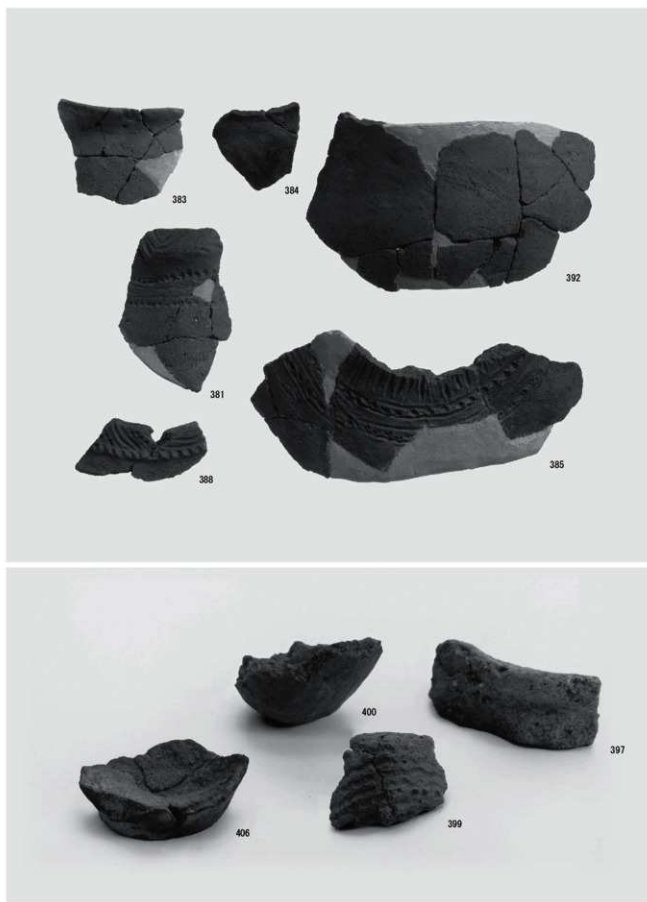
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 5



宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 6



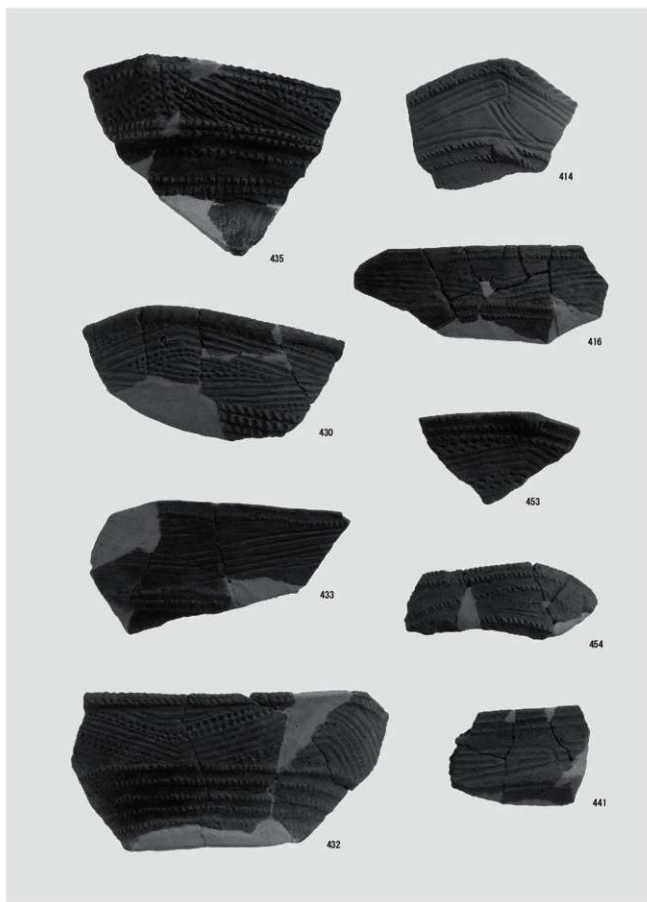
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 7



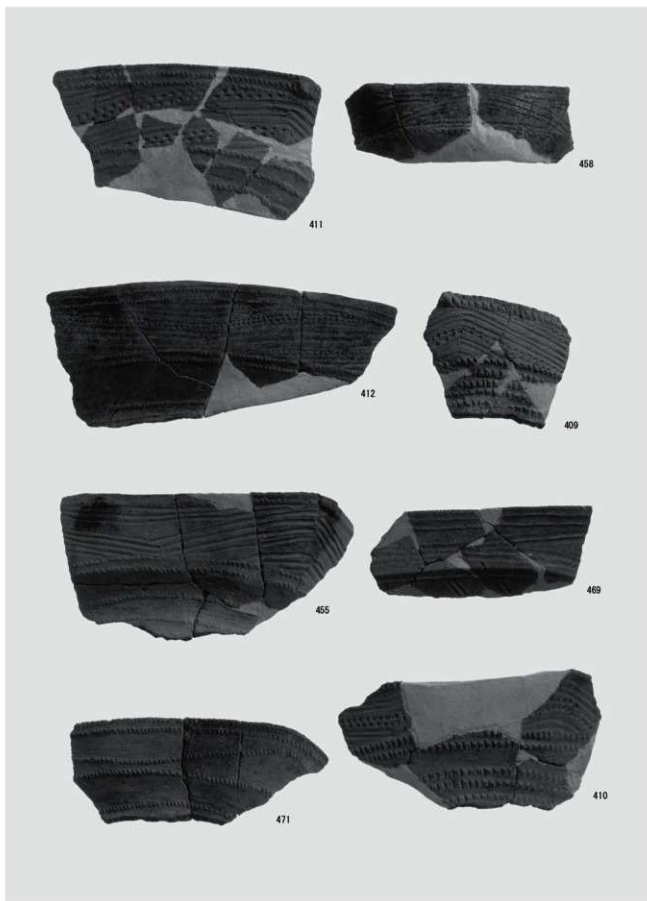
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 8



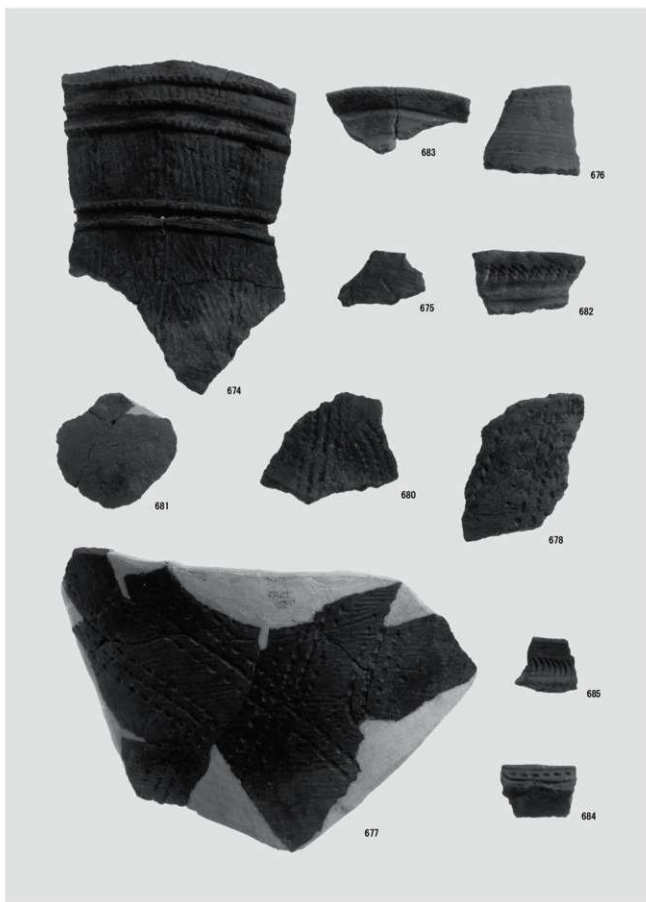
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 9



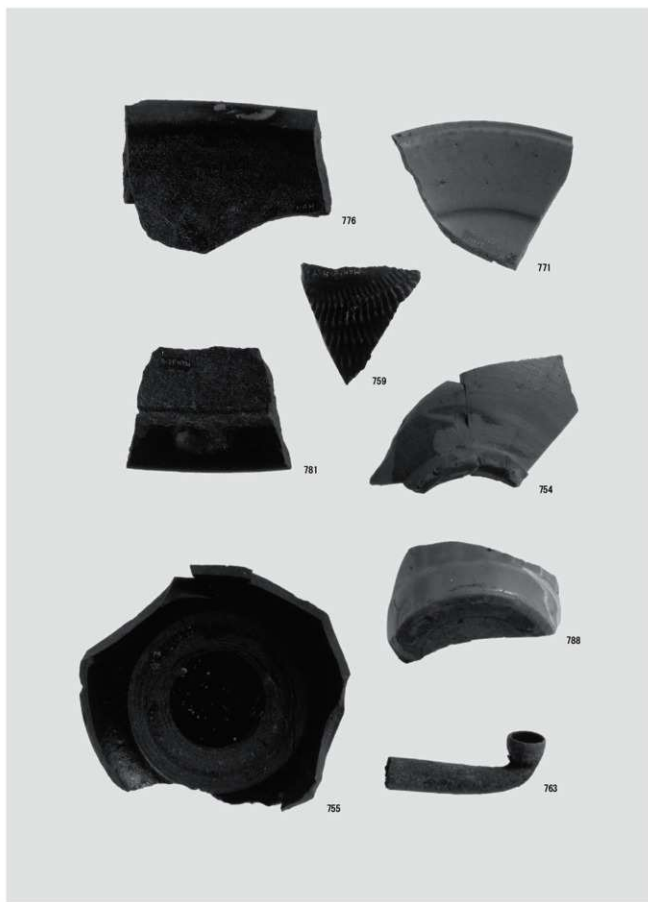
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 10



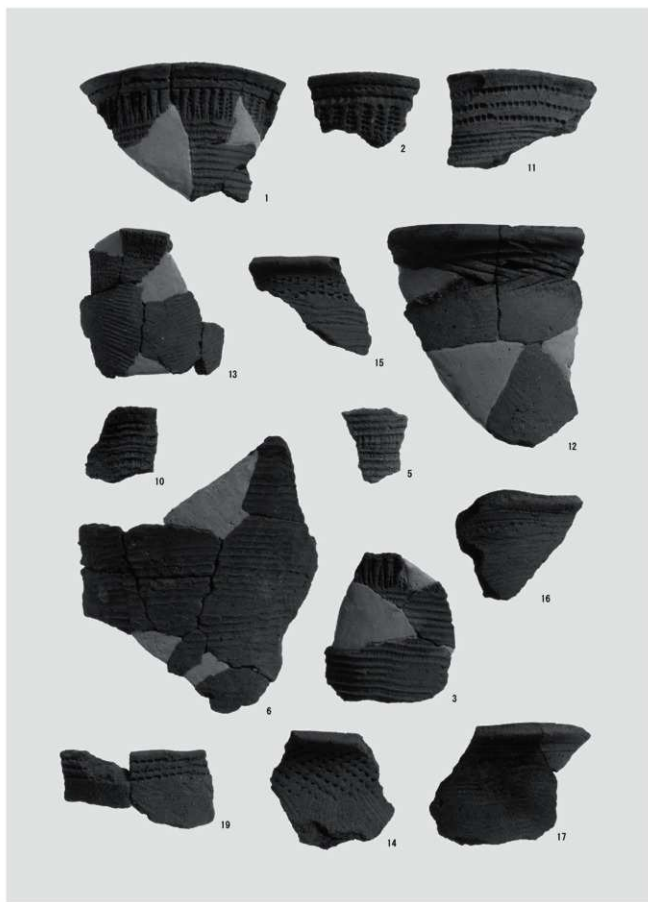
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 11



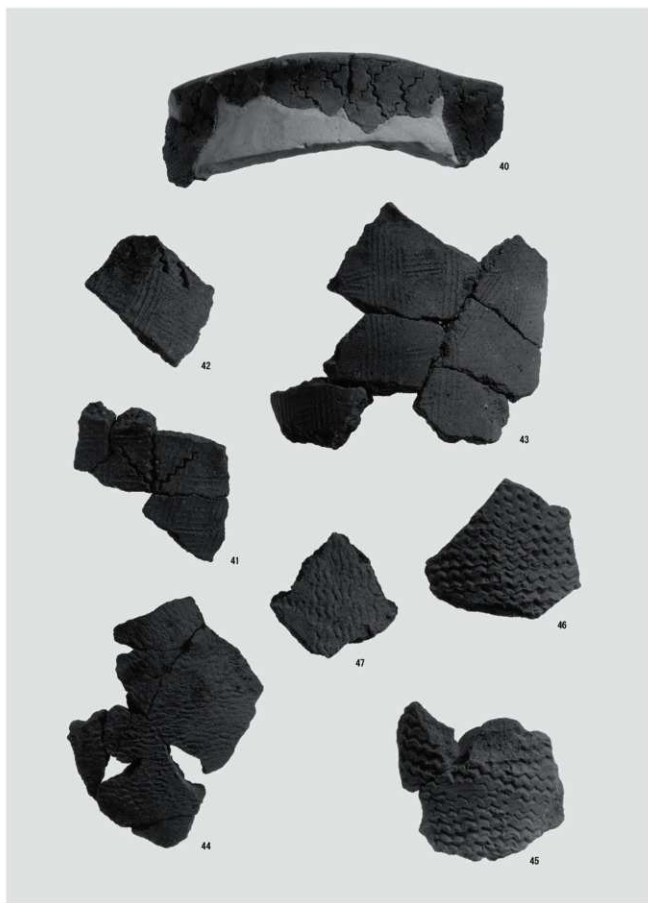
宮ヶ原遺跡 縄文時代早期出土土器 12



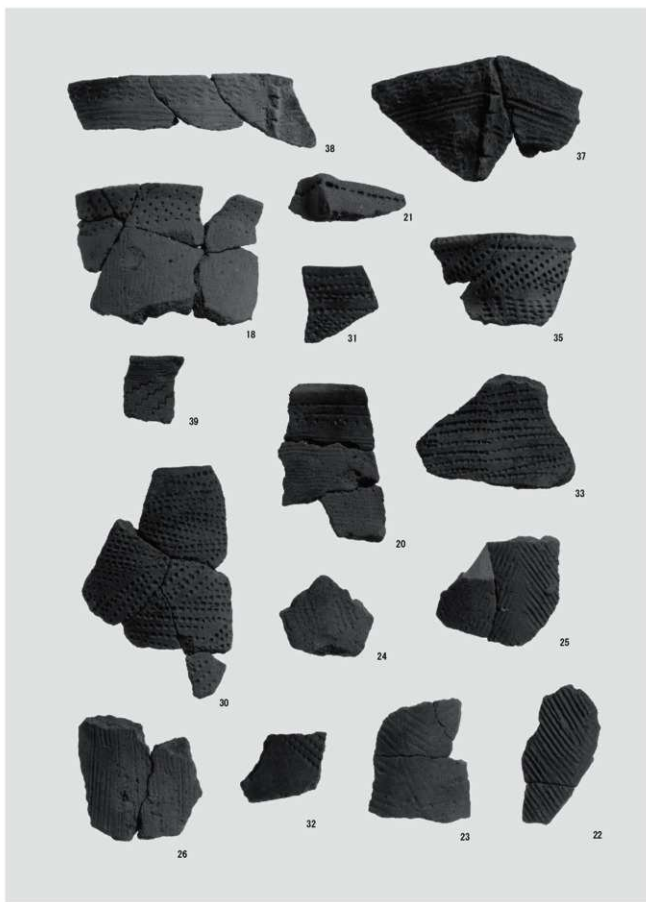
宮ヶ原遺跡 近世出土遺物



野方前段遺跡B地点 縄文時代早期出土土器 1



野方前段遺跡B地点 縄文時代早期出土土器 2



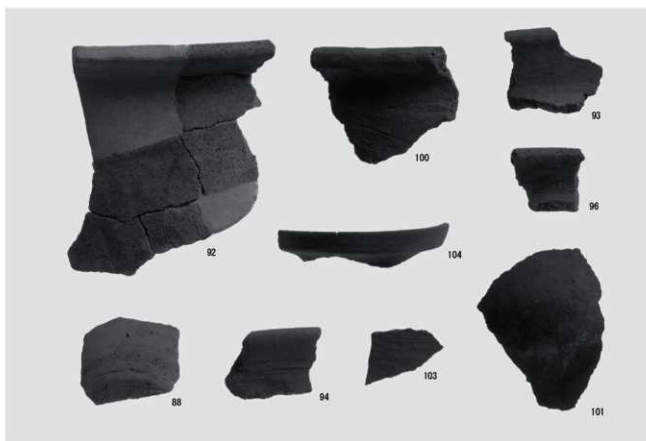
野方前段遺跡B地点 縄文時代早期出土土器 3



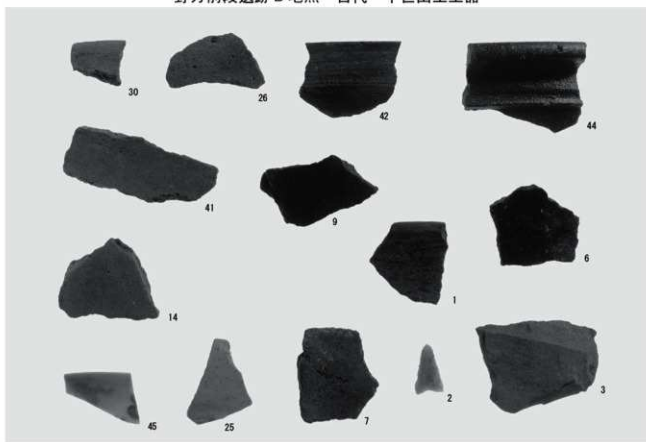
野方前段遺跡 B 地点 縄文時代早期出土土器 4



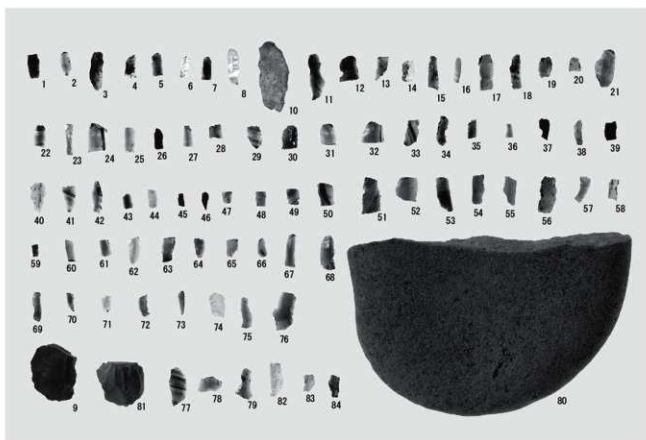
野方前段遺跡 B 地点 弥生時代出土土器



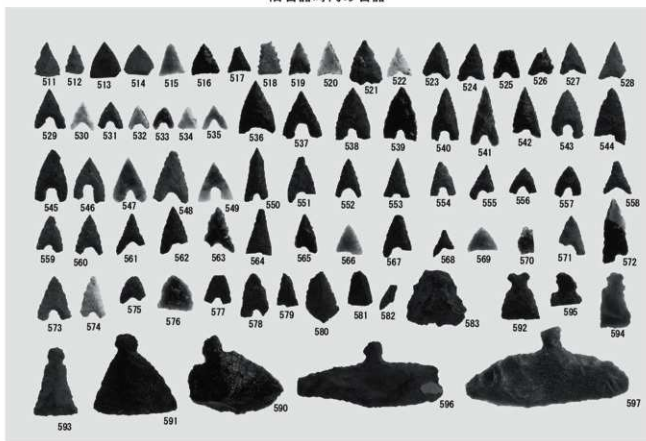
野方前段遺跡 B 地点 古代・中世出土土器



柿木段遺跡 出土遺物

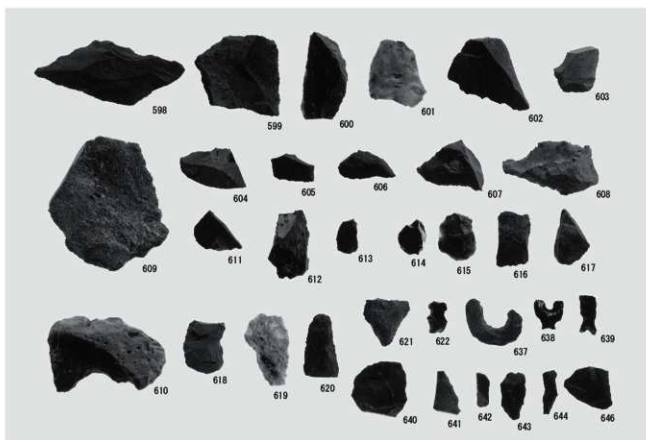


旧石器時代の石器



縄文時代早期の石器 1 (石槍, 石鏃, 石匙)

宮ヶ原遺跡 旧石器・縄文時代石器 1

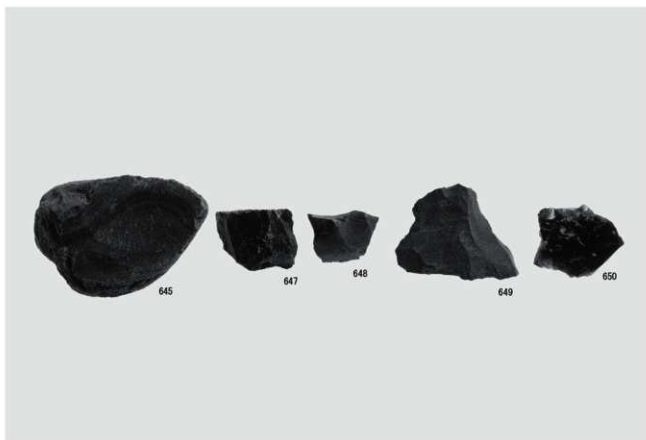


縄文時代早期の石器 2 (削器, 搔器, その他)



縄文時代早期の石器 3 (磨石, 石皿)

宮ヶ原遺跡 縄文時代石器 2

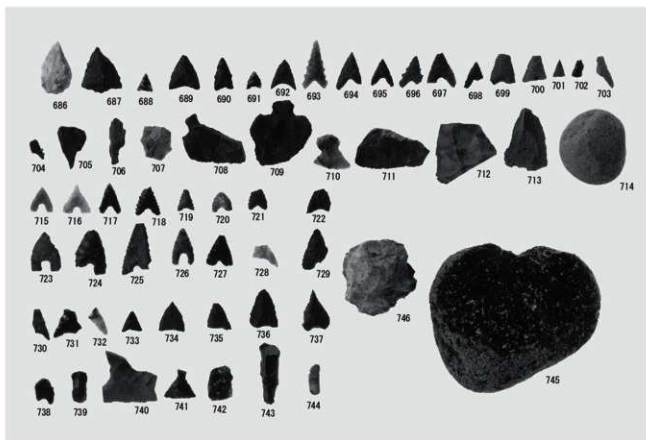


縄文時代早期の石器 4 (石核)

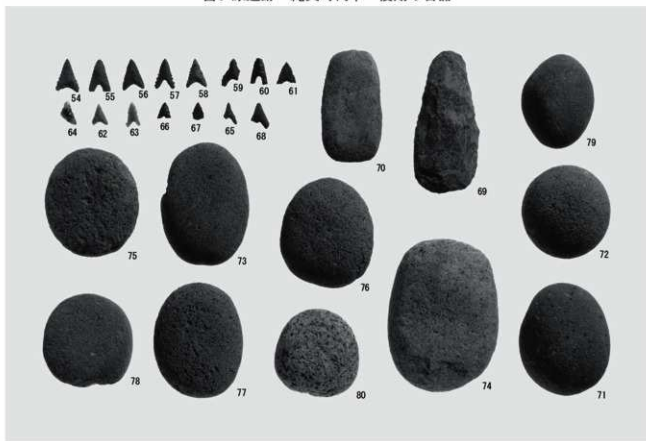


縄文時代早期の石器 5 (磨石, 石皿)

宮ヶ原遺跡 縄文時代石器 3



宮ヶ原遺跡 縄文時代中・後期の石器



野方前段遺跡 縄文時代の石器

宮ヶ原遺跡 縄文時代中・後期石器, 野方前段遺跡 B 地点 縄文時代石器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (173)

宮ヶ原遺跡
野方前段遺跡B地点
柿木段遺跡2

発行 2012年3月
編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821
印刷 青葉印刷株式会社
〒890-0045 鹿児島県鹿児島市武一丁目11-17
TEL 099-251-1821 FAX 099-251-2144



鹿児島県